

# 上強戸遺跡群(1)

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 上強戸遺跡群(1)

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇九

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 上強戸遺跡群(1)

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





上強戸遺跡群は太田市北部に位置する。遺跡は大間々扇状地の扇端東辺を画する八王子丘陵と金山丘陵の南西縁部に形成された沖積低地域にある。

発掘調査では、古墳時代の水田跡や奈良時代の水路跡など活発な生産活動を示す遺構群が検出され、豊富な木製農具類が出土している

(右上手が八王子丘陵、右下手が金山丘陵。左下手の住宅地域には古代新田郡庁と考えられる天良七堂遺跡や東山道と駅家に推定される入谷遺跡などがある。)



## 序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊に至る延長約150kmの高速自動車道です。この高速道路は群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されています。

当事業団ではこの北関東自動車道の伊勢崎～県境間約17.7kmの建設に先立って、平成12年8月から書上遺跡で発掘調査を行い、これに引き続いて東に連なる38遺跡の発掘調査を実施いたしました。また、これらの遺跡の整理作業は平成16年度から実施しております。

上強戸遺跡群は、太田市上強戸町地内に所在し、発掘調査は平成14年度から16年度まで実施いたしました。その結果、低地には古墳時代から中世に至る各時代の水田跡が検出されるとともに、遺跡地低台地上からは大溝区画を持つ中世鍛冶工房跡が発見されました。上強戸遺跡群の整理作業は19年度から実施してまいりましたが、ここに2分冊刊行の第1巻として『上強戸遺跡群（1）』を刊行するものです。本報告書は、北関東自動車道の建設に伴い発掘調査された他の遺跡とともに、太田市域の古代～中世の歴史を明らかにしていく貴重な資料になるものと確信いたしております。

最後になりましたが、東日本高速道路株式会社関東支社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで終始ご協力をいただき、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成21年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫



# 例 言

1. 本書は北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域建設に伴い事前調査された上強戸遺跡群(遺跡略号KT620)の発掘調査報告書である。遺跡番号(ⅠD)は、T0402である。
2. 本遺跡はⅠからⅪ区名の区割りに基づいて調査を行った。その結果、遺跡の地勢及び性格が大きく二分できるものとなった。本書では低地帯で水田跡を中心とするⅢ区からⅪ区を報告対象とし、『上強戸遺跡群(1)』とした。なお、Ⅰ・Ⅱ区は微高地形に居住及び工房域を形成しており、『上強戸遺跡群(2)』として別に編むこととする。
3. 上強戸遺跡群は群馬県太田市上強戸町地内に所在する。
4. 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成14年1月4日～平成16年3月31日
7. 整理期間 平成19年8月1日～平成21年3月31日
8. 調査・整理組織
  - 事務担当 高橋勇夫・小野宇三郎・木村裕紀・吉田 豊・津金沢吉茂・神保佑史・植原恒夫・萩原勉・佐藤明人・能登 健・真下高幸・相京建史・笠原秀樹・石井 清・関 晴彦・小山建夫・高橋房雄・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・斉藤恵利子・矢島一美・斉藤陽子・田中賢一・森下弘美・今井もと子・内山佳子・若田 誠・狩野真子・北原かおり・佐藤美佐子・蘇原正義・本間久美子・中沢恵子・並木綾子・松下次男・吉田 茂
  - 調査担当 阿久津聡・新井 仁・大江正行・大塚俊和・小高哲茂・柏木一男・亀山幸弘・川端俊介・木津博明・黒沢照弘・木暮育秀・坂口 一・小林 徹・小林 正・関口博幸・高井佳弘・高島英之・谷藤保彦・原 信行・長沼孝則・深澤敦仁・増田眞次・渡辺弘幸
  - 整理担当・整理班staff 綿貫邦男・尾田正子・岩田彰子・酒井史恵・嶋崎しづ子・田村浩子・長谷川公子 山本千晶 木器班staff 伊東博子・小池 縁・笛木弘美
  - 遺物写真 綿貫邦男
  - 保存処理 関 邦一・土橋まり子
  - 遺物実測 整理班staff 機械実測班staff 岸 弘子・小池益美・田所順子・田中精子・山口洋子
  - 写真編集 digital専業班staff 牧野裕美・市田武子・安藤美奈子・酒井史恵・廣津真希子・荒木絵美・高梨由美子・矢端真観・横塚由香・下川陽子
9. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
10. 発掘調査及び報告書作成には次の方々からご協力・ご指導を頂いた。
  - 太田市教育委員会・小宮俊久氏・一倉 満氏・地元関係者各位
11. 本書執筆者 第1章・第1節 佐藤明人、第3章・第2節 6. 陶磁器 大西雅広、 8. 縄文土器 谷藤保彦、 第4章・第4節 上強戸遺跡群出土の人骨 檜崎修一郎、他 綿貫邦男
12. 編集 綿貫邦男

# 凡 例

1. 本書における遺構名称は基本的に算用数字と遺構形状や機能による習慣的名称を統合して遺構の固有名詞とする。従って遺構名称としての数字は調査の進行に伴って便宜上付与したものであり他のいかなる有意的順位をも示すものではない。
2. 本書の遺構図版中にある+印とそれに付記される5桁2種の数値は国家座標値X・Y値を表す。
3. 本書の本文中で遺構の位置及び範囲を示すに国家座標値X・Y値を用いる。ただし、図によっては5桁数値の前2桁X値37、Y値42は略してある。また範囲を示す国家座標値の単位は1mである。
4. 本書における遺構図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付したが、遺構全体図に関して基本的には次のようである。

    竪穴住居跡及び類似遺構：1/60、掘立柱建物跡：1/80、竈・炉・土坑・井戸跡：1/40、ただし、遺構によってはこの限りではない。
5. 本書における遺物図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付したが基本的には次のようである。

    金属器及び石器類や土製品のうちの小型品：1/1または1/2、土器・石器類：1/3、ただし、遺物によってはこの限りではない。木製品：小1/2、中1/4、大1/6、極大1/15
6. 本書における遺構図版中の断面水平基準は標高値でこれを表した。単位はメートル（m）である。
7. 本書における遺構図版中の遺物、図版中の遺物、写真図版中の遺物、計測表遺物に付された番号の遺物のうち、同一の番号は同一の遺物を示す。
8. 土器の実測図は原則として四分画法をとった。ただし、残存量が二分の一以下のものは180度展開して図上復元とし、中心線を点線でこれを示した。
9. 遺物の拓影及び展開・断面は基本的に一角法でこれを示した。
10. 土層及び土器の色調名は『標準土色帳』農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。
11. 本書で使用する浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物・泥流堆積物の呼称については、以下のように表示する。

    As-A：浅間山噴出の火砕物 1783（天明三）年  
    As-B：浅間山噴出の火砕物 1108（天仁元）年  
    FP泥流：榛名山二ッ岳噴出の火砕物泥流堆積物  
    FP：榛名山二ッ岳噴出の火砕物  
    FA泥流：榛名山二ッ岳噴出の火砕物泥流堆積物  
    FA：榛名山二ッ岳噴出の火砕物  
    C軽石：浅間山噴出の火砕物
12. 本書で使用する図中の網がけは焼土・灰・炭・その他を示すが示すところの対象は文中に記す。

# 目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

写真目次

抄録

第1章 発掘調査の概要……………1	3. V区の遺構と遺物……………35
第1節 調査に至る経緯……………1	4. VI区の遺構と遺物……………67
第2節 調査の方法と経過……………3	5. VII区の遺構と遺物……………77
1. 調査の方法……………3	6. VIII区の遺構と遺物……………142
2. 調査の経過……………3	7. IX・X・XI区の遺構と遺物……………149
第2章 遺跡の立地と歴史的環境……………7	8. その他の遺物……………152
第1節 遺跡の立地……………7	第4章 自然科学分析……………153
第2節 遺跡の歴史的環境……………8	第1節 上強戸遺跡群出土木製品の樹種同定……………153
第3章 検出された遺構と遺物……………11	第2節 上強戸遺跡群の土層とテフラ……………161
第1節 遺跡の概要……………11	第3節 上強戸遺跡群VII区の植物珪酸体……………168
第2節 検出された遺構と遺物……………13	第4節 上強戸遺跡群出土人骨……………175
1. III区の遺構と遺物……………13	写真図版
2. IV区の遺構と遺物……………25	

# 挿図目次

上強戸遺跡群(1)	第20図 IV区第3面7号溝出土遺物
第1図 北関東自動車道(伊勢崎～県境)関連遺跡位置図	第21図 IV区第3面2号遺構(土器集中地点)遺物分布図
第2図 上強戸遺跡群調査区域図	第22図 IV区第3面2号遺構(土器集中地点)出土遺物(1)
第3図 上強戸遺跡群調査区割図	第23図 IV区第3面2号遺構(土器集中地点)出土遺物(2)
第4図 上強戸遺跡群周辺の地形分類図	第24図 IV区第3面出土遺物(1)
第5図 上強戸遺跡群周辺遺跡	第25図 IV区第3面出土遺物(2)
第6図 上強戸遺跡群基本土層	第26図 IV区第4面2号土坑
第7図 III区第1～3面全体図	第27図 V区第1・2・(3)面全体図
第8図 III区第1面全体図	第28図 V区第4面全体図
第9図 III区第1面3号・4号溝出土遺物	第29図 V区第1面全体図
第10図 III区第2面全体図	第30図 V区第1面1号溝・出土遺物
第11図 III区第2面13号・16号・19号溝、9号・19号土坑出土遺物	第31図 V区第1面2号溝出土遺物(1)
第12図 III区第3面全体図	第32図 V区第1面2号溝
第13図 III区第3面土層図	第33図 V区第1面2号溝出土遺物(2)
第14図 III区第3面30号・31号・32号溝	第34図 V区第1面9号溝出土遺物
第15図 III区第3面20A号・23号・30号・32号溝出土遺物	第35図 V区第1面2号・9号溝
第16図 IV区第2～4面全体図	第36図 V区第2面(3面)全体図
第17図 IV区第2面全体図	第37図 V区第2面1号土坑・出土遺物
第18図 IV区第2面調査区東西土層図	第38図 V区第2面2号土坑
第19図 IV区第3面全体図、6号・7号溝土層図	第39図 V区第2面2号遺構(土坑)
	第40図 V区第2面2号遺構(土坑)出土遺物(1)

第 41 図	V区第 2 面 2 号遺構(土坑)出土遺物(2)	第 99 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(6)
第 42 図	V区第 2 面 3 号遺構(土坑)	第 100 図	VII区第 2 面 10 号溝
第 43 図	V区第 2 面 3 号遺構(土坑)出土遺物	第 101 図	VII区第 2 面 10 号溝土層図
第 44 図	V区第 2 面 19 号遺構(土坑)	第 102 図	VII区第 2 面 10 号溝出土遺物
第 45 図	V区第 2 面 20 号遺構(土坑)	第 103 図	VII区第 2 面水田跡、人・牛歩行軌跡
第 46 図	V区第 2 面 27 号遺構(土坑)	第 104 図	VII区第 2 面 1 号水路・土層図
第 47 図	V区第 2 面 27 号遺構(土坑)出土遺物	第 105 図	VII区第 2 面 9 号溝(11・14 号溝)
第 48 図	V区第 2 面 18 号遺構(井戸)・出土遺物	第 106 図	VII区第 2 面 9 号溝(11・14 号溝) 土層図
第 49 図	V区第 2 面 3 号溝土層図	第 107 図	VII区第 3 面全体図
第 50 図	V区第 2 面遺構図	第 108 図	VII区第 3 面 15 号～19 号溝・土層図
第 51 図	V区第 2 面 3 号溝出土遺物	第 109 図	VII区第 3 面 15 号・17 号～19 号・22 号・29 号溝
第 52 図	V区第 2 面 3 号溝遺物集中地点(4 号遺構)	第 110 図	VII区第 3 面 15 号・17 号～19 号・22 号・29 号溝土層図
第 53 図	V区第 2 面 3 号溝遺物集中地点(4 号遺構) 出土遺物(1)	第 111 図	VII区第 3 面 22 号～24 号溝・土層図
第 54 図	V区第 2 面 3 号溝遺物集中地点(4 号遺構) 出土遺物(2)	第 112 図	VII区第 3 面 25 号・26 号溝・土層図
第 55 図	V区第 2 面 15 号溝遺物集中地点	第 113 図	VII区第 3 面 27 号・28 号溝・土層図
第 56 図	V区第 2 面 15 号溝出土遺物	第 114 図	VII区第 3 面調査区北壁(17・20・22 号溝)土層図
第 57 図	V区第 3 面河道跡	第 115 図	VII区第 3 面 15 号溝出土木器分布図
第 58 図	V区第 3 面 6 号遺構(8 号pit)	第 116 図	VII区第 3 面 17 号溝出土木器分布図
第 59 図	V区第 3 面 6 号遺構(8 号pit) 出土遺物	第 117 図	VII区第 3 面 18 号溝出土木器分布図
第 60 図	V区第 3 面 9 号pit(小穴)・出土遺物	第 118 図	VII区第 3 面 19 号溝出土木器分布図
第 61 図	V区第 3 面pit(小穴)出土遺物	第 119 図	VII区第 3 面 25 号溝出土木器分布図
第 62 図	V区第 3 面出土遺物(埴輪)(1)	第 120 図	VII区第 3 面 27 号溝出土木器分布図
第 63 図	V区第 3 面出土遺物(埴輪)(2)	第 121 図	VII区第 3 面 1 号木組遺構出土木器分布図
第 64 図	V区第 3 面出土遺物(土器)(1)	第 122 図	VII区第 3 面 2 号木組遺構出土木器分布図
第 65 図	V区第 3 面出土遺物(土器)(2)	第 123 図	VII区第 3 面 15 号・18 号・19 号溝出土遺物(土器)
第 66 図	VI区第 1・2 面全体図	第 124 図	VII区第 3 面 22 号・25 号・27 号溝・1 号木組遺構出土遺物(土器)
第 67 図	VI区第 3 面全体図	第 125 図	VII区第 3 面 15 号・17 号溝出土木器
第 68 図	VI区第 1 面全体図	第 126 図	VII区第 3 面 18 号溝出土木器
第 69 図	VI区第 1 面 1 号・2 号・3 号溝	第 127 図	VII区第 3 面 19 号溝出土木器(1)
第 70 図	VI区第 2 面全体図	第 128 図	VII区第 3 面 19 号溝出土木器(2)
第 71 図	VI区第 2 面水田跡土層図	第 129 図	VII区第 3 面 25 号溝出土木器(1)
第 72 図	VI区第 2 面水田跡出土遺物	第 130 図	VII区第 3 面 25 号溝出土木器(2)
第 73 図	VI区第 3 面 5 号・6 号溝・1 号土坑	第 131 図	VII区第 3 面 25 号溝出土木器(3)
第 74 図	VI区第 3 面 5 号溝出土遺物	第 132 図	VII区第 3 面 27 号溝・1 号木組遺構出土木器(1)
第 75 図	VI区第 3 面 1 号土坑	第 133 図	VII区第 3 面 1 号木組遺構出土木器(2)
第 76 図	VI区第 3 面出土遺物	第 134 図	VII区第 3 面 1 号木組(3)・2 号木組遺構出土木器
第 77 図	VII区第 1 面・2 面全体図	第 135 図	VII区出土石器(1)
第 78 図	VII区第 3 面全体図	第 136 図	VII区出土石器(2)
第 79 図	VI区・VII区・VIII区全体図	第 137 図	VII区第 1 面・2 面・3 面全体図
第 80 図	VII区第 1 面全体図	第 138 図	VIII区第 1 面全体図
第 81 図	VII区第 1 面 1 号竪穴	第 139 図	VIII区第 2 面全体図
第 82 図	VII区第 1 面 1 号井戸	第 140 図	VIII区第 3 面全体図
第 83 図	VII区第 1 面 1 号土坑	第 141 図	VIII区第 3 面 6 号溝出土遺物
第 84 図	VII区第 1 面 1 号～7 号溝土層図	第 142 図	VIII区第 3 面溝跡土層図
第 85 図	VII区第 1 面出土遺物	第 143 図	VIII区出土遺物
第 86 図	VII区第 2 面全体図	第 144 図	IX区第 1 面全体図
第 87 図	VII区第 2 面 8 号溝	第 145 図	IX区第 1 面西壁土層図
第 88 図	VII区第 2 面 8 号溝土層図	第 146 図	X区第 1 面全体図
第 89 図	VII区第 2 面 8 号溝出土遺物分布図(北半)	第 147 図	IX区・X区第 1 面出土遺物
第 90 図	VII区第 2 面 8 号溝出土遺物分布図(南半)	第 148 図	遺跡出土の銭貨・鉛製品
第 91 図	VII区第 2 面 8 号溝出土遺物(土器)(1)	第 149 図	遺跡出土の縄文土器
第 92 図	VII区第 2 面 8 号溝出土遺物(土器)(2)	第 150 図	VII区北壁土層断面図
第 93 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(1)	第 151 図	試料採取地点付近の土層断面図
第 94 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(2)	第 152 図	第 1 地点の機動細胞珪酸体分布図
第 95 図	車輪復元図	第 153 図	第 2 地点の機動細胞珪酸体分布図
第 96 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(3)	第 154 図	A 区 1 号火葬墓平・断面図
第 97 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(4)	第 155 図	A 区 1 号火葬墓出土人骨部位図
第 98 図	VII区第 2 面 8 号溝出土木器(5)	第 156 図	B 区 1 号土坑平・断面図

## 写真図版目次

### 上強戸遺跡群

- P L. 1 1. III区第 1 面全景東から  
2. III区第 2 面全景北は右
- P L. 2 1. III区第 2 面全景南東から  
2. III区第 2 面北から
- P L. 3 1. III区第 2 面 2 号～15 号土坑北から  
2. III区第 2 面 15 号・16 号土坑北から

3. III区第 2 面 15 号土坑北から  
4. III区第 2 面 16 号土坑北から  
5. III区第 2 面 17 号・18 号・19 号土坑北から
- P L. 4 1. III区第 2 面 20 号・21 号土坑東から  
2. III区第 2 面 23 号土坑南東から  
3. III区第 2 面 24 号土坑東から  
4. III区第 2 面 25 号土坑東から

5. Ⅲ区第2面26号土坑南から  
6. Ⅲ区第2面27号・28号土坑南から  
7. Ⅲ区第2面29号・30号土坑南から  
8. Ⅲ区第2面31号土坑北東から
- P L. 5 1. Ⅲ区第3面全景北は右  
2. Ⅲ区第3面全景北は下
- P L. 6 1. Ⅲ区第3面20号溝東から  
2. Ⅲ区第3面24～27号溝北から
- P L. 7 1. Ⅲ区第3面30号溝木樋出土状況北から  
2. Ⅲ区第3面30号溝木樋出土状況北東から  
3. Ⅲ区第3面31号溝木樋出土状況南東から  
4. Ⅲ区第3面31号溝木樋出土状況南東から  
5. Ⅲ区第3面31号溝木樋出土状況北から  
6. Ⅲ区第3面31号溝木樋出土状況西から  
7. Ⅲ区第3面31号溝木樋出土状況南から
- P L. 8 1. Ⅳ区第2面全景北から  
2. Ⅳ区第2面全景東から
- P L. 9 1. Ⅳ区第2面全景東から  
2. Ⅳ区第4面2号土坑西から  
3. Ⅳ区第3面2号遺構遺物出土状況  
4. Ⅳ区第3面2号遺構遺物出土状況  
5. Ⅳ区第3面2号遺構遺物出土状況
- P L. 10 1. Ⅴ区第1面B軽石混土下水田跡東から  
2. Ⅴ区第1面B軽石混土下水田跡西から
- P L. 11 1. Ⅴ区第1面B軽石混土下水田跡西から  
2. Ⅴ区第1面1号溝南から
- P L. 12 1. Ⅴ区第1面全景東から  
2. Ⅴ区第2面3号溝北西から
- P L. 13 1. Ⅴ区第1面全景北は上  
2. Ⅴ区第2面2号遺構遺物出土状況南から
- P L. 14 1. Ⅴ区第1面9号溝西から  
2. Ⅴ区第2面3号溝遺物出土状況南西から  
3. Ⅴ区第2面3号遺構遺物出土状況南から  
4. Ⅴ区第2面3号遺構遺物出土状況南から  
5. Ⅴ区第2面3号遺構遺物出土状況  
6. Ⅴ区第2面3号遺構遺物出土状況西から  
7. Ⅴ区第2面4号遺構遺物出土状況東から  
8. Ⅴ区第2面4号遺構遺物出土状況南西から
- P L. 15 1. Ⅴ区第2面18号遺構(井戸)  
2. Ⅴ区第2面27号遺構(土坑)東から  
3. Ⅴ区第3面8号pit遺物出土状況西から  
4. Ⅴ区第3面9号pit遺物出土状況北から  
5. Ⅴ区第3面河道西から
- P L. 16 1. Ⅵ区第1面全景北は上  
2. Ⅵ区第2面全景北は上
- P L. 17 1. Ⅵ区第2面水田の南縁の水路か西から  
2. Ⅵ区第2面水田を覆う洪水層南東から
- P L. 18 1. Ⅵ区第2面水田大畦水口東から  
2. Ⅵ区第2面水田降雨状況  
3. Ⅵ区第2面水田畦畔遺物出土状況東から  
4. Ⅵ区第3面5号・6号溝南東から  
5. Ⅵ区第3面全景南から
- P L. 19 1. Ⅶ区第1面北半部全景北は上  
2. Ⅶ区第1面南半部全景北は上
- P L. 20 1. Ⅶ区第2面水田跡北半部全景北は上  
2. Ⅶ区第2面水田跡南半部全景北は上
- P L. 21 1. Ⅶ区第2面8号溝南西から  
2. Ⅶ区第2面10号溝南から
- P L. 22 1. Ⅶ区第2面水田跡北側中央部東から  
2. Ⅶ区第2面水田跡南東部東から
- P L. 23 1. Ⅶ区第2面水田跡北東部北から  
2. Ⅶ区第2面水田跡南西部東から
- P L. 24 1. Ⅶ区第2面水田耕土面状況  
2. Ⅶ区第2面1号水路跡北から
- P L. 25 1. Ⅶ区第2面8号溝南から  
2. Ⅶ区第2面8号溝遺物出土状況北東から  
3. Ⅶ区第2面水田跡1号畦畔北東から  
4. Ⅶ区第2面水田跡足跡(偶蹄類)  
5. Ⅶ区第1面水田跡足跡(偶蹄類)
- P L. 26 1. Ⅶ区第3面全景北は上  
2. Ⅶ区第3面水田跡東上空から
- P L. 27 1. Ⅶ区第3面東から  
2. Ⅶ区第3面南から
- P L. 28 1. Ⅶ区第3面全景北は上  
2. Ⅶ区第3面東上空から
- P L. 29 1. Ⅶ区第3面東から  
2. Ⅶ区第3面東上空から
- P L. 30 1. Ⅶ区第3面東上空から  
2. Ⅶ区第3面22号溝東上空から
- P L. 31 1. Ⅶ区第3面18号溝木器出土状況東から  
2. Ⅶ区第3面18号溝木器出土状況西から  
3. Ⅶ区第3面18号溝木器出土状況西から  
4. Ⅶ区第3面19号溝木器出土状況北から  
5. Ⅶ区第3面19号溝木器出土状況北西から  
6. Ⅶ区第3面19号溝木器出土状況西から
- P L. 32 1. Ⅶ区第3面25号溝北西から  
2. Ⅶ区第3面25号溝杭列断ち割り南から  
3. Ⅶ区第3面25号溝杭列断ち割り北から  
4. Ⅶ区第3面25号溝杭列断ち割り西から  
5. Ⅶ区第3面1号木組遺構南から  
6. Ⅶ区第3面1号木組遺構南から  
7. Ⅶ区第3面1号木組遺構南東から  
8. Ⅶ区第3面1号木組遺構南から
- P L. 33 1. Ⅶ区第3面1号木組遺構西から  
2. Ⅶ区第3面1号木組遺構南から  
3. Ⅶ区第3面2号木組遺構西から  
4. Ⅶ区第3面2号木組遺構北西から  
5. Ⅶ区北壁第2面土層面(10号溝付近)  
6. Ⅶ区北壁第2面土層面  
7. Ⅶ区北壁第3面土層面
- P L. 34 1. Ⅷ区第1面全景北は上  
2. Ⅷ区第2面全景北は上
- P L. 35 1. Ⅷ区第2面水田跡西上空から  
2. Ⅷ区第2面水田跡南西から
- P L. 36 1. Ⅷ区第2面水田跡南から  
2. Ⅷ区第3面全景西上空から
- P L. 37 1. Ⅷ区第3面全景北は下  
2. Ⅷ区第3面全景東から
- P L. 38 1. Ⅸ区第1面全景北は下  
2. X区第1面全景北は上
- P L. 39 Ⅳ区第3面2号遺構(土器集中地点)出土遺物  
Ⅳ区第3面出土遺物
- P L. 40 Ⅴ区第2面1号遺構(土坑)出土遺物  
Ⅴ区第2面2号遺構(土坑)出土遺物  
Ⅴ区第2面3号遺構(土坑)出土遺物  
Ⅴ区第2面27号遺構(土坑)出土遺物
- P L. 41 Ⅴ区第2面18号遺構(井戸)出土遺物  
Ⅴ区第2面3号溝(4号遺構)出土遺物
- P L. 42 Ⅴ区第2面15号溝出土遺物  
Ⅴ区第3面9号pit(小穴)出土遺物  
Ⅵ区第2面水田跡出土遺物  
Ⅵ区第3面5号溝出土遺物  
Ⅶ区第2面8号溝出土遺物
- P L. 43 Ⅶ区第2面10号溝出土遺物  
Ⅶ区第3面18号・19号・22号・25号溝跡・1号木組遺構・  
Ⅶ区出土遺物
- P L. 44 Ⅲ区第3面32号溝出土木樋
- P L. 45 Ⅶ区第2面8号溝出土木器
- P L. 46 Ⅶ区第2面8号溝出土木器
- P L. 47 Ⅶ区第2面8号溝出土木器
- P L. 48 Ⅶ区第2面8号溝・第3面15号溝出土木器
- P L. 49 Ⅶ区第3面17号・18号溝出土木器
- P L. 50 Ⅶ区第3面19号溝出土木器
- P L. 51 Ⅶ区第3面25号溝出土木器
- P L. 52 Ⅶ区第3面25号溝出土木器
- P L. 53 Ⅶ区第3面27号溝・1号木組遺構出土木器
- P L. 54 Ⅶ区第3面1号・2号木組遺構出土木器

## 報告書抄録

書名ふりがな	かみごうどいせきぐん
書名	上強戸遺跡群(1)
副書名	北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第453集
編著者名	綿貫邦男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090126
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かみごうどいせきぐん
遺跡名	上強戸遺跡群
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしかみごうどまち
遺跡所在地	群馬県太田市上強戸町
市町村コード	10-204
遺跡番号	T0402
北緯(日本測地系)	3633723
東経(日本測地系)	1393594
北緯(世界測地系)	362014
東経(世界測地系)	1392134
調査期間	20020104-20040331
調査面積	46,899㎡
調査原因	高速道路建設(北関東自動車道)
種別	生産跡(水田)
主な時代	古墳/奈良・平安/中世
遺跡概要	古墳/奈良水田跡・水路
特記事項	古墳時代木樋・又鍬・丸木弓/奈良時代木器・馬鍬・田下駄・車輪部材
要約	<p>遺跡は太田市の北部に位置し、金山丘陵北西部・八王子丘陵南西部に広がる平野地勢の縁部に立地する。沖積低地では古墳時代から中世の各水田跡が、低台地域には中世鍛冶工房群が検出された。低地Ⅶ区を中心とする区域には豊富な木器資料が得られている。古墳前期の水田跡と溝跡からは弓や又鍬が、奈良時代の溝跡では馬鍬・田下駄・車輪部材等が出土した。水田跡域の西方調査区Ⅲ区では丸木半裁決りの木樋が検出され、灌漑技術とともに遺跡域内水田営農の重要度を示している。車輪は当地域のみならず東国道路・運輸事情解明に良好資料となろう。</p>

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmの発掘調査が開始されたのは平成12年度である。平成12年6月、日本道路公団（現 東日本高速道路株式会社）、群馬県土木部、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者による協議が行われた。この時、道路公団からは、橋梁下部工事等の工事優先区間の一部について、平成12年8月から発掘調査を実施すべく要請があった。これを受けて当事業団は、建設用地の解決状況、発掘調査において生ずる残土置き場の確保、側道部と本線部の調査区分の検討等、調査実施への準備を進めた。

平成12年8月1日、日本道路公団、群馬県教育委員会、当調査事業団の3者による「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。また、協定書に基づき公団と事業団による平成12年度発掘調査の契約が結ばれ、発掘調査は伊勢崎市書上遺跡から着手することとなった。（第1図）

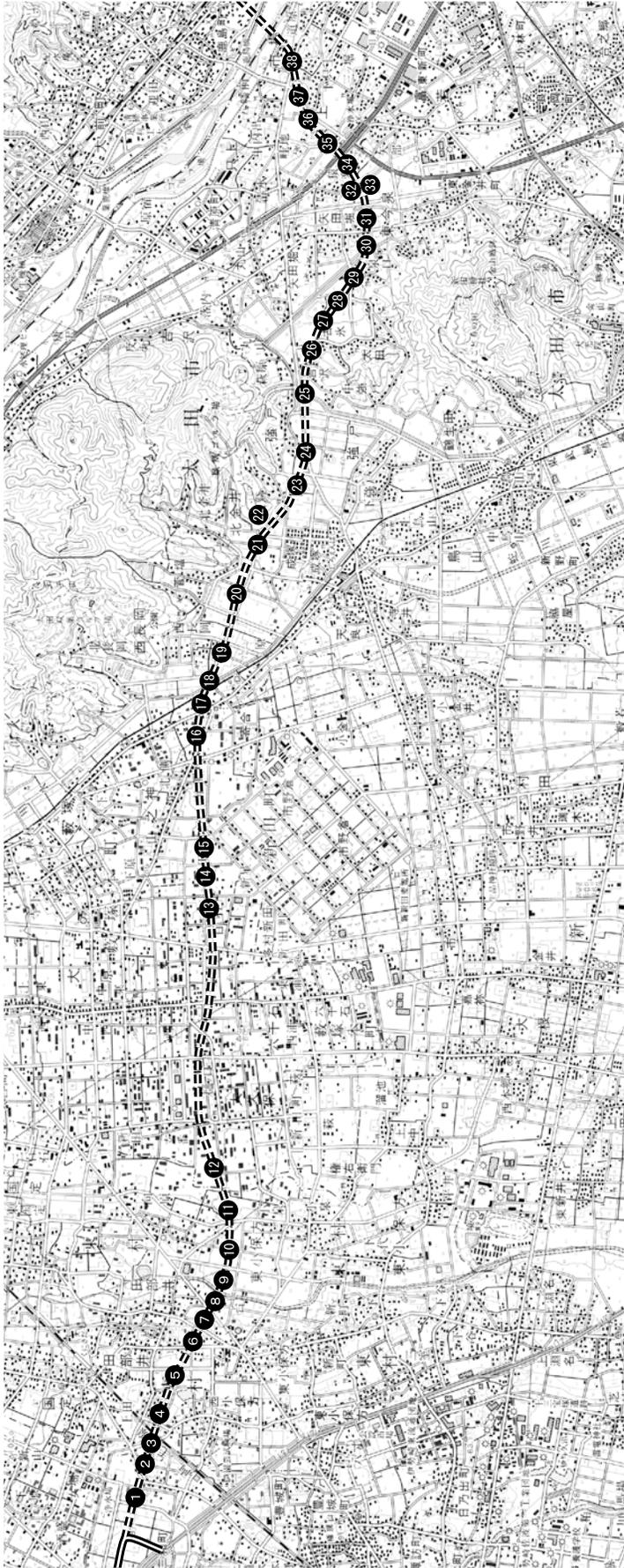
上強戸遺跡群の調査範囲は延長910mに及ぶ。その位置は、北関東自動車道が太田市北部を東西につなぐ県道足利伊勢崎線「強戸」交差点の北東部から県道を南に横切って、南東方向に金山丘陵の裾部を南流する八瀬川に至る区間である。平成8年度、県教育委員会は道路公団から北関東自動車道建設事業区間の埋蔵文化財状況について問い合わせを受け、沿線市町村の協力のもと詳細確認作業が行われた。上強戸遺跡群はこの確認作業によって集落・水田遺構が想定される遺跡として周知化された。

平成13年2月、上強戸遺跡群発掘調査の実施に先立ち、次年度以降の発掘本調査計画策定のため、道路建設予定地が遺跡にかかる全区間の範囲確認調査が実施された。

範囲確認調査の結果では、県道足利伊勢崎線以西の140mの区間は古墳時代からFA洪水層、中近世遺構の検出があり、水田跡の存在とともに特に中・近世家屋跡の存在が確認された。また、県道東側の区間は八王子丘陵の南端部に位置し微高地と低地に分かれる。微高地部分では溝跡・土坑等を検出し、低地部分では浅間B軽石層下及び古代以前の洪水層下からは共に水田跡の展開が予想された。

上強戸遺跡群は、北関東自動車道が県道足利伊勢崎線を高架橋で跨ぐ工事区にあたることから、道路公団側からは橋台工事区域の文化財調査を隣接遺跡に先んじての優先的着手を要請された。しかし、調査用地取得状況では、県道の西側橋台部に関係する周辺住宅地の解決の見通しは立たない状況にあった。

こうした工事工程、及び用地の解決の状況に従って、平成14年1月から2班での調査班体制により発掘調査が実施されることとなった。第1班は県道東の高架橋工事区域から着手し、第2班は県道西側の高架橋工事区域の西隣接地からの着手となった。



第1図 北関東自動車道(伊勢崎～県境) 関連遺跡位置図

番号	KT	遺跡名	所在地(調査時)
1	340	書上遺跡	伊勢崎市三和町
2	350	天ヶ塊遺跡	伊勢崎市三和町
3	360	天上遺跡	佐波郡東村西小保方・上田
4	370	前道下遺跡	佐波郡東村上田
5	380	塚下遺跡	佐波郡東村上田
6	390	上柳沢遺跡	佐波郡東村東小保方
7	400	遠西遺跡	佐波郡東村田部井
8	410	下元屋敷遺跡	佐波郡東村田部井
9	420	下田遺跡	佐波郡東村田部井
10	430	南原間遺跡	佐波郡東村田部井
11	440	下大久保遺跡	佐波郡東村田部井
12	450	大久保鹿鹿遺跡	新田郡戴塚本町大久保

13	510	大原白石遺跡	新田郡戴塚本町大原
14	520	山ノ神野田遺跡	新田郡戴塚本町山ノ神
15	530	山ノ神南側遺跡	新田郡戴塚本町山ノ神
16	540	戴塚西野原遺跡	新田郡戴塚本町戴塚
17	550	西長岡横塚古墳群	太田市西長岡町
18	560	島谷戸遺跡	太田市西長岡町
19	570	西長岡宿遺跡	太田市西長岡町
20	580	菅塩遺跡群	太田市菅塩町
21	590	成塚遺跡群	太田市成塚町
22	600	成塚向山古墳群	太田市成塚町・北金井町
23	610	大鷲遺跡群	太田市大鷲町
24	620	上強戸遺跡群	太田市強戸町
25	630	峰山遺跡	太田市強戸町字峰山

26	640	萩原遺跡	太田市緑町
27	650	古水条里水田跡	太田市緑町
28	660	二の宮遺跡	太田市緑町
29	670	八ヶ入遺跡	太田市緑町・東今泉町
30	680	大道西遺跡	太田市東今泉町
31	690	大道東遺跡	太田市東今泉町
32	700	築前遺跡	太田市只上町
33	710	鹿島補遺跡	太田市東今泉町
34	720	向矢部遺跡	太田市只上町
35	730	矢部遺跡	太田市只上町
36	740	只上深町遺跡	太田市只上町
37	750	新島遺跡	太田市只上町
38	760	道原遺跡	太田市只上町

北関東自動車道(伊勢崎～県境) 地域遺跡一覧

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法（第2図、第3図）

上強戸遺跡群は東西総延長910mあまりである。発掘調査にあたっては、便宜的に西よりローマ数字を用いⅠ区～ⅩⅠ区の調査区を設定した。県道足利伊勢崎線が調査区西部域で斜向南北に分断し、さらには調査域全体を直線的に走る南北方向の土地区画道路が区画様にあるため、これらを調査区境としたものである。また、調査区によってはⅤ-1・Ⅴ-2区などのローマ数字+アラビア数字で小区が設定されているものがあるが、区によっては発掘調査が断続的な工程をとったためである。（遺構実測図・遺物註記などの調査資料には小区の表記がⅤ-i区・Ⅴ-3区などのようにローマ数字とアラビア数字混在が多々ある。本書はアラビア数字に統一して表記してある。）

調査にあたっての方眼設定には、北関東自動車道関連遺跡及び周辺諸遺跡との位置的整合性を保つため、国家座標軸第Ⅳ系を用い10mを標準とした。各方眼の名称は、南東隅の座標値で表し、 $X=37010$ ・ $Y=-42140$ のように表記した。なお個別遺構や出土遺物に関する位置表記に対しての座標値は1m単位で示した。

遺構名称は区毎にそれぞれ独立した名称を付与した。各区とも基本的には通番的にアラビア数字と遺構種名を併せて遺構名称とした（区毎の第1面・第2面・第3面等の文化面や小区の別なく遺構は通番の名称を付与）。1号井戸跡・10号溝・20号土坑等である。

発掘調査における表土及び文化面や遺構を覆う堆積土の除去は、基本的には試掘調査の所見に基づき遺構確認面と判断された深度まで掘削機械を用いた。

遺構測量調査は基本的には平面図はデジタル測量機器を用い、遺構断面及び土層断面図と遺物出土状況などの部分図は従来のアナログ実測を行った。

遺構の写真記録は6×6または6×7版中型カメラと35mm一眼レフカメラを用いてモノクロ写真撮影と、同じく35mm一眼レフカメラでカラーリバーサル写真の撮影を行った。また、遺跡全景写真や区毎の高高度写真の撮影にはラジコンヘリコプターを用いた遠隔撮影を委託して行った。

遺物註記には、上強戸遺跡群の遺跡略号であるKT-620を使用した。

### 2. 調査の経過

平成13年度（平成14年1月1日～平成14年3月31日）

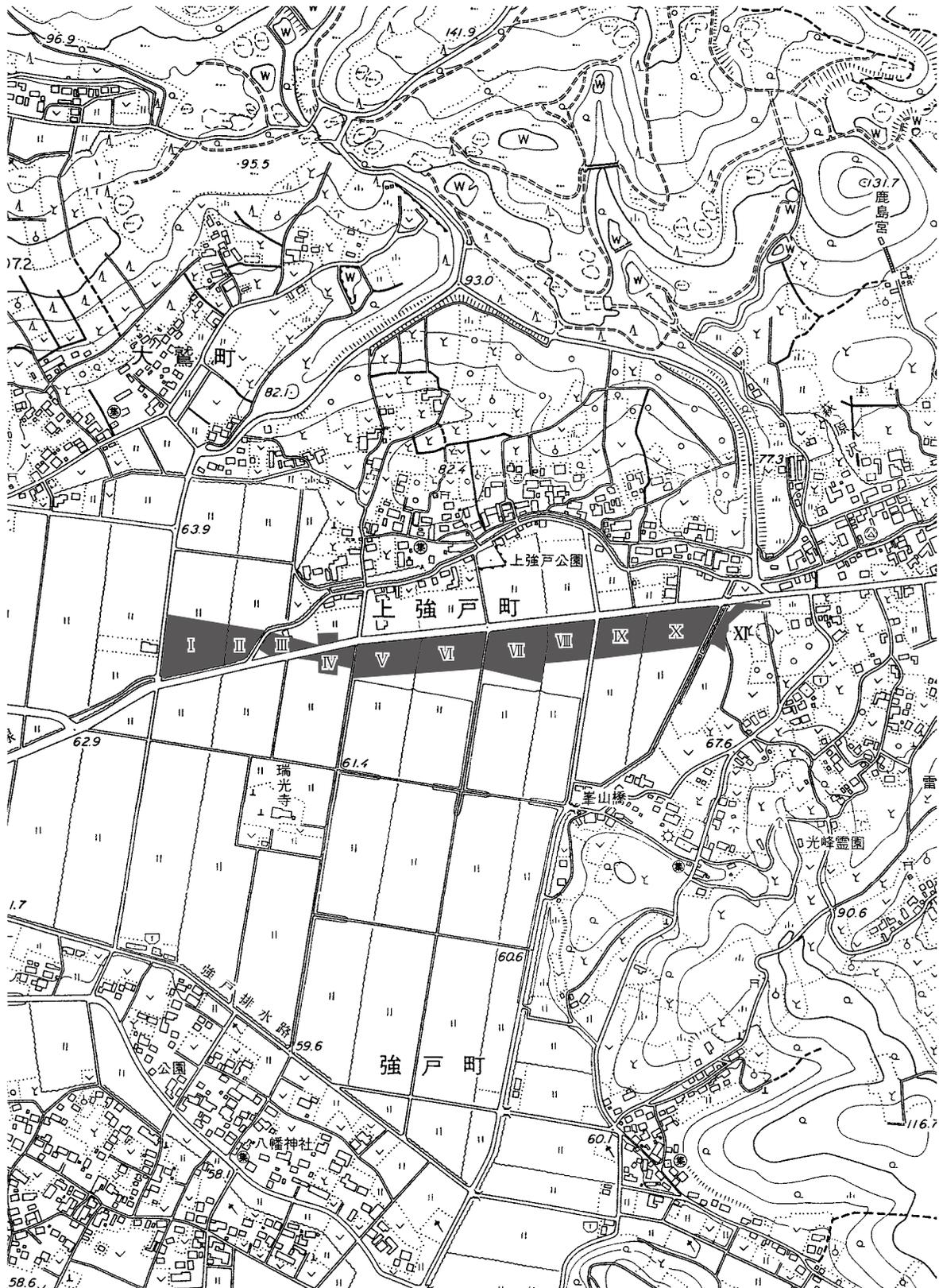
県道足利伊勢崎線を境に北側（Ⅰ区～Ⅲ区）のⅡ区と南側（Ⅳ区～ⅩⅠ区）Ⅳ区・Ⅴ区の調査を実施し、Ⅱ区・Ⅳ区の調査が終了した。

**Ⅱ区** 調査対象表面積は2,383㎡である。検出遺構は中近世と平安時代から古墳時代の各遺構面である。東半部を覆う近世洪水泥流層直下から近世水田跡・溝跡とAs-B軽石に関わる水田跡の痕跡、畝跡などを調査した。出土遺物には中国陶磁器片・国産土器・陶磁器片などがある。

南縁では、現在の新田堀用水路の前身である大溝が、さらに直下には河道跡が確認され、この地域の主要灌漑水路であったことが推測された。平安時代の洪水泥流層は広く確認され、直下からは水路を伴い低い畦の平安水田跡を調査した。

第1章 発掘調査の概要

平安水田面下にはこの地域の開田に関わると考えられる溝跡が検出されているが、時期は古墳時代以降の遺物も含み、検討を要した。



第2図 上強戸遺跡群調査域図(太田市都市計画図1/10,000)

**Ⅳ区** 調査対象表面積は350㎡である。昭和時代に圃場整備された区であるがAs-B軽石関連層以下は大きな攪乱を受けておらず、比較的良好な状態で土層が堆積していたが検出遺構は少ない。中世から平安時代と古墳時代でその下位からは時期不明の土坑状遺構が検出された。

As-B軽石混土層下より水田跡と浅い溝跡5条を検出した。水田跡は耕土が小粒な軽石を混入する黒色粘質土である。畦畔は部分的に南北・東西方向とも確認された。

古墳時代の遺構では2条の溝と遺物集中地点が検出され、土師器甕類が多い。

**Ⅴ区** 調査対象表面積は3,520㎡である。Ⅳ区と同様圃場整備され層序も類似するが、整備事業時の重機によると思われる凹みや攪乱が著しい。西半ではAs-B軽石混土層下より水田面と思われる黒色粘質土面が認められたが畦畔は確認されなかった。その他2条の溝が検出された。南西の一部にAs-B軽石層が純層に近く堆積していたが水田畦畔などは認められなかった。また、調査区西半部に古墳時代前期の土器が集中する地点3～4カ所が検出された。

**平成14年度**（平成14年4月1日～平成15年3月31日）

調査はⅠ区、Ⅴ・Ⅵ区、Ⅷ～Ⅺ区を対象とした。冬期においても自然湧水が地表近くまで達しているため、常時湧水処理を行いながら調査を実施し、Ⅴ区・Ⅸ区・Ⅹ区・Ⅺ区の調査を終了した。

**Ⅰ区** 調査対象表面積は8,731㎡である。調査区北側で近世水田耕土面を確認したが畦畔などは土地改良などにより消失している。区内北側から南側にかけて検出された水路跡は、洪水により埋没している。一部に石敷き、石積み壁や壁面に杭を打設する崩落防止策を施してあった。

当調査区を最も表徴する調査面は中世である。調査区全域に著しい遺構量の検出があり、度重なる改・修築が窺われた。遺構には堀跡・溝状遺構・掘立柱建物跡・土坑・井戸跡・土壙墓・小穴群・製鉄炉跡などがある。出土遺物は多種多彩で、かわらけ土器・軟質陶器(内耳鍋類・搗り鉢)・陶磁器・石製品(穀臼・茶臼・鉢・砥石・墓石・石塔類)・木製品(建築部材・桶・下駄・椀類)・漆器と大量な鉄滓・鉄塊・鞆羽口などである。特に製鉄炉とともに出土した大量な鉾滓類と羽口からは相当量の鉄生産が行われていたことが推測される。

古代では平安時代の水田跡が低地部分で検出され、昨年度調査のⅡ区からの広がり確認された。

**Ⅴ区・Ⅵ区、Ⅷ区～ⅩⅠ区** 調査対象表面積は、Ⅴ区1,400㎡、Ⅵ区6,330㎡、Ⅷ区2,600㎡、Ⅸ区4,158㎡、Ⅹ区5,295㎡、Ⅺ区869㎡である。中近世面の調査でⅥ区・Ⅷ区では畠耕作のさく痕を検出した。さく痕の走向は2～3の形態があり、作付け作物による区割りがなされたようである。

古代面ではⅤ区Ⅵ区Ⅷ～Ⅹ区でAs-B軽石に覆われた水田跡を検出した。水田面の確認は比較的容易であったが、畦畔の遺存状況は南北方向のもの状態がよく、東西方向の畦畔は不鮮明な部分が多かった。Ⅵ区内で幅1mの試掘溝を設定し、上面水田跡下層の遺構確認を実施した。水田耕土下は厚い洪水砂層となり、その洪水砂層に覆われて水田畦畔が確認された。遺存状態は極めて良好な感触を得て、来年度の本格調査が期待された。

**平成15年度**（平成15年4月1日～平成16年3月31日）

本年度の調査はⅥ区・Ⅶ区・Ⅷ区で、水田跡が調査の主体遺構である。

## 第1章 発掘調査の概要

**Ⅵ区・Ⅶ区・Ⅷ区** 調査対象表面積はⅥ区が昨年度同様の6,330㎡、Ⅶ区は8,390㎡、Ⅷ区は1,352㎡である。

Ⅶ区・Ⅷ区ではAs-B軽石によって覆われた水田跡を、さらにⅦ区からは竪穴状遺構・土坑・溝跡などを検出した。水田耕土面は比較的容易に認識されたが、畦畔はその痕跡を止めるにすぎない。その耕土下は洪水砂層が厚く、これに覆われた水田跡が広範囲に検出された。

第2面の水田は旧地形の緩やかな高低傾斜に合わせて方形または長方形区画に畦立ちが行われている。長方形区画の水田面は3～4m×8～10m大のものが多い。Ⅶ区では水田面が凹凸のあるもの、平坦平滑なものや畦畔の高低の違いなど、水田区画によって耕作手順の段階を示すような現象が検出されている。なお、水田跡が洪水層に覆われた後には大溝が開削されており、奈良時代の須恵器とともに農具や杭など多くの木製品が出土した。

Ⅶ区第2面の水田跡耕土下より第3面の水田跡が検出された。畦畔の高まりはほとんど見られず、検出範囲は斑状である。残存状況は不良ながら所謂小区画水田の体をなしている。出土遺物は微量微細で年代等の認定は不明確であるが、水田面を切り裂く様に数条の溝が開削され、古墳時代前期の土器類と農具・杭類など豊富な木製品が出土した。

### 平成16年度（平成16年4月1日～平成16年6月30日）

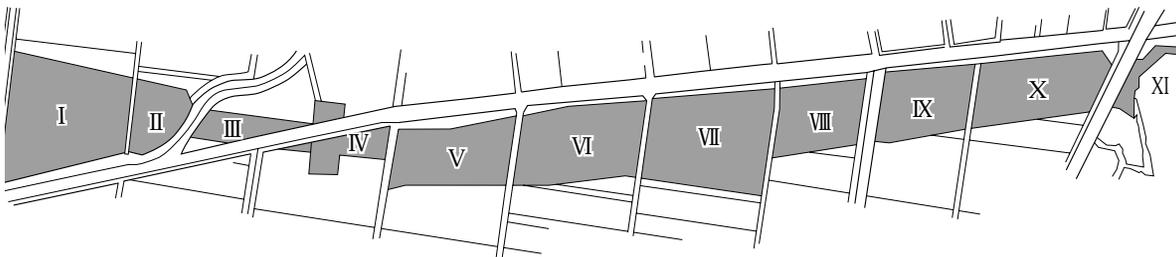
今年度の調査対象区はⅢ区である。上強戸遺跡群はⅠ区～Ⅺ区に調査区を設定し、昨年度までに当区を除き調査を終了している。

**Ⅲ区** 今調査となるⅢ区は一部に未買収地を残す調査区であり、この未買収地以外の部分である。調査対象表面積は未買収地を含め1,521㎡である。

遺構検出面より3面の調査である。1面より検出は8条の溝跡と2区画の水田跡で、中近世の時期と考えられる。

2面では11条の溝と土坑群30余基である。調査区中央を東西に2分するように南北走の溝が走り、その西側に方形土坑が密集して検出された。出土遺物は少なく時代認定に苦慮するが中世から古代にかかる頃とされた。

3面では縦横に交差して13余条の溝が検出された。埋土は洪水による黄褐色系の砂質層が主で、先に調査されたⅥ区・Ⅶ区・Ⅷ区の第2面水田を覆っていた洪水層と同様な堆積層であることが確認でき、当面以後の洪水発生も2度程度の回数が明らかとなった。検出された溝跡は古代水田を含めこの地一帯への人工的な用水路であり、底面傾斜等から西より東方への流水が想定される。この用水路からは丸木縦半裁割り抜き木樋が出土した。県内でも類例が無く、当時の灌漑・治水技術を知る上でも貴重な資料である。



第3図 上強戸遺跡群調査区割図

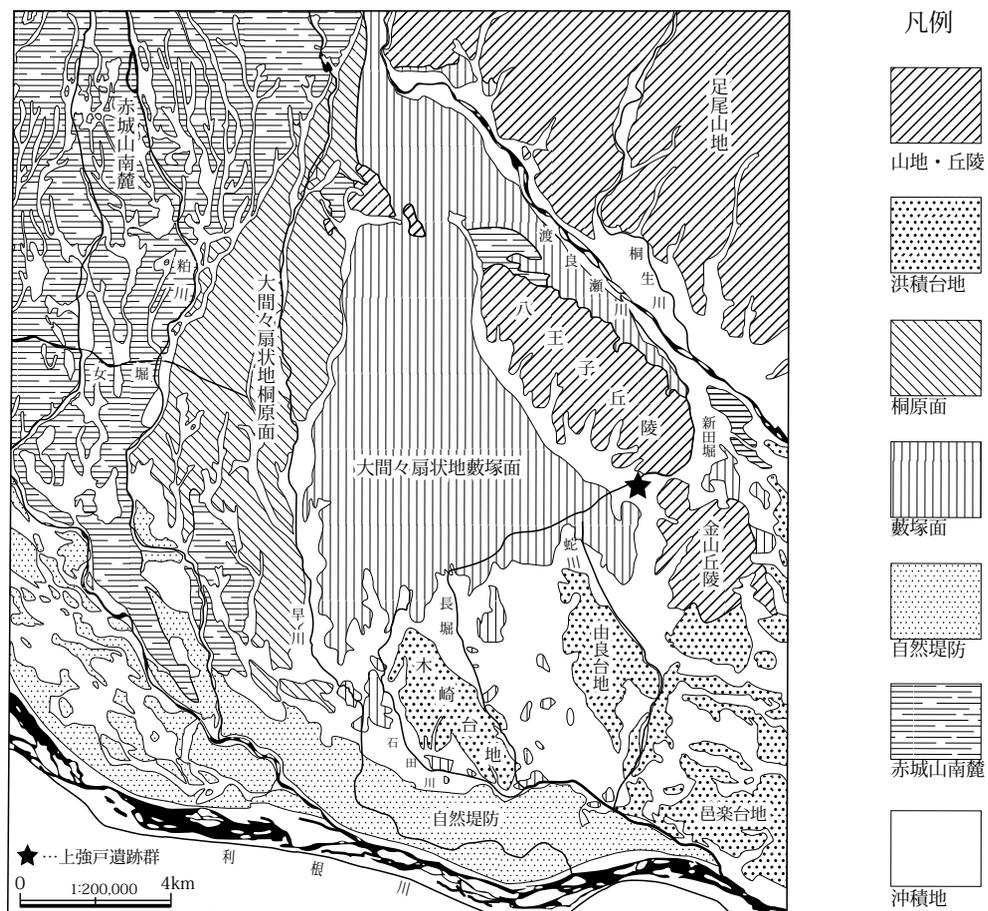
## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

上強戸遺跡群は太田市の北部に位置し、金山丘陵北西部及び八王子丘陵南西部に広がる平野平坦地にある。関東平野の北西部にあたる太田市の地勢は、広大な平野部と八王子・金山の丘陵山地で構成されている。

これらの丘陵は、足尾山地からの断層分離と渡良瀬川の流路変化によって独立的丘陵になったと考えられている。一方、八王子・金山両丘陵西方部に広がる平坦地形は、渡良瀬川が更新世に形成した大間々扇状地形によるものである。

大間々扇状地は、形成時代の異なる五つの地形面で構成され、主体となる地形面は東半の藪塚面と西半の桐原面である。上強戸遺跡群は標高50～60m地帯で、前者の藪塚面の扇頂部付近に位置するとともに、八王子・金山丘陵の縁辺や丘陵浸食谷による沖積低地をその立地環境とする。扇状先端部は伏流水の湧水帯を、そして、沖積低地堆積層は腐食植物を含むsilt～粘土からなり排水不良の低湿地と複雑な地質土壌を形成するが、現在は土地改良によって整然とした水田地帯が広がる。(第4図)



第4図 上強戸遺跡群周辺の地形分類図

## 第2節 遺跡の歴史的環境

上強戸遺跡群の周辺域は、八王子・金山丘陵がその南西面に舌状に延びるloam低台地を発達させている。また、大間々扇状地の末端は沖積平野に点々と連なる小規模なloam層低台地を残している。このような地勢的条件の基で旧石器時代を始め古墳時代から古代・中世の各時代に多くの遺跡が展開している。(第5図)

**旧石器時代** 周辺丘陵部の縁辺には村上遺跡・峯山遺跡・強戸口峯山遺跡・雷電山遺跡などが知られ、槍先形尖頭器をはじめ削器・彫刻刀形石器・ナイフ形石器の出土がある。低台地に立地する成塚住宅団地遺跡からは槍先形尖頭器・搔器が、また、独立丘陵にある小丸山遺跡では片刃状刃部を作る礫器が採取されている。

**縄文時代** 草創期・早期の遺跡は八王子・金山丘陵周辺の沖積低台地に分布する。金山丘陵の東方にある東金井町下宿遺跡は草創期爪形文土器を出土した。早期の遺跡には同じく金山丘陵東面で南東方に張り出す舌状台地上にある東長岡町焼山遺跡や、金山丘陵北東部斜面、小丸山丘陵から撚糸文系の土器が採取されている。早期後半の貝殻条痕文土器を出土する段階の遺跡は増加し、上強戸遺跡周辺では焼山遺跡、東今泉大道東遺跡、由良台地上の新野町堂原遺跡などがある。

前期の遺跡は金山丘陵南東部竜舞台地や大泉台地に多く分布するが、上強戸遺跡周辺域の成塚石橋遺跡では住居跡1軒が、堂原遺跡、大道東遺跡では土器の分布はあるものの遺構は検出されていない。

縄文中期は大間々扇状地末端の成塚住宅団地遺跡、烏山下烏山遺跡や低台地縁辺の堂原遺跡、金山東麓など台地縁辺やこれに続く微高地帯に占拠する遺跡が知られる。成塚住宅団地遺跡では14軒の竪穴住居跡が検出されている。

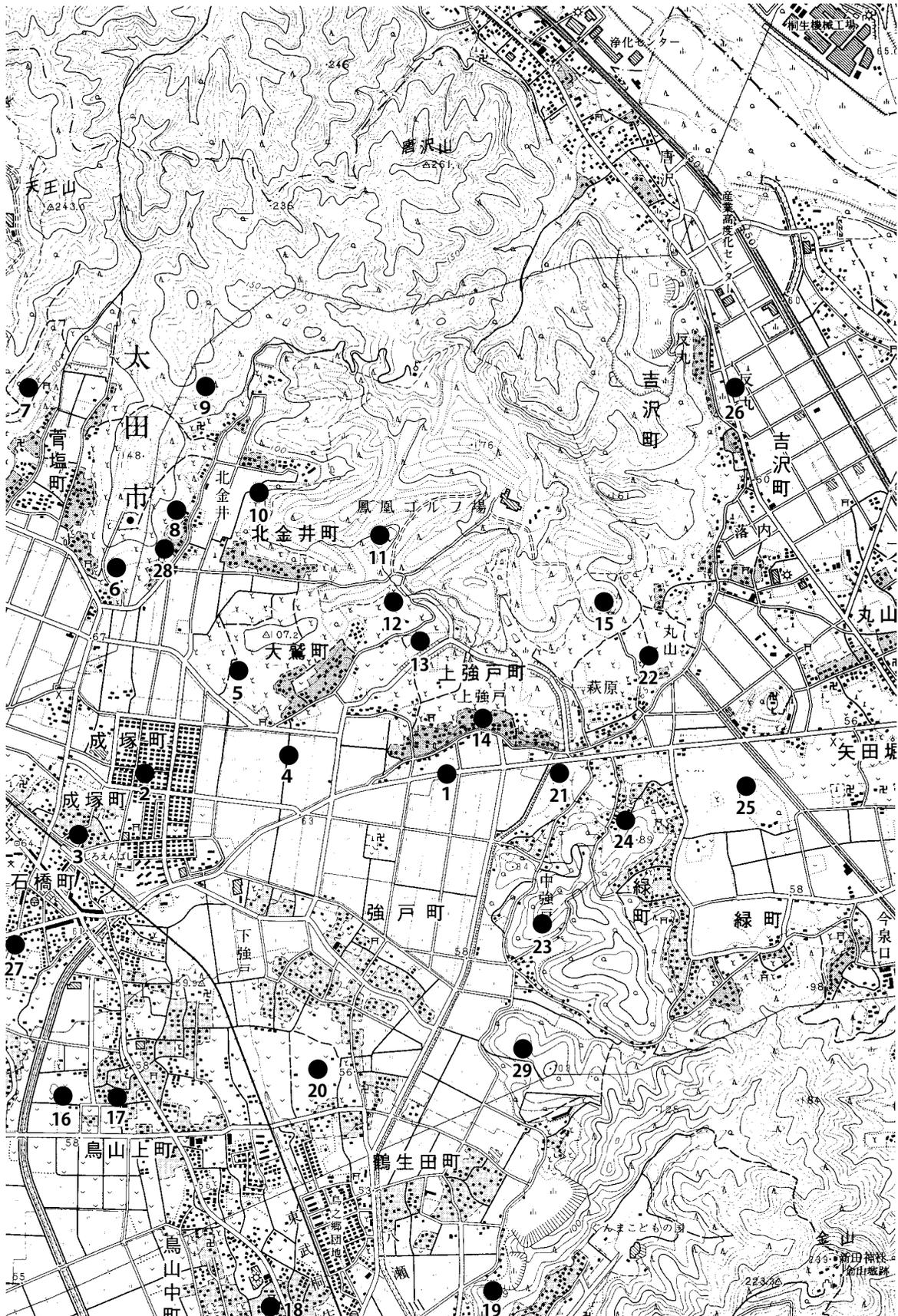
後期の遺跡は金山南東部の竜舞台地や大泉台地、由良台地、大間々扇状地末端台地に多い。上強戸周辺では堂原遺跡に称名寺式～加曾利B式の土器が顕著である。

縄文後期後半から晩期にかけての遺跡は太田市域全体に希薄な分布であるが、西長岡横塚古墳群では晩期の土器が採取されている。

**弥生時代** 太田市域の弥生時代遺跡はかなり限定された地域でその数は少ない。八王子丘陵や金山丘陵の沖積地を間近に望む縁辺部や周辺沖積地の低台地に散見される。成塚向山古墳群は八王子丘陵の南東部で沖積低地に張り出す尾根上にあり、弥生中期の土器が検出されている。独立低丘陵に立地する小丸山遺跡には後期の土器片の散布が認められている。

**古墳時代** 希薄な遺跡分布が一転、市域全体に濃密な遺跡分布を形成する。古墳時代前期に東海地方土器様式を受容した石田川遺跡が著名で、沖積低地低台地に立地する遺跡が多くある。成塚住宅団地遺跡では前期の竪穴住居跡が90余軒をはじめ方形・円形周溝墓が検出された。また、丘陵上の成塚向山古墳群では前期古墳とともに集落跡が発見されている。さらに前期古墳の寺山古墳は上強戸遺跡群を南東方から俯瞰する丘陵先端部にあり、全長約60mの前方後方墳である。

古墳中期の遺跡はその立地条件を前代からほぼ踏襲して主に低台地上に展開する。太田市域には、太田天神山古墳をはじめ東日本有数の大形古墳が出現する。上強戸遺跡群周辺では、全長95m前方後円墳の鶴山古墳、径35mの円墳または帆立貝形とも考えられた亀山古墳、全長66mの前方後円墳の鳥崇神社古墳等、県内古墳時代中期を代表する様な古墳がみられる。鶴山古墳からは衝角付冑・眉庇付冑に伴う3組もの甲冑類が



第5図 上強戸遺跡群周辺遺跡 (国土地理院『桐生』『上野境』『足利北部』『足利南部』)1/25000を使用

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

ありその他、剣・太刀・鉄製農工具類・石製模造品など豊富な副葬品がある。集落遺跡は成塚住宅団地遺跡に代表される。竪穴住居跡350軒以上の検出とともに居館跡と考えられる方形区画の遺構がある。

古墳後期には前方後円墳で全長74mの二ツ山1号墳や45mの二ツ山2号墳の築造があり、終末期には八王子丘陵・金山の丘陵上や沖積地低台地上にも多くの群集墳が形成される。八王子丘陵北面に張り出す舌状台地には菅塩西山・菅塩山崎・北金井川西・北金井西山・北金井御廟山・北金井東浦・大鷲大平・大鷲向山・上強戸・吉沢の古墳群が連なる。また、金山丘陵では長手古墳群が、沖積低台地上には鶴生田・下強戸古墳群、新殿古墳群がある。

生産遺跡では金山丘陵を中心に東日本最大級の窯業地帯を展開する。6世紀後半頃には丘陵の東縁を主に窯跡の分布があり、操業の盛期であったと考えられる。金山丘陵窯跡産須恵器製品の流通範囲は北関東一円に及んでいる。埴輪窯跡には、八王子丘陵に駒形神社埴輪窯跡が、沖積低台地では成塚住宅団地遺跡がある。

**歴史時代** 上強戸遺跡群の南西部には県内初期寺院の一つで7世紀後半の創建とされる寺井廃寺、新田郡衙に推定されている天良七堂遺跡など古代新田郡の中枢部を形成する諸遺跡が集中する。生産遺跡では金山丘陵の窯跡群は丘陵西縁部に生産の拠点を移動し、7世紀後半～8世紀の前半に高太郎I遺跡や山去窯跡群で操業を開始する。また8世紀末から9世紀代には八王子丘陵南東縁の丸山北須恵器窯や小丸山の丘陵裾部の丸山腰巻遺跡の吉沢窯跡群で須恵器生産が小規模・散在的に行われているが、遑って寺井廃寺の創建瓦を焼成した萩原瓦窯跡が知られている。

**中世** 金山山頂を中心に城郭を形成する金山城跡は県内屈指の中世山城である。萩原館跡・大島館跡・大島城跡・由良城跡・台源氏館跡・鳥山城跡など周辺域には金山城跡関連の城館跡が点在する。中世県東部の中心地として十分な景観を見せている。

### 参考文献 周辺の遺跡

1. 上強戸遺跡群『上強戸遺跡群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
2. 成塚住宅団地遺跡群『成塚住宅団地遺跡』I～III群馬県企業局・太田市教育委員会1990～1993
3. 成塚石橋遺跡『成塚石橋遺跡』I・II財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988・1991
4. 大鷲遺跡群『大鷲遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007
5. 成塚向山古墳群『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008
6. 菅塩田谷遺跡『年報23』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
7. 菅塩西山古墳群『太田市史』通史編 原始古代 太田市1996
8. 北金井川西古墳群『太田市史』同上
9. 北金井西山古墳群『太田市史』同上
10. 北金井御廟山古墳群『太田市史』同上
11. 北金井東浦古墳群『太田市史』同上
12. 大鷲大平古墳群『太田市史』同上
13. 大鷲向山古墳群『太田市史』同上
14. 上強戸古墳群『太田市史』同上
15. 吉沢古墳群『太田市史』同上
16. 鶴山古墳『太田市史』同上
17. 亀山古墳『太田市史』同上
18. 鳥崇神社古墳『太田市史』同上
19. 長手口古墳群『太田市史』同上
20. 鶴生田・下強戸古墳群『太田市史』同上
21. 峯山遺跡『太田市史』同上
22. 村上遺跡『太田市史』同上
23. 強戸口峯山遺跡『太田市史』同上
24. 雷電山遺跡『太田市史』同上
25. 小丸山・小丸山西遺跡『太田市史』同上
26. 反丸遺跡『太田市史』同上
27. 新殿古墳群『太田市史』
28. 駒形神社埴輪窯跡『太田市史』同上
29. 鶴生田口遺跡『太田市史』同上

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要

上強戸遺跡群は、その大半が沖積低地にあり、検出遺構には遺存の有無、状態の良し悪しは否めないがある程度の共通性が認められる。各区の遺構はおよそ3面（区によっては4面）にわたって検出されている。遺構の検出状況は、調査区によってかなりの濃淡があり検出面でもその差が大きい、その遺構種としては概略上位面で畝跡か水田跡が、下位面では水田跡かそれに纏わる溝跡で所謂生産跡関連の遺構といえることができる。

上強戸遺跡群の調査で最も遺跡の性格を現す地点は、調査対象区のほぼ中央部にあたるⅦ区である。特に第2面では調査面積8,300㎡余りの全域に方形区画の水田跡が展開し、西側Ⅵ区と東側Ⅷ区にかけても連続する広がりを見せている。特にⅦ区では第3面においても方形小区画水田跡が部分的ではあるが検出されている。

このⅦ区では2面・3面の各水田跡と前後して開削された溝跡からは槌・田下駄・馬鍬・又鍬などの豊富な農具、弓・織機をはじめとする木製品や大小多量な杭類が出土している。また、調査範囲は狭小ながらⅢ区では、第3面より大・小規模に開削された多くの溝が検出されている。この地域の幹線の用水路としての機能が考えられ、現代に続く新田用水の起源として辿り得る様な誘引力がある。一部の溝からは繰り返し設置を試みた半裁決りの木樋が出土している。県内初例の治水関連の木製品であり最終段階に設置されたと考えられる木樋は木肌も生々しく現時点でも加工に耐えられるほどの質感が残されている。当時の灌漑・治水技術を知る上でも貴重な資料を提供している。

沖積低地という立地条件の中で、唯一、調査区域西端区であるⅠ区が低地を望む低台地上に占地する。従って、このⅠ区のみ遺構の構成内容が他区とは際だった違いを見せている。中世を中心とする遺構群が区全域に検出され、堀跡、掘立柱建物跡、pit・土坑群、井戸跡の他大量の製・精鉄関連の鋳滓とともに製鉄炉跡等が調査されている。また、堀跡によっては、埋め尽くすほどに石類の投棄が行われ、石臼・五輪塔類の石造物・大形自然石を用いた置き砥等膨大な量の石材・石製品が検出されている。なお、石臼・石造物の類も砥石としての転用が図られており製鉄炉の存在と合わせ、大規模な鍛冶工房施設が想定される。

各区の遺構検出面には上位から第1面・2面・3面と称し、基本的には文化面あるいは時代面としての掌握を目論んだ。しかし、後世に行われた圃場整備などの土地改変や攪乱による遺構面の削平度合いによっては同一面検出の異時期遺構も多い。また、幾度かの洪水災害などは、狭長な調査区の土層堆積状況は複雑でその統一的な層序認識を阻んでいる。そのため、Ⅰ区～Ⅺ区の調査区を通して同一面として検出した遺構が同時期・同時代であるという確定にはかなりの困難が伴っている。従って、第1～第3面と称した遺構検出面は必ずしも各区を通しての時期ないしは時代的な同一・共通面ではなく、区毎に検出した上下順位的な意味合いが強い。各区における遺構面の記述ではできるだけ検出面の時代等を記すこととする。

上強戸遺跡群における土層堆積状況は、八王子丘陵、金山丘陵縁辺の丘陵浸食谷起源の沖積低地帯という立地環境上または洪水被災地という複雑な条件下にある。このため広範囲な調査区での統一的な層序提示は困難であり、土層状況は調査地点各区によって異なっていることは上述のごとくである。ここでは、水田跡を中心に各面において遺構の遺存状況の最も良好なⅦ区を基準とする概括的層序をもって上強戸遺跡群の基

第3章 検出された遺構と遺物

本層序としてここに示しておく。

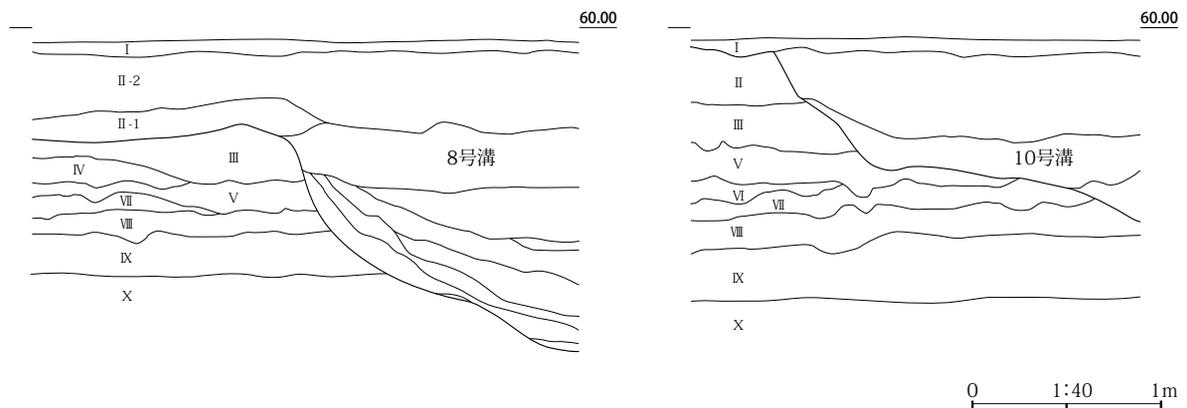
Ⅶ区基本層序（第6図）

- 0層 現耕作土及び圃場整備盛土
- I層 黒色土 第1面水田耕土（As-B混土または現耕作土及び圃場整備盛土下）
- Ⅱ層 暗灰褐色土 silt質（洪水層）
- Ⅲ層 明褐色砂層 砂・siltが縞状に堆積（洪水層）
- Ⅳ層 褐灰色silt層（第2面水田直上被覆の洪水層）薄層で部分的に存在
- V層 暗灰色土 第2面水田耕土 Hr-FA軽石混入
- Ⅵ層 褐灰色silt質土（第3面水田直上被覆の洪水層）薄層で部分的に存在
- Ⅶ層 黒色土 第3面水田耕土 白色軽石（As-C）混入
- Ⅷ層 灰赤色粘土層 強い粘性
- Ⅸ層 黒色粘土層 泥炭質粘土層。
- X層 青灰色silt質土 基層、固く締まる。

基本層序に関わって検出される主たる遺構面は、

- 第1面 I層 As-B混土または現耕作土、圃場整備盛土下面で古代末・中世～近世の水田跡・畠・溝跡等の遺構
- 第2面 V層 Ⅳ層の洪水層に埋まる古墳末～古代初の水田跡を主とした遺構。ただしⅢ層・Ⅱ層の洪水層を開削する奈良・平安時代の溝跡があり、調査では同一面で検出している。このため区によっては第1面と第2面の間に遺構を検出し、第2面を設定した可能性もある。
- 第3面 Ⅶ層 古墳時代前期の水田跡・溝跡等である。

Ⅶ区 基本土層



第6図 上強戸遺跡群基本土層(Ⅶ区)

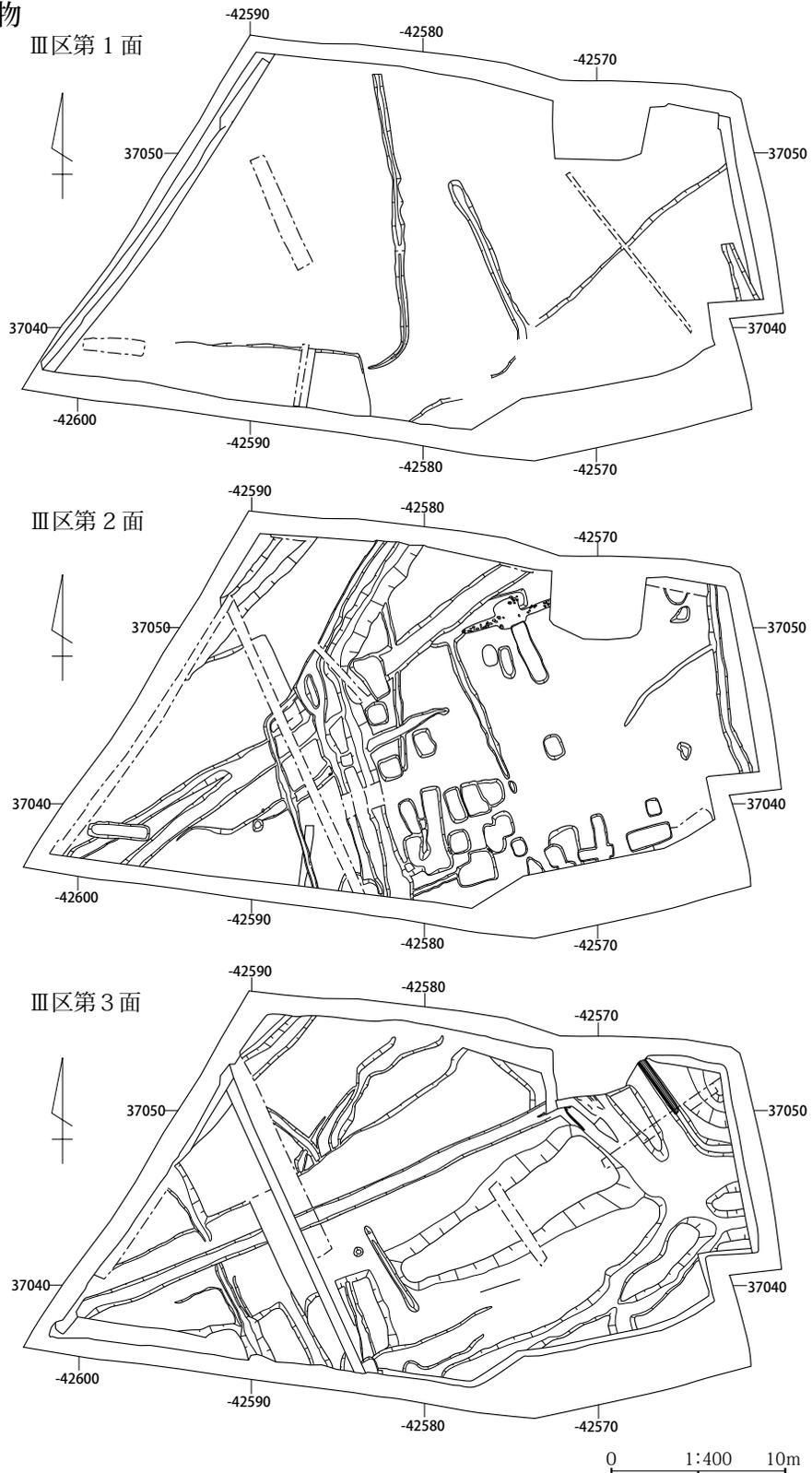
## 第2節 検出された遺構と遺物

### 1. Ⅲ区の遺構と遺物

Ⅲ区では3面にわたって遺構面を検出した。第1面は中・近世を中心とし、溝2条と水田跡とされる2区画分である。水田跡は調査区の南側に検出され、東西方向に長く並ぶ。溝跡についてはこの水田に伴う水路と考えられているが遺構の時期については、中世、近世の区別は明確ではない。なお他に溝跡と思われる痕跡が確認されているが掘形にも至らないためか記録にとどめてはいない。

第2面は溝跡13条、土坑31基である。溝跡は調査区を東西に二分するような南北方向を主とする走向をみせ、その西側に形状が方形ないし長方形の土坑群が密集する。土坑からは出土する遺物もほとんどなく帰属時期に明確さを欠くが古代～中世に相当しよう。

第3面は溝跡13条が検出されている。これら溝跡の一部に木樋が用いられており、治水技術の高さが窺われる。溝跡の埋土は砂質土を主としており、Ⅵ～Ⅷ区において広範に検出された第2面の古代水田跡を覆っていた洪水層と同じもので

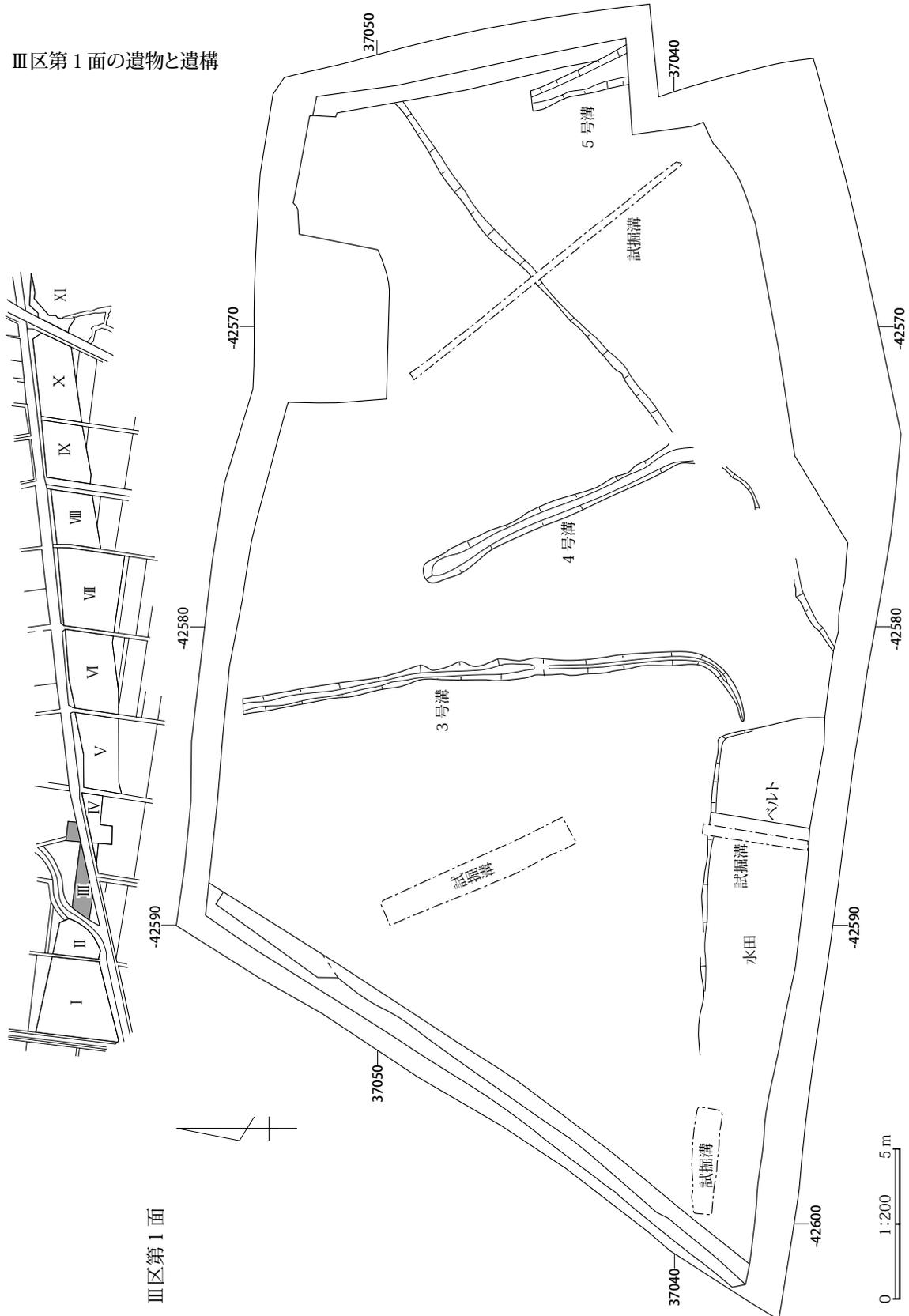


第7図 Ⅲ区第1～3面全体図

第3章 検出された遺構と遺物

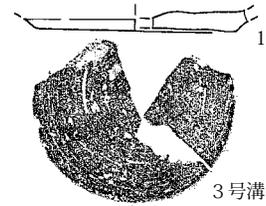
あることが確認できた。従って、これらの溝跡は上強戸遺跡群域の水田耕作に大きな灌漑的な役割を負った用水路であった可能性が高い。なお後節で報告するⅥ～Ⅷ区の古代水田は7世紀末頃に洪水に見舞われたと考えられている。

Ⅲ区第1面の遺物と遺構

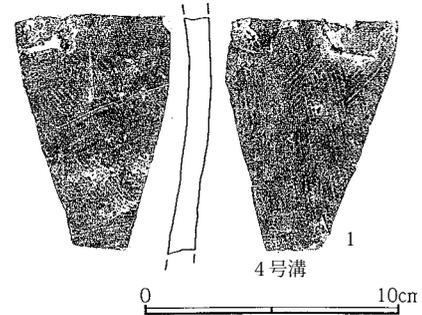


第8図 Ⅲ区第1面全体図

**3号溝** 調査区中央部にあり、略南北走し、N-9°-Wを示す。南端部は南西方水田に接するがごとく弧状に曲がり細まって消滅する。検出延長は約18m、最大幅50cm、深さ11cmを測る。水田跡に伴う水路とも考えられる。出土遺物は埋土中より須恵器坏底部片がある。底部は径8cm、右回転篋削り。2面13号溝出土品と接合する。



**4号溝** 調査区中央部にあり略南北走し、N-24°-Wを示す。南端部は南東方水田に合し、北端は跡切れる。検出延長は約9m、最大幅80cm、深さ20cmを測る。出土遺物は埋土中より須恵器甕片がある。内外面細目平行叩きと当て目後篋撫で。



**水田跡** 調査区南縁南東部と南西部に2区画が検出されている。

区画は畦畔としての高まりはなく、約15cmの落差として確認されている。また、2区画は検出範囲に限っては畦畔に繋がりがなく区割りに連続性が認められない。南東部の区画検出延長は約24mで走向はN-47°-E。南西部のそれは北東隅部を僅かに形成する。北縁区画検出延長は北東隅部より約8mで西側は試掘溝で消失する。走向は略東西を示す。出土遺物はない。

第9図 III区第1面  
3号・4号溝出土遺物

### Ⅲ区2面の遺構と遺物 (第10・11図、PL. 1・2・3・4)

**溝跡** 2面検出の溝群には大別して3つの傾向がある。1つは、走向が南南東から北北西にあるもの(5号溝)。2つに、南西から北東方に走るもの(6・9・10・11・12・13・14)。調査区中央部にあつて、南南東から北北西に向かい北北東方に折れるもの(15・16・17・18・19)である。かなりの頻度で重複するが新旧関係についての所見は得られていない。なお中央部の南南東から北北西走の溝は第1面の3・4号溝の残形である。溝跡の埋土は大半が褐砂質土主体で白色軽石粒が散在して混入する。下位を中心に黄褐色土塊が点在する。

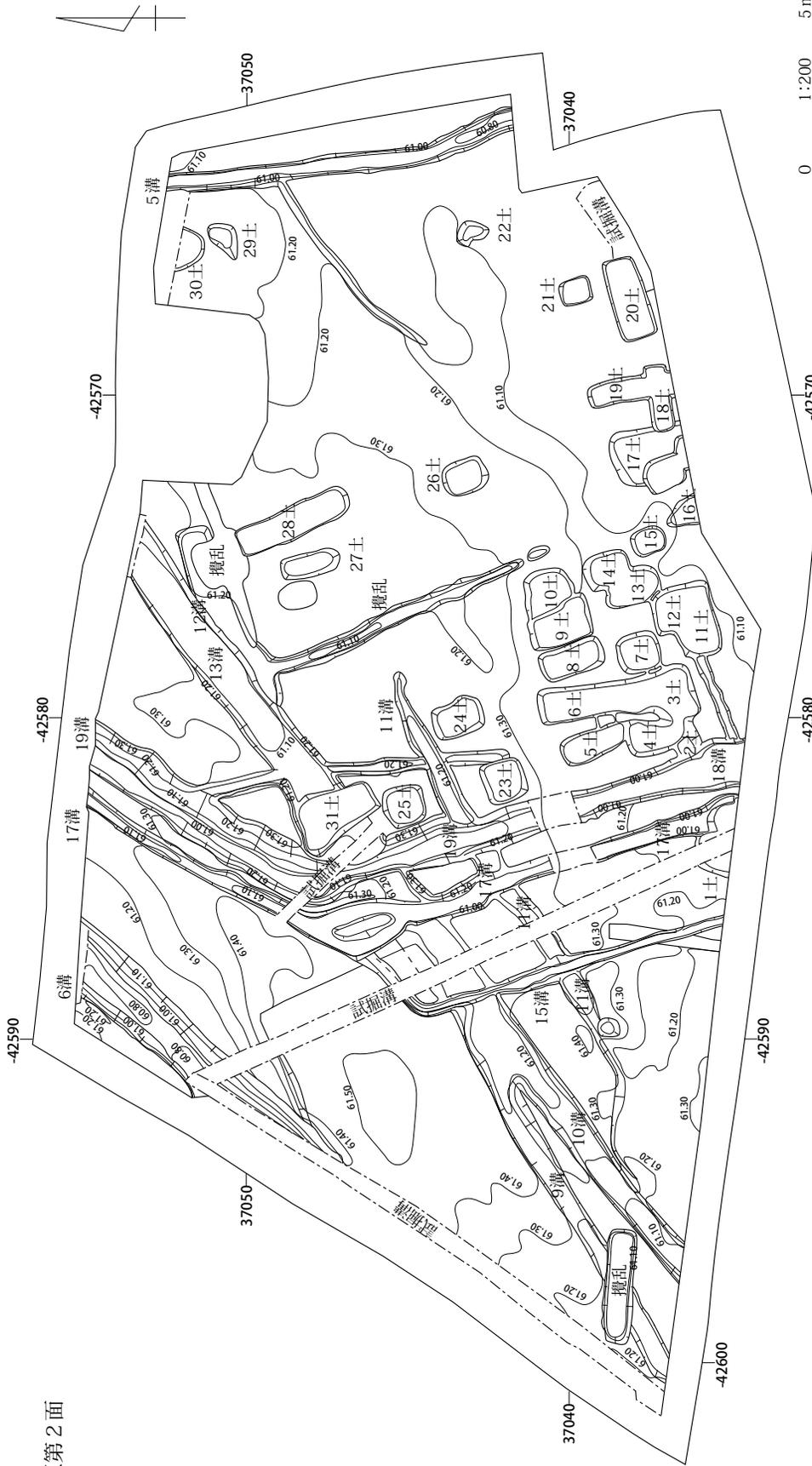
**5号溝** 調査区東縁にあり南北走し、南端部はN-20°-Wで緩く折れてN-5°-Wを示す。南北端は調査区域外に延びる。検出延長11.0m、幅70cm、深さ25cm。第1面で一部が確認されていたが、第2面の調査で明らかにされた。走方向では第1面の溝に同調している。出土遺物は埋土中より古代土師器小片数点である。

**6号溝** 調査区北西部にあり、南西～北東走し、両端は調査区域外に延びる。検出延長11.2m、幅1.45m、深さ35cmを測る。出土遺物はない。

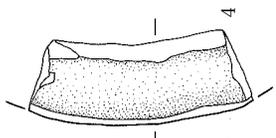
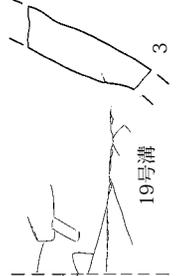
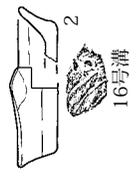
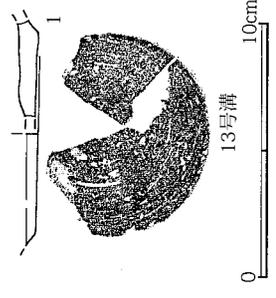
**9号・10号・(12号・13号)溝** とともに南西から北東走し両端は調査区域外に延びる。調査区南西部から約10mは9号・10号溝として併走するが合流して一筋になる。検出延長約31m、溝幅は9号が85cm、10号が1.1m、深さはともに約30cmを測る。合流幅は1.4mである。

**11号溝** 調査区のほぼ中央部にあり南西～北東走する。両端とも途切れるが南西端はS字状に屈曲し細る。

Ⅲ区第2面



第10図 Ⅲ区第2面全体図



第11図 Ⅲ区第2面13号・16号・19号溝、9号・19号土坑出土遺物

走方向はN-62°-Eを示す。検出延長17.8m、幅78cm、深さ10cm足らずで浅い。出土遺物はない。

**14号溝** 調査区南縁にあり、検出範囲では小規模な溝で南西～北東走し、N-70°-Eを示す。南西端は18号溝に直角で合するが延長する可能性もある。北東端は土坑に接して跡切れるが新旧関係は不明である。検出延長約3m、幅40cm、深さ15cmを測る。出土遺物はない。

**15号・16号・17号溝** 15号と17号溝は南半では2.5mほどの間隔で平行して南南東～北北西走し、ともにN-17°-Wを示す。折れて北北東走するが15号溝は17号溝に合し、N-30°-Eを示す。また16号溝は17号溝が折れる直前でこれと分離し2m足らずで17号溝に合する。15号溝の検出延長10.25m、幅80～60cm、深さ20cmを測る。17号溝は検出延長22m、幅60cm、深さ30cmを測る。出土遺物は埋土中で15号溝に古墳時代前期頃の、16号溝は時期不明のともに1片の小片土師器である。

**18号・19号溝** 別名同一遺構である。15号・17号溝と同じく南南東～北北西走し、N-15°-Wを示す。北北東へ折れて走向はN-32°-Eを示す。検出延長21.8m、幅90cm～1.6m、深さ20～30cmを測る。出土遺物は19号溝埋土中より古墳時代前期の土師器小片である。

**土坑** 調査区の南東半部に集中する。平面形状はおおよそ長方形と方形に分かつ。1号～31号土坑の埋土はそのほとんどが砂質暗褐色土を主にし、黄褐色土塊少量混える同質土が堆積するが、2号・11号土坑は主層に褐色味が強い。また、29号土坑も褐色味が強く白色軽石が多く混じる。土坑の重複については調査所見が無く不明である。出土遺物は土師器片が数基の土坑より検出されているがいずれも極小片のため年代等を窺うことはできない。

Ⅲ区第2面土坑計測表

単位 m

遺構名	位置	平面の形状	規模(径・深さ)	出土遺物
1	X=37034～37035・Y=-4258～-42583	?	0.8+ $\alpha$ ×?×?	
2	X=37035～37036・Y=-42580	?	1.0+ $\alpha$ ×0.9×?	
3	X=37036～37037・Y=-42578～-42579	長方形	1.7×1.0+ $\alpha$ ×?	
4	X=37036～37038・Y=-42580～-42581	長方形	1.8×1.0×0.23	
5	X=37038・Y=-42579～-42580	?	0.4+ $\alpha$ ×0.7×?	
6	X=37037～37040・Y=-42578～-42580	長方形	3.5×1.0×0.19	土師器極小片
7	X=37037～37038・Y=-42577～-42578	方形	1.3×1.25×0.07	
8	X=37039～37040・Y=-42577～-42578	長方形	2.0×1.0×0.13	
9	X=37039～37041・Y=-42576～-42577	長方形	2.0×1.2×0.22	土師器極小片
10	X=37039～37041・Y=-42575～-42576	長方形	1.3+ $\alpha$ ×1.5×?	
11	X=37035～37036・Y=-42575～-42578	長方形	2.3×1.3×0.25	土師器小片
12	X=37036～37037・Y=-42576～-42577	長方形	1.85×1.5×0.15	
13	X=37038～37039・Y=-42575～-42576	長方形	1.7×1.2×0.12	土師器極小片

### 第3章 検出された遺構と遺物

遺構名	位置	平面の形状	規模(径・深さ)	出土遺物
14	X = 37038 ~ 37039・Y = - 42374 ~ - 42575	長方形	1.45 × 1.1 × 0.10	
15	X = 37037 ~ 37038・Y = - 42574	長方形	1.1 × 0.85 × 0.22	
16	X = 37036・Y = - 42573	不整形	1.0 + α × 0.9 × ?	
17	X = 37036 ~ 37038・Y = - 42570 ~ - 42572	長方形	2.3 + α × 1.8 × 0.12	
18	X = 37036 ~ 37037・Y = - 42569 ~ - 42570	長方形	2.1 × 0.7 × 0.12	
19	X = 37036 ~ 37039・Y = - 42569 ~ - 42570	長方形	2.7 + α × 0.8 × 0.12	
20	X = 37037 ~ 37038・Y = - 42565 ~ - 42568	長方形	2.1 × 1.15 × 0.16	
21	X = 37039 ~ 37040・Y = - 42566 ~ - 42567	長方形	1.0 × 0.8 × 0.20	
22	X = 37042 ~ 37043・Y = - 42564 ~ - 42565	不整形	1.0 × 0.6 × ?	
23	X = 37041 ~ 37042・Y = - 42581 ~ - 42582	方形	1.3 × 1.3 × 0.20	
24	X = 37042 ~ 37044・Y = - 42579 ~ - 42580	長方形	1.6 × 1.2 × 0.15	
25	X = 37044 ~ 37045・Y = - 42582 ~ - 42583	方形	1.3 × 1.3 × 0.20	
26	X = 37042 ~ 37043・Y = - 42571 ~ - 42572	長方形	1.4 × 1.2 × 0.13	土師器壺小片
27	X = 37047 ~ 37049・Y = - 42574 ~ 42575	長方形	1.9 × 0.8 × 0.26	土師器極小片
28	X = 37046 ~ 37050・Y = - 42572 ~ - 42574	長方形	3.2 × 1.0 × 0.22	土師器極小片
29	X = 3705 ~ 37051・Y = - 42564 ~ - 42565	不整形	1.0 × 0.8 × ?	
30	X = 37.051・Y = - 42564 ~ - 42565	楕円形?	1.3 × - × 0.11	
31	X = 37045 ~ 37.48・Y = - 42582 ~ - 42589	不整形長方形	2.2 × 1.8 × ?	

### Ⅲ区第2面出土遺物計測表

単位 cm

番号	遺構	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	13号溝	須恵器杯	埋土		8	現高 1.2	底3/4	細土	灰白5Y8/1	良好	底右回転篋削り3号溝と接合
2	16号溝	土器(かわらけ)	埋土	6.2	4.7	1.5	全1/4	細土	橙5YR6/6	良好	内面に油煙、回転糸切り
3	19号溝	軟質陶器播鉢	埋土			現高 4.9	胴片	細土	鈍黄橙10YR7/3	良好	内面摩擦
4	19号溝	上石白	埋土			現高 3	縁部		表面調整滑らか茶白か		粗粒輝石安山岩
5	9号土坑	土器(かわらけ)	埋土		7	現高 1	底1/5	細土	橙5YR6/8	やや軟	底部篋削り
6	19号土坑	台付甕台部	埋土		9	現高 4	台片	細土	鈍黄橙10YR7/3	良好	台端部折返なし単口縁甕

### Ⅲ区第3面の遺構と遺物(第12・13・14・15図、PL. 5・6・7・44)

**溝跡** 第3面で検出された溝跡群は、周辺域の灌漑に供した水路として認識されている。総数13条とされているが同一遺構での別名称などがあり、実質の遺構数に若干の修正が必要である。北西隅部の22号溝は上位第2面に帰属する6号溝の基底残痕を調査したものであろう。25号と26号溝は同一遺構で26号溝とする。21号溝は30号溝と同一遺構で30号溝とする。

溝跡はその走向を南西～北東方と南東～北西方の2方向に大別される。これらの溝跡はかなりの頻度で重複または分枝・合流する様な状況が窺われるものの、遺構相互の関係についての調査所見は得られていない。

査証する根拠は持たないが2方向の溝群は、導水方向の変更のため（災害等の自然現象によるか、開発・改良など意図的行為は不明）時期を違えて開削されたとも考えられる。なお、第3面の被覆土は洪水層によるものであり、当区より東方で広範囲に検出されているⅥ・Ⅶ・Ⅷ区の第2面検出の水田跡を被覆する層と同じ洪水層であるとの所見がある。

第3面で注目されるのは木樋を備えた溝跡である。木樋は最も遺存のよい31号溝と、これに隣接併走30号溝には2条の木樋が確認されている。後者はかなり脆弱なため痕跡程度の遺存であったようである。また、これらと走方向の異なる溝にも木樋を埋設した痕跡を窺われるものがある。

**20号溝** 調査区中央部を南西～北東走する幅広な20A号溝と、その底辺に開削される20B号溝である。走方向はN-67°-Wを示し、検出延長30mである。20A号の溝幅は7.5m、深さ88cm、20B号溝は幅約80cm、深さ30cmでA号溝の底面を穿ち断面箱形の掘形である。北東縁は30号溝と合するが、底面に落差がありこれより古い所産になろうか。A号溝の埋土は主として砂質とsilt質層の互層からなり、洪水起源層による埋没であろう。A号溝底面にあるB号溝の埋土は、粘土質黒褐色土の単層で埋土の違いは両者の開削や機能した時間差を示すことも考えられる。しかし、あまりに規格性を感じさせる直線的軌跡と、後述する木樋具備の溝跡になされる2段掘形の状況が類似することもあり、粘土質黒褐色土は木樋充填土としての観点も必要であろう。出土遺物は埋土中よりA号が2～3点の土師器小片、B号は縄文土器小片である。

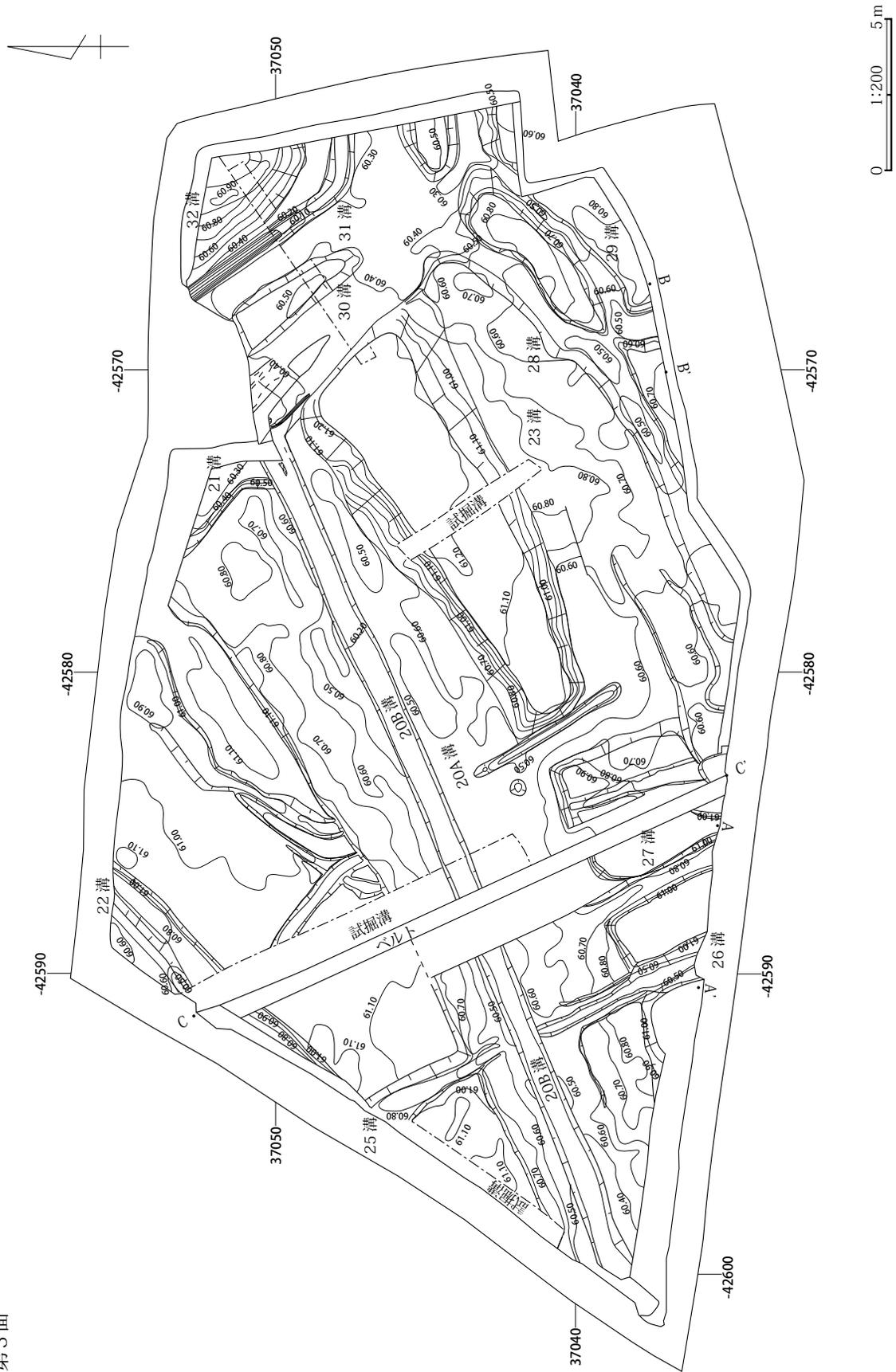
**23号溝** 20号溝の南側に併走して、走方向は20号溝とほぼ同じである。幅広な溝になると思われるが、南縁は底面より深い28号・29号溝の開削でその限りが不明であり、両者との新旧を含めどのような関連があるかもまた不明である。北東縁は南東～北西走する30号・31号溝に合し跡切れ、底面の落差よりこれらより古い所産になろう。南西縁は調査区域外に延びる。検出延長約20m、幅5m+ $\alpha$ 、深さ65cmを測る。出土遺物は埋土中より土師器片10余点であるが年代などを推し量ることのできるものはない。

**24号溝** 調査区中央部にあり、20号・23号溝に直交し略N-31°-Wを示す。検出延長は20号・23号溝との重複で定かでは無い。溝幅2m、深さ75cmを測る。南端は23号溝の範囲で軌跡が途絶え、北側は20号溝の北縁で東・西方に分枝するような状況を示すが一連の溝かは不明である。出土遺物は埋土中より土師器極小片1～2点である。

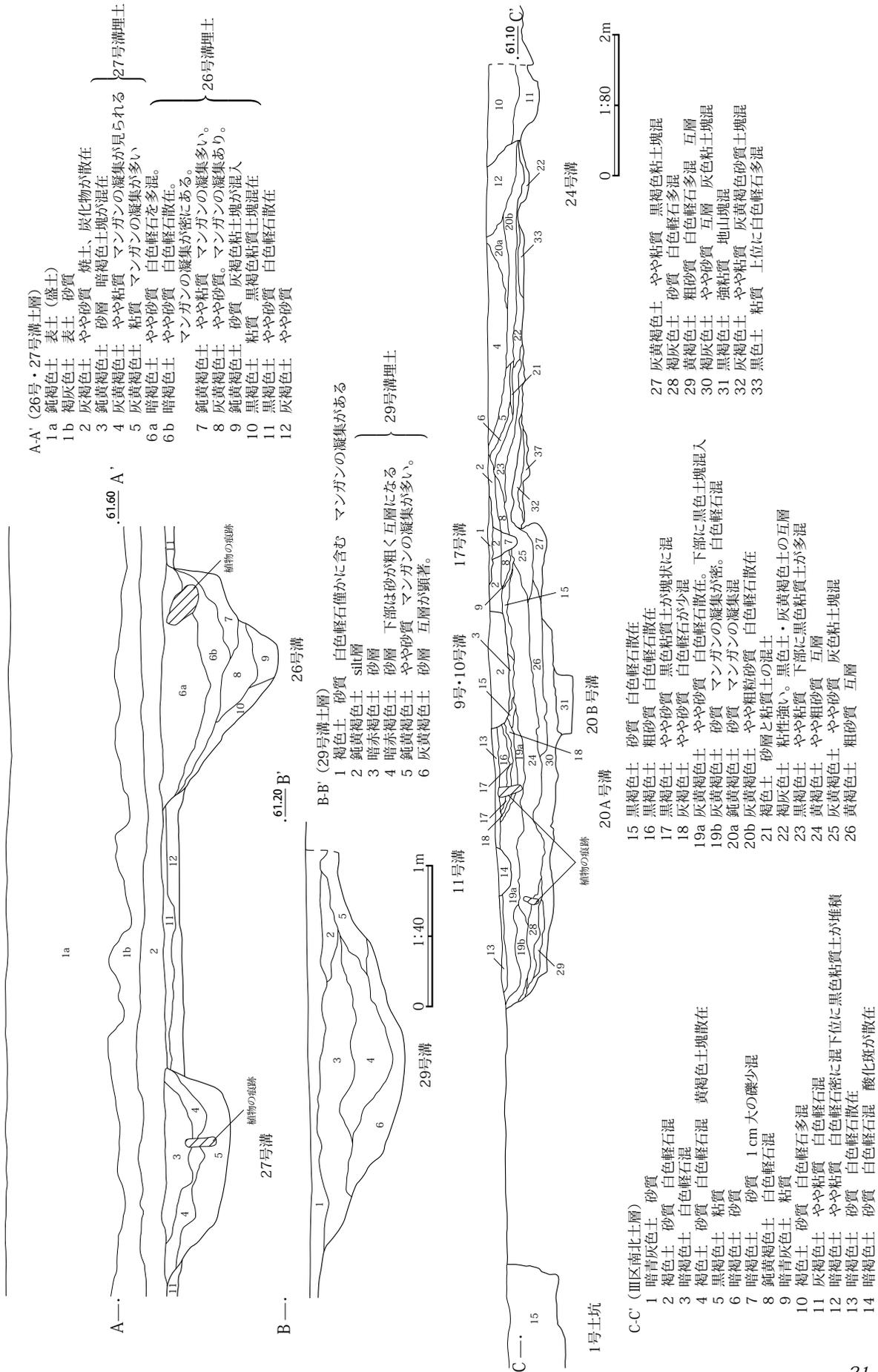
**26号溝** 調査区西側にあり、南北端は調査区域外に延びる。南東～北西走して20号溝に直交し、走方向はN-25°-Wを示す。20号溝との新旧関係は不明である。断面形状は深いU字形を呈し、洪水層と思われる砂質土が堆積する。検出延長12m、幅1.7m（土層断面より）、深さ80cmを測る。出土遺物はない。

**27号溝** 26号溝に平行してあり、走方向は26号溝とほぼ同じである。南端は調査区域外に延び、北側は20号溝との重複で途絶える。断面形状は略箱形を呈し、埋土は上下粘質土層の間に砂層が介在する。検出延長5m、幅1.4m（土層断面より）、深さ45cmを測る。出土遺物はない。

**28号溝** 調査区南東部南縁にあり29号溝に隣接する。23号溝の底面を開削した様な状況である。ただし、両者の関連については新旧を含め不明である。南西～北東走し、走方向は僅か北に湾曲してN-52°-Eを示す。



第12図 Ⅲ区第3面全体図



第13図 Ⅲ区第3面26号・27号・29号溝、南北方向土層図

### 第3章 検出された遺構と遺物

南西端は調査区域外に延び、北東部は30号溝と合する。底面落差はこれより高く新旧関係を示そうか。検出延長17m、幅1.1m、23号溝底よりの深さ35cmを測る。出土遺物はない。

**29号溝** 調査区南東部にあり、28号溝に隣接する。略南北走方向で短く南側調査区外に入るが、直に近く東方に折れる。東端は30号溝に合するが底面の落差はこれより高く新旧関係を示そうか。断面形状は緩やかに立ち上がる壁法面で、底面の掘形も曲面をなす。埋土は、砂層やsilt層が主で洪水堆積層であろう。検出延長約9m、幅2.7m・深さ60cm（土層断面より）を測る。出土遺物はない。

**30号・31号溝** 調査区北東隅部にあり、隣接・併走して共に木樋を埋設する溝である。南端・北端はいずれも調査区域外へ延び、全体は不明であるが両者とも流水方向は略北西～南東である。

30号溝は検出延長17.5m、幅2.5m、第3面検出面より深さ90cmを測り、南東端は東方へ折れる。30号溝には2条の木樋（1号木樋・2号木樋）がある。

31号溝は30号溝の北東約1.3mの間隔をもって位置する。検出延長6.5mで短い。30号溝と同じく南東端は東方へ折れる。溝幅約3mで北東縁の壁立ち上がりは南西縁のそれに比べ緩やかな傾斜となっている。第3面検出面よりの深さ95cmを測る。31号溝には1条の木樋（3号木樋）が埋設される。ただし、30号溝の木樋は2譲渡も遺存が悪く検出状況に明瞭さを欠く。その他出土遺物には土師器小片が数点ある。

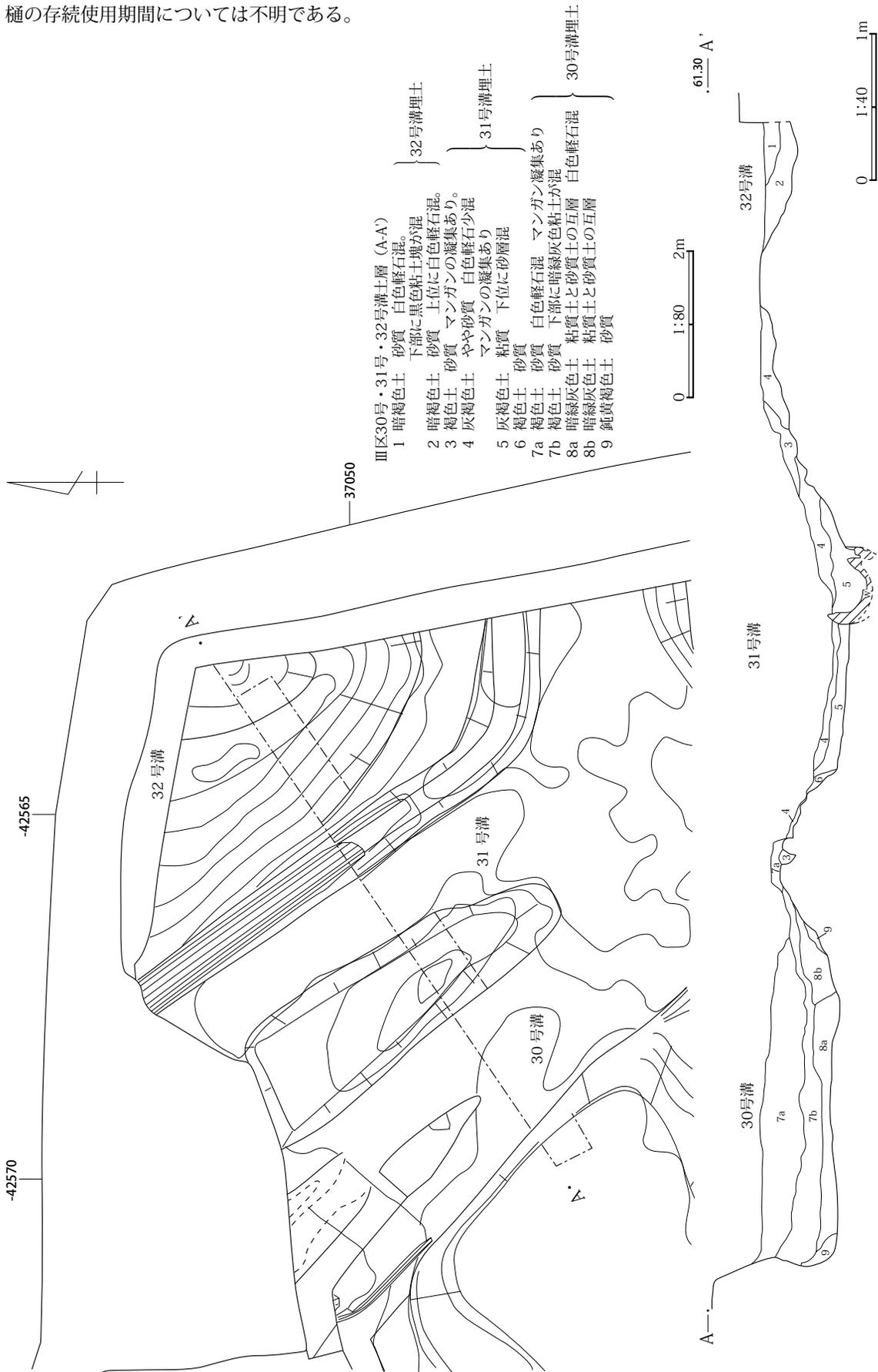
**1号木樋** 30号溝1号木樋は調査域北縁より1.8mの長さを確認した。北側調査区域外へ延びているようであるが、北西端の溝部分には検出されていない。検出された部分の木質は極めて脆弱で内側の腐食が進みかなり痩せた状態で取り上げ採取は不可能であった。縦割り半裁丸太をU字形に削りぬいて作られたものであろう。木樋の走方向はN-47°-Wを示す。幅は60cmを測るがやや開き気味で実際の木樋幅はもう少し小さなものになろう。底面は消失し上縁から土壌面までの深さ約20cmを測る。樹種は不明である。

**2号木樋** 1号木樋の東側にあり、極近接して平行、併走する状況で40cmの間隔がある。遺存状態は1号樋以上に悪く、固形としての木質は残されていない。辛うじて痕跡を観察できたにすぎず、その長さは1.6m、幅80cmほどである。やはり半裁丸太をU字形に掘り抜いたものと思われる。樹種は不明。

**3号木樋**（第15図、P L. 44） 31号溝に埋設されるが、2号木樋の約3m北東に位置する。調査域北縁より3.75mを検出したがなお北方に延びる状況にある。縦割り半裁丸太材をU字形に削りぬいて作られる。木質の遺存状態は極めて良好で、木質部はその質感・色調とも新鮮・鮮明で、いまだ加工に耐えられるほどに堅い強度を持っていた。最大幅は北西端で52.8cm、僅かずつ細まって南東端は45cmを測り、流水上方に根本を用いている。厚みは最大で7cm、削り抜き深さ14cm前後、検出部分で推定される使用木材は直径30cm超40cm前後のものを用いたと思われる。木樋に続く南東方への溝底面には、樋埋設のための掘形に類する細溝が延びる。木質は検出されず不明であるが、樋の設置に関わるものとするれば東方への折れ部位などには木樋の連結などの細工もなされたのであろうか。樹種は常緑樹のカヤ属と思われる。

30号・31号溝または1～3号木樋の新旧等は不明であるが、木樋の遺存状況は時間的前後関係を容易に推測させる。木質の腐食が進んだ状態の1号木樋、痕跡だけの2号木樋、堅い木質を残す3号木樋からは次のような順番を考えて大過無かろう。古い順に、2号木樋、1号木樋、3号木樋である。なお、1～3号木

樋の存続使用期間については不明である。

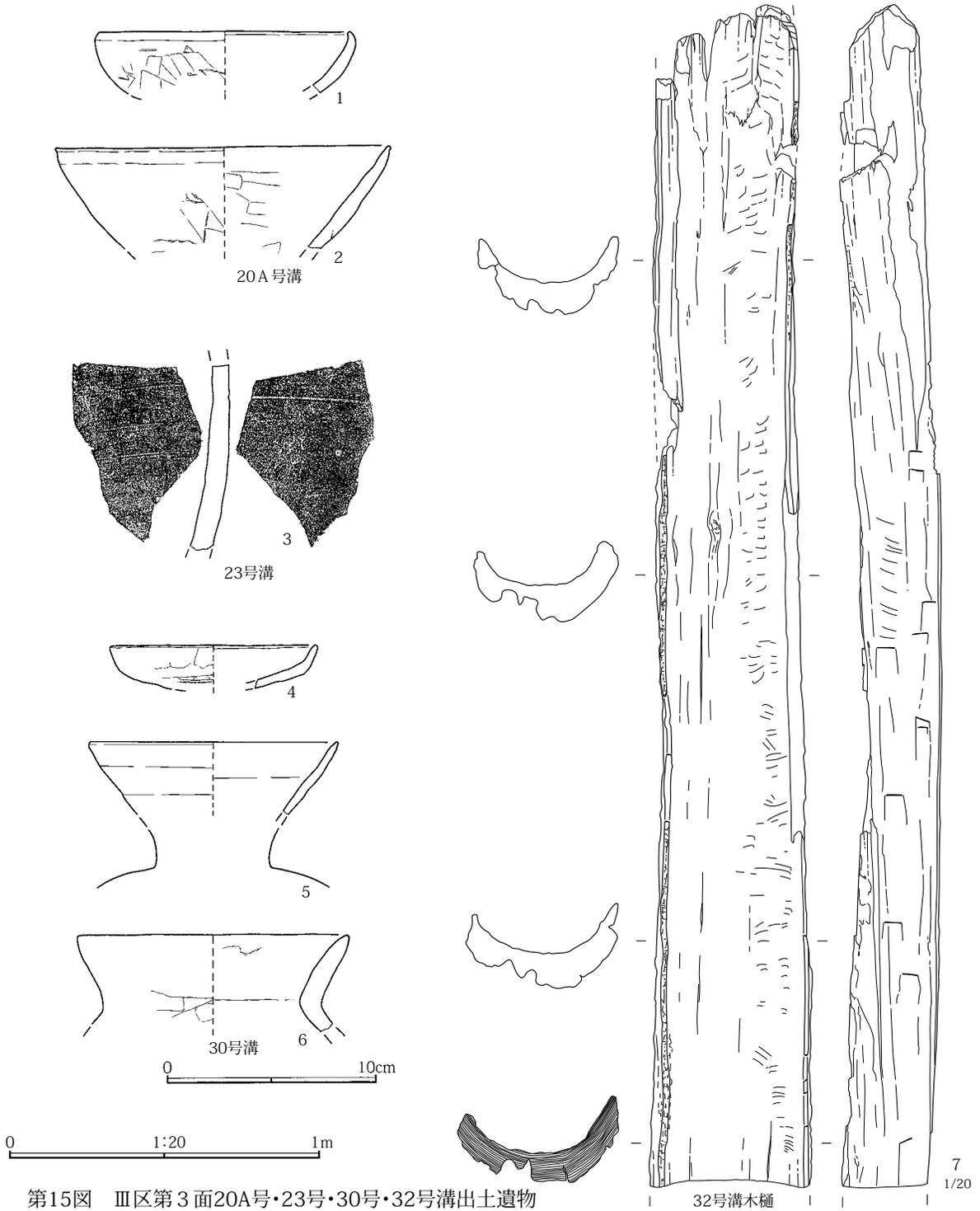


第14図 III区第3面30号・31号・32号溝(木樋)

Ⅲ区第3面出土遺物計測表

単位 cm

番号	遺構	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	20A号溝	土師器坏	埋土	12		現高 2.9	口縁1/4	細土	橙5YR6/8	良好	口唇内屈し細まる
2	20A号溝	土師器高坏	埋土	16		現高 4.8	口縁片	細土	明褐7.5YR5/6	良好	口唇部とがる
3	23号溝	須恵器甕片	埋土			厚 1	胴片	細土	灰5Y6/1	堅緻	内外面撫で調整
4	30号溝	土師器坏	埋土	10		現高 2	底欠	細土	明褐7.5YR5/6	良好	偏平な体部器形不詳
5	30号溝	土師器壺	埋土	12		現高 3.4	口縁片	細土	鈍2.5Y6/3	良好	薄手
6	30号溝	土師器甕	埋土	13		3.6	口縁片	細土	橙2.5YR6/8	やや軟	口縁厚手くの字に外屈
7	32号溝	木樋	底面	長374.6	幅52.8	厚 27.3	片端切断	丸木半裁割り抜き内外面手斧様の削り痕樹種カヤ属			



第15図 Ⅲ区第3面20A号・23号・30号・32号溝出土遺物

## 2. IV区の遺構と遺物（第16図）

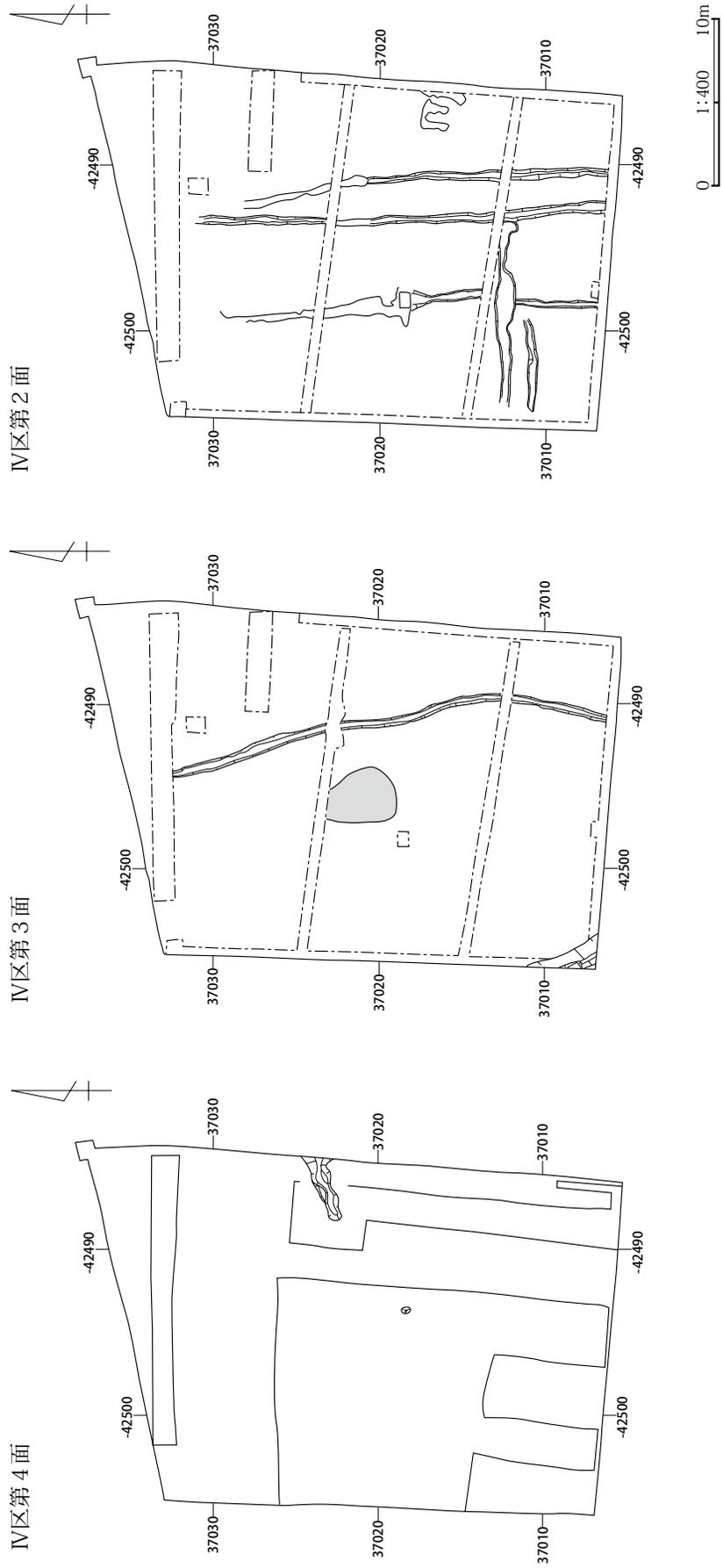
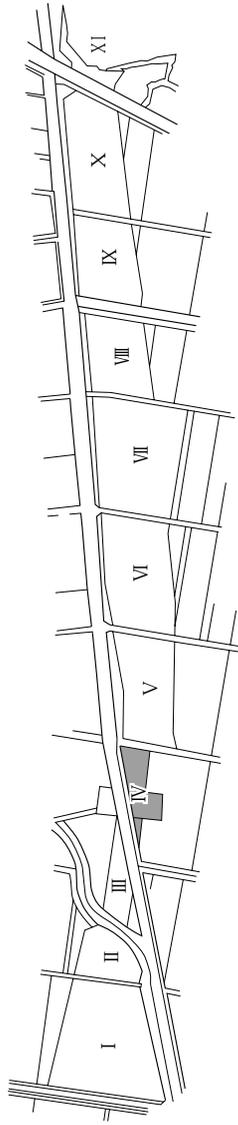
4区では上強戸遺跡群での遺構検出面のうち第2面・第3面・第4面からなる遺構面を調査した。当区では第1面は消失した面として捉えられる。各面で検出された遺構は主として生産跡関連の遺構と考えられるが、遺構数及びそれらに伴う遺物量は少ない。各面で検出された遺構は第2面では溝跡5条。第3面からは溝跡2条と破碎土器片集中地点1カ所。第4面は土坑とされる遺構が2基である。

**土層** IV区における層序は大略次のようである。各遺構検出面に係わる土層は、第2面はB軽石及びFP軽石が関係する4～14層、3面はC軽石が関係する16層の前後が、そして第4面はそれより下位の層が概略該当する。

1. 耕作土 耕作機で攪拌されている。
2. 耕作土 灰褐色でやや締まる。若干赤褐色を帯びる。
3. 黄灰色土 As-Bを若干含む。現水田の床。
4. 暗灰褐色土 B軽石を主体とする砂質土。
5. 黒褐色土 B軽石を主体とする砂質土。
6. 黒褐色土 B軽石を主体とする砂質土。3・4層の塊が混じる。鋤跡埋土か。
7. 黄褐色土 B軽石を主体とする黄色粘質土の塊を多く含む。（第2面溝埋土）
8. 黒褐色土 粘質土。FP軽石を多く含む。（第2面溝埋土）
9. 黒褐色土 8層と同質だが色調やや明るくFP軽石も減る。
10. 暗灰褐色土 8・9層と似るが色調が灰色に近い。FP軽石を含むが少ない。
11. 暗黄褐色土 FP軽石を少量含む。粘性強い。
12. 暗黄灰色土 11層より黄色味が弱い。FP軽石を少量含む。粘性強い。
13. 黄橙色土粒層
14. 塊状FP軽石（第2面溝埋土）
15. 暗黄灰色土 粗細粒の砂が主体。
16. 暗灰色土 粘質土。C軽石を多く含み特に上位に多い。
17. 暗褐色土 混入物特になし。細粒でsilt質。
18. 暗褐色土 17・19層の混土
19. 暗褐色土 混入物特になし。粘性土。
20. 黒褐色土 粘質土。白色細粒（軽石?）を多く含む。
21. 黒灰色土 粘質土。混入物特になし。水つきloam層か。

### IV区第2面の遺構と遺物（第17・18図、PL. 8）

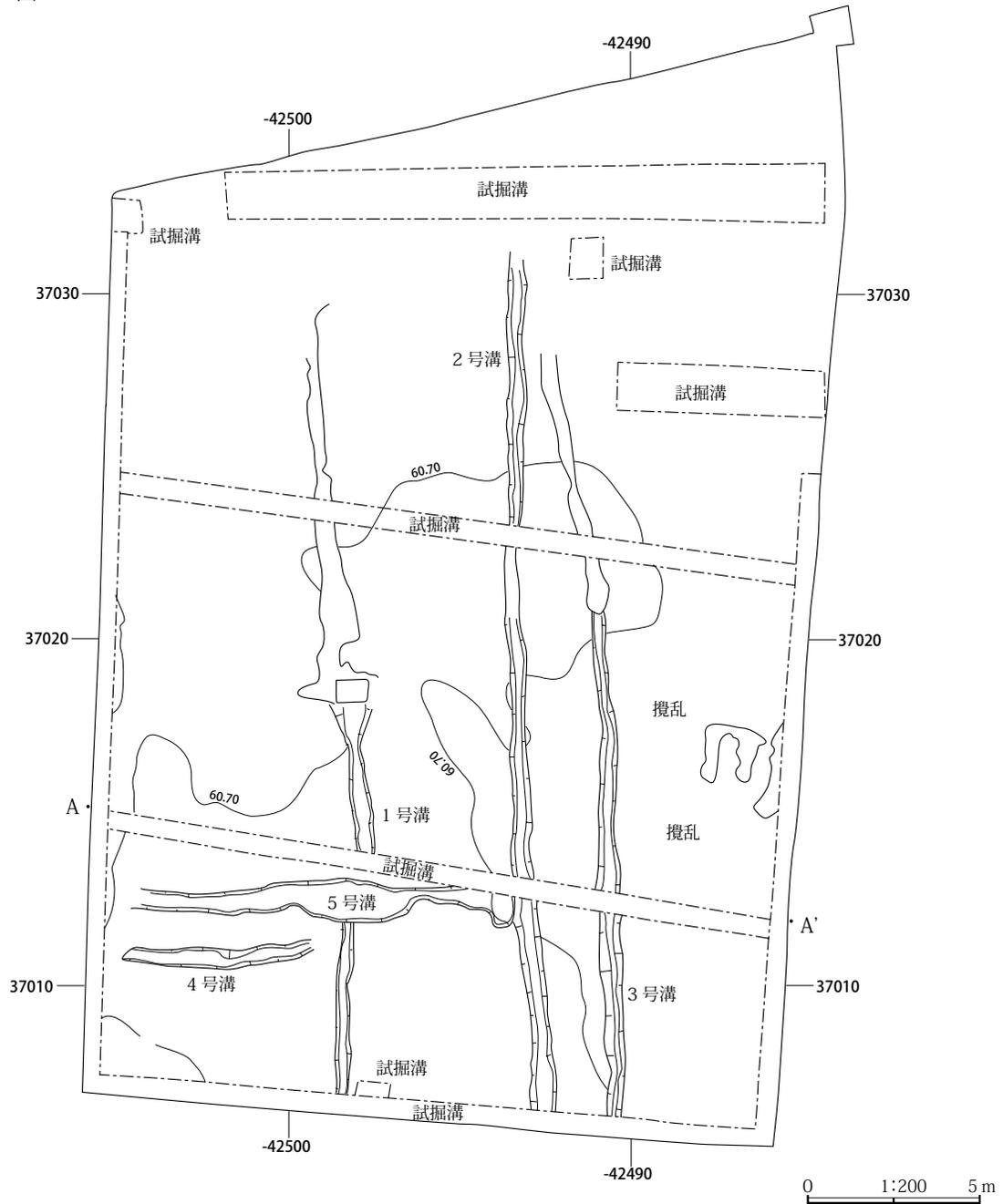
第2面より検出された遺構は1号～5号溝である。1号～3号溝は調査区中央部をほぼ南北方向に併走する。また、4号・5号溝は調査区南にあり西半部では一時東西方向に併走する。いずれも検出面では浅い掘形で遺存状況は良好ではない。溝跡からは小片で少量の土師器が出土するのみで、遺物によって年代等の情報を得ることはできない。第2面検出の遺構上位面は人為・自然ともに後世にかなりの改変が及んでいると考えられる。帰属時期は掘形基層や埋土の状況で、おおそ古代から中世あたりの頃になるうか。



第16図 IV区第2～4面全体図

**1号溝** 確認総延長は約23mを測るが北半は痕跡程度になり消滅する。掘形の比較的良好な部分では幅55cm、深さ6cm、底面横断形状は平坦である。埋土は黄褐色土でB軽石を主体とする黄色粘質土塊を多く含む。東側併走の2号溝との内法間隔は約4mである。

IV区第2面



第17図 IV区第2面全体図

第3章 検出された遺構と遺物

**2号溝** 検出総延長24.5mを測り、調査区北縁で途切れる。幅60cm、深さ7cm、底面横断形状は緩い曲面である。埋土は下位にFP軽石を多く混入する粘性のある黒褐色土とB軽石を主体にする黄色粘質土塊を含む黄褐色土である。東側併走の3号溝との内法間隔は約2mである。

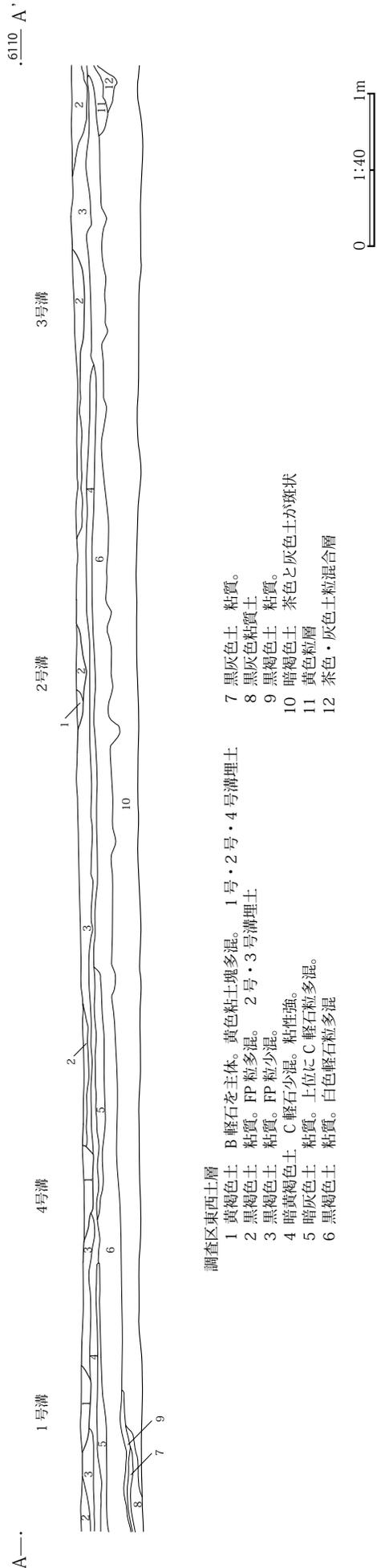
**3号溝** 確認総延長22.8mを測り、北半は1号溝同様に痕跡程度で消滅する。幅60cm、深さ5cm、底面横断形状は緩い曲面である。埋土はFP軽石を多く混入する粘質の黒褐色土である。

**4号溝** 5号溝の南側で東西方にこれと並走して検出された。掘形長では5.5mを測るが1号溝の東側に北走する痕跡が確認されている。4号溝は1号溝を横断後、L字状に北へ折れ5号溝を横断する形で北方へ延び、1号溝に併走する痕跡に続くと考えられる。総延長は13mほどになるろうか。幅60cm、深さ5cm、底面横断形状は平坦である。埋土はB軽石を主体にする黄褐色土である。1号・5号溝との重複関係は不明である。

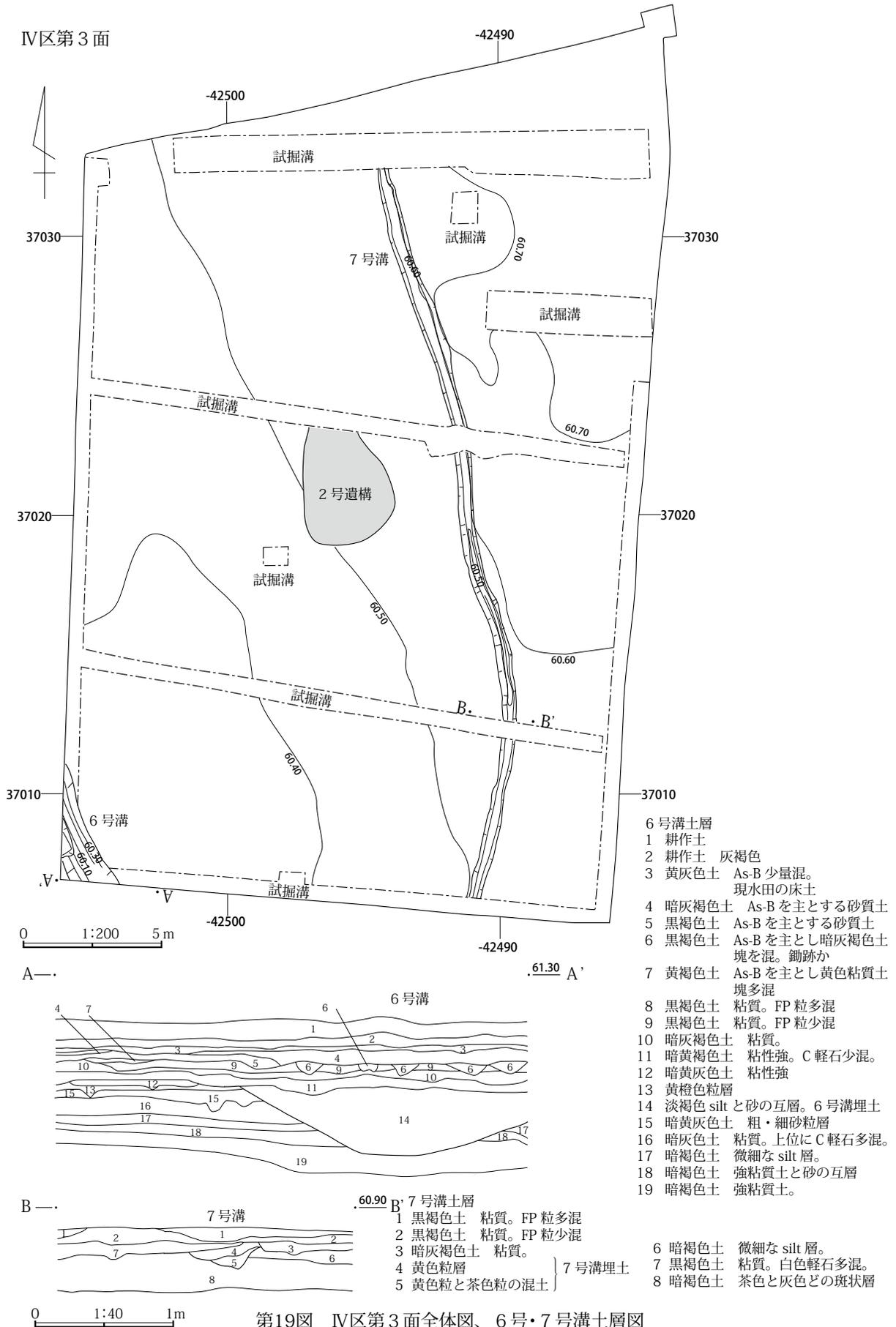
**5号溝** 調査区南側で東西走するが東半部は軌跡を確認するに止まる。掘形検出は約11mで痕跡総延長は18mほどになるろう。幅70cm、深さ5cmを測る。埋土はFP軽石を多く混入する粘性黒褐色土である。重複は1号～4号溝全てに係わるが新旧についての所見は無い。埋土の検討からは1号・4号溝より旧く、2号・3号溝とは不明である。

**Ⅳ区第3面の遺構と遺物** (第19図、PL. 9)

第3面より検出された遺構は6号・7号溝の2条と、破碎土器集中分布地点1カ所である。6号溝は調査区南西隅部に東縁立ち上がりから深い底面を見せるだけで全容は不明である。7号溝は調査区東側に僅かに偏り緩く蛇行気味に略南北走するが、調査区北際での検出は途切れたままである。土器集中地点からは古墳時代前期ころの遺物が出土する。

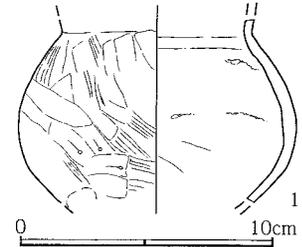


第18図 Ⅳ区第2面調査区東西土層図



**6号溝** 調査区南西隅部に検出され、東縁立ち上がりと底面が確認できる。走方向は定かではないが略北北西から南南東になるうか。深さ約50cmで底面の断面形状は緩い曲面をなす。埋土は大略淡褐色 silt 層と砂層の互層である。出土遺物は古墳前期に属す1点の土師器小破片である。

**7号溝** 調査区東半にあり、走向を略南北にもつ。緩く蛇行しながら北半を僅か北北西に軌跡を進める。検出延長約27m、深さ10cm、幅53cmを測る。底面横断面は浅いV字形またはU字形を呈す。埋土の所見は判然としないがFA軽石を多量に混入するようである。出土遺物は土師器で北半に集中するが小破片が多く、大略古墳時代前期のものである。



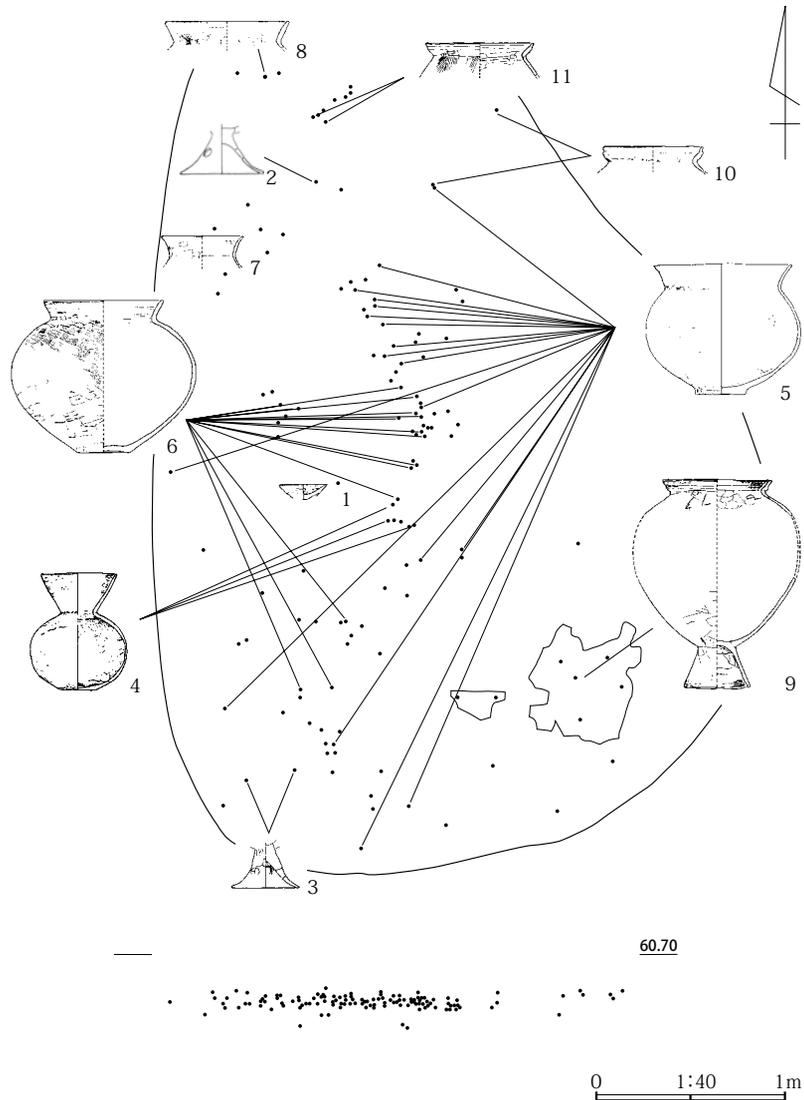
第20図 IV区第3面  
7号溝出土遺物

**出土遺物** (第20図)土師器壺の胴部1/3である。偏平で強く張る。上半斜位の篋削り下半短引きの掻き目を施す。胴径11cm、細土で鈍橙色、焼成良好。

**2号遺構(土器集中地点)** (第21図、PL. 9)

調査区中央部の南北4m・東西2.4mほどの平面範囲に120点余りの大小土器片が検出されているが、調査ではこれらを内蔵するような遺構は確認・検出されていない。遺物が分布する概略の位置は、X=019~022・Y=-494~-496にある。

土器群は比較的完形度の高い壺・甕の2点を中心に分布し、破片群全体の垂直分布最大高低差は18cmになるが土器片の多くはもっと僅差のうちにあり一括廃棄の様相が強い。土器の個別出土状況は破砕度の小さな壺・甕の2点と小破片化したものに大別されるが、分布域の南東部に検出されたS字状口縁台付き甕はやや異なる。口縁部・台部を中心に十分形状の知れる破片数を持つが必要以上の細片状態であり、執拗な破砕を行っているように感じられる。しかし、この土器集中地点については性格を推測できるような付帯的状況は他に得られていない。出土遺物に



第21図 IV区第3面2号遺構(土器集中地点)遺物分布図

は土師器壺・甕類・器台・高坏などがあり大略古墳時代前期に属する。

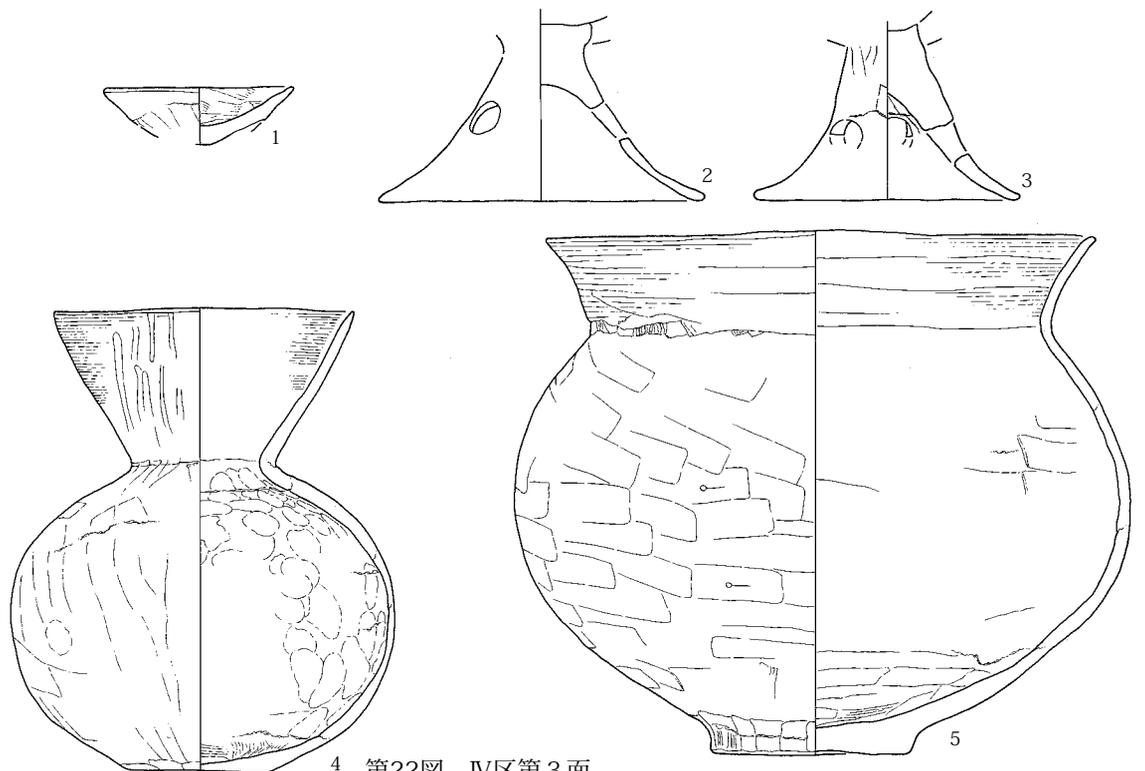
出土遺物 (第22・23図、PL. 39)

1. 器台坏部。中位で緩く屈するが直線的に開く。見込み部に穿孔はない。2・3. 器台or高坏。裾部は大きく開く。脚柱通孔無く略等高位に3円孔を配す。4. 壺。細まった頸部から口縁部は直線的に外傾する。胴部丸く強く張る。底部小径でベタ底。外面肩部に篋磨き痕、下班に弱い篋削り。内面見込み部に掻き目調整。5・6. 甕。広口の口縁部は大きく開く。胴部は偏平気味に強く張り、やや下張り。凸状底部は小径で中央部が弱く凹気味。外面は掻き目後横位の篋削り。内面に紐巻き上げ痕顕著で見込み部掻き目調整。7・8. 単口縁甕口縁部。7はやや胴長形状になろうか。8は掻き目調整。9～11. S字口縁台付き甕。9は肩部の張りが強く大形品である。破片の多くが接合に至らず、極度に細片化した破片の状況から故意に破碎したものと考えられる。

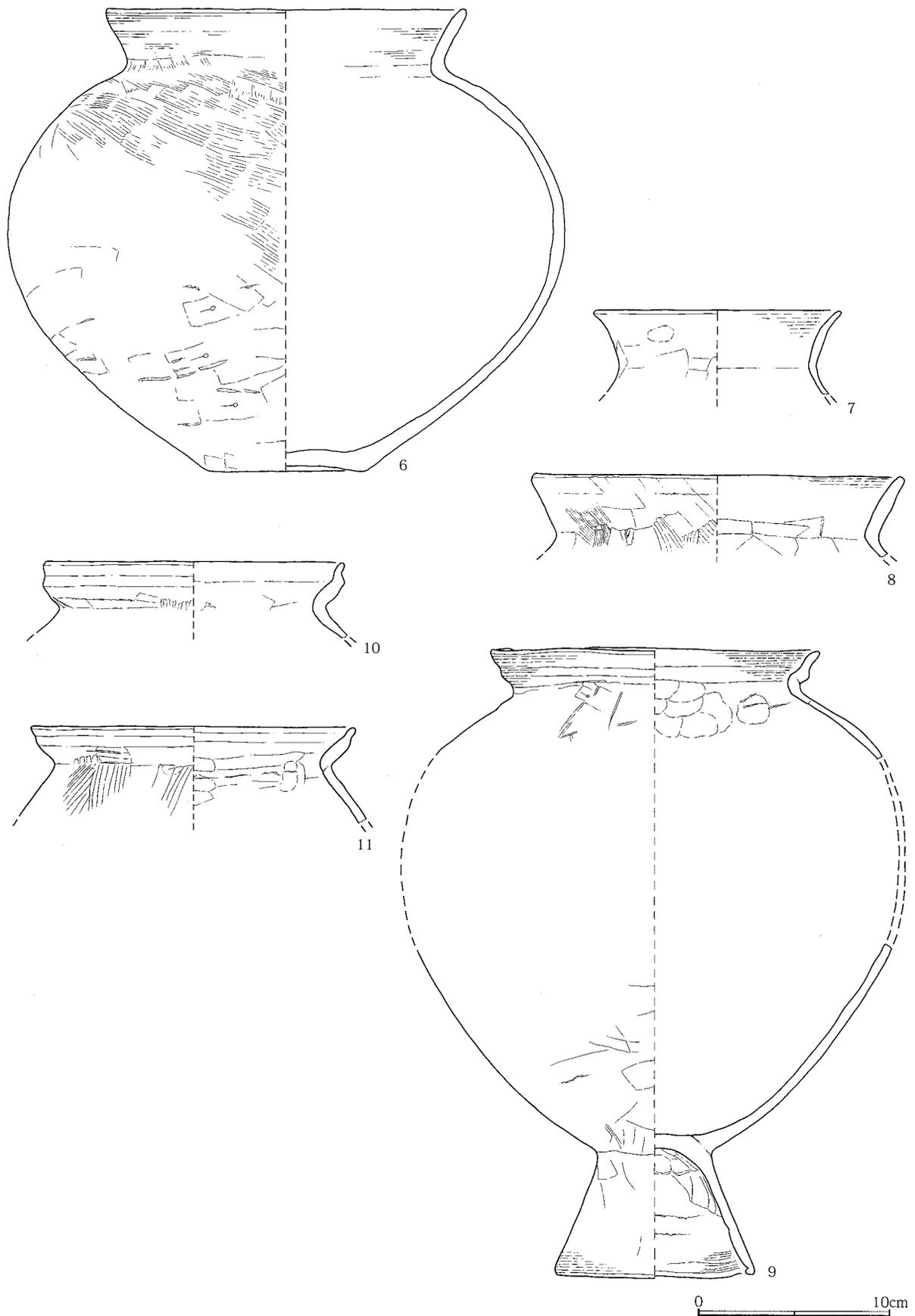
2号遺構(土器集中地点)出土遺物計測表

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器器台	埋土	7.5		現高2.0	坏部	砂粒多	浅黄橙 7.5YR8/4	やや軟	
2	土師器器高坏	埋土		13	現高7.8	脚部	粗砂混	橙 2.5YR6/8	軟	
3	土師器器高坏	埋土		10.3	現高7.2	脚部	粗砂混	浅黄橙 7.5YR8/6	やや軟	
4	土師器壺	埋土	12	5.5	18.5	口少欠	細土	浅黄橙 10YR8/3	良好	胴径 15
5	土師器甕	埋土	21.5	7	20.8	4分の3	大粒砂混	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	胴径 24.6
6	土師器甕	埋土	20	7.5	24	2分の1	土粒粗目	明赤褐 2.5YR5/6	良好	胴径 29.3
7	土師器甕	埋土	13		現高4.3	口縁1/4	細土	鈍黄橙 10YR7/4	良好	
8	土師器甕	埋土	19.8		現高4	口縁小片	砂粒多	浅黄 2.5YR8/6	良好	
9	土師器s字口縁甕	埋土	16		現高4.5	口縁小片	細砂多	褐灰 10YR6/1	良好	
10	土師器s字口縁甕	埋土	15.8		現高3.4	口縁小片	細砂多	浅黄橙 10YR8/3	良好	
11	土師器s字口縁台付き甕	埋土	17	10	30	口縁小片	砂粒多	灰白 2.5YR8/2	良好	破片多数残

単位 cm・g



4 第22図 IV区第3面  
2号遺構(土器集中地点)出土遺物(1)



第23図 IV区第3面2号遺構(土器集中地点)出土遺物(2)

その他の遺物 (第24・25図、PL. 39)

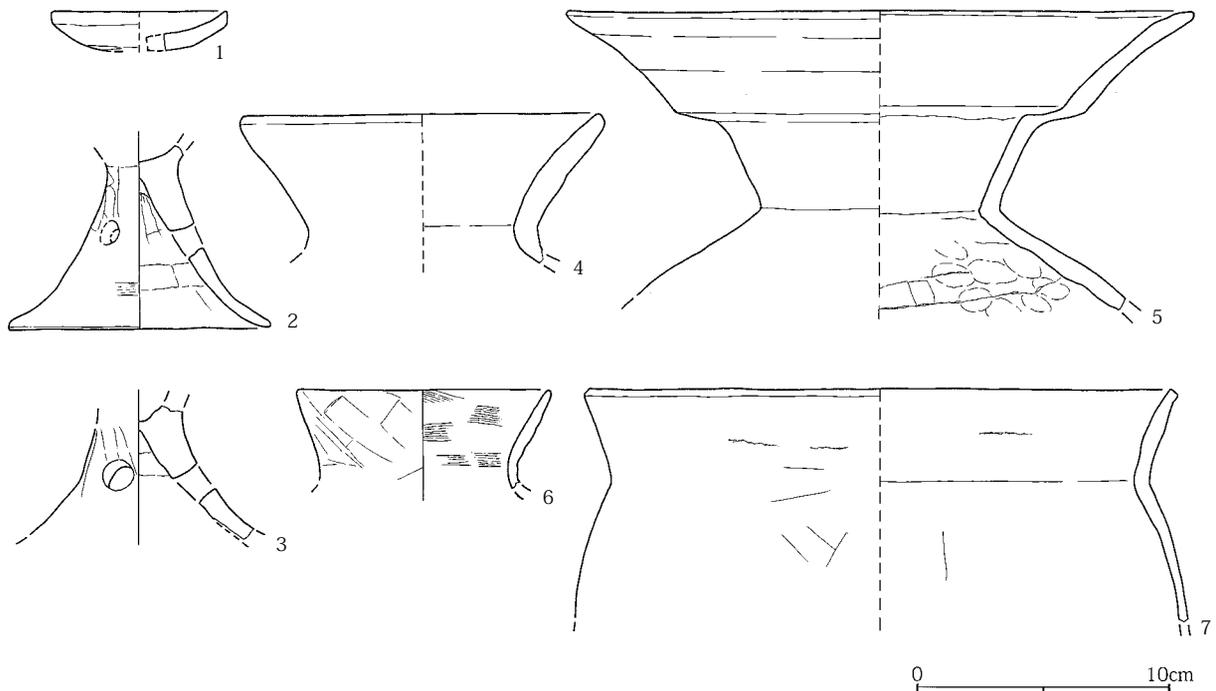
IV区第3面では包含層出土の土師器土器片がある。これらは設定方眼10m枠毎に採取されたもの直接的には遺構に関係しない。大略古墳時代前期に属する。

1. 器台坏部。口唇部外縁直立面をなし端部は細まる。2・3. 高坏。脚柱部から緩く裾部はハの字状に開く。等高位に3円孔を穿つ。4. 壺口頸部である。器肉厚く、やや短めの頸部で外反気味に開く。5. 二段口縁壺。頸部直線的に外傾し、上部口縁帯は小さく水平に折れた後外反気味に大きく開く。6. 甕口縁部。中位が緩く括れ外傾して開く。器肉薄く、外面斜位の篋削り。内面横位の細掻き目。7. 甕。肩部の張り弱く、口縁部は直線的に小さく外傾する。口唇部は断面矩形。器表の荒れ著しく二次比熱も受ける。8~10は甕底部。11~13はS字状口縁台付き甕。11は肩部が強く張る。口縁部の立ち上がりが低く、S字の屈曲も弱く形態がやや異なる。14. 壺。胴部丸く張る。底部凸状で小径外面多段縦位の掻き目、見込み部は強い篋撫で。

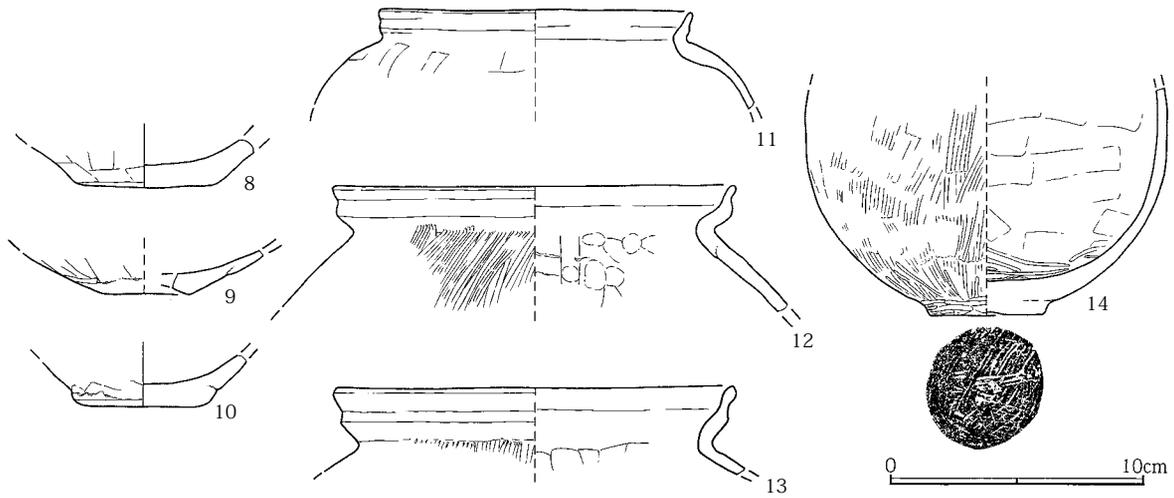
IV区第3面出土遺物計測表

単位 cm・g

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器器台	37000-42490	7		現高 1.5	坏部 1/4	細砂混	橙 5YR7/6	良好	
2	土師器高坏	37000-42490		10.7	現高 7.1	脚部 1/3	細土	橙 2.5YR6/6	良好	
3	土師器高坏	37000-42490			現高 5.1	脚柱部 1/3	細土	赤 10R5/6	良好	
4	土師器壺	37020-42490	14.6		現高 5.8	口頸 1/2	小砂礫混	橙 5YR6/6	良好	
5	土師器二段口縁壺	37020-42490	25		現高 12.5	口頸 1/3	粗砂粒多	鈍橙 7.5YR7/4	良好	
6	土師器甕	37020-42490	10.2		現高 3.8	口縁部	砂粒多	鈍橙 10YR7/4	良好	
7	土師器甕	37000-42480	23.6		現高 9.1	口縁部 1/5	粗粒土	鈍橙 2.5YR6/4	良好	
8	土師器甕	37000-42490		5.6	現高 1.9	底部	砂粒多	橙 2.5YR7/6	良好	
9	土師器甕	37020-42490		3.6	現高 1.8	底部 1/3	砂粒多	橙 5Y6/5	良好	
10	土師器甕	37020-42490		5.4	現高 2	底部	砂礫混	淡黄 2.5Y8/3	良好	
11	土師器s字口縁甕	37020-42490	12.4		現高 3.8	口縁 1/4	細土	明赤褐 2.5Y5/6	良好	
12	土師器s字口縁甕	37000-42490	16		現高 5	口縁片	細砂多	鈍黄橙 11YR7/3	良好	
13	土師器s字口縁甕	37000-42490	16		現高 3.5	口縁片	細土	橙 2.5YR7/6	良好	
14	土師器壺			5	現高 9.5	下半	細土	鈍橙 7.5YR6/4	良好	胴径 14.4



第24図 IV区第3面出土遺物(1)



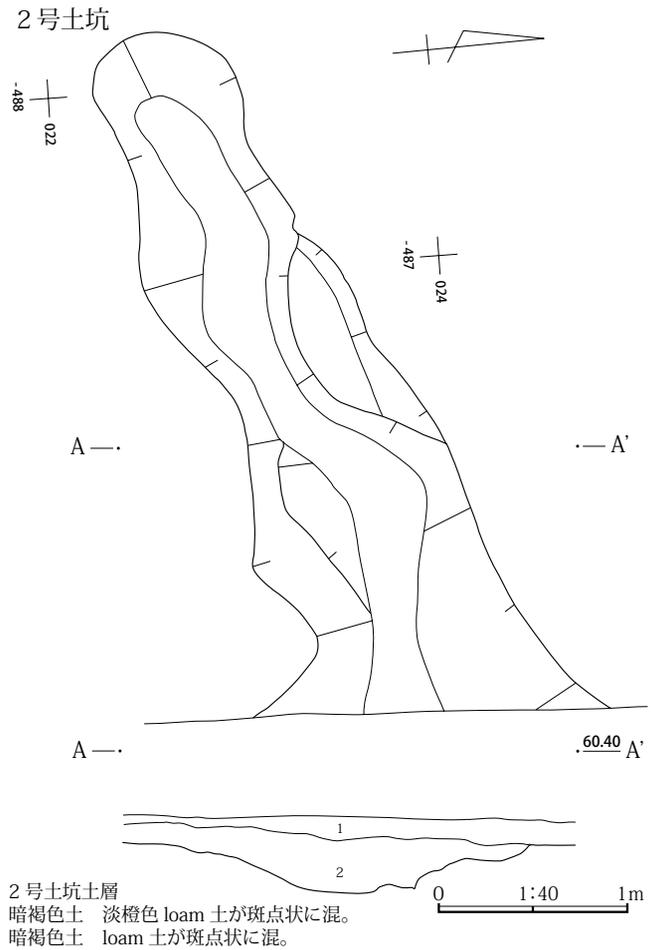
第25図 IV区第3面出土遺物(2)

#### IV区第4面の遺構

第4面から検出された遺構は2号土坑である。名称は土坑とあるが、形状より溝跡とすべきかも知れない。帰属時期は古墳時代以前の可能性がある。

#### 2号土坑 (第26図)

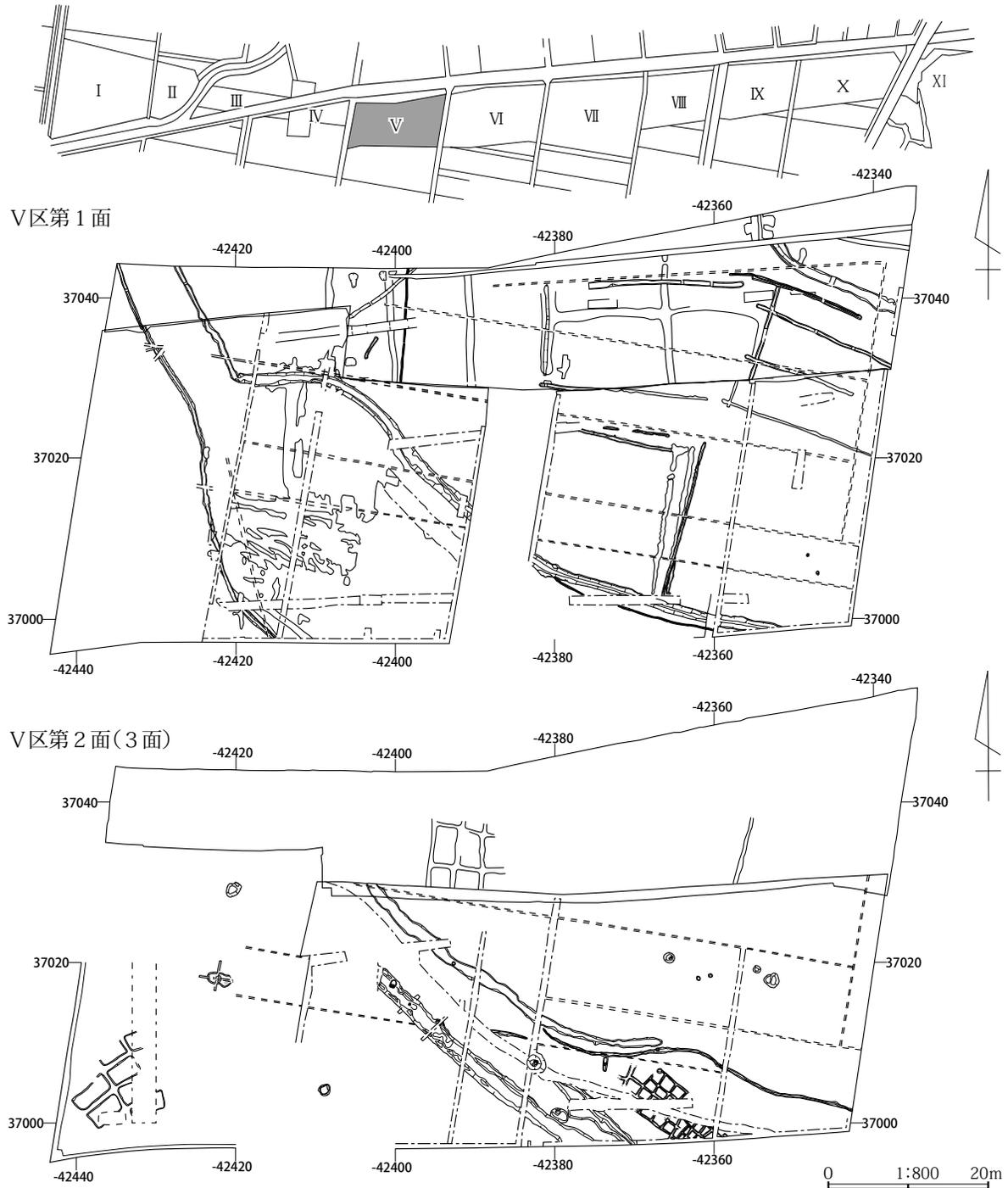
調査区東縁より南西部に延びる狭長な形状から土坑ではなく溝のごとくである。位置はX=022~024・Y=-484~-488の範囲にある。検出長約4m、検出基部幅1.8m先端幅約70cm、深さ30cmを測る。断面形は緩いU字形を呈する。掘り込み面は層序所見が無く不詳であるが、水性 loam と考えられている当区基準21層の直上層、粘質黒褐色土(土層所見での色調は暗褐色土)になる。出土遺物は無い。



第26図 IV区第4面2号土坑

3. V区の遺構と遺物 (第27・28図)

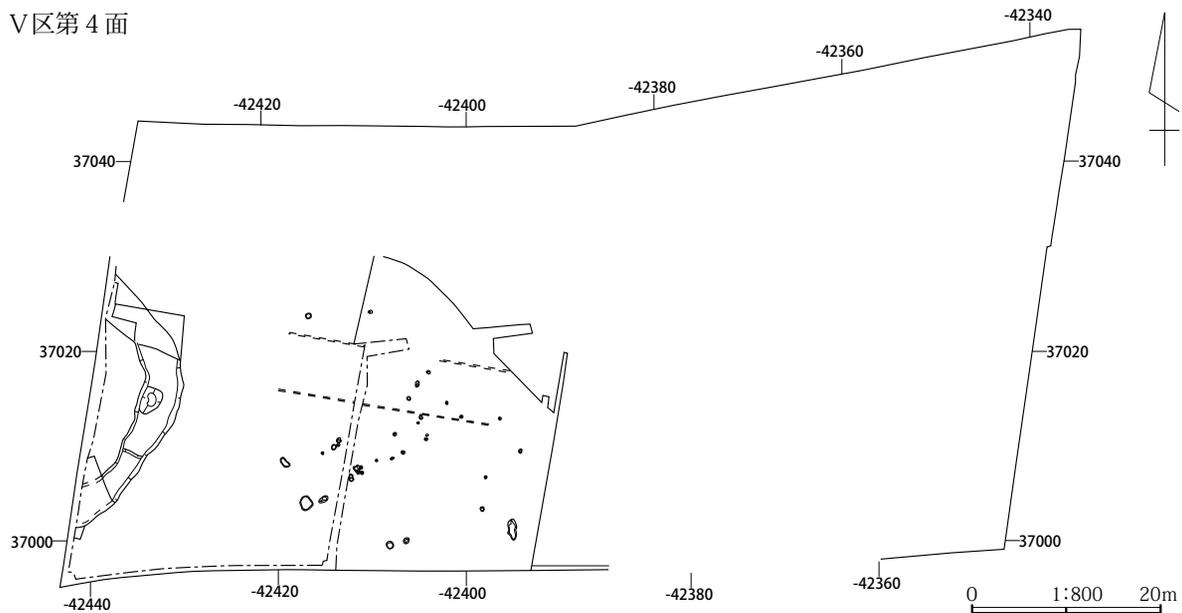
V区では1・2・3の小区割りの調査が行われた。当区での遺構検出面は第1面・第2面・第3面からなる。各面での検出遺構は、第1面から溝跡3条の他As-B軽石混土層下より水田畦畔の痕跡を認めた。第2面では溝跡4条、土坑状遺構11基、井戸跡1基、遺物集中地点5カ所(うち2カ所は溝内)である。第3面からは小1区西端に小河道と考えられる弧状に強く曲がる溝の一部が検出されている。



第27図 V区第1面・2面全体図

第3章 検出された遺構と遺物

V区第4面



第28図 V区第4面全体図

V区第1面の遺構と遺物（第29図、PL. 10・11・12・13）

1号溝（第30図、PL. 11）

調査区西側で1・3小区にあり、南南東～北西走する。南半は西側に緩く弧を描き北半で直線的に延びる。検出延長は51.6m・幅75cm前後・深さ20cmで底面横断面形状は略平坦である。埋土はAs-B軽石を混える砂質土である。出土遺物は埋土中より奈良期の高台盤型須恵器片、古墳前期台付甕台部片の他古墳時代土師器細片がある。

**出土遺物** 1は須恵器高台付盤の底部片である。回転糸切り後周辺回転篋削り。腰部の折れ強く付高台は内縁に付く。奈良時代。2は土師器台付甕台部。見込み部調整粗略で砂土塗布するか。古墳時代前期S字口縁甕か。

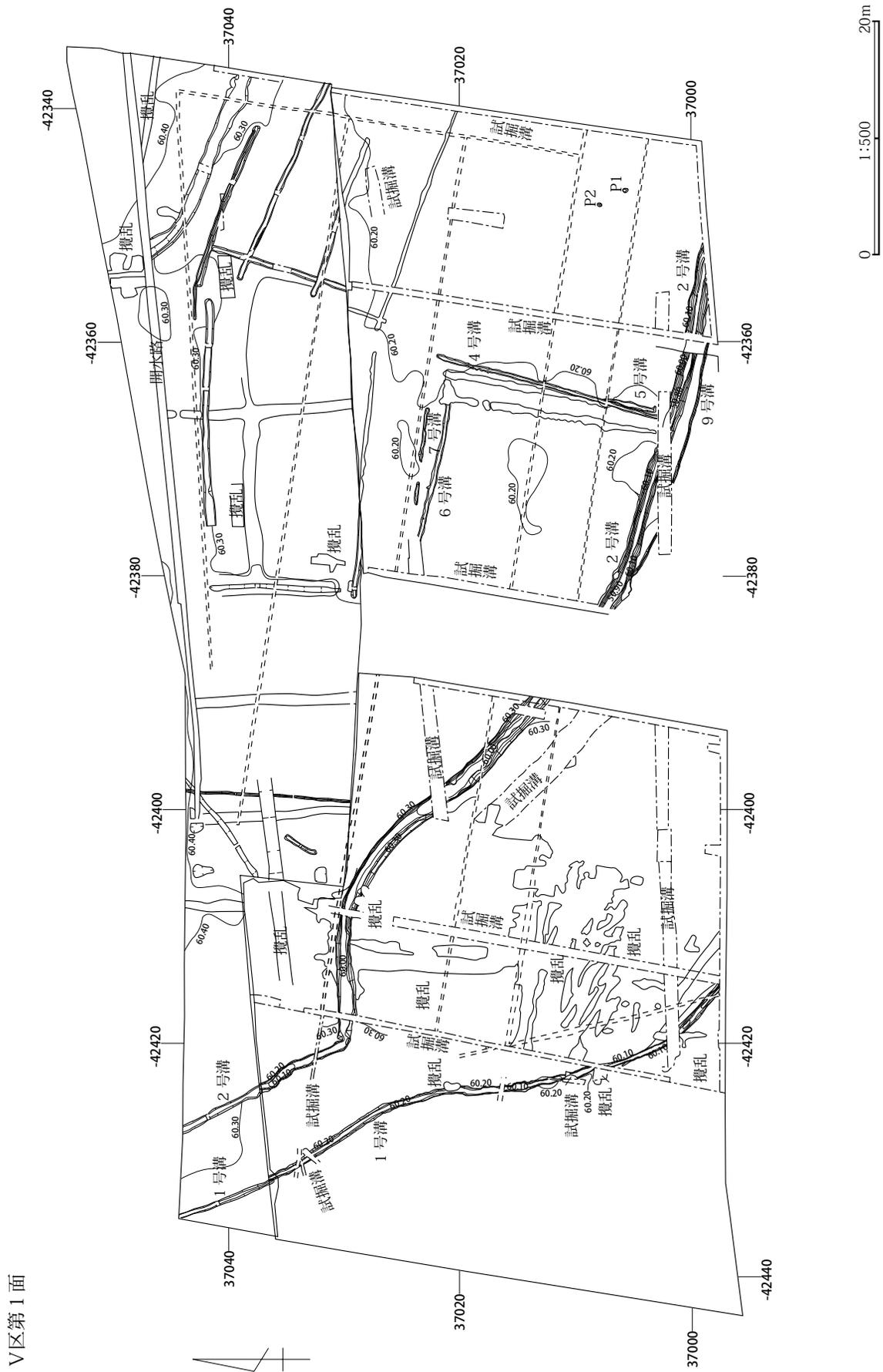
1号溝出土遺物計測表

単位 cm・g

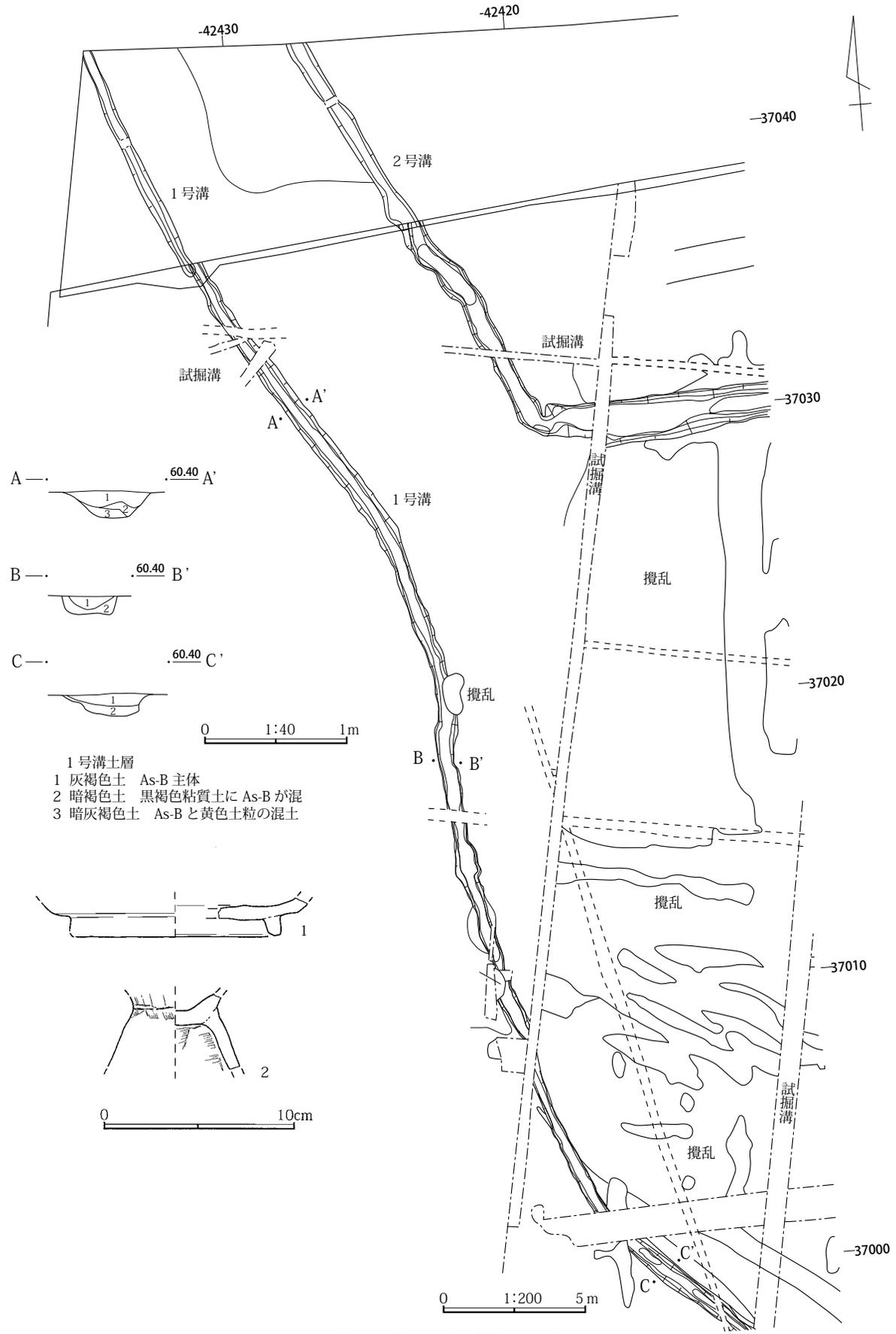
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵器盤	埋土		11.2	現高 1.9	底部小片	細土	灰 5 YR6/1	良好	
2	土師器台付甕	埋土			3.8	底部小片		橙5YR6-6	やや軟	

2号溝（第31・32・33・35図、PL. 12）

1・2・3小区にわたって検出された。調査区南部、南東隅部から緩く弧を描いて北西方に延びる。西に小さな弧をなした後、強く折れて北北西方へ直進する。検出延長約160m、幅は北縁で1.6m・南縁では3.2m、深さは北縁17cm・南縁で48cmを測る。横断面形状は略V字形を呈する。埋土はsilt質または粘質な灰色土である。溝幅・深さの差違状況からは北側から南側への水路と考えられる。A～Eの地点には杭状の木質痕が確認されている。各地点の杭数はA(11本)B(8本)C(2本)D(3本)E(6本)である。A地点は右岸寄り底縁に、C～E地点は左岸寄りの底縁に列し、およそ50～70cmの間隔を基準に持つようである。B地点では杭痕の一部が底面を横列に打設されたごとくである。他地点の杭が護岸目的に対し、堰のような機能があるか。ただし、分枝溝等の痕跡は検出されていない。なお、使用されている杭材や打設状況等の所見が無く詳細は不明である。出土遺物には中近世のかわらけ土器・軟質鍋類、平安時代須恵器、古墳前期土師



第29図 V区第1面全体図



第30図 V区第1面1号溝・出土遺物

器類などがある。

**出土遺物** かわらけ土器1は小杯底部、2は皿形状になろうか。3は内耳鍋。4は軟質火器台部か底部は大口径。5は火鉢または手焙り。表面は燻し焼成、縦位連子紋。6は内自焙烙鍋。7は流紋岩製定形砥石。以上中近世。8は須恵器蓋。平安時代。9は土師器高坏。腰部強く折れ体部は大きく外反して開く。外面縦位篋磨き。10・11は土師器甕底部。古墳前期。

V区2号溝出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	かわらけ小杯	埋土		7	現高 1.5	底部小片	細土	鈍橙7.5YR7/4	やや軟	
2	かわらけ皿	埋土		8	現高 1.5	底部1/4	細土	浅黄橙10YR8/4	やや軟	
3	軟質陶器火鉢or手焙	埋土		14	現高 3.7	底部小片	細土	灰5Y6/1	良好	
4	軟質陶器火器台	埋土				小片	粗粒混	灰褐	良好	底多孔
5	軟質陶器内耳鍋	埋土				小片	細土	灰褐	良好	
6	軟質陶器焙烙	埋土	41	38	5.5	小片	細土	灰褐	良好	
7	砥石	埋土	7.5	3.5	2.4	半欠		流紋岩		4面使用
8	須恵器蓋	埋土	17.5		現高 1.7	小片	微細粒	灰	良好	
9	土師器高坏	埋土			現高 2.6	坏部小片	微細粒多	鈍橙5YR7/4	良好	
10	土師器甕	埋土		8	現高 1.5	底部2/3	砂粒混	灰黄褐10YR5/2	良好	
11	土師器甕	埋土		9	現高 2.8	底部1/4	細砂多	鈍橙7.5YR7/4	やや軟	

9号溝 (第34・35図、PL.12・14)

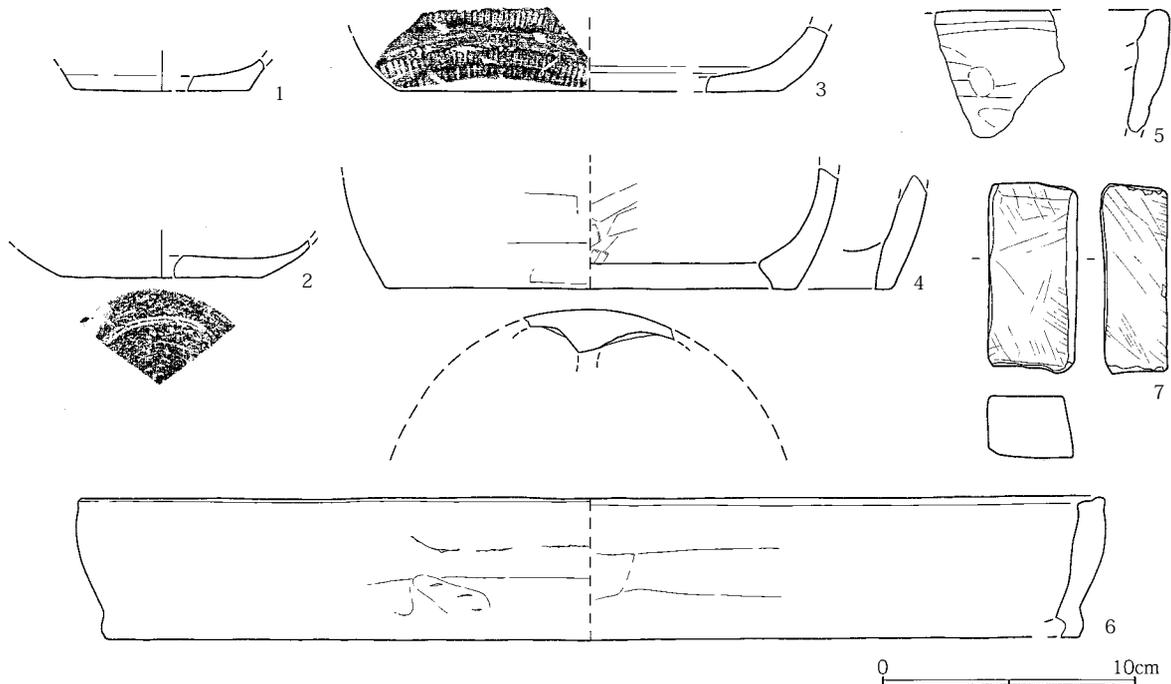
2小区に検出された。調査区南縁にあり、2号溝南側をこれが併走して2小区西端で2号溝に併する。検出延長約21m・幅20cm・深さ8cmほどの狭小な溝である。埋土はB軽石を主体にする暗灰色土である。横断面形状はU字形を呈する。出土遺物は土師器の小片少量である。

**出土遺物** 1は平底甕底部。2は台付甕の台部である。古墳前期になろう。

V区9号溝出土遺物計測表

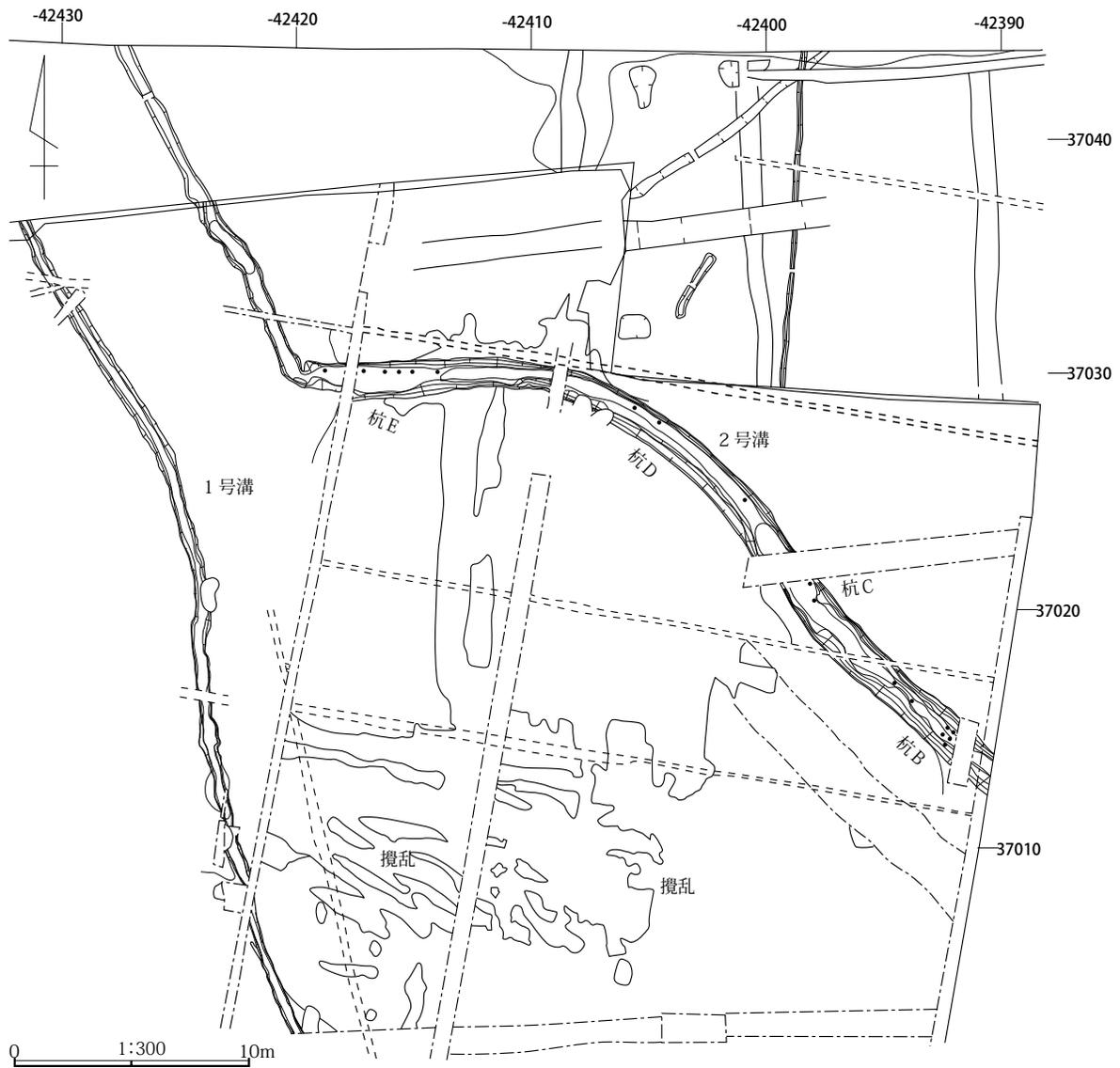
単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器甕	埋土		6	現高 2.1	底部1/3	細土	橙5YR6/8	やや軟	
2	土師器台付甕	埋土				台部	細土	明黄褐10YR7/6	やや軟	

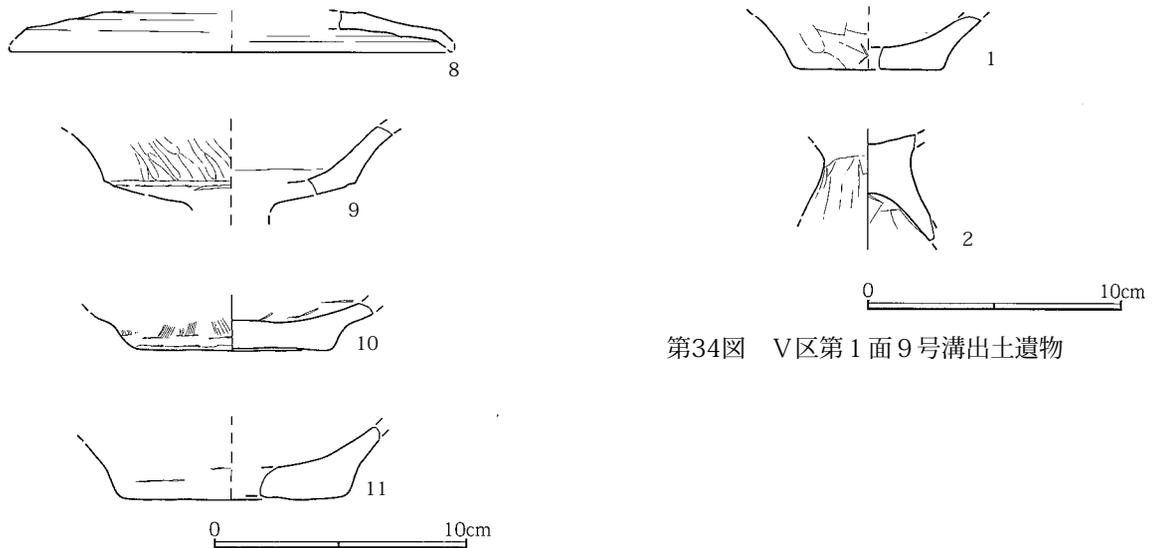


第31図 V区第1面2号溝出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物

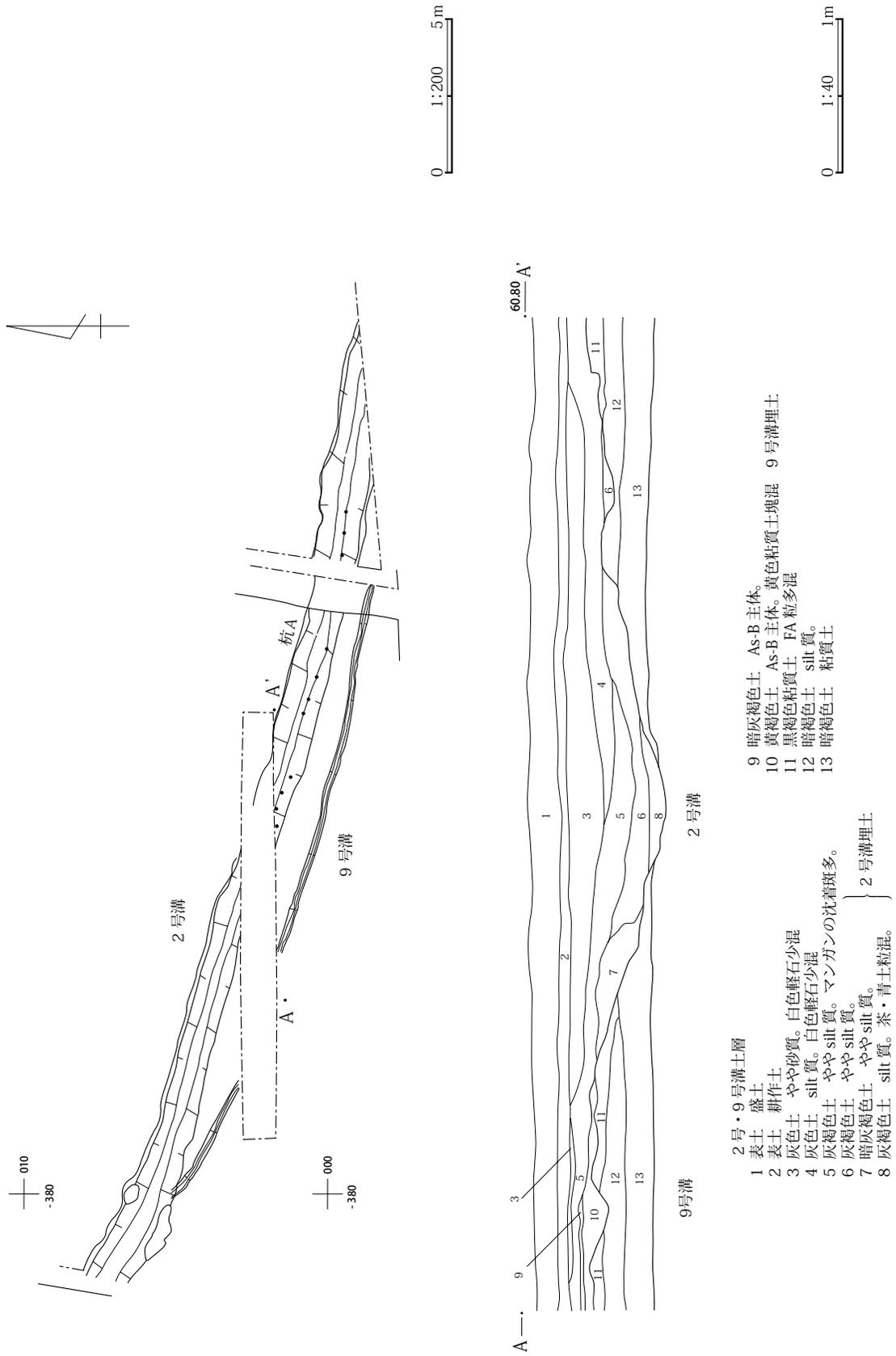


第32図 V区第1面2号溝



第34図 V区第1面9号溝出土遺物

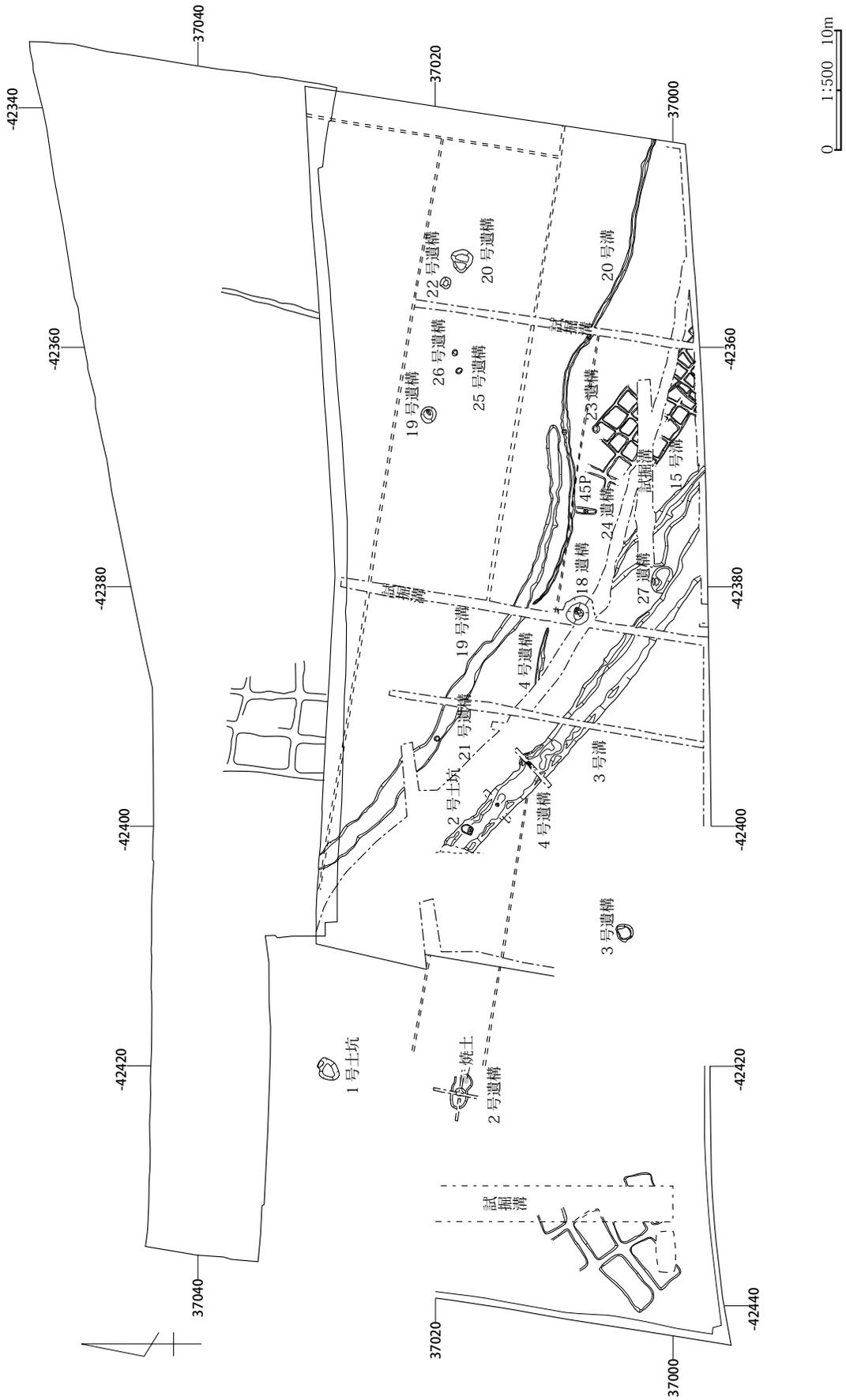
第33図 V区第1面2号溝出土遺物(2)



第35図 V区第1面2号・9号溝

V区第2面の遺構と遺物

V区第2面(3面)



第36図 V区第2面(3面)全体図

V区第2面(3面)の遺構と遺物 (第36図)

第2面の主な遺構は小穴・土坑・井戸跡・溝跡からなる。このうち、小穴・土坑・井戸跡に関しての名称は例えば井戸跡に対し、18号遺構などをもって遺構名称としている。本文では通例的にみて遺構種の判明するものについては( ) 付けで遺構名称を補うこととする。18号遺構(井戸跡)等。

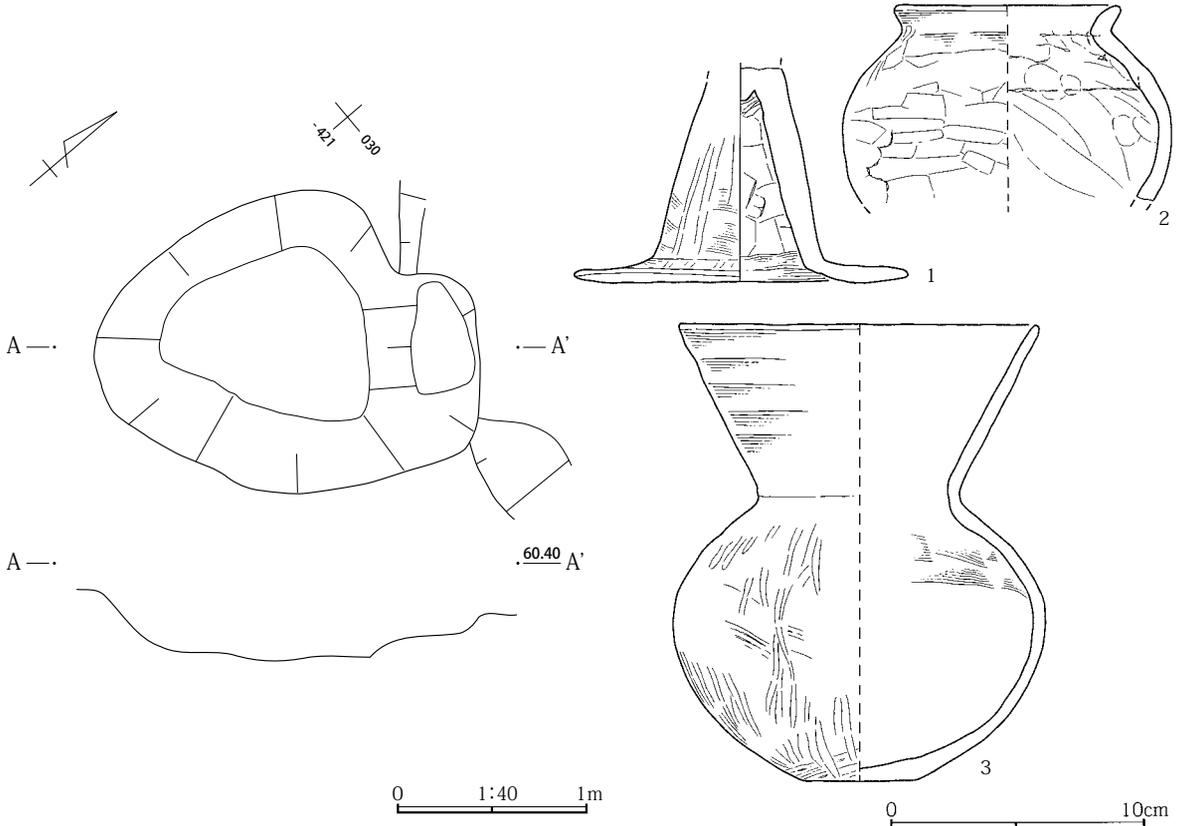
1号遺構(土坑) (第37図、PL. 40)

小1区東側に検出された。平面位置では第1面の2号溝に北縁が接する様にしてある。位置は、X=37028～37029・Y=-42419～-42420の範囲にある。平面形状は、不整楕円で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は、径2.0×1.58m、深さ36cmを測る。出土遺物には土師器高坏、長・短頸壺がある。

**出土遺物** 1は高坏脚部。脚柱は直線的な円錐台形を呈し、裾部は水平に折れて開く。裾端部は接地面より浮く。脚柱は縦位、裾部は放射状に篋磨き。内面横位の篋削り。2は器肉の厚い短頸の壺。口縁部は短く「く」の字状に外屈。胴部は丸く強く張る。外面胴部上半は斜位、中横位の篋削り。内面強めの斜位指頭撫で。3は壺。口頸部は直線的で高く外傾する。胴部丸く張り、小径な平底。胴部縦位の篋磨き。腰・底部に掻き目調整。以上古墳前期

1号遺構(土坑)出土遺物計測表

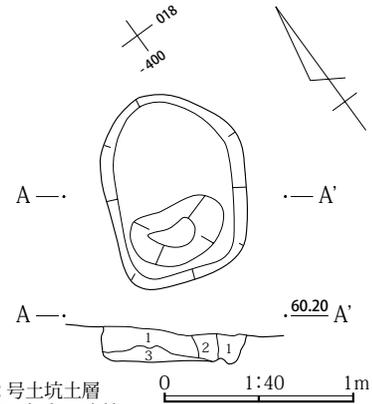
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器高坏	埋土		13.5	現高 8.5	脚 2/3	細土	橙 7.5YR7/6	良好	
2	土師器壺	埋土	9		現高 7.7	上半 1/3	土粒粗	明赤褐 2.5YR5/6	やや軟	
3	土師器壺	埋土	13.3	5	18.2	1月2日	砂粒混	鈍橙 7.5YR6/4	良好	



第37図 V区第2面1号土坑・出土遺物

2号土坑 (第38図)

小1区の3号溝北端底面に検出された。位置はX=37016～37017 Y=-42400の範囲にある。形状は不整楕円形を呈し、径1.01×0.75mである。3号溝との関連についての所見はなく新旧関係等は不明である。出土遺物は無い。



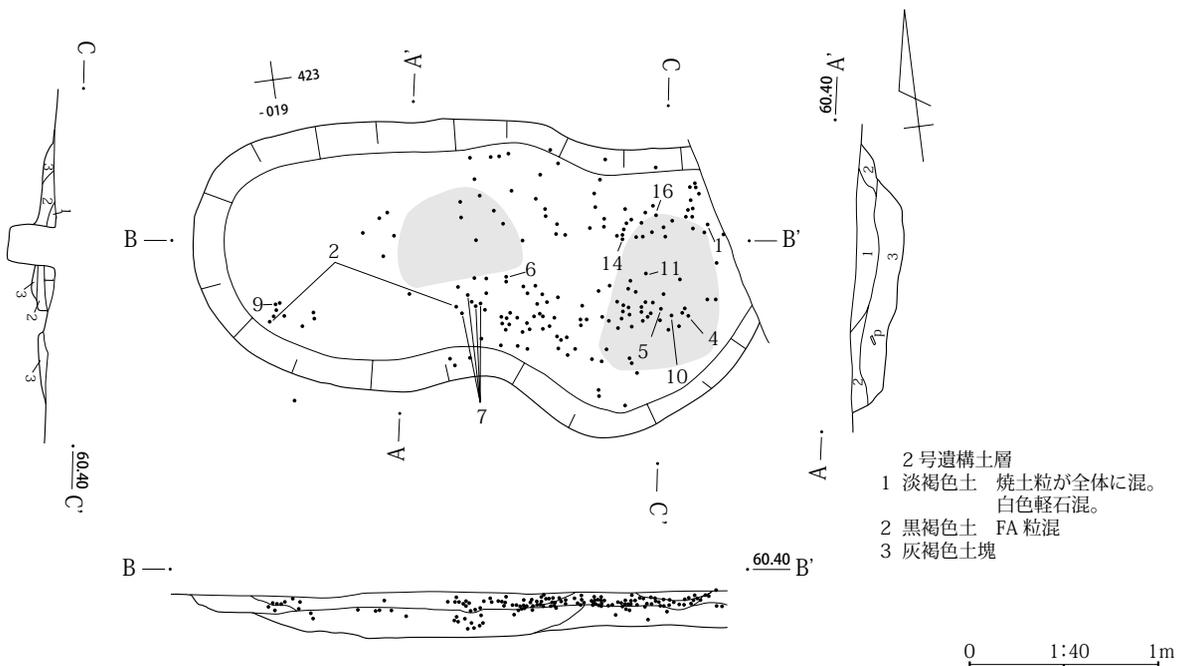
2号土坑土層  
 1 暗灰色土 砂質。  
 2 暗灰色土 砂質。Loam 土粒混  
 3 暗灰色土 Loam 土粒混。やや粘性あり。

第38図 V区第2面2号土坑

2号遺構(土坑) (第39図、P L. 13)

小1区中央部に検出された。位置はおおよそ、X=37017～37018・Y=-42421～-42423の範囲にある。平面形状は、東西に長軸を持つ長楕円形を呈するが中央部で緩い括れがあり不整形を呈する。横断面形は浅い皿状をなし、壁面の立ち上がりは緩やかである。規模は2.86×1.42m、深さ30cmを測る。長軸方位はN-81°-Wを示す。埋土はおおよそ3層からなり白色軽石(φ0.2～2mm)を混ざる黒色土～暗褐色土である。

出土遺物には土師器で器台・高坏・壺・甕・手捏ね土器などがある。検出状況では大半が小破片化したものである。遺構東側に集中する傾向があり、埋土中からの出土が多い。なお、東側に焼土粒の分布が認められているが層序的には遺構検出最上面に相当する。これと遺物群との関係・関連についてはその状況的な説明・所見が得られていない。



2号遺構土層  
 1 淡褐色土 焼土粒が全体に混。白色軽石混。  
 2 黒褐色土 FA 粒混  
 3 灰褐色土塊

第39図 V区第2面2号遺構(土坑)

出土遺物 (第40・41図、P L. 40)

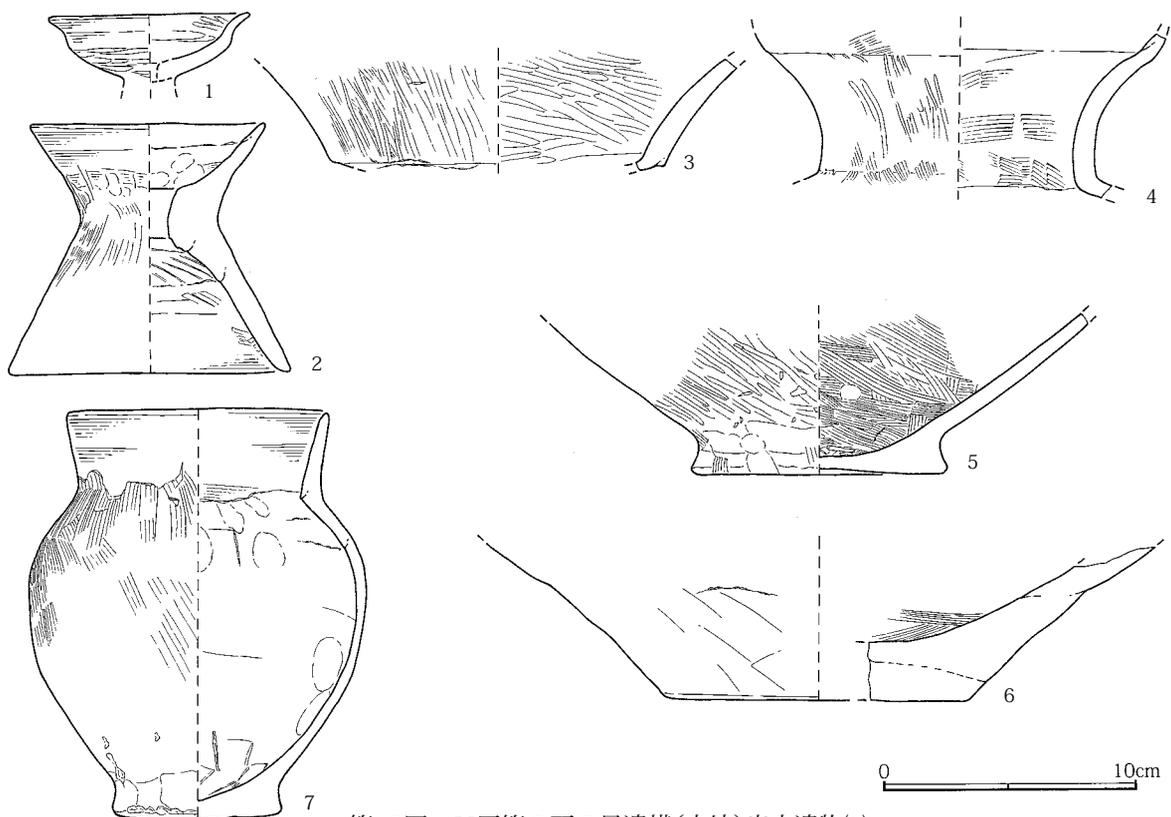
1・2は器台。1は偏平丸底気味、口縁部は括れて小さく外反して開く。口縁部外面横撫で。体・底部篋磨き。2は器肉厚目。台付甕の台部様の形態を呈する。坏部横撫で、台部上半は縦位の搔き目。台部内面斜放射状に篋止め痕。3は高坏。坏部は外反気味に大きく開き、腰部は強く折れる。外面縦・内面斜位に篋磨

き。4は二重口縁壺頸部。短く直立し、上半は大きく外反後内湾して開く。5・6は大振りな壺下半部。5の底部は外縁が高く出っ張る。外面斜位篋磨き。内面細掻き目。6は大径な底部で肥厚し、大形器になろう。見込みは部分的に掻き目。7～10は甕。7は口縁部直線的で外傾小さく立ち上がる。胴部上位に最大径をもち、腰部は緩く括れて厚手の底部に至る。胴部上半は2～3段の短引きの掻き目。口縁内面に横位掻き目、見込み部に放射状篋止め跡。8は甕口縁部。外面斜掻き目後横位細掻き目。内面横掻き目。9は口縁部外反気味に開き、端部はやや強めに開く。口縁部下位～肩部に縦～斜位の掻き目。内面は横位で粗めの掻き目。10は甕底部。腰部は縦位の強細掻き目、見込み部の調整粗略。11～15は手捏ね土器。略鉢形模倣。16は凹み石。中央に1凹。縁辺に敲打痕。裏面は剥離破損。以上古墳前期。

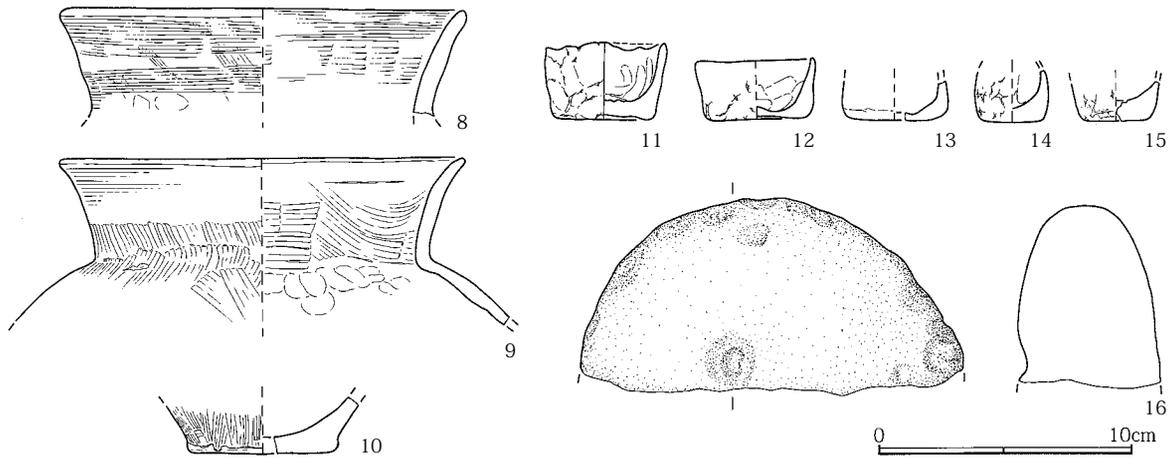
2号遺構(土坑)出土遺物計測表

単位 cm・g

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器器台	埋土	8		現高 2.5	坏部1/3	微細砂混	明赤褐5YR5/6	良好	
2	土師器器台	埋土	9.2	11	10	全2/3	砂粒多	橙2.5YR6/6	良好	
3	土師器高坏	埋土				坏部小片	細土	黄褐2.5YR5/3	良好	
4	土師器二段口縁壺	埋土			現高 6.5	頸部1/4	細砂多	鈍橙7.5YR6/4	良好	
5	土師器壺	埋土		9.5	現高 6	底部1/2	細土	橙2.5YR7/6	良好	
6	土師器壺	埋土		12	現高 6.1	底部1/4	粗砂多	浅黄橙7.5YR8/3	良好	
7	土師器甕	埋土	12	6.8	16	全1/3	砂粒多	明赤褐2.5YR5/8	良好	胴径13.5
8	土師器甕	埋土	16.2		現高 4.1	口縁1/4	細土	鈍橙2.5YR6/3	良好	
9	土師器甕	埋土	16		現高 6.8	口縁1/2	砂粒多	鈍橙7.5YR7/4	良好	
10	土師器甕	埋土		6	現高 2.2	底部1/3	砂混	明赤褐5YR5/8	硬	
11	土師器手捏ね土器	埋土	4.9	4	3	略完	細砂多	褐灰10YR4/1	やや軟	
12	土師器手捏ね土器	埋土	5.6	4	2.3	略完	砂混	橙7.5YR6/6	良好	
13	土師器手捏ね土器	埋土		4.2	現高 1.5	下半1/3	細土	橙5YR6/6	やや軟	
14	土師器手捏ね土器	埋土		2.5	現高 2	口欠1/3	細土	灰褐7.5YR4/3	やや軟	
15	土師器手捏ね土器	埋土		2.8	現高 1.5	下半1/4	細土	灰褐5YR4/2	軟	
16	凹石	埋土	15.3	7.5	6.7	半欠				755g



第40図 V区第2面2号遺構(土坑)出土遺物(1)



第41図 V区第2面2号遺構(土坑)出土遺物(2)

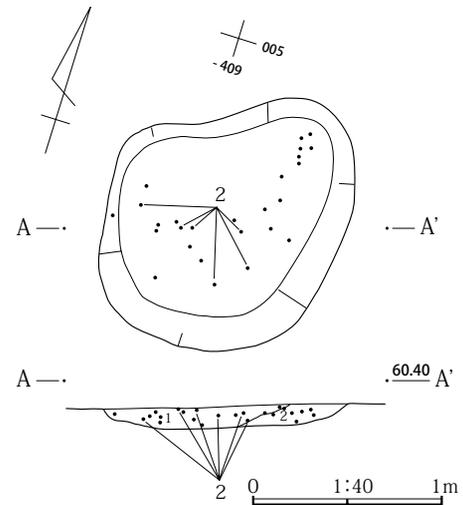
**3号遺構(土坑)** (第42図、P L. 14)

小2区南西部に検出された。位置は、X = 37003~37004 Y = -42408 ~ -42409の範囲にある。平面形状は、北壁縁線が歪み不整楕円形を呈する。断面形は平坦な底面に壁面が緩やかに立ち上がり浅い皿状をなす。規模は、径1.55×1.3m、深さ約10cmを測る。埋土は塊状の黄褐色粘質土に焼土粒を混える褐色土である。

出土遺物には土師器壺・甕がありいずれも胴下半部分である。

**出土遺物** (第43図、P L. 40)

1、2は球胴形の壺である。1は腰部が強く張る。底部小径で凸状。外面弱い篋削り、内面見込み部に放射状の篋止め痕、胴部は横撫で。2は胴部最大径が中位にある。器面調整痕は希薄。以上古墳前期。

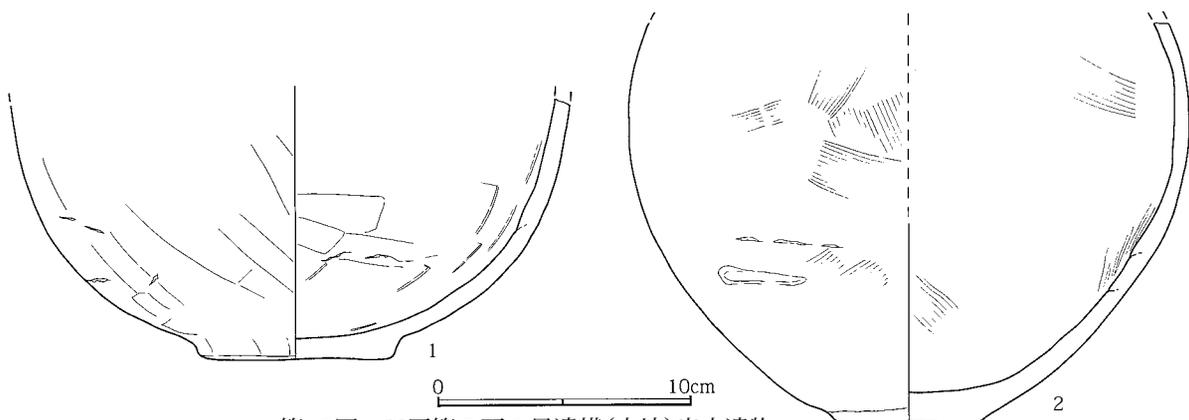


3号遺構土層  
1 褐色土 焼土塊・黄褐色粘土塊混  
2 褐色土 焼土塊・黄褐色粘土粒混

第42図 V区第2面3号遺構(土坑)

**3号遺構(土坑)出土遺物計測表**

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	埋土		7.8	現高 10.2	下半	土粒粗	橙5YR6/6	良好	胴径22+α
2	土師器甕	埋土		6	現高 17.5	下半	土粒砂多	鈍褐7.5YR5/3	やや軟	胴径22.4



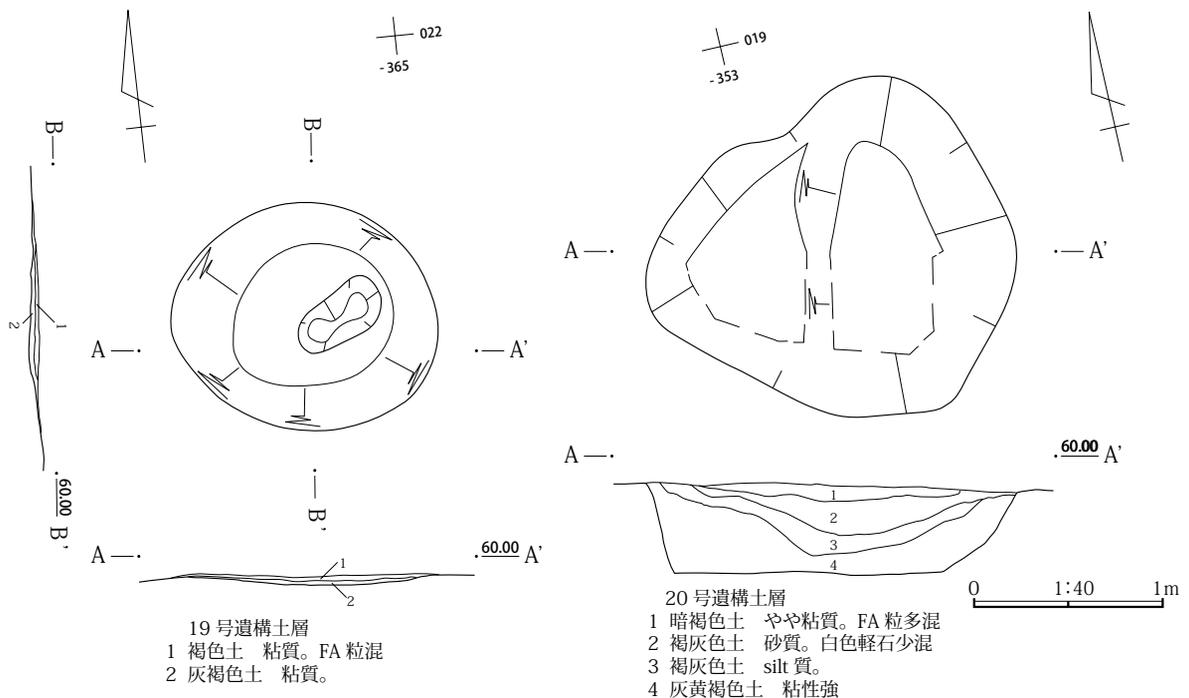
第43図 V区第2面3号遺構(土坑)出土遺物

19号遺構(土坑) (第44図)

小2区やや北寄りに検出された。位置は略X=37020・Y=-42365の範囲にある。ほぼ円形を呈し極浅い皿状を呈する。径1.4×1.2m、深さは僅6cmを測る。埋土中には焼土・炭化物がみられるが出土遺物は無い。

20号遺構(土坑) (第45図)

小2区北東寄りに検出された。位置はX=37017~37018・Y=-42351~-42353の範囲にある。平面形状はやや不整な楕円形を呈する。径1.95×1.80m、深さ47cmを測る。底面はほぼ平坦をなし、壁面の立ち上がりは明確である。埋土は4層からなるがやや上位で褐灰色の砂質土が介在して粘質土が堆積する。出土遺物は検出されていない。



第44図 V区第2面19遺構(土坑)

第45図 V区第2面20遺構(土坑)

27号遺構(土坑) (第46図、P L. 15)

小2区に検出された。位置はX=37000~37001・Y=-42378~-42380の範囲にある。平面形状は北西~南東方に長軸を持つ楕円形を呈する。規模は南边上縁が3号溝との重複で失っているものの、長軸2.3m、短軸略1.7m、深さ35cmを測る。長軸方位はN-61°-Wを示す。底面は平坦で壁面の立ち上がりは緩い傾斜を持つ。埋土は4層からなるが粘性が強く、FA・C軽石が混入する所見である。

出土遺物は土師器の器台・壺・甕・手捏ね土器などがあるものの多くは小破片での出土である。手捏ね土器は完形品に近い。

出土遺物 (第47図、P L. 40)

1は器台坏部。中位で括れて口縁部は外反気味に開く。坏見込みに孔を穿つ。2は直立する壺の口縁部。肩部に凸帯を巡らす。内面細横位の掻き目。3は壺胴部。強く張り偏平気味な球形で底部凹状。下半は横位の篋削り。4は甕口縁部。幅広な折り返しで厚手。外面細斜位掻き目後横位篋磨き、内面横~斜位の篋磨き。

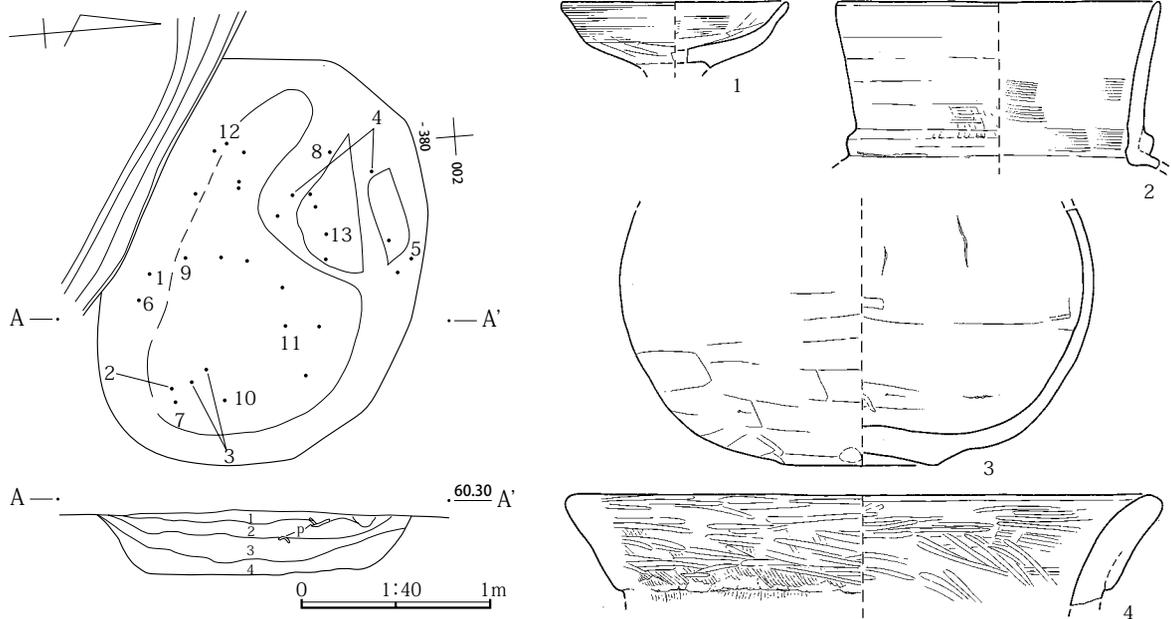
第3章 検出された遺構と遺物

5から7は壺の底部か。8・9は台付甕台部。8は台端部内折り返し無く単口縁甕か。外面縦位の細掻き目。9は端部内折り返しでS字口縁甕。外面斜掻き目撫で消し。10～13は手捏ね土器。鉢形土器の模倣と13は台付きの形状になろう。以上古墳前期。

27号遺構(土坑)出土遺物計測表

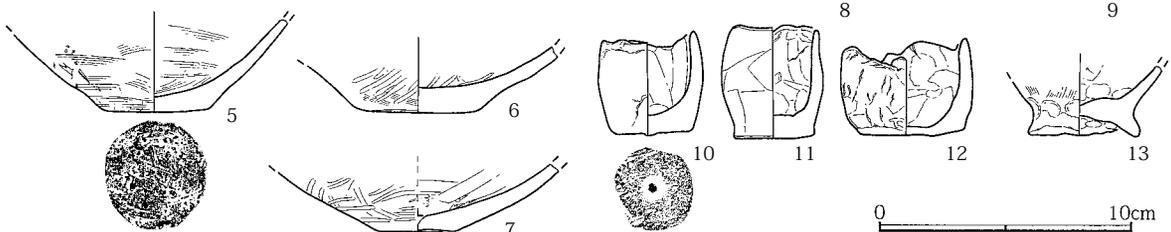
単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器器台	埋土	9		現高 2.5	坏部1/3	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
2	土師器壺	埋土	12.9		現高 6.5	口縁小片	砂礫多	鈍橙5YR7/3	やや軟	
3	土師器壺	埋土		6.5	現高 10	下半1/2	粗土粒混	浅黄橙7.5YR8/4	良好	胴径 18.8
4	土師器甕	埋土	23.8		現高 4.3	口縁1/4	土粒やや粗	鈍橙7.5YR7/4	良好	
5	土師器壺	埋土		4.3	現高 3.6	底部	細土砂礫混	鈍橙7.5YR7/4	良好	
6	土師器壺	埋土		4.6	現高 2.6	底部	細土	鈍黄橙10YR6/4	良子	
7	土師器壺	埋土		3	現高 2.7	底部1/3	極細土	灰黄褐10YR6/2	良好	
8	単口縁台付甕	埋土		11	現高 6	台部1/2	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
9	土師器s字口縁台付甕	埋土		7.5	現高 5.7	台部	細土	灰黄褐10YR5/2	良好	
10	土師器手捏ね土器	埋土	4	3.2	4		細土	鈍黄橙10YR7/4	良好	
11	土師器手捏ね土器	埋土	3.4	3	4.5	完形	細土	鈍橙2.5YR7/4	良好	
12	土師器手捏ね土器	埋土	4.5	4	3.9	完形	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
13	土師器手捏ね土器	埋土		4.4	現高 2.8	台部	細土	黒褐2.5YR3/2	良好	



- 27号遺構土層  
 1 黒褐色土 白色軽石少混。  
 2 暗褐色土 白色軽石  
 3 黒褐色土 炭化粒多混。白色軽石少混。  
 4 黒褐色土 炭化粒少混。白色軽石少混。

第46図 V区第2面27号遺構(土坑)



第47図 V区第2面27号遺構(土坑)出土遺物

V区2面では上記土坑の他、21～26号遺構とする小穴や小土坑に類する落ち込みが検出されている。以下表にて示す。

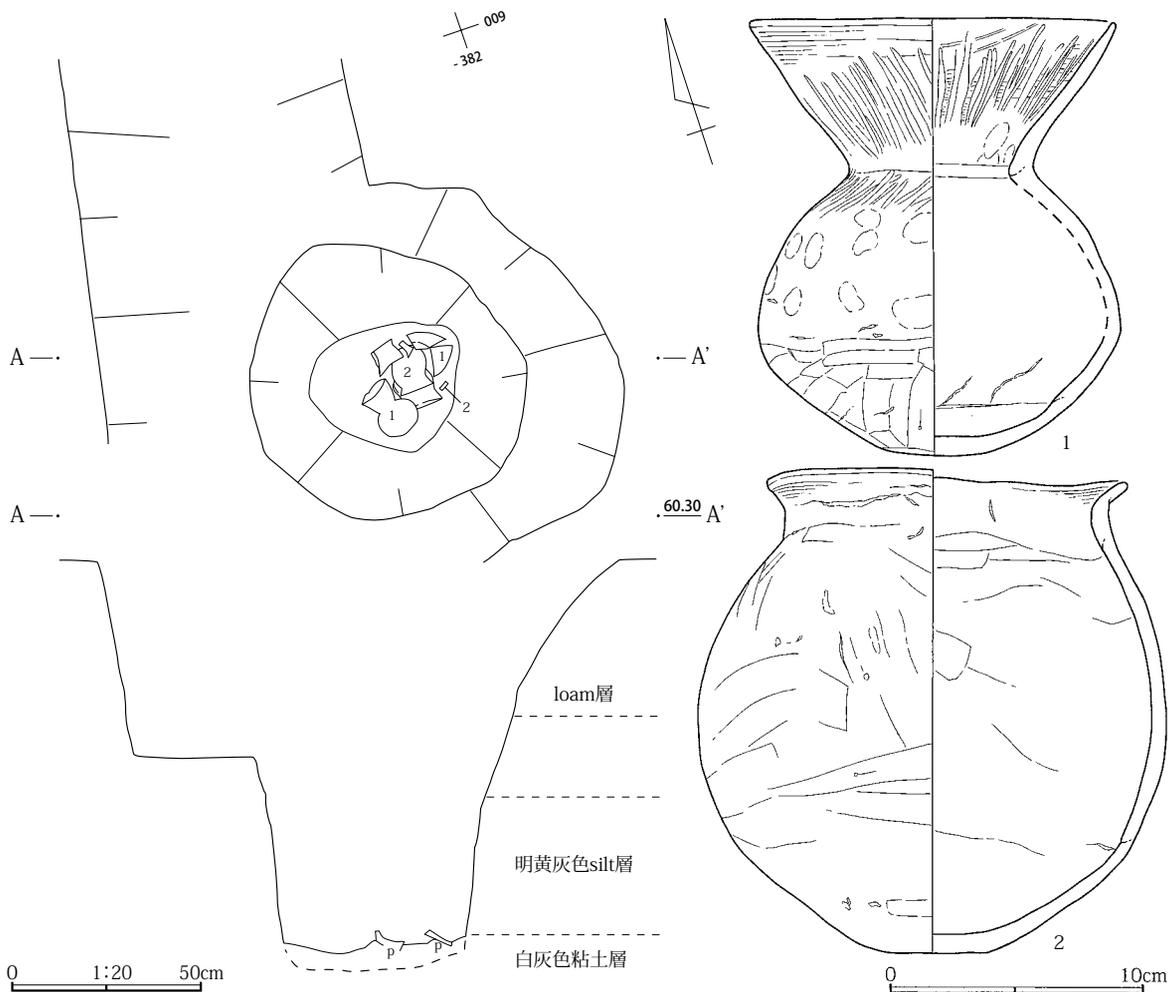
V区第2面検出小穴・土坑状遺構観察表

単位 cm

遺構名	位置	平面形状	断面形状	規模 径・深さ(cm)	出土遺物	備考
21号遺構	X=37019・Y=-42392	円形	U字形	45×43・17	なし	小穴状
22号遺構	X=37018～37019・Y=-42394	略円形	浅皿状	97×83・11	なし	土坑状
23号遺構	X=37006・Y=-42362～-42363	円形	U字形	65×61・33	なし	小穴状
24号遺構	X=37006～37008・Y=-42393	長楕円形	浅皿状	181×59・7	なし	土坑状
25号遺構	X=37017～37018・Y=-42361～-42362	楕円形	浅皿状	57×48・11	なし	小穴状
26号遺構	X=37018・Y=-42360	円形	浅皿状	50×45・7	なし	小穴状

18号遺構(井戸跡) (第48図、P L. 15・41)

小2区に検出された。位置は略X=37007～37008・Y=-42381～-42382の範囲にある。試掘溝に

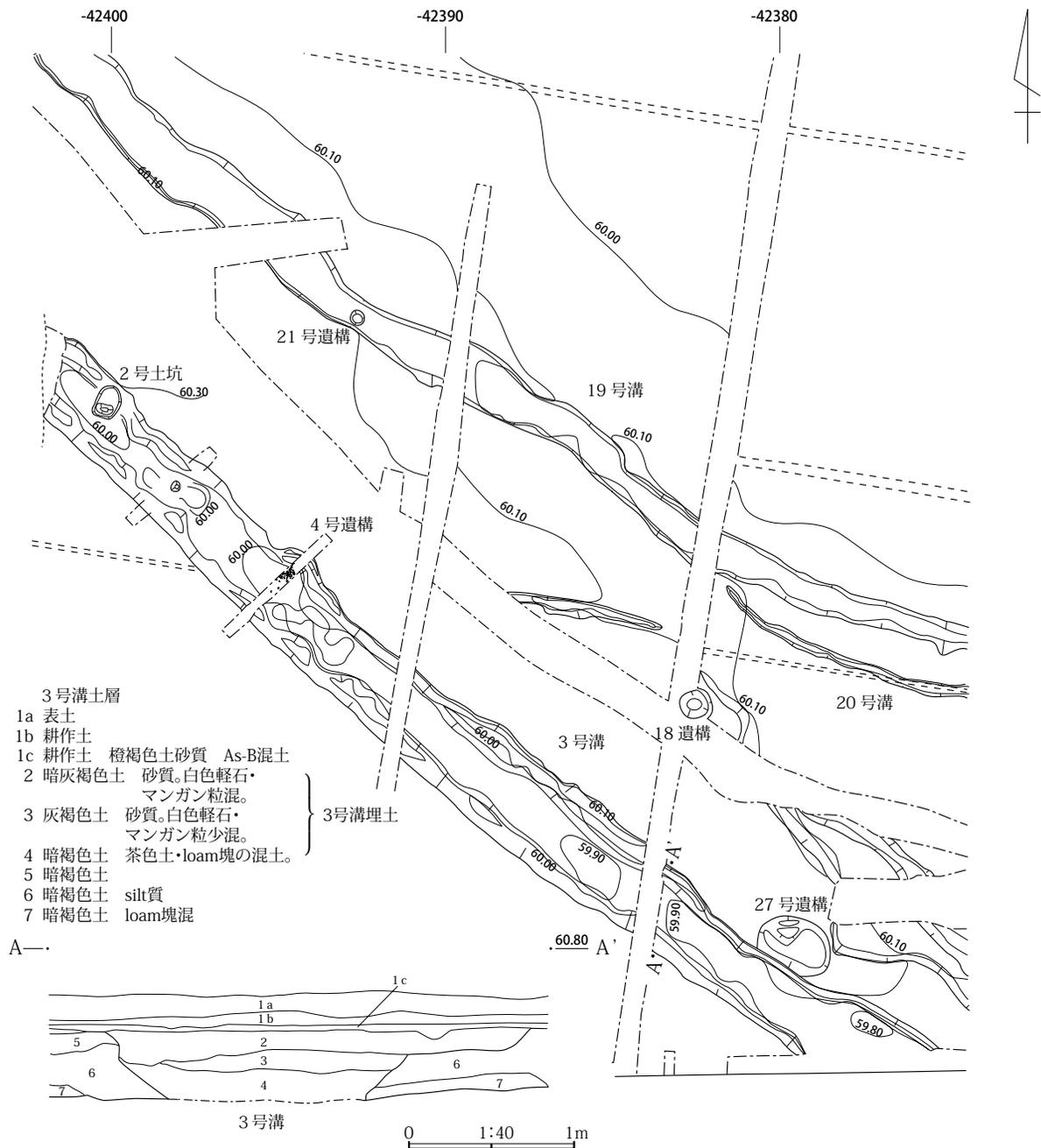


第48図 V区第2面18号遺構(井戸)・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

よって西半上部は削平される。形態は平面形略円形、断面形は下半壁面が垂直に近く上半で大きく開口する。上縁径は約1m強、底面径約50cm、深さ1.1mを測る。なお、埋土についての所見は無い。出土遺物は底面間近より完形品で土師器壺・甕の2個体がある。

**出土遺物** 1は壺。口頸部直線的に大きく開く。胴部中で算盤珠形状に強く張る。底部は小径で不安定。口頸部内外面縦位の篋磨き。胴下半は横～斜位篋削り。2の甕は口縁部短かく内傾して上半は外傾。短胴で最大径はやや下位にあり、下膨れ風。底部は小径で平底。胴下半は横位の篋削り、上半は粗間隔で縦篋撫で。下位は被熱で肌荒れ、内面に焦げ状の付着物。以上古墳前期。



第49図 V区第2面3号溝土層図

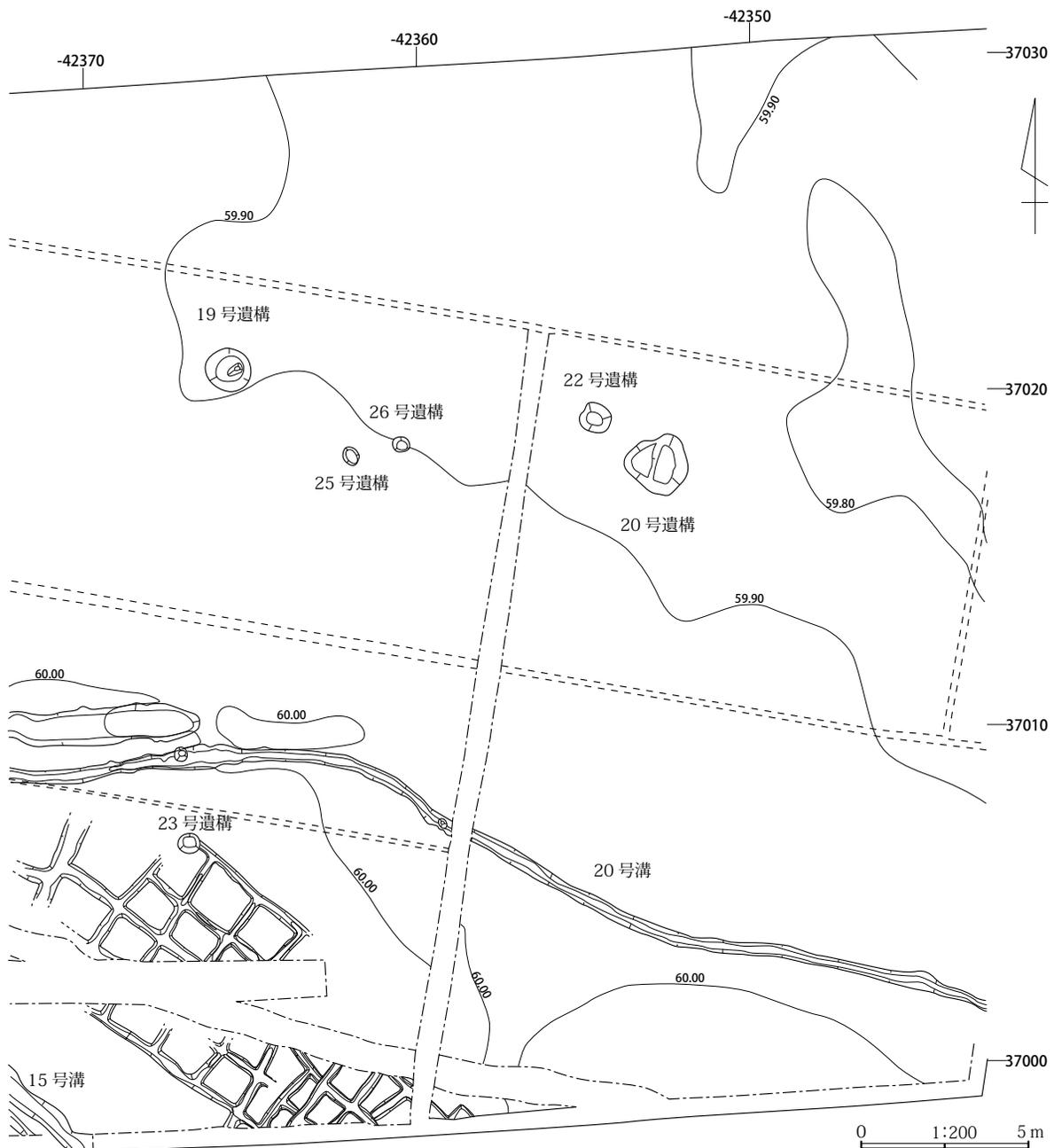
V区2面18号遺構(井戸跡)出土遺物計測表

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	底面	14.5	4.5	17.1	完形	細砂多	淡橙5YR8/3	良好	胴径14.3
2	土師器甕	底面	14	5	18.5		細砂多	鈍橙7.5YR7/4	良好	胴径18.5

単位 cm

3号溝 (第49・50図)

小1区北東部から2区南西部に検出された。南は調査区域外に、北は検出されず跡切れたままである。3号溝の北側には15号・20号・19号溝が併走する。位置はX=37000~37020・Y=-42375~-42402の範囲にある。軌跡は直線的で底面幅も比較的均等な掘形をなす。検出延長は約35mで、上縁幅2.8m・下縁幅1.0m、深さ35~40cm前後を測る。走方向は北西~南東で方位は略N-50-Wを示す。底面は平坦部が



第50図 V区第2面遺構図

第3章 検出された遺構と遺物

多く、遺存深さは浅いものの横断面は箱堀状を呈す。埋土はおおよそ3層からなり、上位層にはF Aと考えられる軽石を混ざる砂質暗灰褐色土が、下位には粘性のあるloam塊混土の暗褐色土が厚く堆積する。出土遺物には溝埋土中より古墳時代前期に属する土師器埴・高坏・甕・手捏ね土器等が検出されているがいずれも小破片化している。なお溝跡やや北西寄りの地点で大量の遺物集中地点が検出されている。

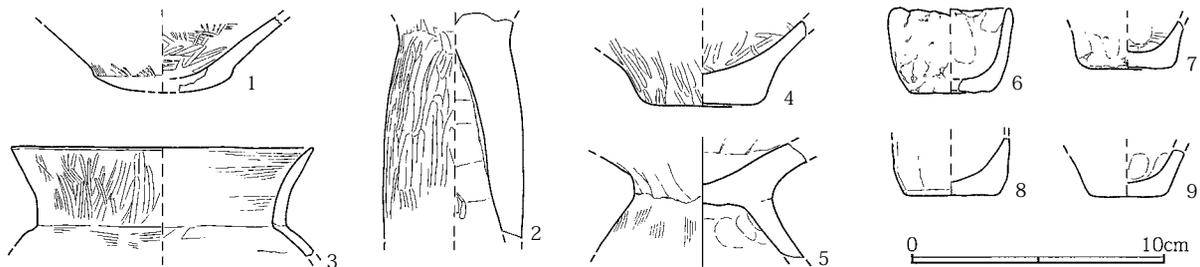
出土遺物（第51図）

1は埴で口縁部欠損。底部小径で偏平な丸底様。体部外反気味に大きく開く。内面掻き目後篋磨き。2は高坏脚柱。entasis状に中脹らみ。外面縦位篋磨き、内面横位篋削り。3は壺口縁部。肩部小さく張り口縁部は短く直立気味で上半は外傾して開く。口縁内外面肩部横位掻き目後赤色塗彩。口縁外面篋磨き後赤色塗彩。4は壺の底部か。小径で肉厚。内外面篋磨き。5は台付甕台部。見込み部に砂土の塗布無く単口縁甕のものか。6から9は手捏ね土器。いずれも鉢形模倣であろう。以上古墳前期。

V区2面3号溝出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器埴	埋土		腰径 5.3	現高 2.9	小片	細土	明赤褐5YR5/6	良好	
2	土師器高坏	埋土			現高 8.7	脚柱1/2	細土	鈍橙5YR7/4	良好	
3	土師器壺	埋土	12		現高 4.3	口縁小片	細土	橙2.5YR6/6	良好	
4	土師器壺	埋土		5	現高 3.4	底部	細土	褐7.5YR4/3	良好	
5	土師器台付甕	埋土			現高 4.5	台基部	微細砂	明褐7.5YR5/6	良好	
6	土師器手捏ね土器	埋土	5	3.4	3.3	全1/3	細土	鈍黄橙10YR7/3	良好	
7	土師器手捏ね土器	埋土		3.8	現高 1.9	口欠1/2	細土	橙5YR6/6	やや軟	
8	土師器手捏ね土器	埋土		3.8	現高 2.1	口欠1/3	細土	明赤褐2.5YR5/6	やや軟	
9	土師器手捏ね土器	埋土		3	現高 1.8	下半1/4	粗土	明黄橙10YR7/6	やや軟	



第51図 V区第2面3号溝出土遺物

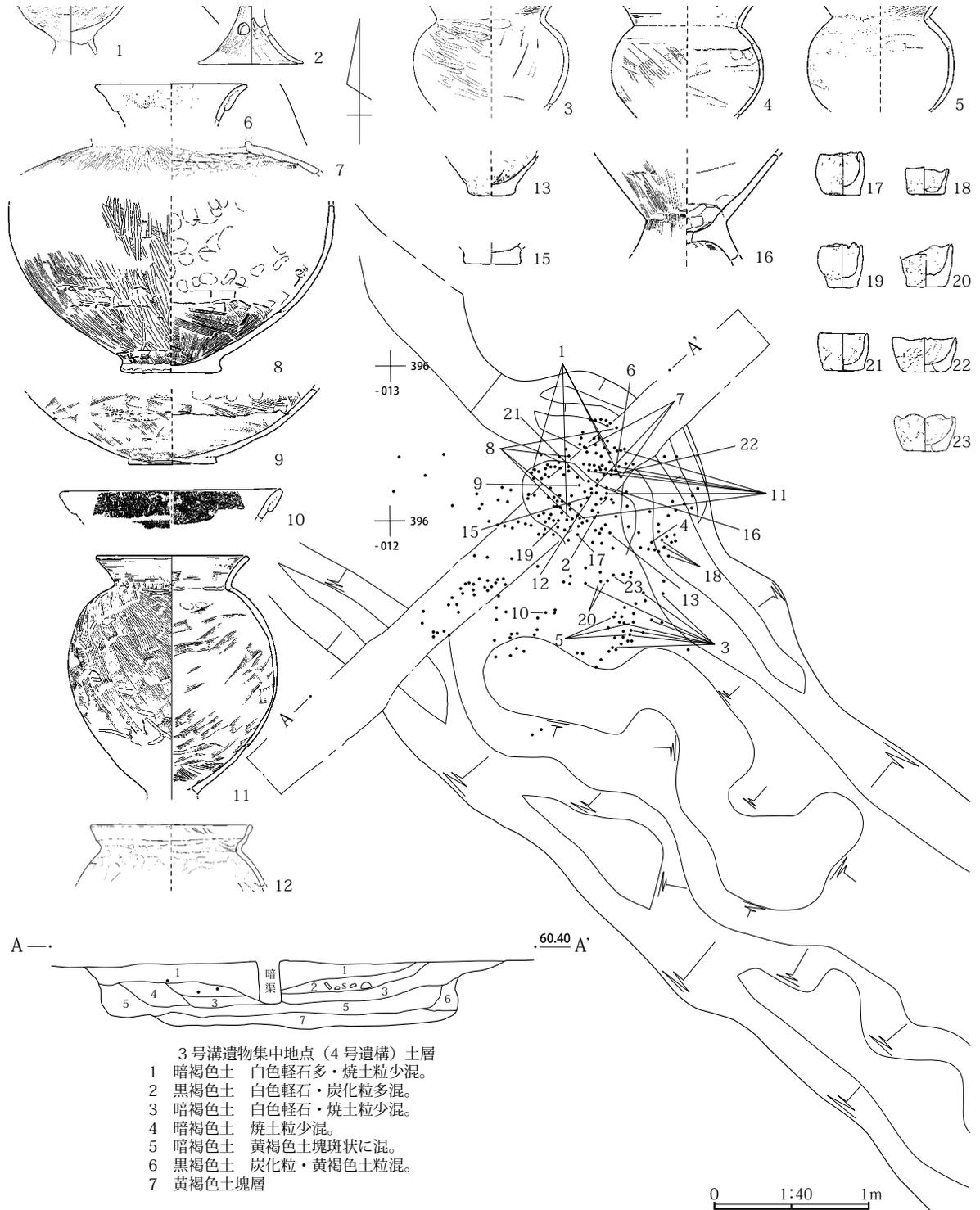
3号溝遺物集中地点（4号遺構）（第52図、P L. 14）

土器集中地点は溝跡やや北西寄りの地点に検出されている。位置はX=37010~37012・Y=-42394~-2395の範囲である。出土遺物は全て土師器で大小に破片化している。通番号にして約300点を数える。分布は東縁側に密にあり、垂直分布では溝中央部に比較してやや高くなる。遺物は溝の東縁方からの投棄で、溝跡の埋没がある程度進んだ段階と考えられる。なお遺物出土面に重なり焼土や炭化物の分布が記録されているが、焼土の形態（粒・塊・層・量・厚）や遺物との関係（前・後・同時）などの所見はみられない。主な器種には高坏・壺・甕・手捏ね土器がある。

出土遺物（第53・54図、P L. 41）

1は高坏の坏部。内湾気味に開く小椀形で、口縁部内外面横位・体部斜位篋磨き。2は高坏脚部で緩く大きく開く。脚柱に3孔を穿つ。外面縦位篋磨き、赤色塗彩。3~5は壺。胴部は張りの強い球胴で口縁部「く」の字状に開く。3は口縁部外面横撫で、内面横~斜位篋磨き、胴部横~斜位篋磨き。4は外面肩部横・胴部斜位に細掻き目、赤色塗彩。5は口縁部内面横~斜位篋磨き。外面肩部篋磨き、胴部斜位篋削り。6は壺の

折り返し口縁。内外面横位の篋磨き。7～9は大振りな壺の肩及び胴下半部。7は外面縦位篋磨き。内面紐作り痕残り、指頭調整顕著。8は凸状の底部を有し、胴部大きく球胴を呈す。外面下地に掻き目後縦位篋磨き。内面見込み部横・放射状に掻き目、中位は指頭痕多く篋撫で。9の底部は薄手の凸状。外面下地に掻き目後斜位篋撫で。内面見込み部は篋撫で、中位は斜～横位の掻き目。10は折り返し口縁の甕。口縁帯内外面は横・斜位の細掻き目。11は単口縁台付甕。口縁部「く」の字状に開き、胴部丸く張り腰部は細る。口縁部外面



第52図 V区第2面3号溝 遺物集中地点(4号遺構)

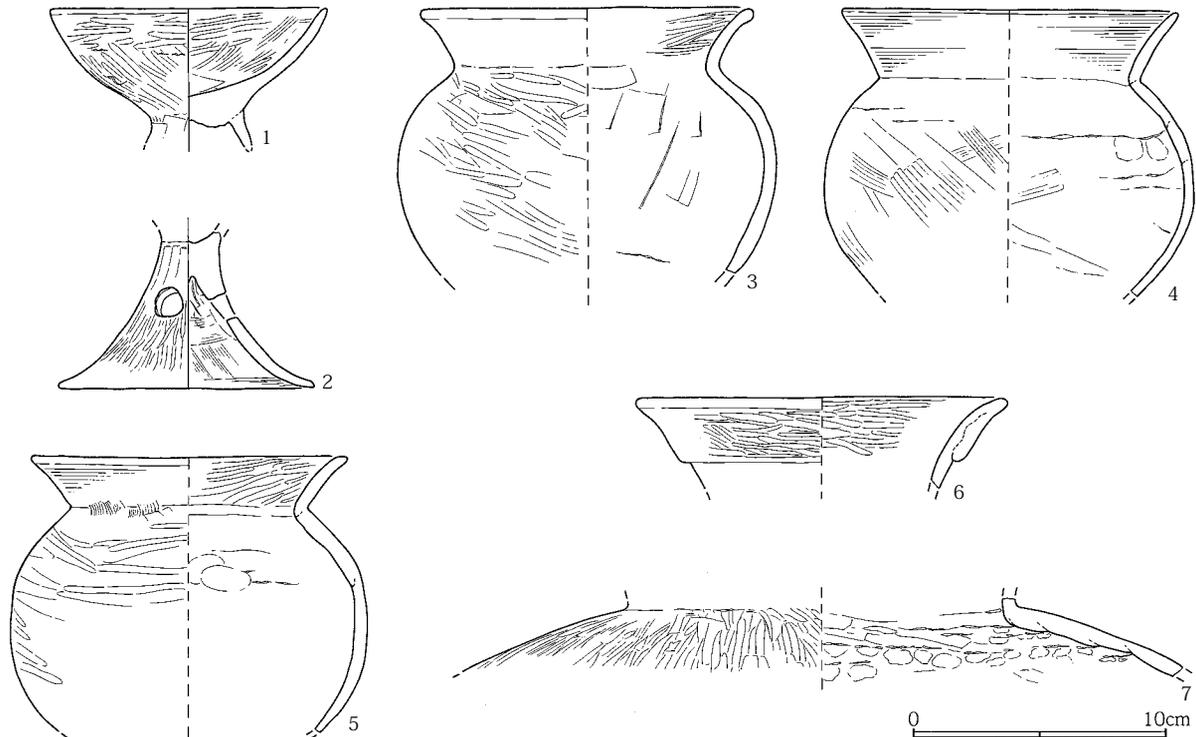
第3章 検出された遺構と遺物

縦位細掻き目後横撫で。内面横位掻き目。胴部多段斜位掻き目。内面斜位の篋撫でと掻き目。13～15は凸状の底部。12は厚手で、腰部外面にやや粗雑な指頭痕調整が残る。内面は引き手の短い細掻き目。16は台付甕台基部。外面縦位細掻き目。胴・台部の見込み部に砂土の塗布無く単口縁のものか。17～23は手捏ね土器。いずれも鉢形模倣。以上古墳前期。

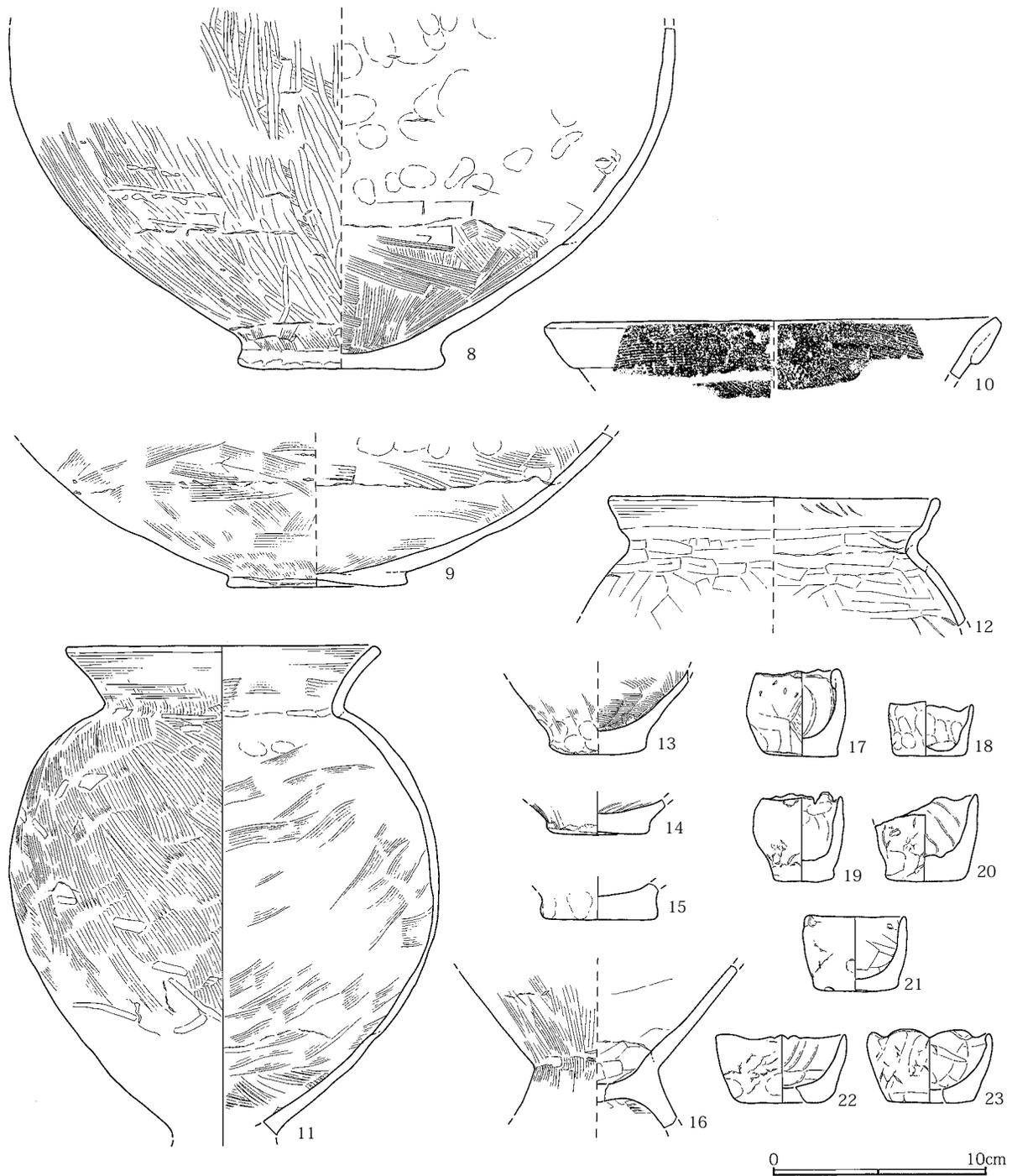
V区2面3号溝遺物集中地点(4号遺構)出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器高坏	埋土	11		現高 5.5	坏部1/3	細土	橙7.5YR7/6	良好	
2	土師器高坏	埋土		10	現高 6.2	脚部2/3	砂粒少混	浅黄橙10YR8/3	良好	
3	土師器壺	埋土	13.3		現高 10.3	下半欠1/5	細砂混	鈍橙2.5YR6/4	良好	胴径15
4	土師器壺	埋土	13.3		現高 11.5	下半欠1/3	細砂混	橙2.5YR7/6	良好	胴径14.6
5	土師器壺	埋土	12.5		現高 11	下半欠1/4	砂粒混	浅2.5YR7/3	良好	胴径11
6	土師器壺	埋土	14.8		現高 3.5	口縁片	細土	鈍黄橙10YR7/4	良好	
7	土師器壺	埋土			現高 3.2	胴部片	細土	褐7.5YR4/3	良好	
8	土師器壺	埋土		9.2	現高 17	下半1/3	砂粒混	橙2.5YR6/8	良好	胴径32.4
9	土師器壺	埋土		9	現高 7.2	下部1/4	砂粒多	橙7.5YR7/6	良好	
10	土師器甕	埋土	21.6		現高 2.8	口縁片	細土	橙5YR6/8	やや軟	
11	土師器単口縁台付甕	埋土	15		現高 23	台部欠	砂粒混	鈍橙7.5YR6/4	良好	胴径20.4
12	土師器s字口縁甕	埋土	15.6		現高 5.9	口肩部片	細土	橙7.5YR7/6	良好	
13	土師器甕	埋土		4.7	現高 1/3	底部1/3	細土	赤10R5/8	やや軟	
14	土師器壺or鉢	埋土		4.8	現高 1.6	底部3/4	細土	明赤褐2.5YR5/6	良好	
15	土師器甕	埋土		5.5	現高 1.7	底部1/2	細土	橙5YR6/8	良好	
16	土師器台付甕台部	埋土			現高 7.5	台部片	細土	鈍褐7.5YR5/4	良好	
17	土師器手捏土器	埋土	4.5	3.5	4.2	略完	細土	灰褐7.5YR4/2	やや軟	
18	土師器手捏土器	埋土	4	3.4	2.5	略完	細土	橙2.5YR6/8	良好	
19	土師器手捏土器	埋土	4	4.1	2.8	略完	細土	褐7.5YR6/4	良好	
20	土師器手捏土器	埋土	5	3.5	4	略完	砂粒混	鈍橙7.5YR6/4	良好	
21	土師器手捏土器	埋土	4.8	4	3.5	全1/2	細砂多	黒褐10R3/1	良好	
22	土師器手捏土器	埋土	6.2	4	3.2	全1/3	細砂多	鈍7.5YR5/3	良好	
23	土師器手捏土器	埋土	5.8	4	3.2	全1/4	細砂多	鈍黄10YR7/4	良好	



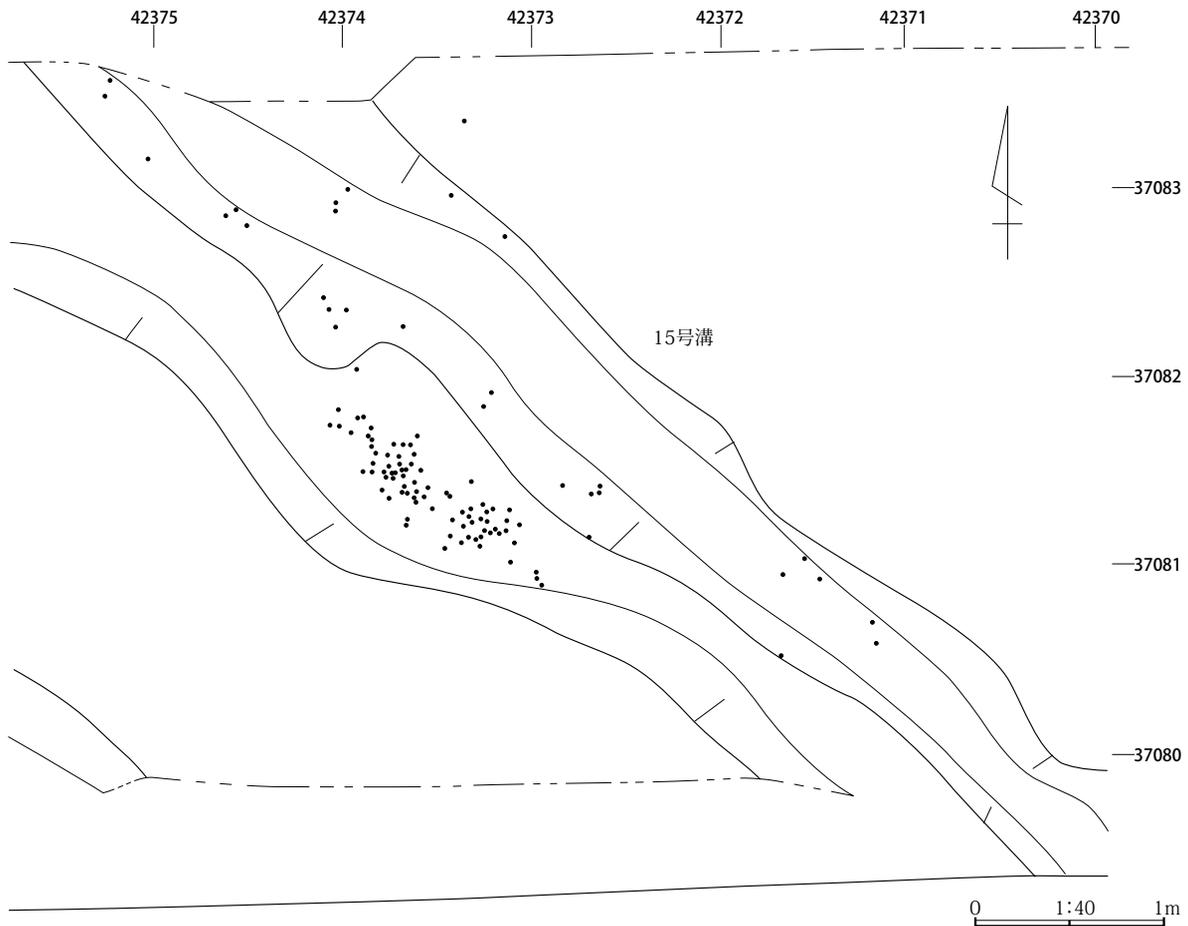
第53図 V区第2面3号溝遺物集中地点(4号遺構)出土遺物(1)



第54図 V区第2面3号溝遺物集中地点(4号遺構)出土遺物(2)

15号溝 (第55図)

小2区南西部南端に検出され南は調査区域外に延びる。北側は上位面に検出された2号溝と重複するが以北の軌跡は途絶える。3号溝の北東方を併走するが軌跡は短い。位置は、X=36997~37005・Y=-42370~-42380の範囲にある。検出延長は約12m、上縁幅は1~2mで縁線は大小に波うつ。底面は南側に低い段をなし東側は僅かに低い底面を造る。深さは25cmほどである。走方向はN-47-Wを示す。出土遺物には土師器甗・高坏・鉢・壺・甕などがあり、南端部に集中して検出された。



第55図 V区第2面15号溝遺物集中地点

出土遺物 (第56図、P L. 42)

1は埴形土器。口縁部内湾気味に開くが体部とも丸み無く直線的な形状。底径大きく体部と口頸の括れが小さい。作りは粗雑で外面粗い篋削り。2・3は高坏。2の坏部は所謂埴形状で腰部が小さく括れる。脚は細身で高く脚柱は充填され裾部は緩やかに開く。調整不鮮明。脚柱は縦位の篋削り。3は厚太な脚柱で内面は小孔状に浅く抉り、裾部は緩く開く。脚柱は幅狭な縦位篋削り。4・5・6は壺。4は器肉の薄い口頸部。直線的に外傾。5は外側に折り返し口縁。内面に横位搔き目。6は器肉の薄い胴下半部。小径な底部で、腰部の張り強く端正な丸味。底部篋削り、腰部縦位篋磨き。内面放射状に篋止め痕。7・8は鉢形。7は小型鉢で小さく肩部をなし口縁部は直立する。寸胴形で細搔き目を不均一に施す。8は口縁部小さく直立。撫肩で胴部に張りなし。9は甕口縁か。外面斜位・内面横位の搔き目。10は壺底部か。11はS字口縁甕。肩部粗間隔に右上がり搔き目。下地は横位の篋削り。12は南壁際出土の高坏。坏部内湾して開く。脚柱は充填細身で裾は小径で小さく開き内面に接合痕明瞭。坏内面放射状篋磨き、脚柱縦位篋磨き。

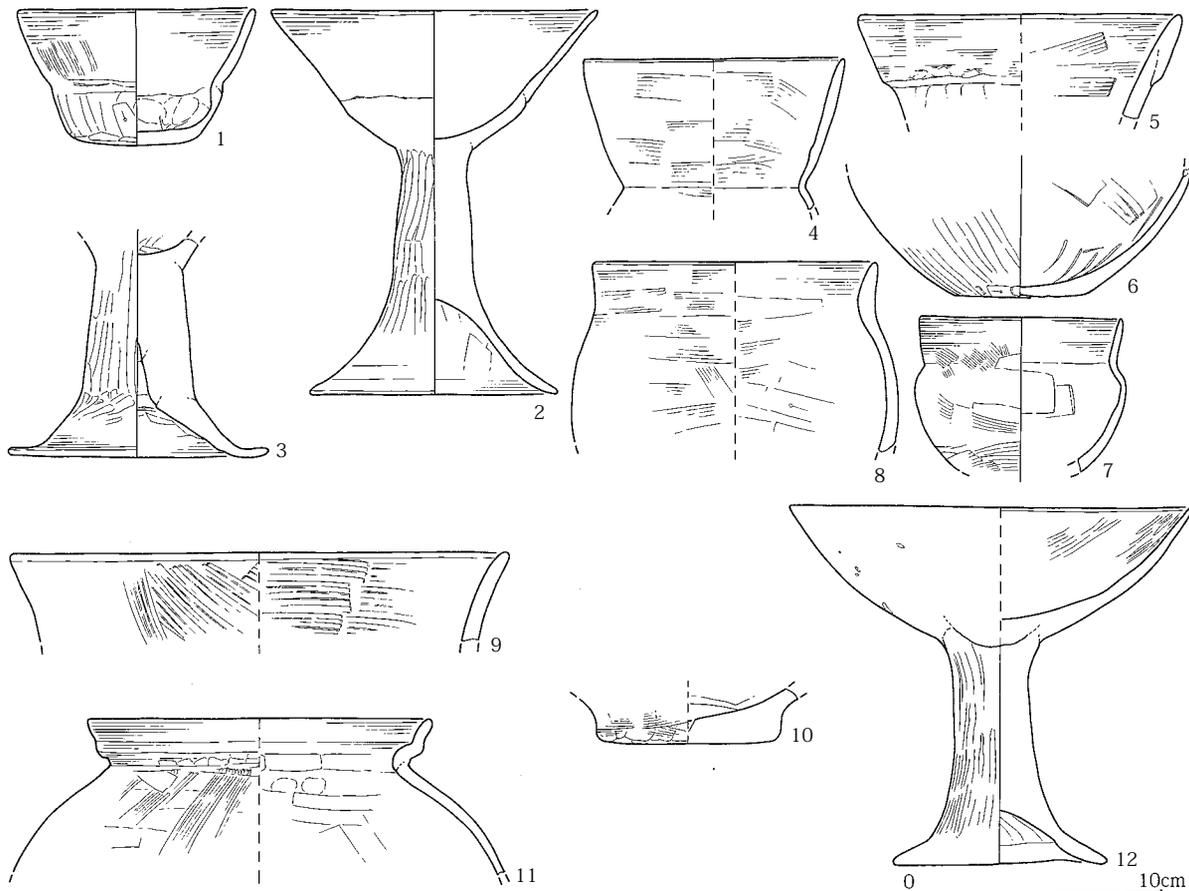
V区2面15号溝出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器埴	埋土	7	5	5.4	全 1/2	細土	明赤橙2.5YR5/6	良好	
2	土師器高坏	埋土	13	10	15	全 1/3	細土	黄橙7.5YR7/8	やや軟	
3	土師器高坏	埋土		10.5	現高 8.5	脚 1/3	細土	鈍橙5YR6/3	良好	
4	土師器壺	埋土	10.4		現高 5.9	口頸小片	細土	明赤橙2.5YR5/6	やや軟	
5	土師器壺	埋土	13		現高 4.1	口縁小片	粗土	浅黄橙7.5YR8/3	良好	

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
6	土師器壺	埋土		5	現高 5.3	下半	細土	浅黄橙7.5YR8/4	良好	
7	土師器鉢	埋土	8		現高 6.5	底部欠	細砂	浅黄橙7.5YR8/4	良好	
8	土師器鉢	埋土	11		現高 7.2	小片	砂粒混	淡橙5YR8/3	やや軟	
9	土師器甕	埋土				口縁小片	粗土	鈍黄橙10YR7/3	良好	
10	土師器壺	埋土		7	現高 2.2	底部1/3	粗土	橙2.5YR6/6	良好	
11	土師器s字口縁甕	埋土	13.7		現高 6.1	口縁部1/5	細砂混	灰白10YR8/2	良好	
12	土師器高坏	埋土	15.5	8.2	14	坏部2/3欠	細土	赤10R5/6	良好	



第56図 V区第2面15号溝出土遺物

19号溝 (第50図)

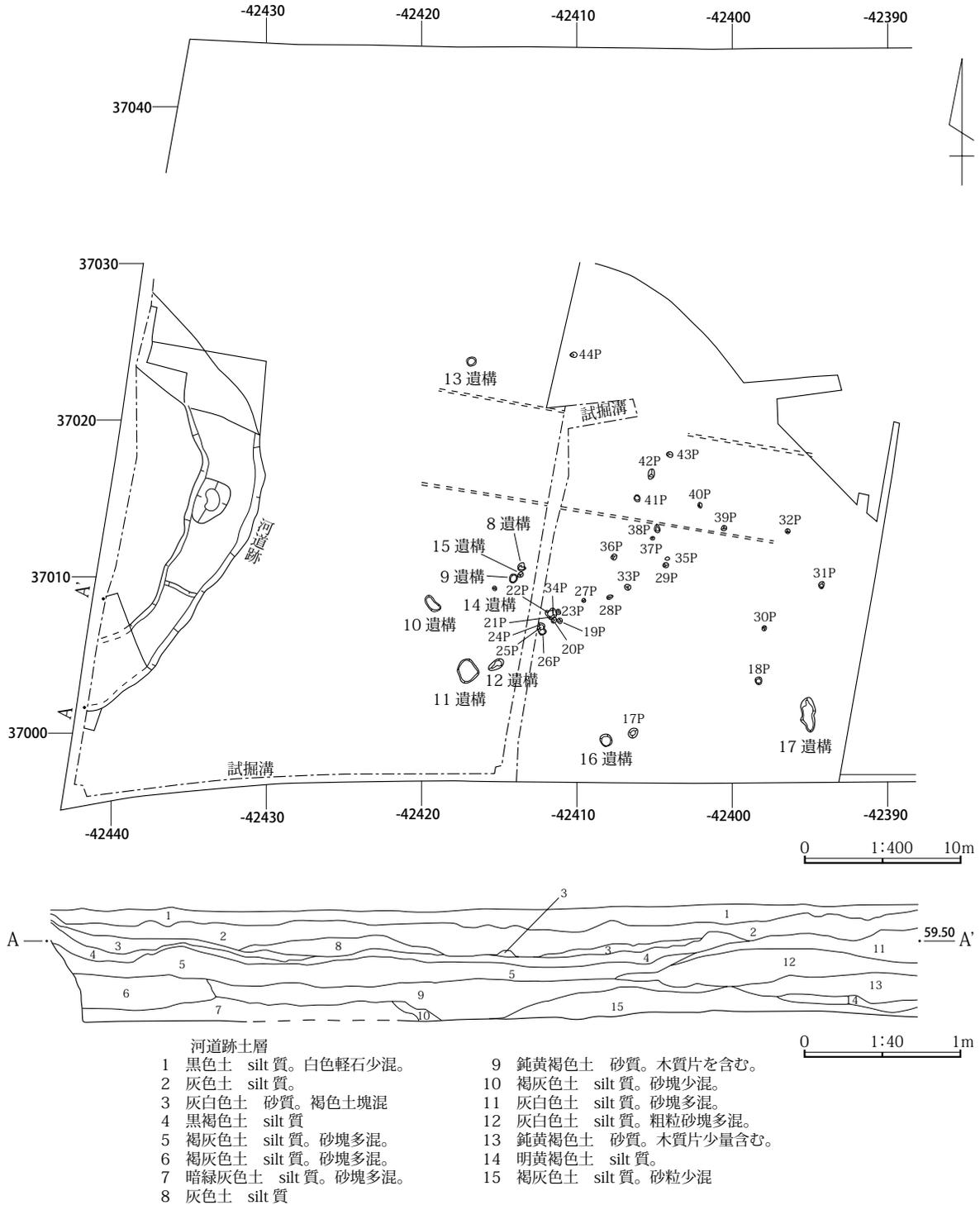
小1区北東部から2区はぼ中央部にかけて検出された。端部は中央部にあり、短く東西方にて緩く弧をなし北西方へ延び北縁は調査区域外にかかる。位置はX=37009~37029・Y=-42366~-42403の範囲にある。検出延長は44m、上縁幅は最大で約2m、深さは辛うじて軌跡を追える程度である。走方向は中央部で略東西走で北縁部ではN-50°-Wを示すが、なお緩く北方に弧を描く。出土遺物は少量で、土師器小片が散見するのみである。壺頸部添付の加飾帯片、壺底部片など古墳前期になろう。

20号溝 (第50図)

小2区中央部から南東方に検出された。中央部で19号溝の南側を併走するが緩い蛇行をなして調査区南東隅へ延び調査区域外にかかる。位置はX=37001~37010・Y=-42342~-42381の範囲にある。検出延長は約41m、上縁幅は40cmたらずで細い。深さは19号溝同様軌跡を確認できる程度である。出土遺物は土師器小片が数点のみである。小型甕の底部、台付甕上部などで古墳前期になろう。

V区第3面(4面)の遺構と遺物

小1区と小2区の西端部にかけての範囲に遺構が検出された。1区西縁には河川河道とされる東に大きく弧を描く溝状遺構がある。また、1区から2区には土坑や小穴が集中し、数基の遺構からは土器類の出土がある。なお、ここに掲載する土坑・小穴以外の同類遺構については計測値等を一覧表にて示す。



第57図 V区第3面河道跡

河道跡 (第57図、P L. 15)

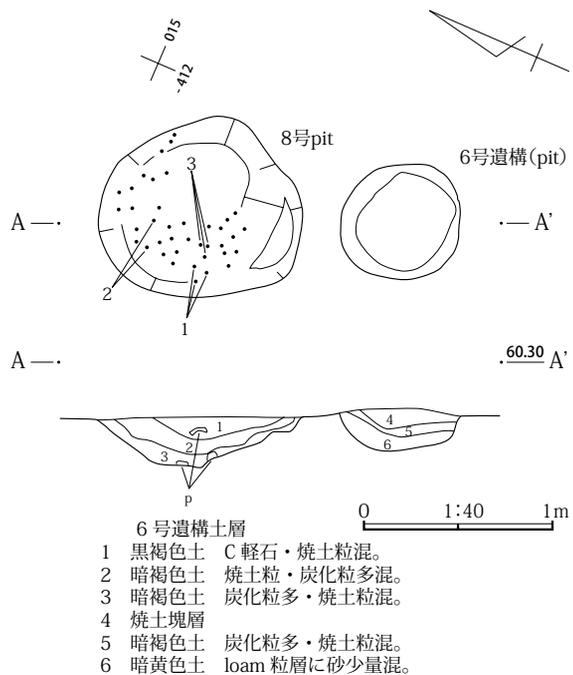
小1区の西縁にある。流路が東方に大きく蛇行湾曲する状況の地点にあたろうか。平面形状では整った箱堀様に兩岸の立ち上がりが見られているが、検出域南端の土層図の観察によれば岸の法面は緩く傾斜を持って立ちあがる。上幅は4m超になろう。河床までの深さは不詳であるがこれも2m超であろう。埋土は同時堆積による葉層(ラミナ)の生成は少なく、シルト質土及び砂質土の互層順次堆積やそれらの水平に近い堆積状況を示すことから、比較的緩やかな埋没過程を辿ったであろう。また、覆土層にC軽石混入の観察所見があることから、埋没平坦化は古墳時代前期のある段階には既に成っていたものと考えられる。出土遺物等は無い。

6号遺構 (第58図、P L. 15)

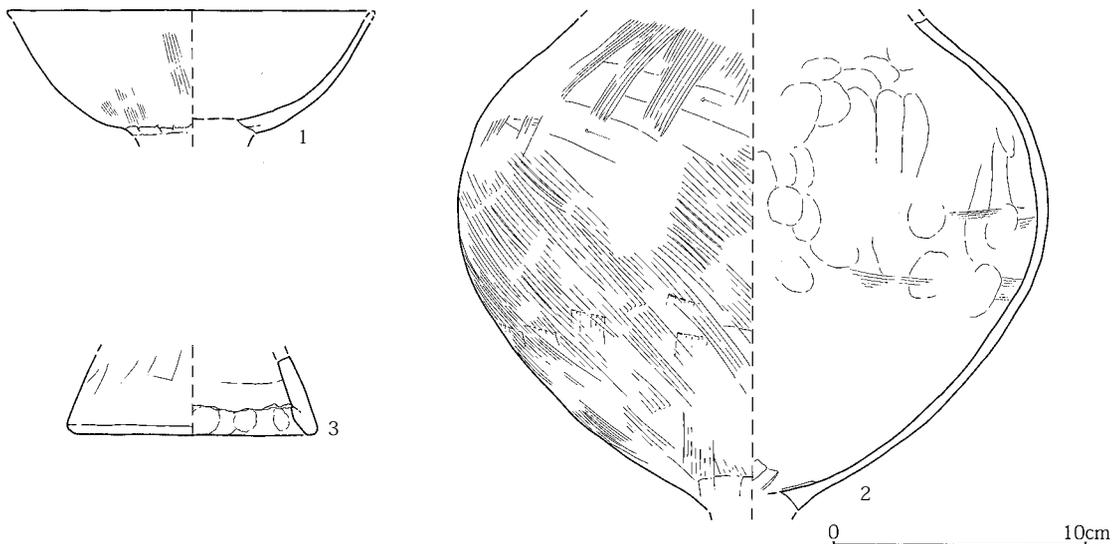
小1区中央部に検出された。位置はX=37014・Y=-42414の範囲にある。8号pit(多量の土器片で埋まる小穴)と、6号遺構(焼土塊・炭化物が混入する土層が堆積する小穴)を併せた遺構である。両者の関係について、直接的に言及できる事象は無いが、極めて近接する位置にあり埋土にはともに焼土・炭化物が混入する。

8号pit(小穴)は平面形状がやや不整楕円形を呈し、径53×49cm、深さ13cmで断面形状緩いU字形を成す。土器片の多くは底面に密着するが、土器そのものは1個体ではない。出土遺物には土師器高坏・台付甕などがある。

6号遺構(小穴)は円形を呈し、径32cm、深さ11cmを測る。埋土はC軽石・焼土・炭化物等が混入するが、底面や壁面には被熱などを示す所見は得られていない。穴内からの出土遺物は無い。



第58図 V区第3面6号遺構(pit)・8号pit



第59図 V区第3面6号遺構(8号pit)出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 (第59図)

1は高坏坏部。腰部は丸く、内湾して開く。外面細弱な縦位掻き目。2は台付甕胴部。胴部最大径は中位にあり球形に近い。肩部に粗間隔・粗目な縦位掻き目、下地には篋削り。3はS字口縁甕の台部。

V区3面6号遺構(小穴)出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器高坏	底面	14.5		現高 4.5	坏部1/3	細土	橙7.5YR6/6	やや軟	
2	土師器S字口縁甕	底面			現高 19.5	胴部1/3	細砂多	橙6/6	良好	胴径23.5
3	土師器S字口縁台付甕	底面		10	現高 2.1	台部片	細土	橙7.5YR7/6	やや軟	

9号 pit (小穴) (第60図、P L. 15・42)

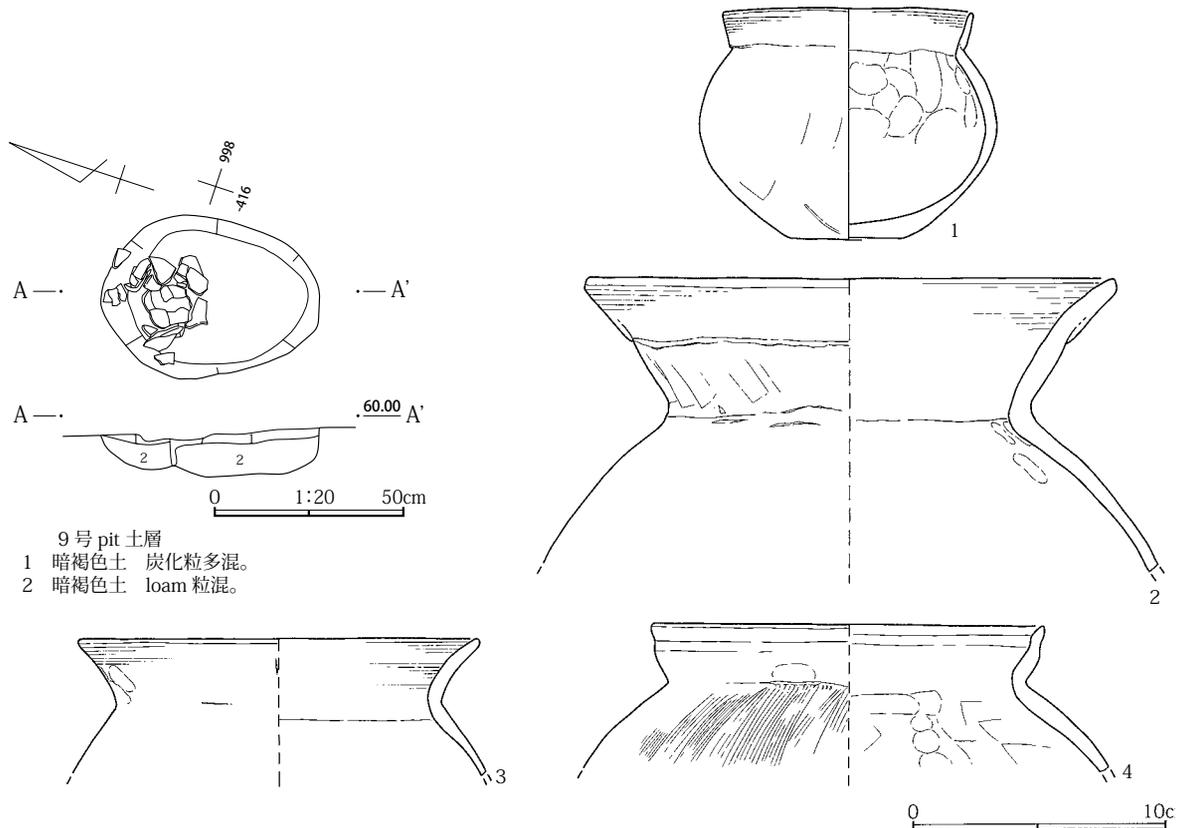
小1区南西部に検出された。楕円形を呈し、径60×46cm、深さ12cmを測る。埋土上層には炭化物が多く混入する。遺物は土師器甕・壺等数器種の破片が混在して出土している。

出土遺物 1は小型鉢。口縁部短く直立気味で胴部丸く張り、平底。胴部下半は斜位の弱い篋削り。2は壺で折り返し口縁帯を作り、頸部外反して開く。撫で肩で胴部は丸く張ろう。3は甕口縁部。撫で肩で外反気味に開く口縁部。4はS字口縁甕。口外縁は緩いS字曲線で内縁は鋭く屈曲する。肩部縦位細掻き目。

V区3面9号pit(小穴)出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器鉢	底面	10	4.5	9	全1/3	砂粒多	橙	良好	胴径11.7
2	土師器壺	底面	21		現高 12.5	口~肩1/3	土粒粗	赤	やや軟	折り返し口縁
3	土師器甕	底面	16		現高 5.4	口縁	細砂混	褐灰5YR4/1	良好	
4	土師器S字口縁台付甕	底面			現高 4.5	口縁片	砂粒多	鈍褐7.5YR5/4	良好	



9号 pit 土層  
1 暗褐色土 炭化粒多混。  
2 暗褐色土 loam 粒混。

第60図 V区第3面9号pit (小穴)・出土遺物

V区3面の調査では、上記pit(小穴)遺構の他に18号pitと19号pitから少量の土師器片が検出されている。(第61図)

**18号pit(小穴)出土遺物** 1は口唇部欠損のS字口縁甕。撫で肩で胴部上半が強く張る。肩部右上がり細目、胴部上半は左上がりの細掻き目。

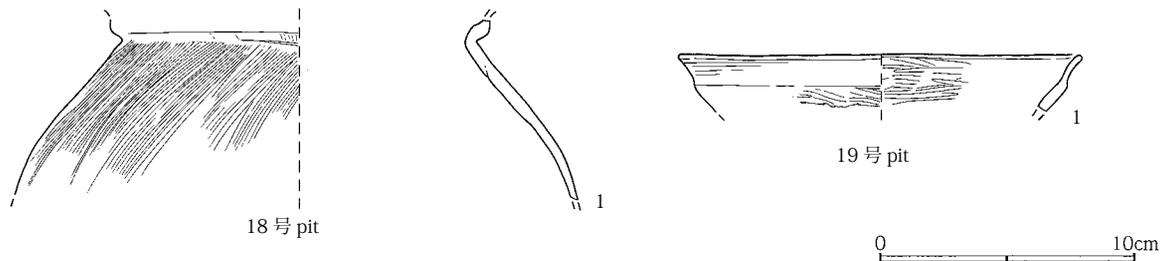
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器S字口縁甕	底面	18+α		現高 7	胴部片	細土	浅黄橙7.5YR8/3	良好	

単位 cm

**19号pit(小穴)出土遺物** 1は高坏の坏部片。口縁部は小さく括れて開く。内外面篋磨き。

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器高坏	底面	16		現高 2.2	口縁片	細土	鈍赤褐5YR5/3	良好	

単位 cm



第61図 V区第3面pit(小穴)出土遺物

V区3面遺構観察表(土坑・小穴)

番号	遺構名	位置	平面形状	断面形状	規模 径・深さ(cm)	出土遺物	備考
6	6号遺構	X=37014・Y=-42414	略円形	U字形	32×30・10	なし	小穴状。焼土塊・炭化物
8	8号遺構	X=37010Y=-42413	不整楕円形	片開形	59×49・13	なし	小穴状
9	9号遺構	X=37009~37010・Y=-42413~-42414	楕円形	深皿形	55×45・13	なし	小穴状
10	10号遺構	X=37007~37008・Y=-42418~-42419	不整長楕円	浅皿形	123×65・11	なし	土坑状
11	11号遺構	X=37003~37004・Y=-42416~-42417	不整形	底凹凸浅皿形	136×130・15	なし	土坑状
12	12号遺構	X=37004Y=-42314~-42315	長楕円形	浅皿形	108×55・10	なし	土坑状
13	13号遺構	X=37023Y=-42416	円形	浅皿形	60×55・10	なし	土坑状
14	14号遺構	X=37009Y=-42415	円形	U字形	30×30・20	なし	小穴状
15	15号遺構	X=37010Y=-42413	円形	U字形	36×31・15	なし	小穴状
16	16号遺構	X=36999・Y=-42407~-42408	円形	深皿形	76×71・22	土師器片	土坑状。灰・炭化物混
17	17号遺構	X=37000~37002・Y=-42394~-42395	長楕円形	片開形	218×90・20	なし	土坑状
28	28号遺構	X=37007・Y=-42372	楕円形	U字形	65×57・26	なし	土坑状。焼土・炭化物混
4	4号pit	X=37007・Y=-42414	略円形	浅皿形	30×30・18	なし	
5	5号pit	X=37006・Y=-42413	楕円形	浅皿形	44×35・13	なし	
6	6号pit	X=37008・Y=-42412	略円形	浅U形	25×23・13	なし	
7	7号pit	X=37008~37009・Y=-42412	略円形	深U字形	30+α×28+α・25	なし	
8	8号pit	X=37014・Y=-42414	楕円形	深皿形	53×49・13	土師器甕	小穴状。焼土・炭化物
9	9号pit	X=36997~36998・Y=-42416	楕円形	底平深皿形	60×46・8	土師器甕	埋土炭化物混
10	10号pit	X=36998~36999・Y=-42418	円形	箱形	49×48・24	なし	
11	11号pit	X=37005・Y=-42414~-42415	楕円形	深U字形	37×31・42	なし	
12	12号pit	X=37006・Y=-42414~-42415	略円形	V字形	30×28・39	なし	
13	13号pit	X=37010・Y=-42413	略円形	深U字形	37×32・20	なし	
17	17号pit	X=36999~37000・Y=-42406	楕円形	深皿形	56×45・17	なし	
18	18号pit	X=37003・Y=-42398	円形	箱形	47×41・15	土師器甕	
19	19号pit	X=37007・Y=-42410~-42411	円形	深U字形	40×37・28	土師器高坏	
20	20号pit	X=37007・Y=-42411	楕円形	V字形	36×29・11	なし	
21	21号pit	X=37007・Y=-42411	楕円形	柱穴形	74×73・35	なし	
23	23号pit	X=37007・Y=-42411	略円形	深皿形	37×29・9	なし	
24	24号pit	X=37006・Y=-42412	略円形	浅皿形	58×45・9	なし	
26	26号pit	X=37006・Y=-42412	略円形	浅皿形	44×44・8	なし	
27	27号pit	X=37008・Y=-42409	略円形	柱穴形	32×29・21	なし	
28	28号pit	X=37008・Y=-42407	楕円形	深皿形	34×20・11	なし	
29	29号pit	X=37010・Y=-42404	楕円形	V字形	33×27・24	なし	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	遺構名	位置	平面形状	断面形状	規模 径・深さ(cm)	出土遺物	備考
30	30号pit	X=37006・Y=-36397	略円形	V字形	30×27・26	なし	
31	31号pit	X=37009・Y=-36394	楕円形	柱穴形	47×36・26	なし	
32	32号pit	X=37012・Y=-36396	略円形	V字形	31×31・16	なし	
33	33号pit	X=37009・Y=-42406	略円形	不定形	41×37・26	なし	
35	35号pit	X=37011・Y=-42404	楕円形	箱形	29×21・15	なし	
36	36号pit	X=37100・Y=-42407	略円形	不定形	37×35・15	なし	
37	37号pit	X=37012・Y=-42405	楕円形	深U字形	24×20・12	なし	
38	38号pit	X=37012~37013・Y=-42404	楕円形	不定形	54×37・25	なし	
39	39号pit	X=37012~37013・Y=-42400	略円形	箱形	40×33・13	なし	
40	40号pit	X=37014・Y=-42402	略円形	U字形	29×27・21	なし	
41	41号pit	X=37014~37015・Y=-42406	略円形	箱形	41×39・18	なし	
42	42号pit	X=37016・Y=-42405	楕円形	箱形	73×37・26	なし	
43	43号pit	X=37017・Y=-42403~-42404	円形	V字形	35×33・32	なし	
44	44号pit	X=37024・Y=-42410	楕円形	U字形	51×31・34	なし	

V区の出土遺物 ここでは遺構に直接伴わない遺物群を掲載する。

埴輪 (第62・63図)

器財埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪などがある。いずれも小破片化し、器面の荒れも著しい。

1から3は器財or形象埴輪の部位と考えられる。1は直立部位からL状の折れ部を作る。その上面は縦ハケ。2の内面は紐作り痕が顕著で外面は篋撫で。下縁に孔の痕跡が残る。3は底部片で基部器肉が著しく肥厚。輪台積み上げ痕。4は朝顔形埴輪の肩部で丸味を持つ。外面縦位、内面斜位気味にハケ目。突帯は台形断面に上下面撫で。5は円筒埴輪口縁部で線刻あり。口縁下位より縦位ハケ目、内面上位の横位から斜位のハケ目。口縁部横撫で。6~10は胴部で突帯。8は断面やや三角形気味で他は台形断面、上下面撫で。7の突帯に布目圧痕。下位は縦位ハケ目。11~13は底部。11・12の外面縦位ハケ目。13~15は表採。14・15は胴部で高い突帯。縦位ハケ目。13に線刻か、内面紐作り痕とハケ目痕。16は底部縦位ハケ目。

土器、その他 (第64図)

大半は古墳時代前期に属する土師器であるが、少数ながら奈良~平安時代の須恵器や中・近世の所産と思われる軟質陶器がある。2~5は器台。7~11は高坏の脚柱部である。13・14は折り返し口縁壺で幅広い口縁帯を作る。13は棒状浮紋を添付する。17・18は壺底部で木葉痕が転写する。37・38は甌で38は単孔。39~43は手捏ね土器。47の形状はとれないが鋳型の可能性もある。50は土錘、51は磨り石様の球形石器だが表面に摩滅の滑らかさは無い。粗粒輝石安山岩。

V区出土遺物計測表 (埴輪)

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	長	幅	厚	部位	胎土	色調	焼成	備考
1	形象埴輪	37020-42410	6.3	8	1.8	不明	粗	橙5YR6/8	良好	
2	形象埴輪	37010-42410	10.1	9	2.8	下半か	粗	橙7.5YR6/8	良好	下縁に孔痕
3	形象埴輪	37020-42400	5.9	10.5	3.6	底部	粗	橙5YR6/8	良好	極肥厚
4	朝顔形埴輪	37020-42410	7.9	10.2	1.4	肩部	粗	橙5YR6/9	良好	
5	円筒埴輪	37020-42410	10.5	5	1.5	口縁部	粗	橙5YR6/6	良好	内面線刻
6	円筒埴輪	37010-42410	4.7	4.6	1.7	胴部突帯	粗	橙5YR7/6	良好	
7	円筒埴輪	37000-42410	4.9	4.8	1.7	胴部突帯	粗	橙5YR7/6	良好	布目圧痕
8	円筒埴輪	37010-42420	7.3	10.2	2	胴部突帯	粗	橙7.5YR6/8	良好	
9	円筒埴輪	37020-42410	7.1	8.1	1.5	胴部突帯	粗	橙7.5YR7/8	良好	
10	円筒埴輪	37020-42410	6.4	7.3	2	胴部突帯	粗	橙7.5YR7/8	良好	

第2節 検出された遺構と遺物

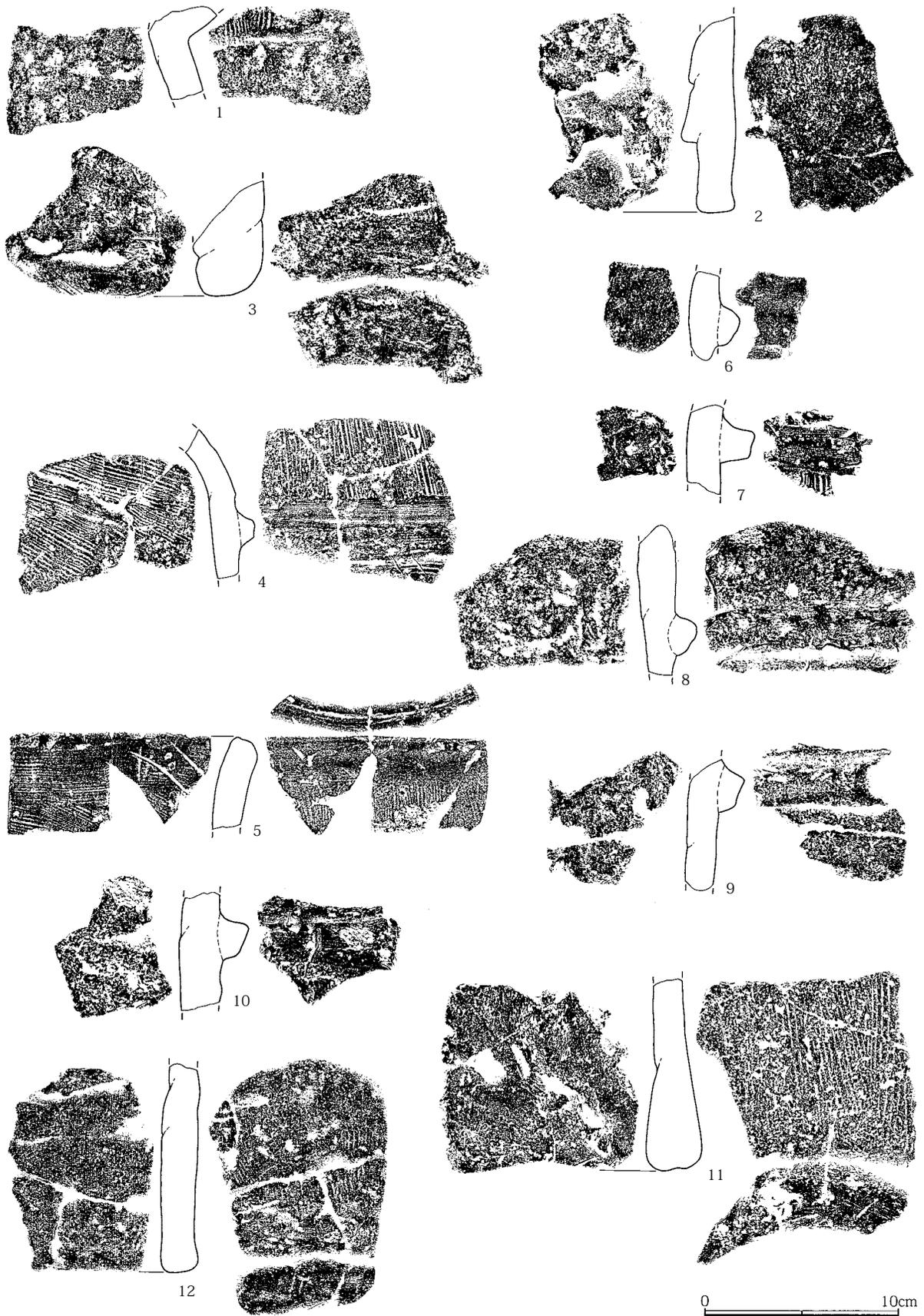
単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	長	幅	厚	部位	胎土	色調	焼成	備考
11	円筒埴輪	34020-42400	10	9	2.8	底部	粗礫痕	橙5YR6/8	良好	
12	円筒埴輪	37010-42410	10.7	9	1.9	底部	粗	黄橙7.5YR8/8	良好	
13	円筒埴輪	37000-42420	9.4	9.1	2	底部	粗	橙5YR6/8	良好	
14	円筒埴輪	表採	12	10.5	2	胴部突帯	粗	橙7.5YR6/6	良好	
15	円筒埴輪	表採	4.5	5	1.8	胴部突帯	粗	橙7.5YR6/8	良好	
16	円筒埴輪	表採	3.7	8	2.4	底部	粗	橙7.5YR6/6	良好	

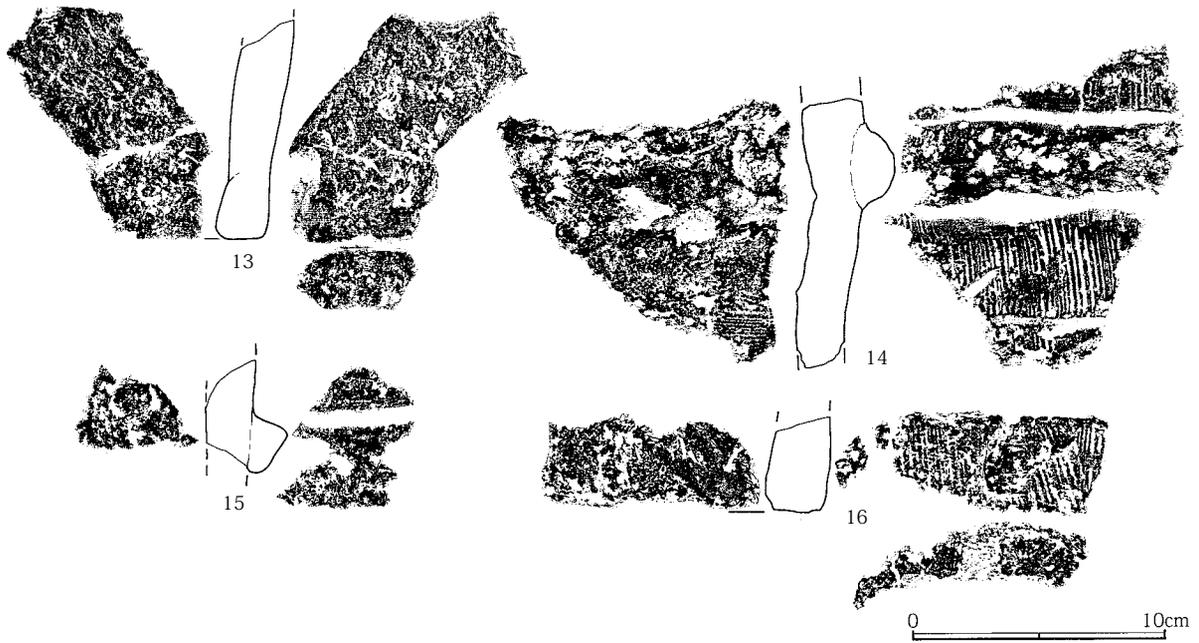
V区出土遺物計測表(土器)

単位 cm

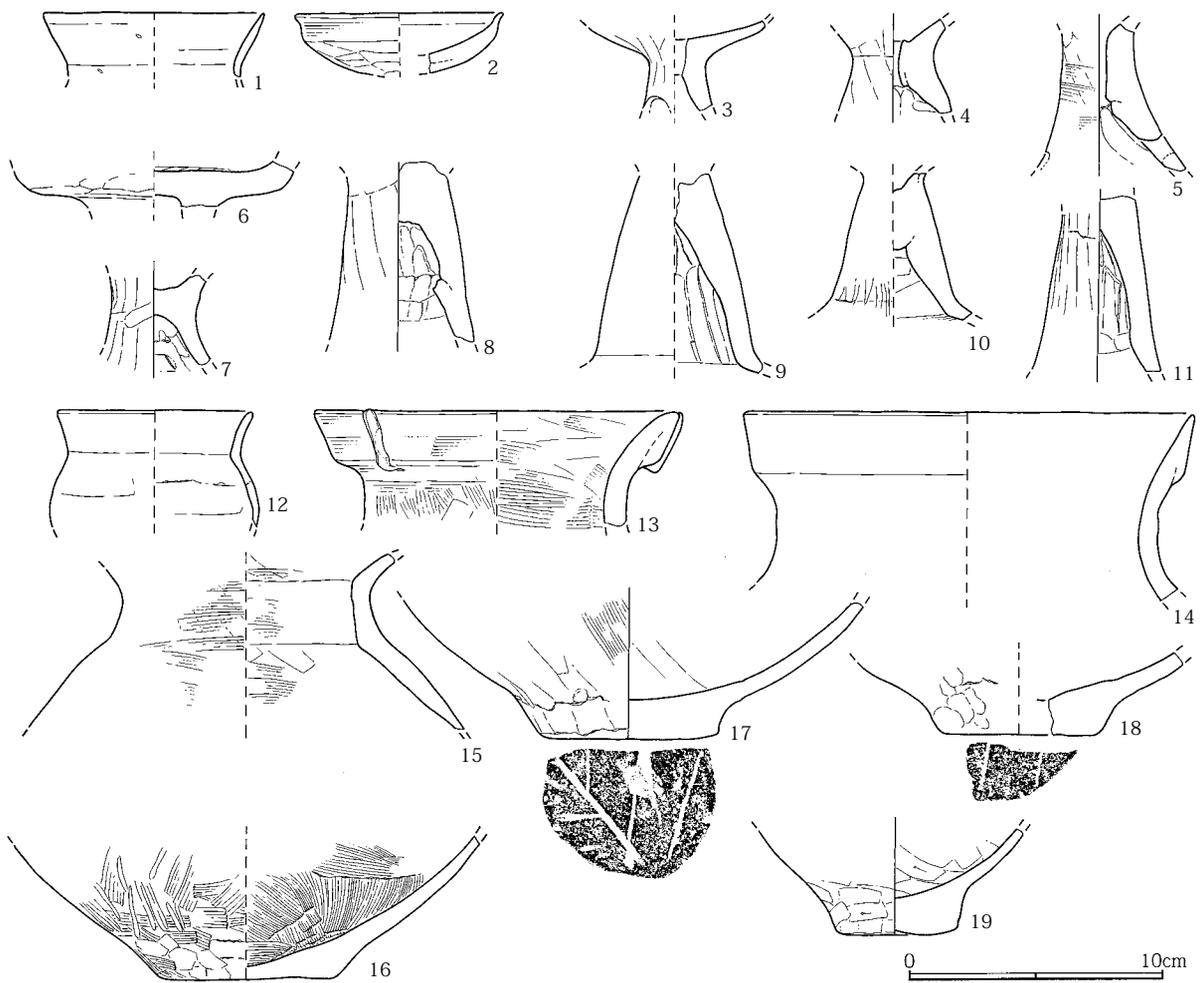
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器埴	36990-42360	8.8		現高 2.6	口縁片	砂多	鈍黄橙10YR7/3	良好	
2	土師器器台	37010-42380	8.2		現高 2.4	坏部1/4	細土	褐7.5YR4/3	良好	
3	土師器器台	37010-42370			現高 3.4	坏~脚部	細土	明褐灰7.5YR7/2	良好	
4	土師器器台	37010-42430			現高 3.6	脚柱部	細土	橙5YR6/8	良好	
5	土師器器台	37030-42420			現高 5.7	脚柱部	細土	橙7.5YR6/6	良好	脚柱2孔
6	土師器高坏	37000-42410			現高 1.8	坏底部片	細土	鈍橙5YR6/4	良好	
7	土師器高坏or器台	37000-42370			現高 3.5	脚柱部	細土	橙5YR5/8	良好	
8	土師器高坏	37000-42420			現高 4.6	脚柱部	細土	橙5Y7/6	良好	
9	土師器高坏	37010-42370			現高 7.8	脚柱部	砂粒混	明褐7.5YR5/8	良好	
10	土師器高坏	37010-42380			現高 5.7	脚柱部	細土	鈍黄橙10YR7/3	良好	
11	土師器高坏	37000-42370			現高 6.9	脚柱部	細土	鈍橙5YR7/4	良好	
12	土師器小壺	36990-42360	7.8		現高 5.1	小片	砂多	鈍黄橙10YR7/4	良好	
13	土師器壺	37020-42390	14.5		現高 3.8	口縁1/3	細土	鈍橙5YR7/4	良好	折返口縁帯
14	土師器壺	37010-42380	18		現高 6.4	口縁片	砂粒混	橙7.5YR7/6	良好	折返口縁帯
15	土師器壺	37000-42420			現高 6.9	頸~胴	細土	鈍黄橙10YR7/2	良好	
16	土師器壺or甗	36990-42400		5.8	現高 5.6	底部1/3	砂混	暗褐10YR4/6	良好	
17	土師器壺	37010-42370		7.3	現高 5.5	底部	砂粒混	鈍黄橙10YR7/4	良好	底部木葉痕
18	土師器壺	37010-42380		6.2	現高 2.8	底部小片	細土	鈍黄橙10YR7/5	良好	底部木葉痕
19	土師器壺	37010-42430		4.8	現高 4.2	底部	細土	鈍黄橙10YR6/4	良好	
20	土師器壺	37010-42380		9.3	現高 2.5	底部	細土	浅黄橙10YR8/3	良好	
21	土師器壺	36990-42360		6.5	現高 6.5	底部	細土	橙7.5YR7/6	良好	
22	土師器甗	37000-42370		5.8	現高 2.1	底部1/3	細砂少混	橙7.5YR6/8	良好	
23	土師器甗	37020-42380	15.6		現高 6	口縁部	砂粒少混	鈍橙7.5YR7/4	良好	
24	土師器甗	37010-42390	15		現高 3.7	口縁部片	砂粒多	鈍黄橙10YR7/4	良好	
25	土師器甗	37020-42390	17		現高 3.8	口縁1/3	細土	鈍橙5YR7/4	良好	
26	土師器甗	36990-42380	16		現高 5.7	口縁1/4	細土	鈍橙5YR6/4	良好	
27	土師器甗	36990-42360	20.4		現高 3.5	口縁1/3	細砂多	鈍黄橙10YR6/3	良好	
28	土師器甗	37010-42430	18		現高 4	口縁1/4	細砂多	鈍橙7.5YR7/4	良好	
29	土師器甗	37000-42430	20		現高 4.4	口縁片	大粒砂混	鈍黄橙10YR7/4	良好	
30	土師器甗	37020-42400		6.4	現高 1.9	底部	赤褐粒混	鈍橙7.5YR6/4	良好	
31	土師器甗	37010-42370		3.8	現高 3.9	底部1/3	砂多	鈍黄橙10YR6/3	良好	
32	土師器甗	37000-42430		5.2	現高 1.8	底部3/4	細砂多	明赤褐5YR5/8	良好	
33	土師器甗	37010-42350		6.7	現高 2.2	底部	砂粒多	橙5YR6/8	良好	底部凹
34	土師器甗	37010-42430		6.6	現高 2.2	底部	砂粒多	明赤褐2.5YR5/8	良好	底部凹
35	土師器甗	37010-42360		9	現高 2	底部	砂粒多	黄橙10YR5/6	良好	
36	土師器台付甗	36990-42410		9	現高 6.2	台部1/4	細土	鈍赤褐5YR5/3	良好	
37	土師器甗	37010-42380	17.4		現高 3.7	口縁部片	細砂多	橙2.5YR6/8	良好	
38	土師器甗	37010-42370		3.8	現高 2.7	底部	砂多	明赤褐5YR5/6	良好	二次比熱
39	土師器手捏土器	37000-42360	6.4	3.4	4.2	全1/4	細土	明赤褐2.5YR5/6	良好	
40	土師器手捏土器	37010-42360	4	3.1	3.2	略完	砂粒多	淡黄2.5Y8/4	良好	
41	土師器手捏土器	37010-42390		3.6	現高 2.2	口縁欠1/3	細土	黒褐10YR2/2	良好	
42	土師器手捏土器	37010-42390	4	3.5	3	完形	細土	橙5YR6/8	良好	
43	土師器手捏土器	37020-42390		4.2	現高 2	底部	細土	鈍褐7.5YR5/3	良好	
44	須恵器坏	37010-42370		8.8	現高 1.8	底部1/2	細土	灰5Y6/1	やや軟	回糸後回篋
45	須恵器坏	37020-42380		8.2	現高 1.3	底部1/3	細土	浅黄2.5Y	やや軟	回糸後回篋
46	須恵器碗	37000-42340		5.5	現高 4.2	底部1/3	細土	灰5Y5/1	酸化炎	
47	調整土塊	37010-42360	5.7	4.6	3.6	小片				炉胎or鑄型片
48	軟質陶器内耳鍋	42010-42390	31.8	29	5	小片	細砂混	鈍黄褐10YR4/3	良好	
49	軟質陶器鉢	42000-42360		21	現高 5.8	小片	細土	灰オリーブ5Y6/2	良好	
50	土錘	表採	5.7	2.1	孔径 0.7	完形	砂流混	灰褐7.5YR5/2	良好	26g
51	磨り石	表採	8.5	7.4	6.6	完形		粗粒輝石安山岩		370g



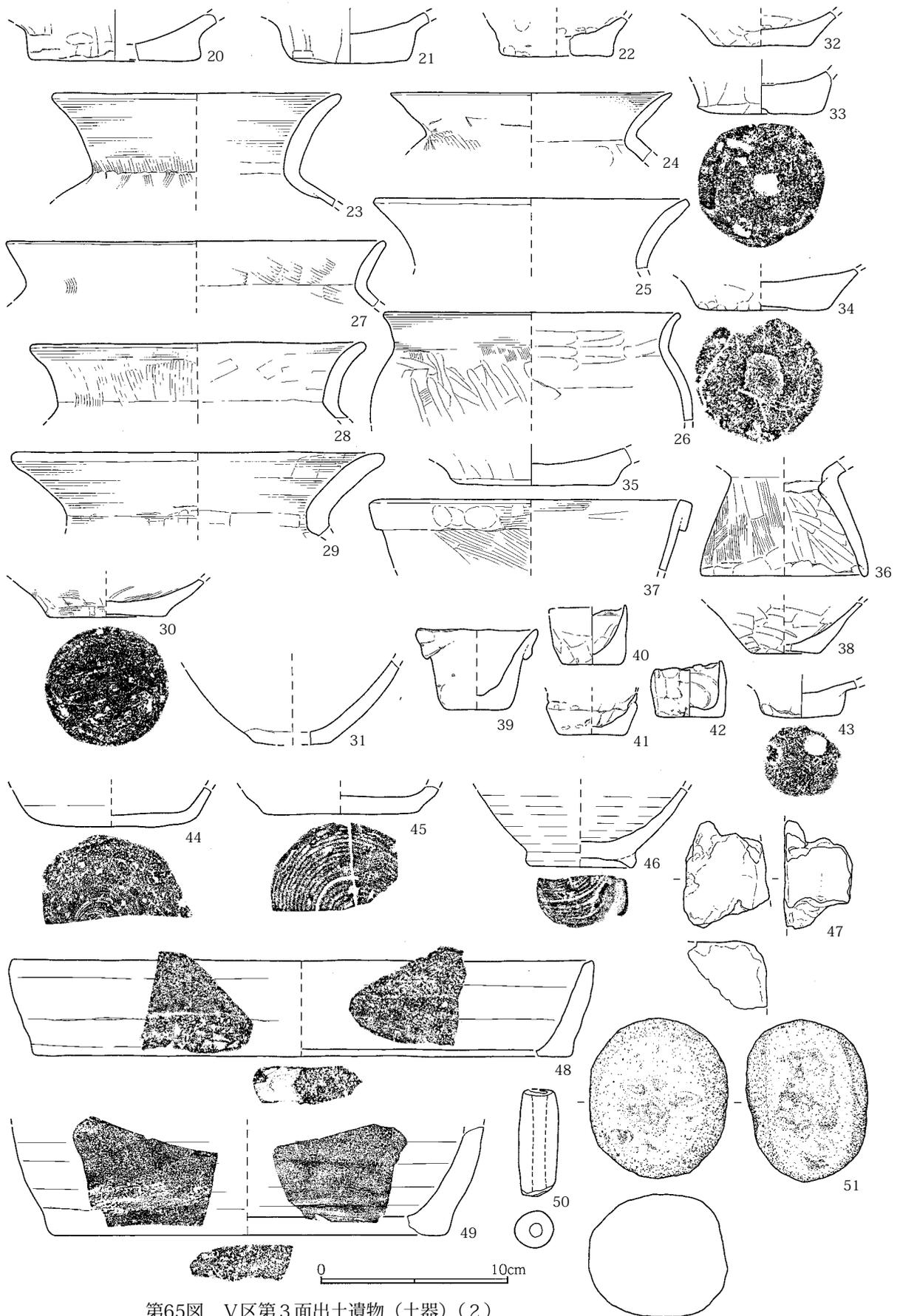
第62図 V区第3面出土遺物（埴輪）（1）



第63図 V区第3面出土遺物 (埴輪) (2)

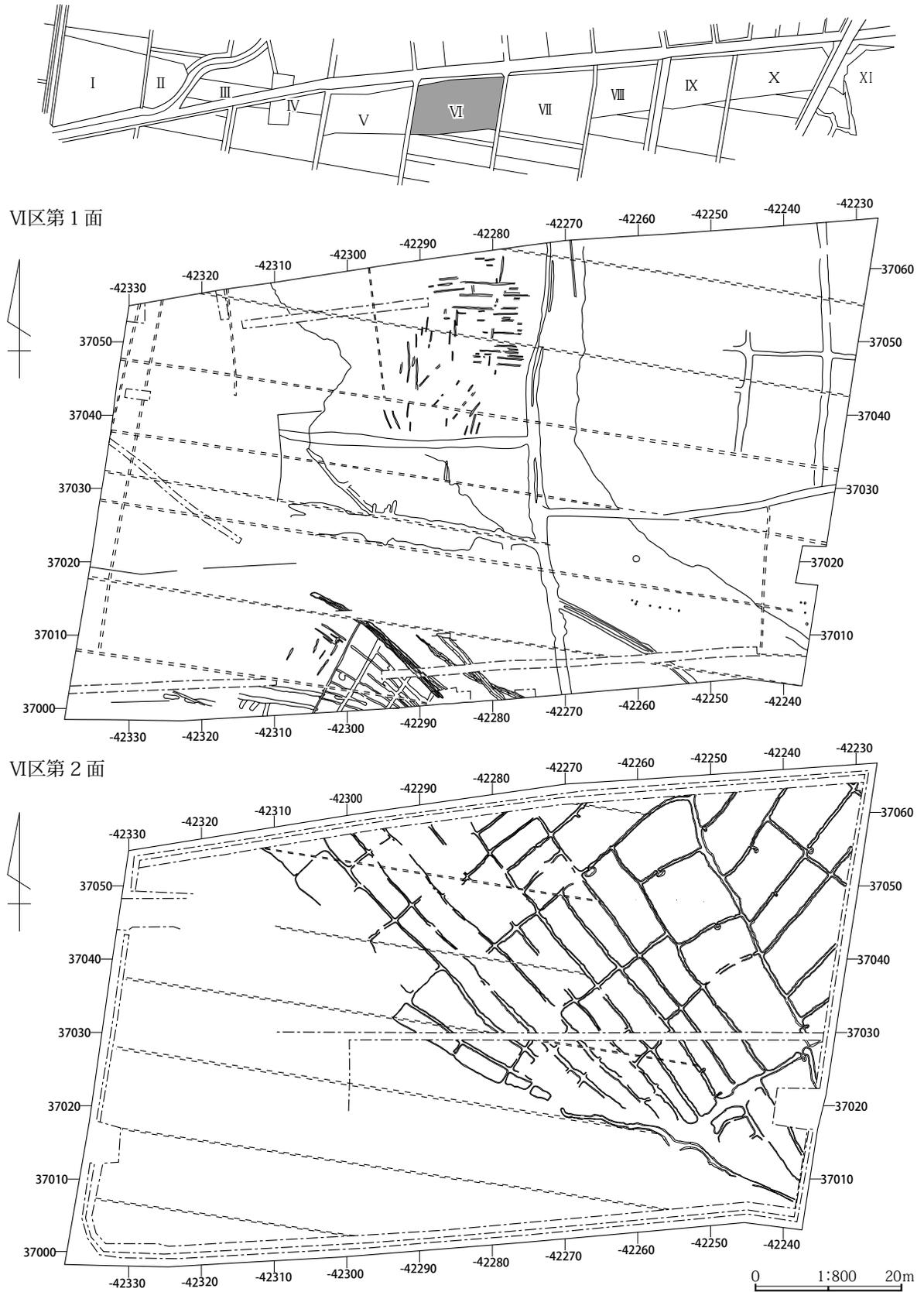


第64図 V区第3面出土遺物 (土器) (1)



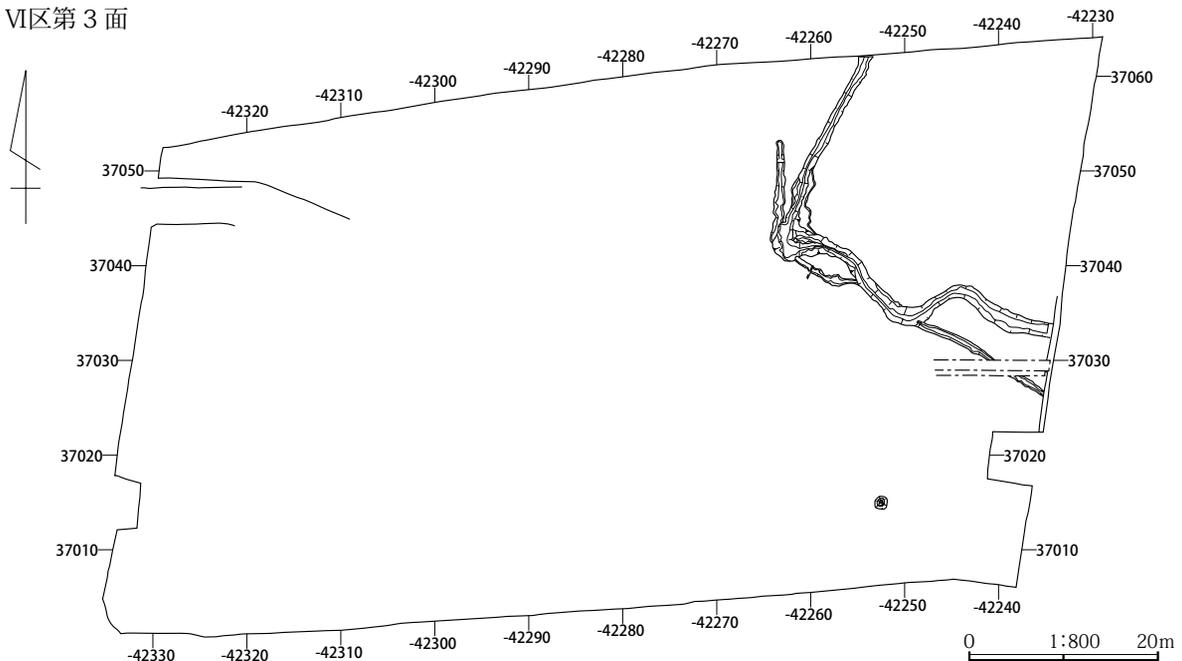
第65図 V区第3面出土遺物(土器)(2)

4. VI区の遺構と遺物



第66図 VI区第1面・2面全体図

VI区第3面



第67図 VI区第3面全体図

VI区の概要 (第66・67図)

VI区での遺構検出面は第1面・第2面・第3面からなる。各面での検出遺構は、第1面ではB軽石下の水田跡(耕土及び畦畔の痕跡)さく状遺構(畑か)、溝跡及び溝痕跡が検出されている。第2面は調査区北東半一帯に東側のVII区に連なる方形区画の水田跡が良好な遺存状態で検出された。第3面は調査区北東隅部に南東方から延びて北東方へL字に屈する2条の溝跡がある。これは東側のVII区より連続するものである。

当区で検出された各面の遺構概観では第1面において東方が水田跡であるのに対し、西寄りにさく状遺構(畠)が検出され、土地利用の区別が図られている。この現象は第2面・第3面の遺構分布に示唆的である。両面とも東方に遺構の偏りがみられ、第3面が特に顕著である。これは、調査区西側の一部が第1面に至るまでの間、第3面、第2面段階では耕作不適な場所(水田としては)であったことを示している。

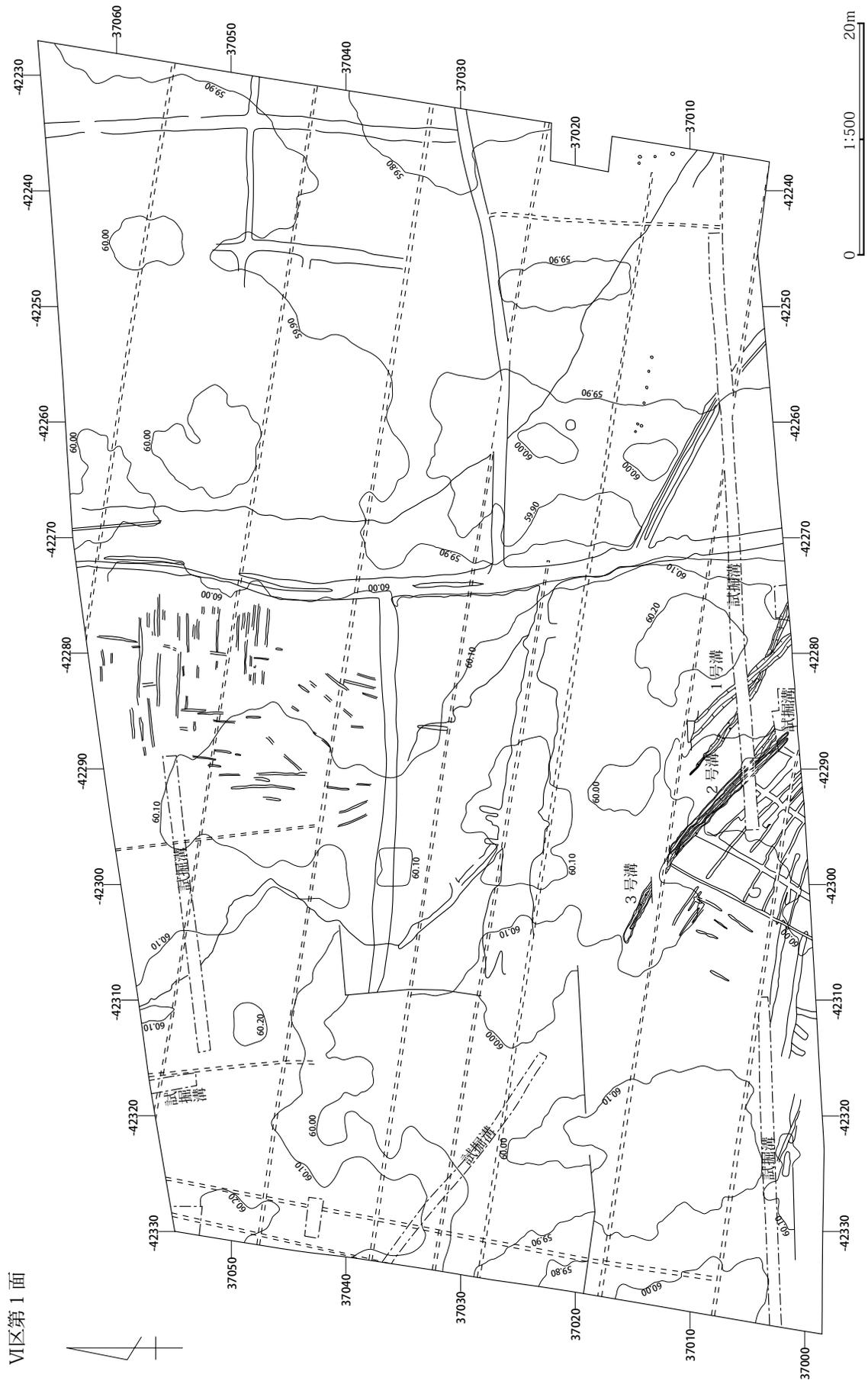
VI区第1面の遺構と遺物 (第68図、P L. 16)

第1面より検出された遺構に1号・2号・3号溝がある。3条の溝とも調査区南縁中央部より北西方へ延びる。遺存する底面までの掘形はいずれも極めて浅い。出土遺物は土師器の細片化したものが多く、また、散在的な出土状況であり遺構と直接に関連するものはみられない。北東部に確認された畦畔によると考えられる水田跡の区画は長軸が南北にあり、この方向の畦畔跡が幅太になっている。

第1面の帰属年代は、B軽石下の検出層位所見によることと出土遺物の中に少量ながら平安時代に属する須恵器片などがみられることから、古代末期頃に想定されよう。

1号溝 (第69図)

調査区南側に検出されている。南端は調査区域外に入り、北端は検出が途絶える。2号溝と交差しこれより新しいと思われる。位置はX=37000~37009・Y=-42278~-42287の範囲にある。直線的な軌跡で断面形状は平坦な底面で壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。規模は検出延長約12m、幅1m、深さ

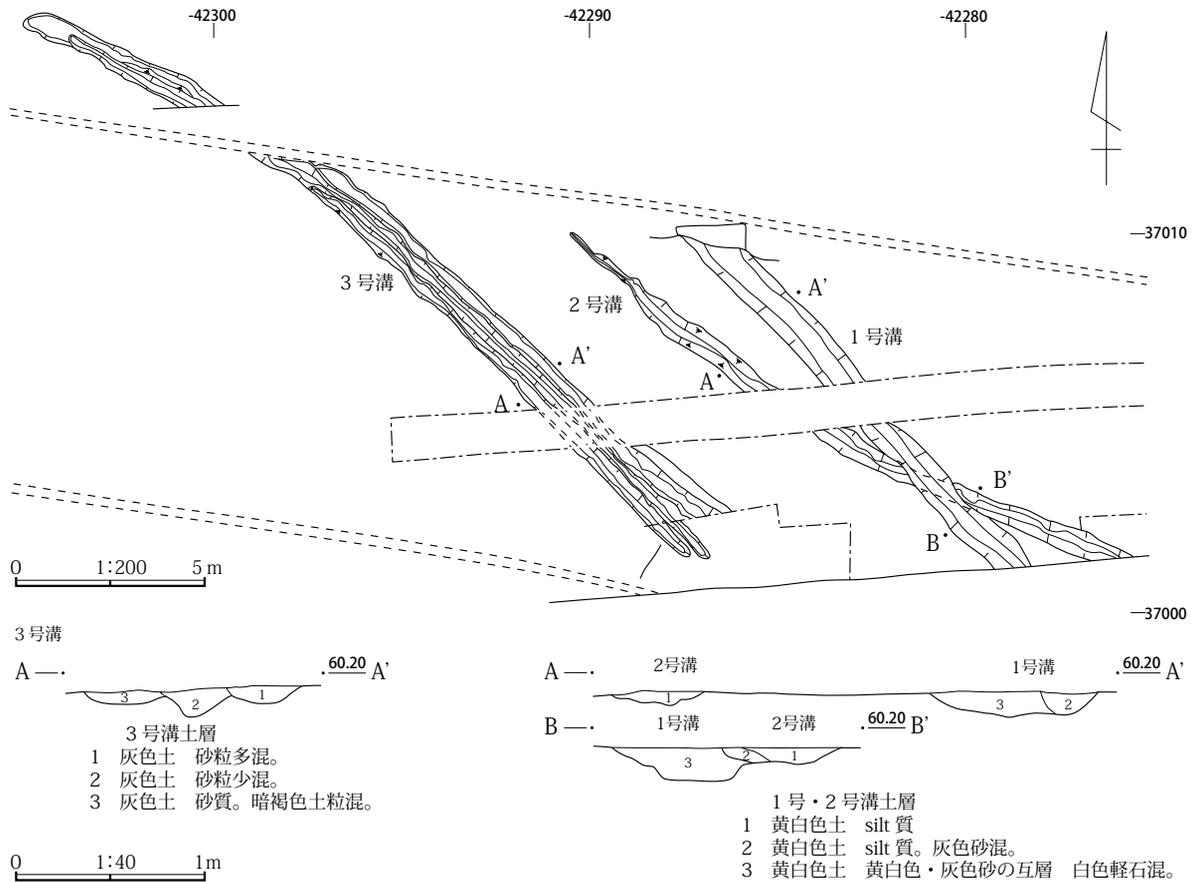


VI区第1面

第68図 VI区第1面全体図

第3章 検出された遺構と遺物

10cm前後を測る。走方はN-40°-Wを示す。埋土は淡黄色と灰色砂質土の混合である。出土遺物は古墳時代前期に属しよう土師器細片が多い。40余点。



第69図 VI区第1面1号・2号・3号溝

2号溝 (第69図)

1号溝と交差してある。南端は調査区域外に入り、北端は細く消滅する。位置はX=37001~37009・Y=-42275~-42287の範囲にある。軌跡は略直線的である。規模は検出延長17.3m、幅最大で約60cm、深さ10cmほどである。走方はN-70°-Wを示す。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土はsilt質淡黄・黄灰色土である。出土遺物は古墳時代前期や平安時代の須恵器など小片である。40点弱。

3号溝 (第69図)

1号・2号溝の西側に併走する。3条が平行、接してあるごとくである。南端は試掘溝による削平と調査区域外にかかり、また、北端は細まって消滅する。位置はX=37001~37015・Y=-42286~-42304の範囲にあり、軌跡は直線的である。検出延長は12m、全幅1.6m、1条ごとには30~35cmで、深さ5cmと痕跡程度である。走方はN-45°-Wを示す。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は灰色砂質土である。出土遺物は土師器小片で十数点である。

水田跡

調査区北東部で広・狭の方形水田7面を画する畦畔の基底部(畦畔の痕跡)が確認されている。畦畔の走

向はほぼ東西・南北走する直線軌跡であるが、東西走の畦畔が幅広となっている。確認された畦畔延長は東西畦畔で18m強、幅約1.2m。南北畦畔で約36mと17m、幅50～70cmである。区画規模については全容が検出されたものが無く不明であるが、長軸(南北)が20m以上、短軸(東西)10m前後の区画がみられる。水田耕土と考えられる土壌は層厚が10～12・3cmで砂粒を混入する粘質の黒褐色土で、確認された水田区画こそ狭小であるが耕土類似土壌は調査区内広範に堆積する。

#### さく状遺構

調査区中央北部と中央南部に畝さく跡とみられる細溝状の群が検出されている。走向はほぼ東西方、南北方、北東～南西方、北西～南東方の4走向があり、中央南部域の走向は北東～南西方と北西か～南東方のものに限られる。なお、走向の違いによるさく状遺構の前後関係は不明である。

#### その他の遺構

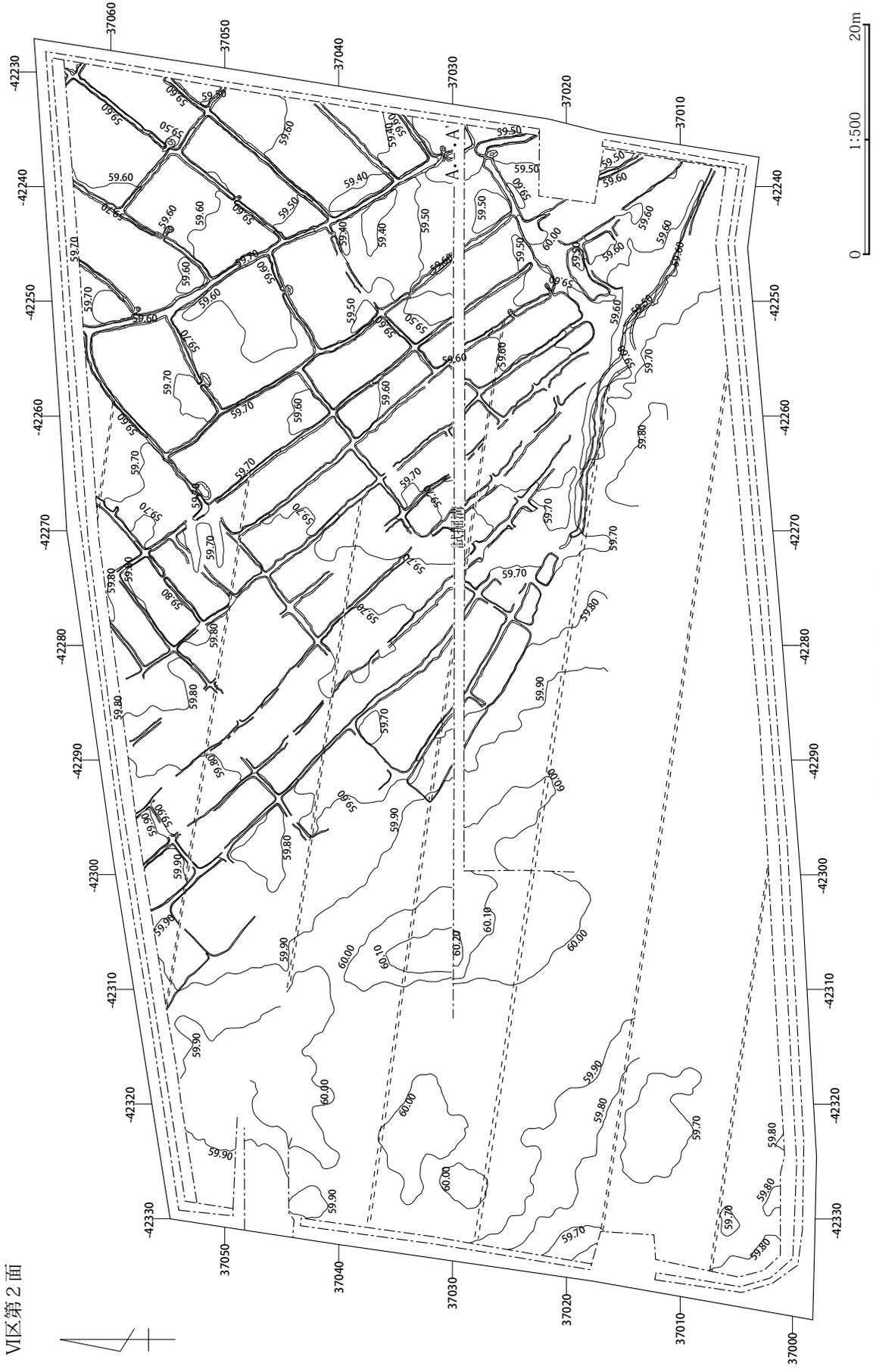
調査区を大きく画する様に数状の軌跡が確認されている。中央部をほぼ東西走するものを中心に東方と西方に延びる。また、南東方へ延びる軌跡もあり、いずれも調査区の全幅におよぶ勢いで、軌跡幅は2m前後と幅広である。標高値記録によればこれらの軌跡は微妙に低くなり溝状の遺構底面の様相を呈するが明らかな掘形としては認識されているかは判然としない。

#### Ⅵ区第2面の遺構と遺物 (第70・71・72図、P.L. 16・17・18・42)

2面での遺構は調査区北東部でほぼ半域に渡って広がる水田跡である。この面の水田区画は東方に続くⅦ区においてさらに広範な展開を見せる。出土遺物は極めて少ないが、水田跡畦畔の直上に1点の須恵器が検出されている。水田跡最終段階の時期を考える上で重要な資料となる。

**水田跡** 水田跡検出面は第1面の水田耕土に続く灰色土層下である。なお、耕土直上には灰色の砂層が断続的に堆積するが、この被覆土はともに洪水起源の堆積土である。畦畔の遺存状態は比較的良好な東側で5cm前後の高さである。畦畔は調査区の西側に向かうほどに低くなりその痕跡は辛うじてたどれるほどに不鮮明で、水田区画南西縁の限界確定はできていない。全体に耕土面はかなりの圧縮状態を示しており、田起しや畦の造作前の状態か、耕作停止後埋没までにある程度の時間的経過が考えられる状況である。耕土は暗灰色の粘質土である。

確認水田総区画数は約77区画で、区画形状はかなり長短軸長差のある長方形と略方形の形態に大別される。また、長方形の区画は長短軸の方向がおおよそ90度の違いをもって区画群を構成しているが、これらは地形高低の微妙な変化に対応したものであろう。地形的にみて水田区画域の等高線分布からは僅かながらも北西部から南東部に向かい標高が低くなっているが、水田としての条件が水平面を指向するため、区画構成群の状況からはさらに微地形が読み取れるであろう。例えば、北西～南東方向の畦畔筋が長辺と短辺の直交する区画群を分ける水田区画は方形または長短軸長差の少ない形状で当区では広い面積の区画であり、基本的には南東方へ低くなるが比較的平坦な地帯であったことによる。この地帯を境に南西部と北東部の水田区画が異なるが、南西部の区画群はここに短軸を向かわせていることから、ここには北東方に下り傾斜があったことがわかる。これに対して北東部の区画群は短軸を傾斜の強い南東方に対応している。この方向は後節で述べるⅦ区の水田区画に続き、区画状況もまた同じでⅦ区に向かう下り傾斜に応ずるものとなっている。



第70図 VI区第2面全体図

大区画を示すような大畦畔は検出されていないが、軌跡的には東隣のⅦ区より調査区南東部に連なる主幹畦畔を想定できる。Ⅶ区南西部より北西走する2号畦畔と、北東部より南西走する3号畦畔がここⅥ区の南東隅部で合流交差している。南東隅部に幅広な部分がみられるが、地形変換部による水田区画の不整備箇所の様相がある。先のⅦ区3号畦畔はこれによってその軌跡を消滅させる。また2号畦畔はさらに北西への畦畔筋へと連続するが、Ⅵ区の調査時点では主幹畦畔としては認識されていないようである。実際にもその高まり等が減じて、単位畦畔の様相であったとも考えられる。

水路と推定される溝跡は水田区画の南西縁を南東隅から北西方に延びる。検出延長約35m、幅50cm前後、深さ10～15cmで小さく蛇行し掘形にはさほどの丁寧さはみられない。これに水路的な機能があるとするれば、当区の水田区画南西縁の限り、または区画仕様の区切りとも考えられる。

なお、水田の造成には何度かの改変が加えられている様であるがその状況については東隣Ⅶ区の項で述べる。

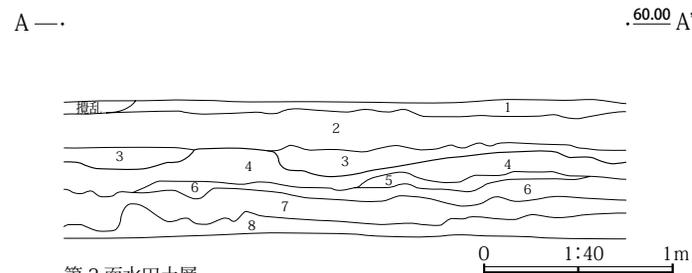
出土遺物は極めて少ない。唯一ともいえる遺物は完形品の小型須恵器坏である。出土位置はⅦ区の2号・3号の主幹畦畔が当区に連なりこれが合する畦畔上に検出されており、洪水層によって被覆される水田の最終段階または埋没直前の時期を示す遺物として重要であり、大略7世紀後半頃の年代が考えられる。

**出土遺物** 1は須恵器小型坏で所謂坏Gと称される形態である。底部は平底を呈するが不安定である。器肉は体部が比較的均一で底部は厚手。轆轤右回転。底部～腰部は右引き左回りの手持ち篋削りを施す。7世紀後半。

**Ⅵ区2面（水田）出土遺物計測表**

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵器坏	37030-42240	8.5	5	3.5	完形	細土	灰白N7/	良好	



第2面水田土層

- 1 黒褐色土 粘質。砂粒混。As-B下水田耕土（第1面水田耕土）
- 2 灰色土 砂・粘土混。白色軽石少混
- 3 灰色砂層土 鉄分で橙色に染まる部分が多い。
- 4 暗灰色粘土層 白色軽石混。第2面水田耕土
- 5 暗灰色砂層 粘土塊・白色軽石混
- 6 黒灰色粘土層 砂粒混。水田耕土か（Ⅶ区第3面水田に相当か）
- 7 明褐色土 粘質。
- 8 褐灰色土 砂粒混

第71図 Ⅵ区第2面水田跡土層図



0 10cm

第72図 Ⅵ区第2面水田跡出土遺物

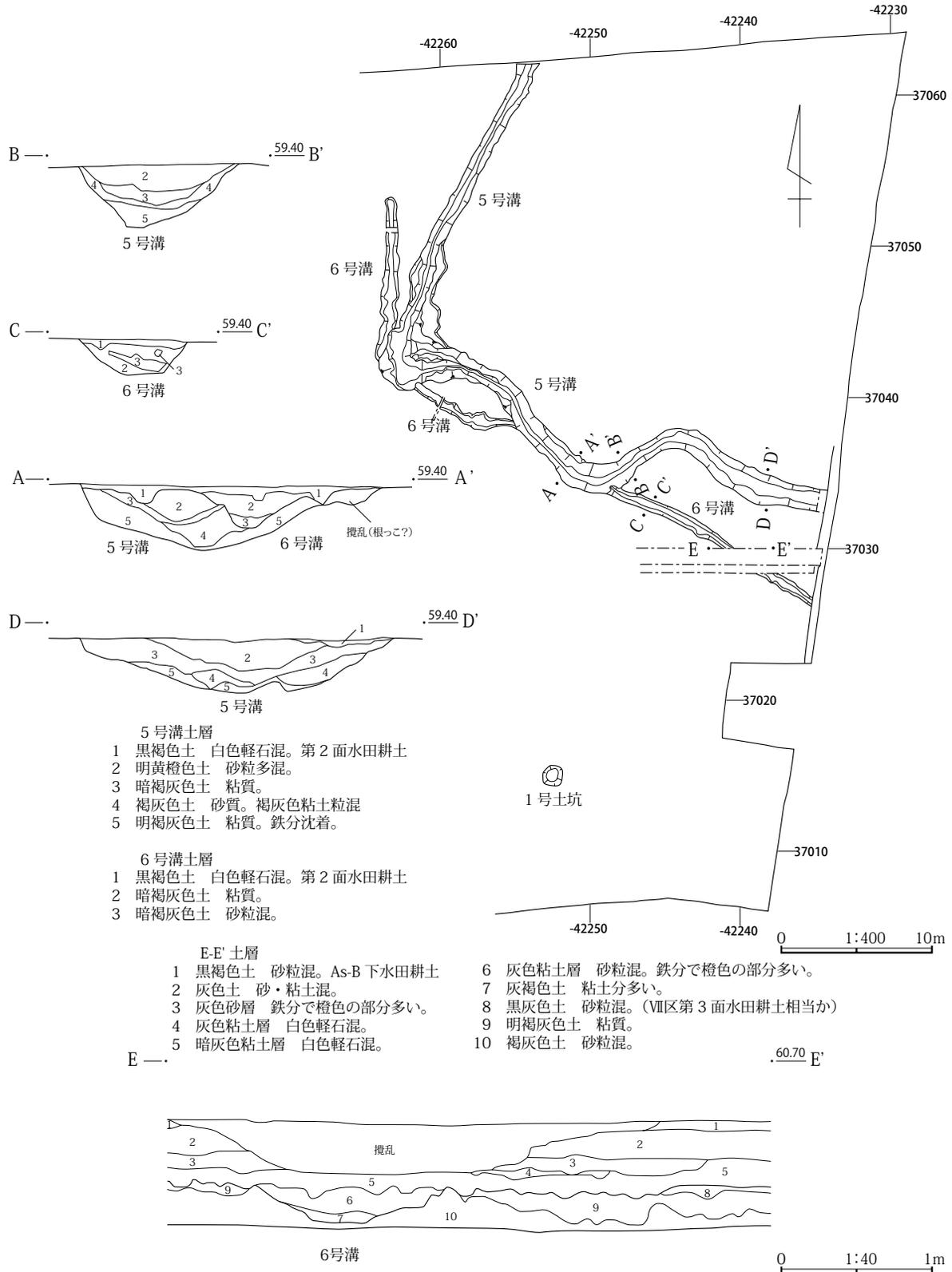
**Ⅵ区第3面の遺構と遺物**（第73図、P.L. 18）

第3面に検出された遺構は5号・6号の2条の溝と土坑1基である。2条の溝跡は東方Ⅶ区より連続する遺構である。なお、この溝以西からは遺構の確認・検出は無い。

**5号溝** 調査区北東部に検出され、6号溝と幾度か交差するがこれより古い。北端は調査区域外にはいるが、東端は東方のⅦ区より連続する。小さな蛇行を繰り返し、当区での検出総延長は約55mを測る。南東

第3章 検出された遺構と遺物

端からの延長約25mは小さな蛇行で北西方へ走向し、直に折れて北北東走する。後約20mの軌跡は直線的である。溝上縁幅1~1.5m、深さ約40cmを測る。埋土はおよそ5層分かち、砂質土と粘質土の互層となる。出土遺物には土師器壺・甕類の他、手捏ね土器がある。



**6号溝** 5号溝に併走または交差してある。5号溝より新しく、同様に東方Ⅶ区より連続する溝である。当区での検出総延長約42mのうち、北西方へ約30mは極緩くうねる軌跡で直に近く折れて北向するが約12mで消滅する。溝幅1.3m前後、深さ30cm(いずれも土層断面より)ほどである。上面に第2面水田耕土が覆い、粘質土と砂質土からなる埋土である。出土遺物は無い。

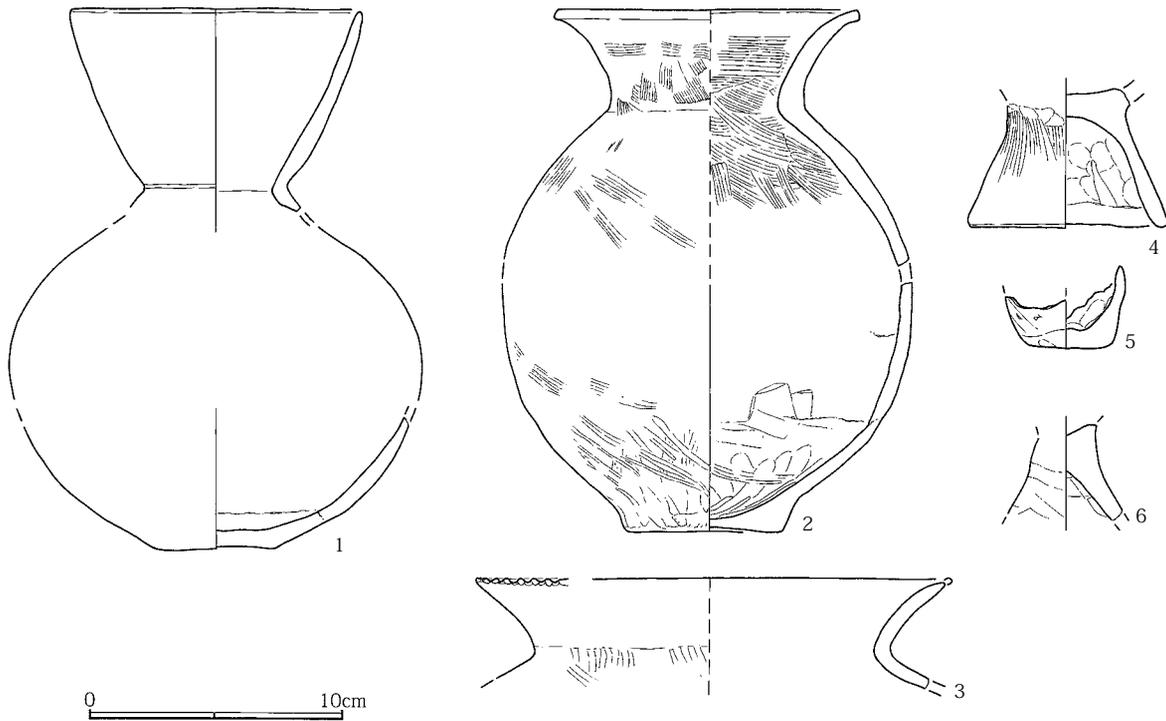
**5号溝出土遺物** (第74図、P.L. 42)

1・2は壺。1は口頸部が内湾気味に立ち上がる。胴部下半丸味強く、小径な平底。器面荒れ調整不鮮明。2は口頸部外反気味に開く。口唇部は断面矩形。胴部丸く張る。外面掻き目、腰部に篋磨き残る。内面口径部短引きの掻き目後放射状に篋磨き。3は甕口縁部。大きく外反して開く。口唇部に波状刻目を施す。4はS字口縁甕の台部。胴・台部の見込み部に砂土塗布。器面荒れ。手捏ね土器5は鉢形模倣。6は台付甕の模倣か、台部。

Ⅵ区第3面5号溝出土遺物計測表

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	埋土	11.6	4.6	20+α	全 1/3	砂粒多	浅黄2.5Y7/3	良好	胴径17+α
2	土師器壺	埋土	12	6.5	30.5	全 1/3	細土	鈍橙5YR7/3	良好	胴径16+α
3	土師器甕	埋土	19		現高 3.4	口縁小片	小石混	明赤褐10YR5/4	良好	
4	土師器甕	埋土		7.8	現高 5.8	台部	砂粒多	灰白10YR8/2	良好	
5	土師器手捏ね土器	埋土	4.5	3	現高 3.2	全 2/3	砂粒多	灰黄2.5YR7/2	良好	
6	土師器手捏ね土器	埋土		4	現高 3.5	台部	砂粒多	灰褐2.5YR3/2	良好	



第74図 Ⅵ区第3面5号溝出土遺物

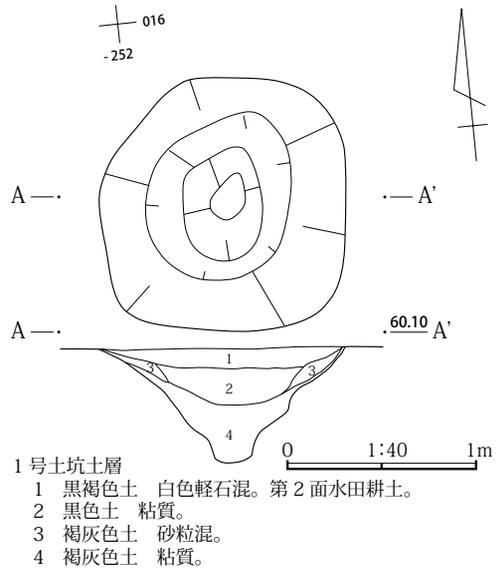
**1号土坑** (第75図)

調査区南東部に検出された。位置はX=37014~37015・Y=-42251~-42252の範囲にある。形状は略隅丸方形を呈し、断面形は小さな段状壁面をなして先窄まりに落ち込む。上縁径1.35×1.3m・下縁径約20cm、深さ60cmを測る。埋土は最上位に第2面検出の水田耕土が僅かに沈み込んで覆う。出土遺物は無い。

Ⅵ区出土の遺物 (第76図)

ここに掲載する遺物は、遺構には直接伴わない遺物である調査途上に各面より出土し、あるいは試掘溝調査によって採取されたものである。

1は土師器の器台。2・3は高坏脚柱部。4は土師器甕の口縁から肩部である。口縁部内湾気味に開く。頸部鋭く折れて肩部丸く張る。5はS字口縁甕小型、口唇部欠。胴部張り強く球胴。胴部左上り細目搔き目。2条単位横線肩部巡る。6は壺底部か、細身の腰部に底部厚手の凸状。7は台付甕台部。8は回転篋削り「目カ」の刻書。須恵器底部9は篋調整か。10は土器(かわらけ)。浅い体部で底部篋削り。11は秉燭(ひょうそく)。黒褐釉底部無釉。底部に台差し込みの孔。右回転糸切り。12は焙烙。内外面撫で、腰部篋撫で。

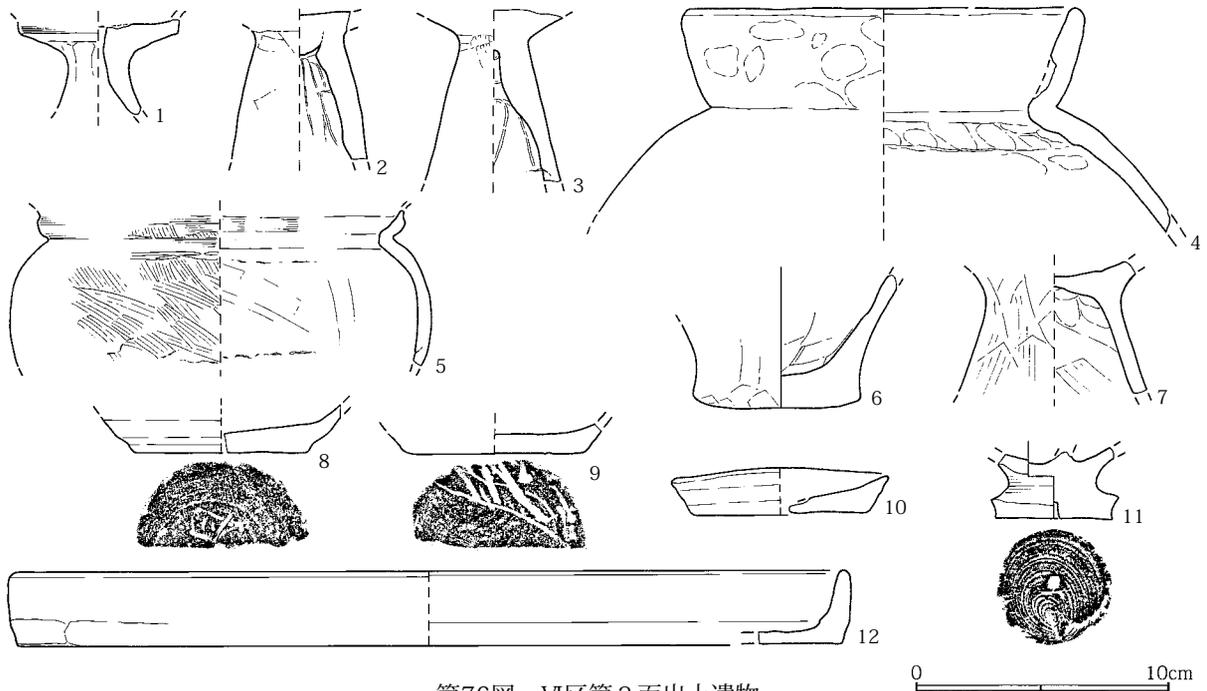


1号土坑土層  
 1 黒褐色土 白色軽石混。第2面水田耕土。  
 2 黒色土 粘質。  
 3 褐灰色土 砂粒混。  
 4 褐灰色土 粘質。

第75図 Ⅵ区第3面1号土坑

Ⅵ区出土遺物計測表

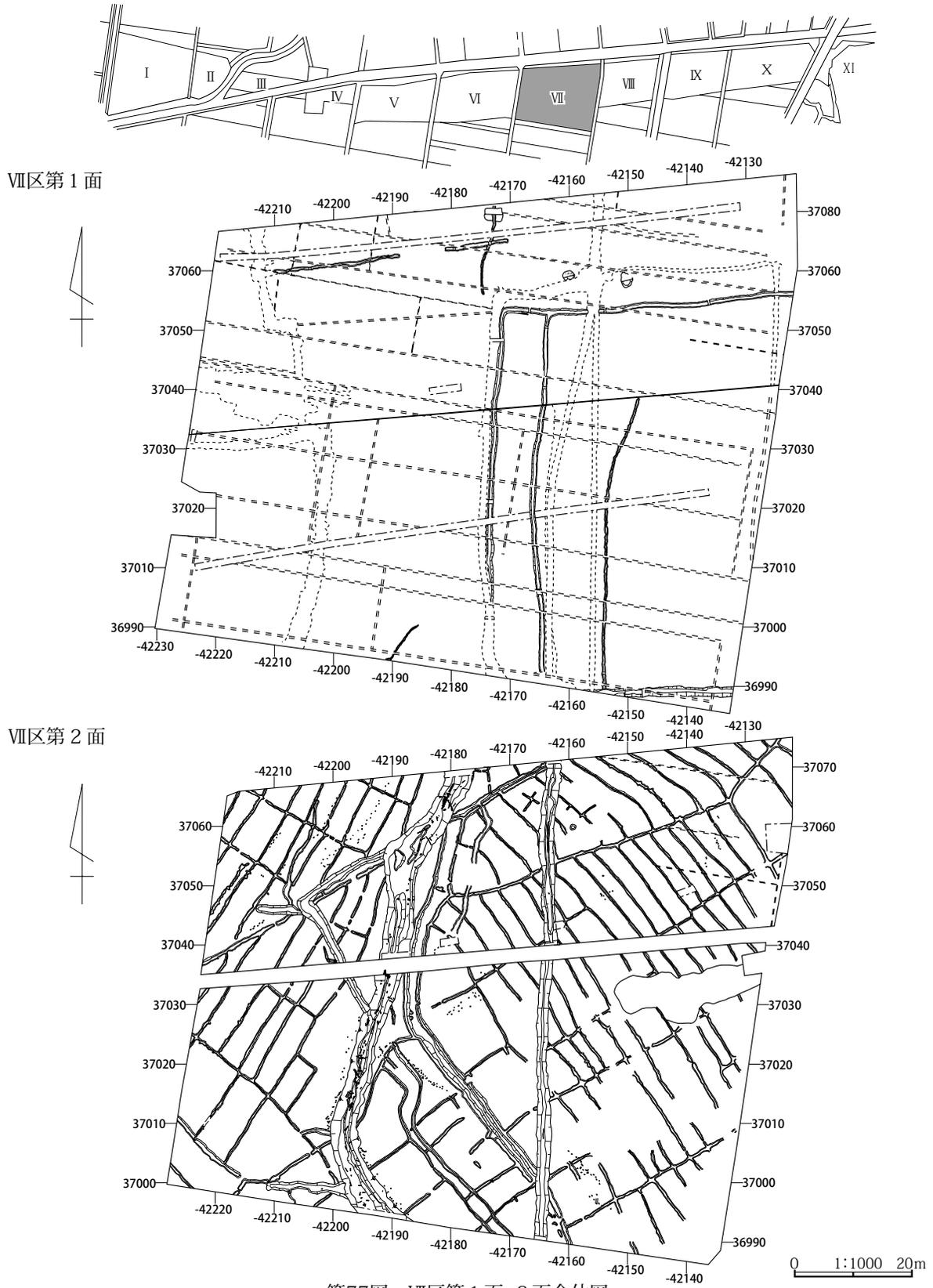
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器器台	37010-42240			現高 3.6	坏~脚	細土	明赤褐5YR5/6	良好	
2	土師器高坏	表採			現高 5.8	脚柱部	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
3	土師器高坏	表採			現高 6.7	脚柱部	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
4	土師器甕	37101-42250	16		現高 8.5	口~肩片	砂粒多	明赤褐5YR5/6	良好	
5	土師器S字口縁甕	37020-42320			現高 6	胴部	細土	浅黄2.5YR7/3	良好	胴径16.8cm
6	土師器甕	37030-42300		6.3	現高 5	底部	砂粒多	橙7.5YR6/6	良好	
7	土師器台付甕	37010-42250			現高 5.3		砂粒混	鈍黄橙10YR7/4	良好	
8	須恵器坏	中央試掘溝		6.8	現高 1.9	底部1/3	砂粒混	灰7.5YR1/7	良好	(目カ) 刻書
9	須恵器坏	37050-42260		7	現高 1.1	底部1/3	砂粒混	灰7.5YR1/6	軟	
10	土器(かわらけ)	37030-42260	8.6	7	1.9	全1/3	細土	鈍黄2.5YR6/3	やや軟	
11	陶器秉燭	37040-42260		4.7	現高 2.8	底部	細土	灰白2.5YR8/2	良好	黒褐釉
12	軟質陶器(焙烙)	表採			現高 2.9	小片	細土	橙5YR7/6	良好	



第76図 Ⅵ区第3面出土遺物

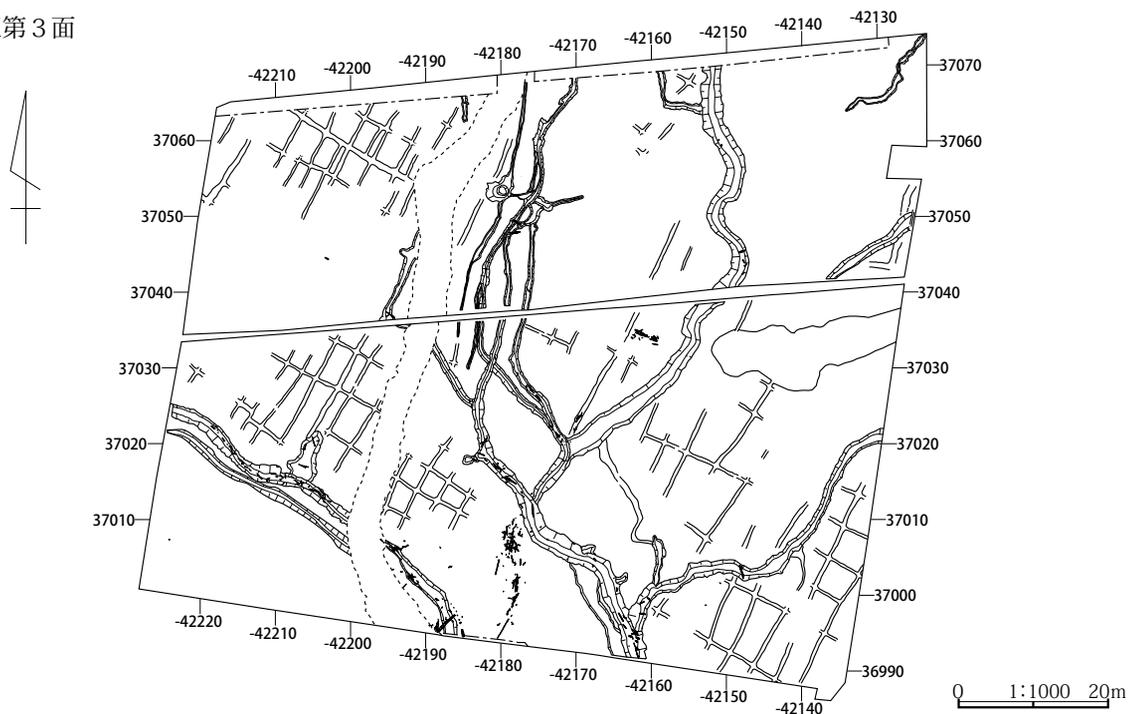
5. VII区の遺構と遺物（第77・78・79図）

VII区は1区・2区の小区割りの調査が行われた。当区での遺構検出面は第1面・第2面・第3面からなる



第77図 VII区第1面・2面全体図

Ⅶ区第3面



第78図 Ⅶ区第3面全体図

が、各面とも東西隣接区であるⅥ区、Ⅷ区との遺構内容はいずれも同質で一連のものとして理解される。

第1面ではB軽石の関わる堆積層の上・下(ただしB軽石の直接降下による堆積層やそれに近い層序は形成されていないため関連は明確ではない)より、竪穴状遺構・井戸跡の他7条の溝跡が検出されている。なお、Ⅵ区においては小範囲で確認されている水田、特に畦畔については高まりとして捉えることのできる様な状態ではなかった。水田面としての認識はその土壌の質感によって耕土であろうと想定されるにすぎなかった。

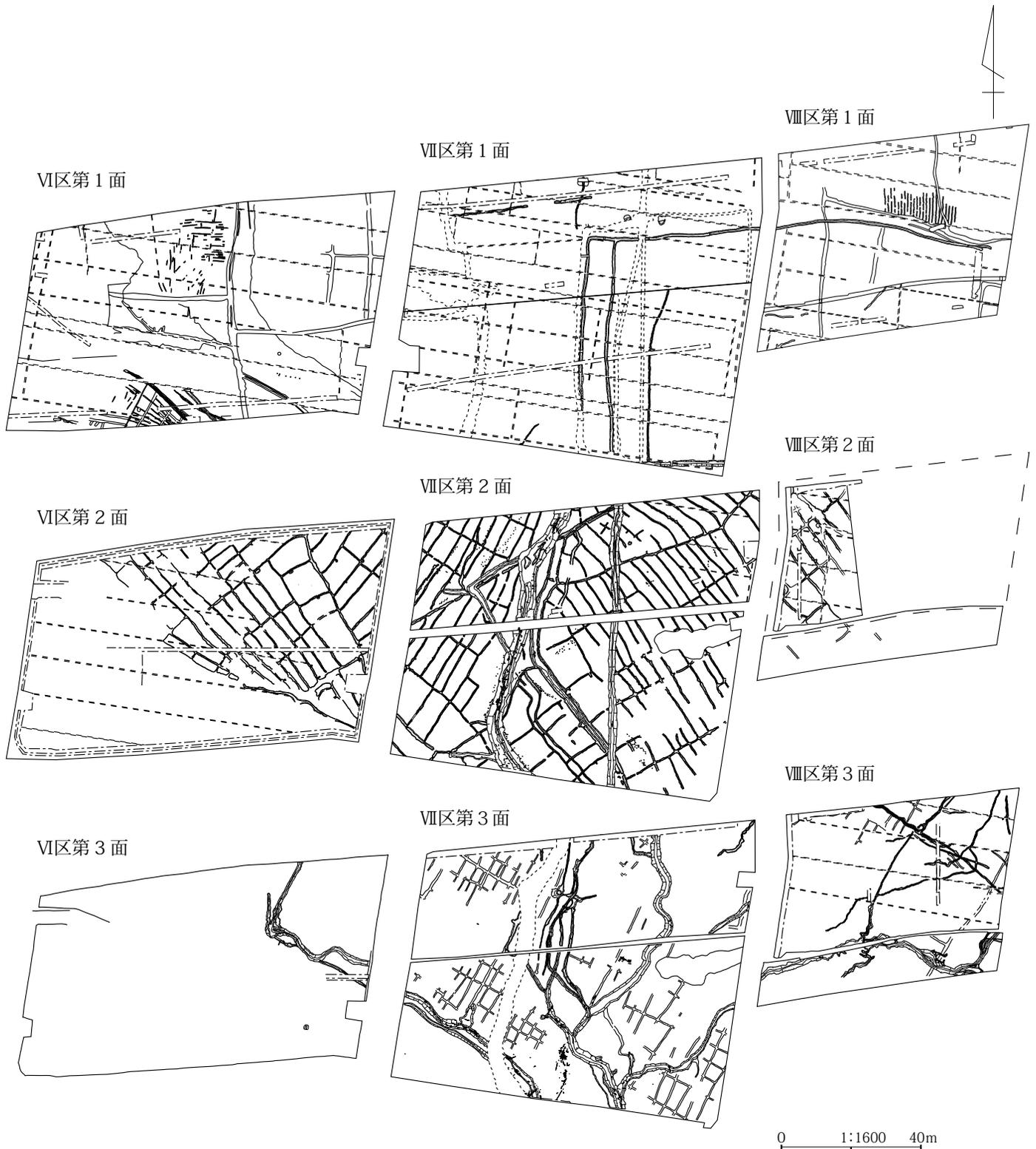
第2面では調査区全域に方形区画の水田面が検出されている。この水田面は西方の調査区であるⅥ区から東方のⅧ区へと連続するもので当区の遺存状態はより良好で水田面には人と獣類の歩行足跡がある。水田区画は主幹的畦畔や水路に関わる状況から、幾度かの改変が行われている。その他の遺構としては2条の溝跡がある。2条とも水田跡とは時期・時代が異なり厳密には面的に上下を成すものであるが、調査による検出は同一面となっている。そのうちの1条からは農具類や多量な杭などの木製品を出土する。

第3面は小方形区画の水田が検出されている。本来的には調査区の全域に渡って存在していたと考えられるが畦畔の連続性は危うく、その痕跡は途絶えがちである。従って隣接Ⅵ区、Ⅷ区からは積極的な水田遺構を確認できなかった。水田耕土面2地点より木器類や丸木材の集中箇所が見られる。水田跡より後出の溝跡は18条が確認されている。広・狭・深・浅様々な形態があり、多くは大・小の蛇行軌跡をもつ。それら幾条かの溝跡はⅥ区、Ⅷ区へ溝筋をのぼしている。溝跡からは農具・弓などの木器の他多量な木杭類が出土する。

**Ⅶ区第1面の遺構と遺物** (第80図、P.L. 19)

第1面から検出された遺構は、竪穴状遺構・井戸跡・土坑各1基がある。溝跡は1号～7号があり、それらの軌跡はほぼ東西と南北の2方向を指向している。なお4号溝と5号溝は一連のものと目され、分枝・分割といった機能が考えられる。水田跡については明瞭な立体を示す遺構としては認識されていない。前述したように検出面の土壌が水田耕土を思わせる趣があるということと、畦畔の基底痕跡を示す(基底幅ではな

く単線として) 様な土壌色合いが線状に続くことが断続的に確認されていることによる。しかし、水田耕土と認識された土層の試料分析ではイネ科植物に形成される植物珪酸体の含有が極めて高い濃度を示すことから、水田跡であった可能性は極めて高い。(第4章自然科学分析第3節参照)



第79図 VI区・VII区・VIII区全体図

第3章 検出された遺構と遺物

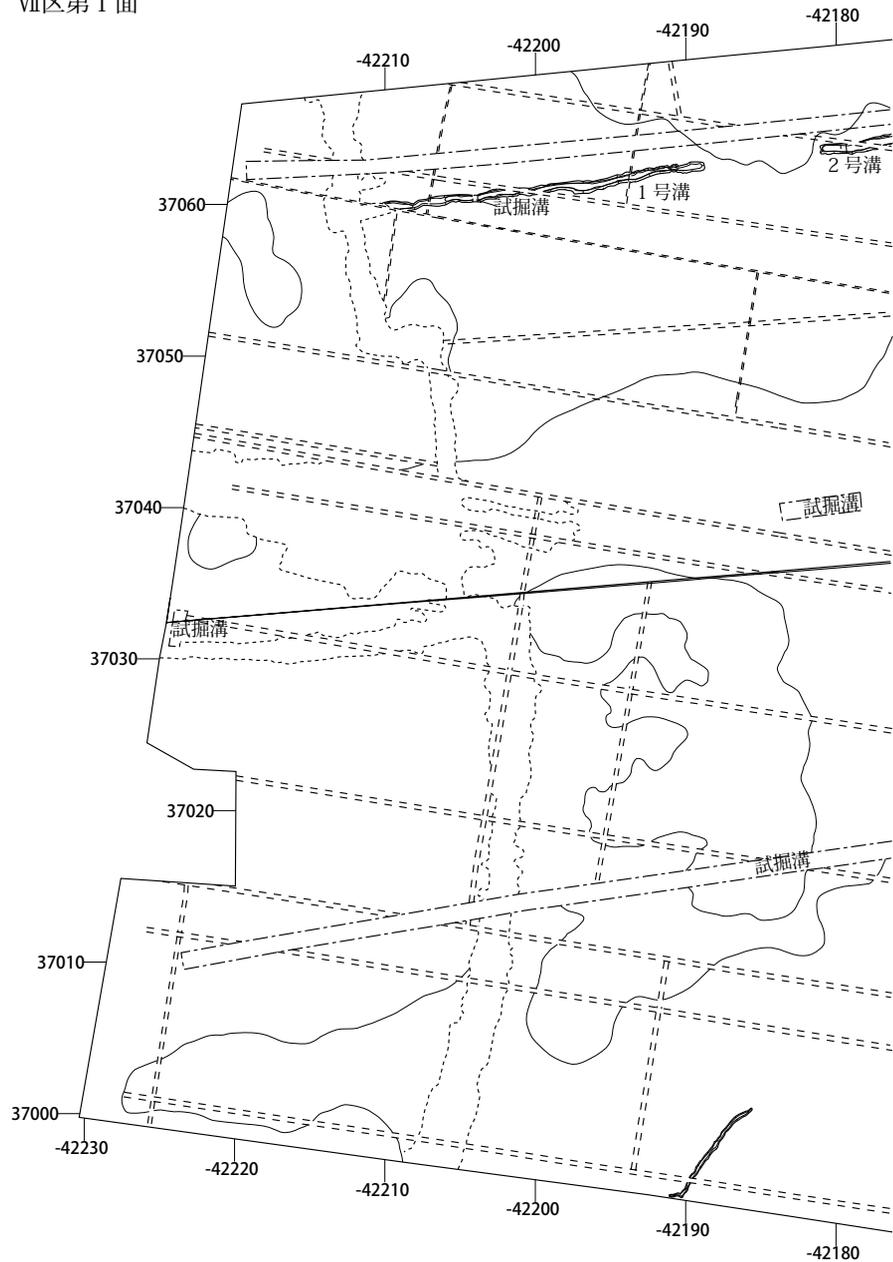
1号豎穴状遺構 (第81図)

小1区北側中央部に検出され、位置はX=37068～37070・Y=-42171～-42174の範囲にある。南北走る3号溝が中央に重なり、新旧関係はこれより新しい。平面形状は東西方向に長軸をもち、南東・南西隅部が隅丸を呈する。長軸3.1m、短軸2.2m、断面壁立ちは緩くなお浅く10cmに満たない。出土遺物は無い。

1号井戸跡 (第82図)

小1区中央部に検出され、位置はX=37058～37059・Y=-42159～-42161の範囲にある。南縁の一部は攪乱を受ける。平面形状は楕円形を呈し、上縁は大きく開口する。断面形状は検出面より50cmほど

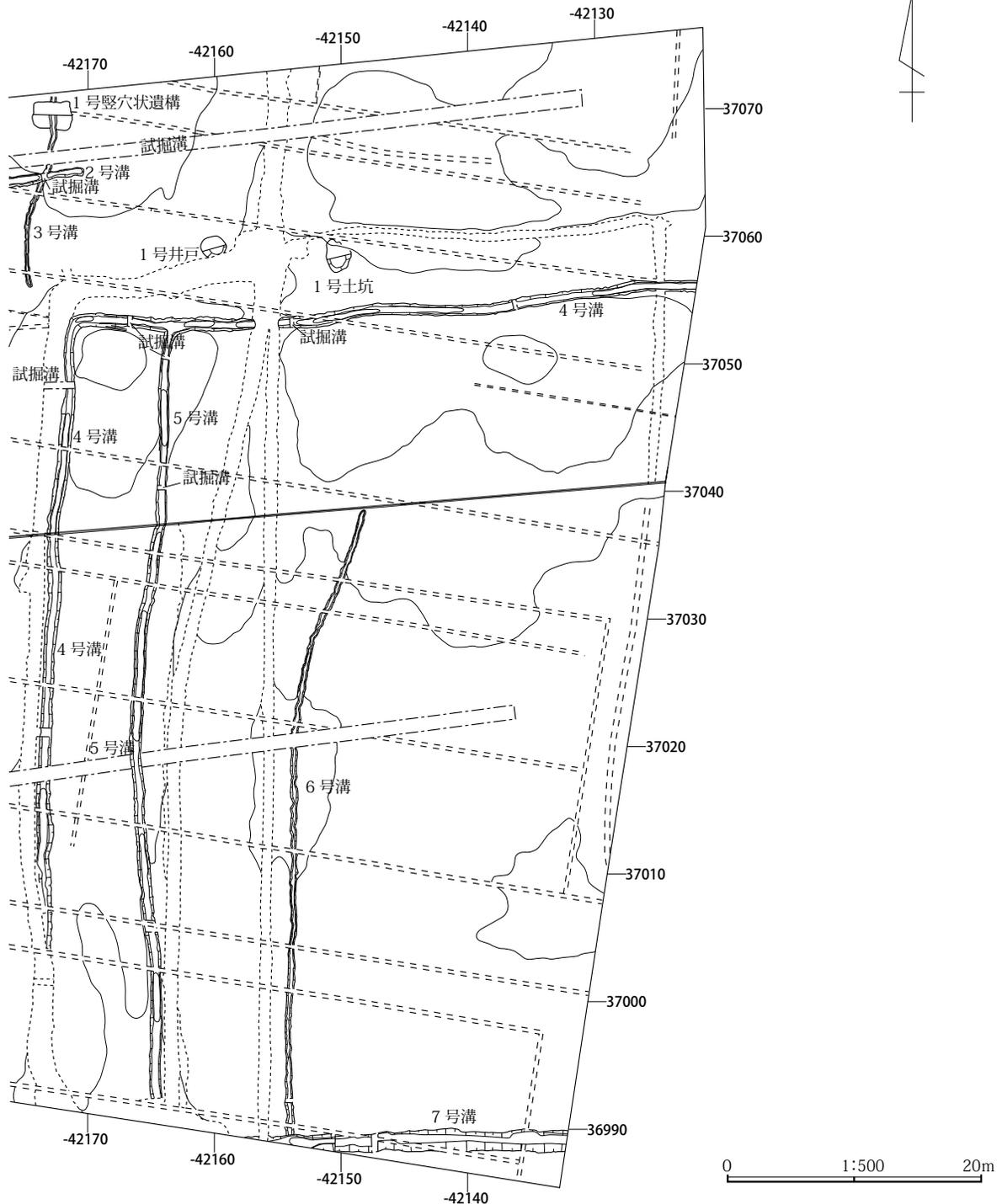
VII区第1面



で窄まり、筒状になって略漏斗状を呈する。規模は径2.1×1.7m、深さ1.8mを測る。埋土は中位までAs-B軽石混じりの層序で埋まり、下位は粘質土や砂・silt質土である。出土遺物は無い。

1号土坑 (第83図)

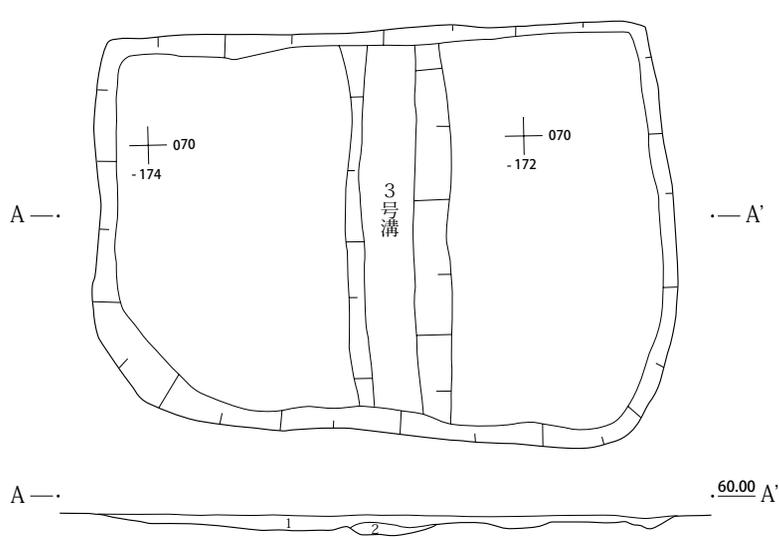
小1区やや北側に検出され、位置はX=37057~37059・Y=-42149~-42150の範囲にある。平面形状は不定形を呈するが攪乱坑などのためと考えられ、本来的には楕円形状を呈しよう。長軸2.2m、短軸



第80図 VII区第1面全体図

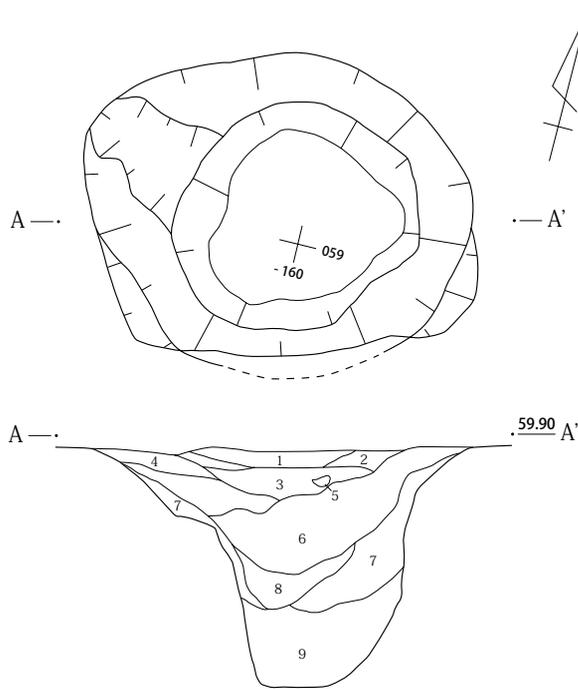
第3章 検出された遺構と遺物

1.4m、深さ50cmで断面は深い皿形を成す。埋土は砂質土が多く混入する褐灰色土である。出土遺物には軟質陶器・陶器・磁器の極小片のほか拳大の転石が数点ある。近世。



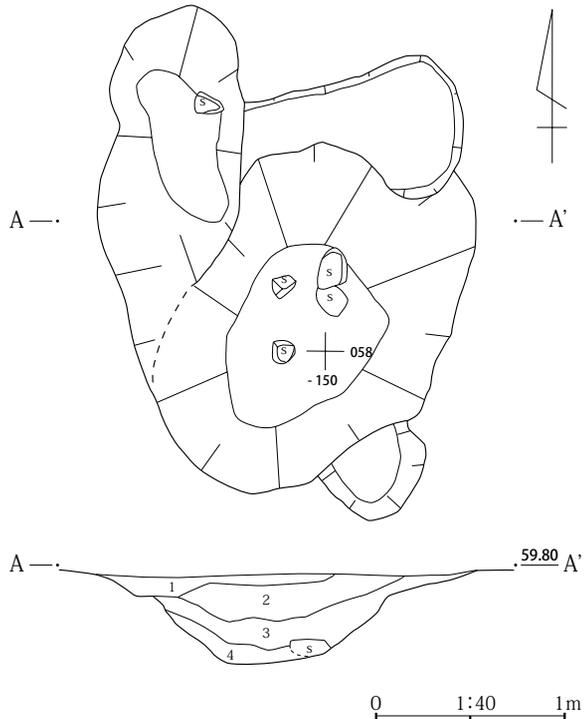
- 1号竪穴土層  
 1 暗褐色土 As-B 混土。黄褐色粘土粒混  
 2 暗褐色土 As-B 混土。明黄褐色砂質土塊混。

第81図 VII区第1面1号竪穴



- 1号井戸跡土層  
 1 暗褐色土 As-B 混土。暗灰色砂質土多混。  
 2 暗褐色土 As-B 混土。暗灰色砂質土少混。  
 3 暗褐色土 As-B 混土。黄褐色粘土小塊混  
 4 暗褐色土 As-B 混土。黄褐色粘土小塊散在混  
 5 暗褐色土 As-B 混土。鈍黄褐色粘土大塊混  
 6 鈍黄褐色砂質土とAs-Bの混土  
 7 暗褐色土 砂質土と粘質土の混土。  
 8 黒褐色土 粘質。  
 9 暗褐灰色土 silt 質土と砂質土の混土

第82図 VII区第1面1号井戸



- 1号土坑土層  
 1 褐灰色土 砂質。粗砂粒多。  
 2 褐灰色土 砂質。  
 3 褐灰色土 砂質。黄褐色粘土小塊少混。  
 4 褐灰色土 砂質。褐灰色粘土多混。

第83図 VII区第1面1号土坑

溝跡 (第84図)

**1号・2号溝** 小1区中央から北西部にかけて検出され、位置はX = 37060~37065・Y = -42170~-42209の範囲にある。1号、2号の別名称が付与されているが、一連の溝と思われる。1号溝は西端の軌跡が途切れて未検出で、検出延長約21mである。およそ8mの間隔をおき、延長10mの2号溝となる。溝幅50~80cm、深さ10cm前後の横断面浅い皿形である。走向は両者ともおよそN-80-Eを示す。埋土はAs-B混土である。

**3号溝** 小1区中央部に検出され、位置はX = 37055~37070・Y = -42172~-42174の範囲にある。緩く蛇行する南北走の溝で、北側は調査区域外に入り、南は軌跡が途絶える。1号竪穴状遺構と重複するがこれより古い所産である。検出延長15m、幅35cm、深さ10cmを測り、横断面は浅い皿状を呈す。埋土はAs-B混土である。

**4号溝** 小1~2区の東半の広範囲に検出され、位置はX = 37004~37056・Y = -42121~-42173の範囲にある。方形区画を意図したものと考えられる。調査区東縁からN-85°-Eの走向で西進し、約45mで直に折れて40mほど南進するが検出は途切れる。走向はほぼ南北の軌跡である。溝幅は1m前後、深さ20cmを測る。やや凹凸のある底面で横断面は浅い皿状を呈す。埋土はAs-B混土である。出土遺物は無い。

**5号溝** 4号溝東西軌跡の南端より約40mで分枝し、4号溝南北走軌跡に併走する。位置はX = 37004~37056・Y = -42121~-42173の範囲にあり、南端は調査区域外に入る。検出延長約61m、幅1m、深さ15~20cmを測る。底面は比較的平坦で横断面は箱形を呈する。埋土はAs-B混土である。出土遺物は無い。

**6号溝** 小2区やや東側に検出され、位置はX = 36989~37038・Y = -42148~-42154の範囲にある。調査区南端部で7号溝と重複してこれよりは古い所産である。ほぼ南北走向するが北側は緩く15度ほどの角度で東方に走向を変えて収束する。検出延長は約50m、幅50cm、深さ10cm程度の浅い凹凸のある底面である。埋土はAs-B混土である。出土遺物は無い。

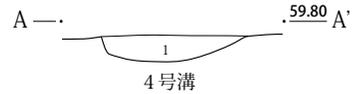
**7号溝** 小2区南東隅部に検出され、位置はX = 36998~36999・Y = -42132~-42157の範囲にある。東西走向し両端とも調査区域外に延びる。検出延長は約23m、幅1.5m、深さ30cm前後の掘形が残り、横断面U字形を呈す。埋土は砂粒を含む褐灰色silt層である。出土遺物は無い。



1号溝土層  
1 暗褐色土 As-B混土。黄褐色粘土混。



2号・3号溝土層  
1 暗褐色土 As-B混土。黄褐色粘土塊混。  
2 暗褐色土 As-B混土。黄褐色粘土塊・白色軽石混。



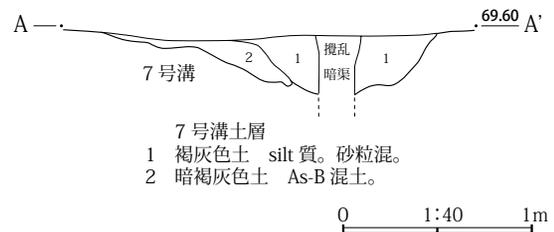
4号溝土層  
1 暗褐色土 As-B混土。黄褐色粘土塊混。



5号溝土層  
1 暗褐色土 As-B混土。黄褐色粘土塊混。



6号溝土層  
1 暗褐色土 As-B混土。黄褐色・黒褐色粘土塊混。



7号溝土層  
1 褐灰色土 silt質。砂粒混。  
2 暗褐灰色土 As-B混土。

第84図 VII区第1面1号~7号溝土層図

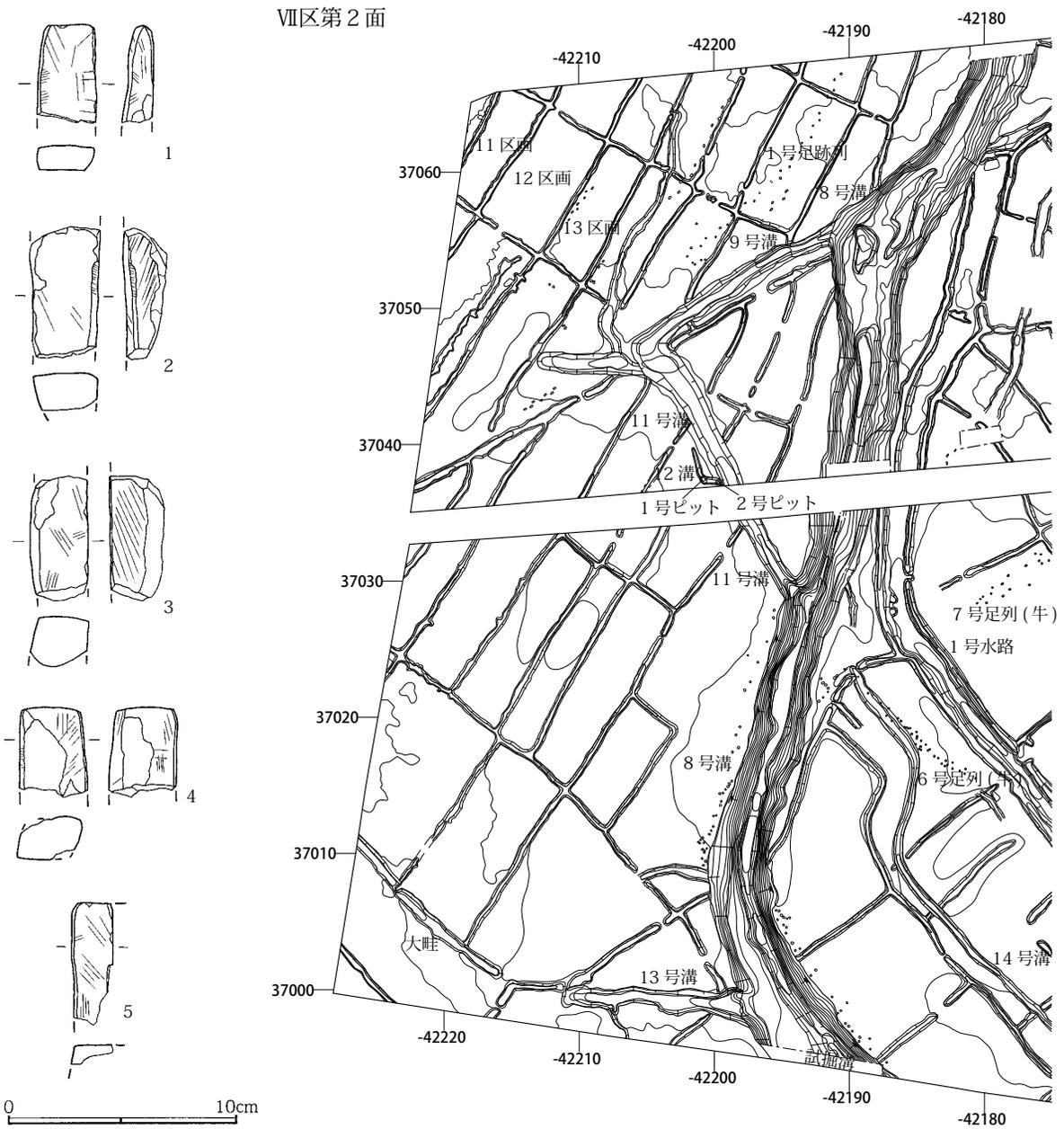
Ⅶ区第1面の出土遺物 (第85図)

表採定形砥石である。いずれも多面使用の小塊破損品で、石材は流紋岩質である。近世以降に属しよう。

Ⅶ区 1 面出土遺物計測表

単位 cm・g

番号	器種	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存		
1	砥石	埋土	4.3	2.6	1.3	小片	流紋岩質	21.3g
2	砥石	埋土	5.8	3.1	2	小片	流紋岩質	41g
3	砥石	埋土	5.5	2.6	2.4	小片	流紋岩質	46.7g
4	砥石	埋土	3.9	3	1.9	小片	流紋岩質	26.9g
5	砥石	埋土	5.4	1.9	0.8	小片	流紋岩質	8.2g

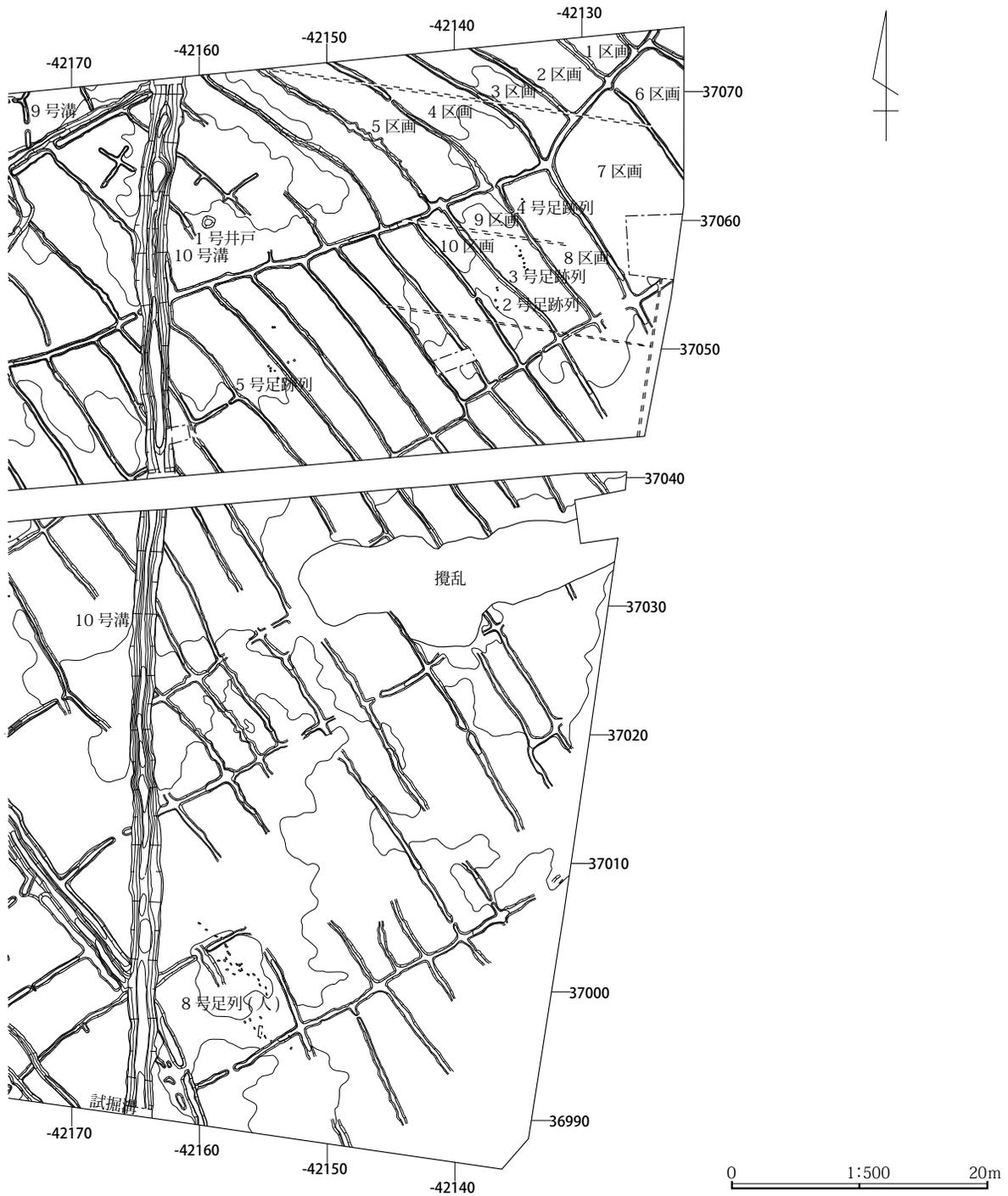


第85図 Ⅶ区第1面出土遺物

Ⅶ区第2面の遺構と遺物（第86図、PL. 20）

第2面より検出された遺構は、方形区画の水田跡である。Ⅶ区8,000㎡超の調査区全域に展開し、前節で述べたⅥ区2面と後節でふれるⅧ区第2面での水田跡と連続するもので当区が水田遺構の中心的区域になる。水田区画は何度かの改変が試みられたと考えられる畦、水路とともに、人と獣類の足跡が検出されている。耕土面は洪水起源の堆積層が被覆し、廃絶はこれによるものであろう。

その他の遺構には8号・10号の溝跡2条がある。水田跡を覆う洪水層は上下2層に大別され、2条の溝跡は水田跡を被覆するこの洪水層を掘り込むが、前後2度にわたる洪水層をそれぞれに開削したもので、出土



第86図 Ⅶ区第2面全体図

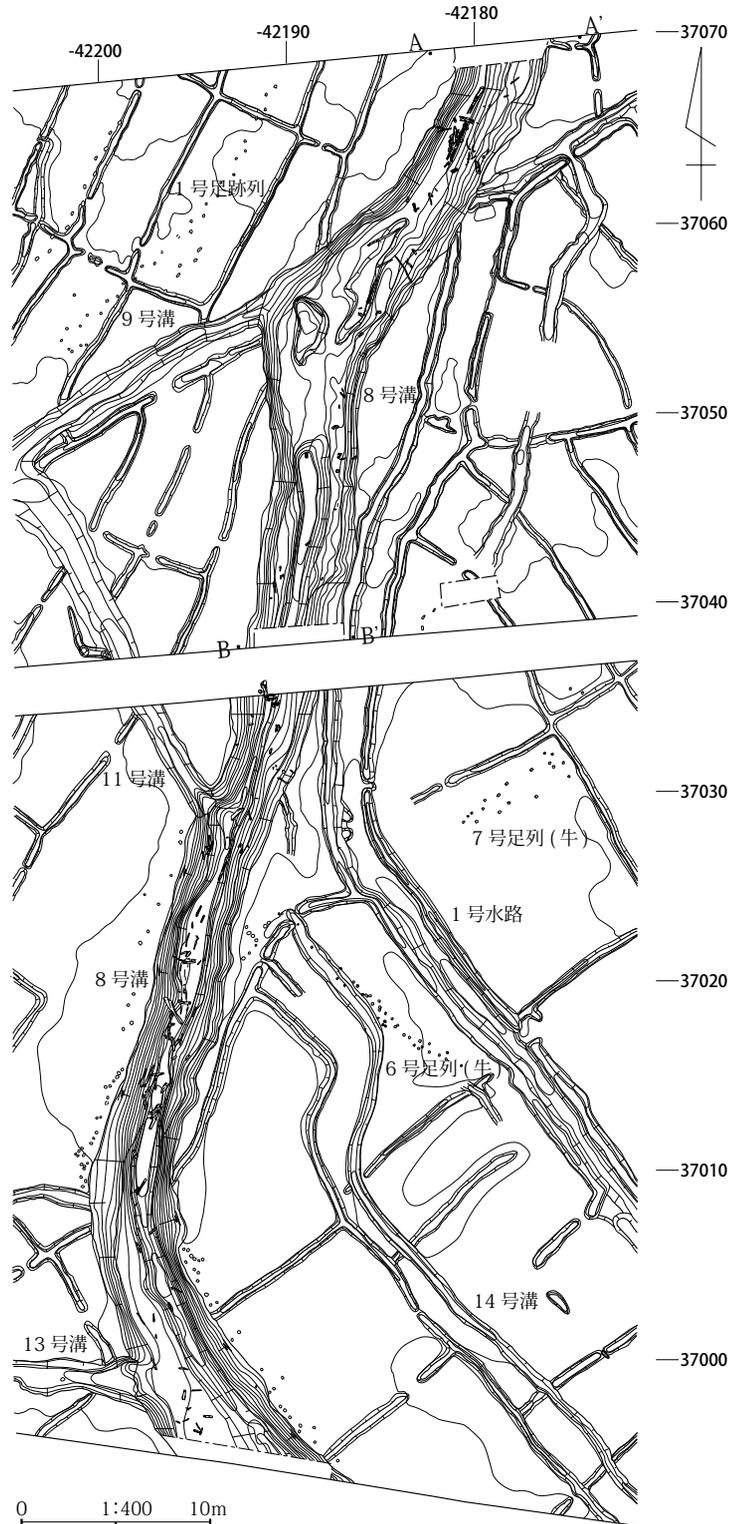
遺物からも明らかな時間差が看取できる。下位洪水層開削の溝跡からは木製品として馬鍬・田下駄・横槌・板材・串状品などのほか多量の杭類が出土している。

**8号溝** (第87・88・89・90図、P L. 21・25)

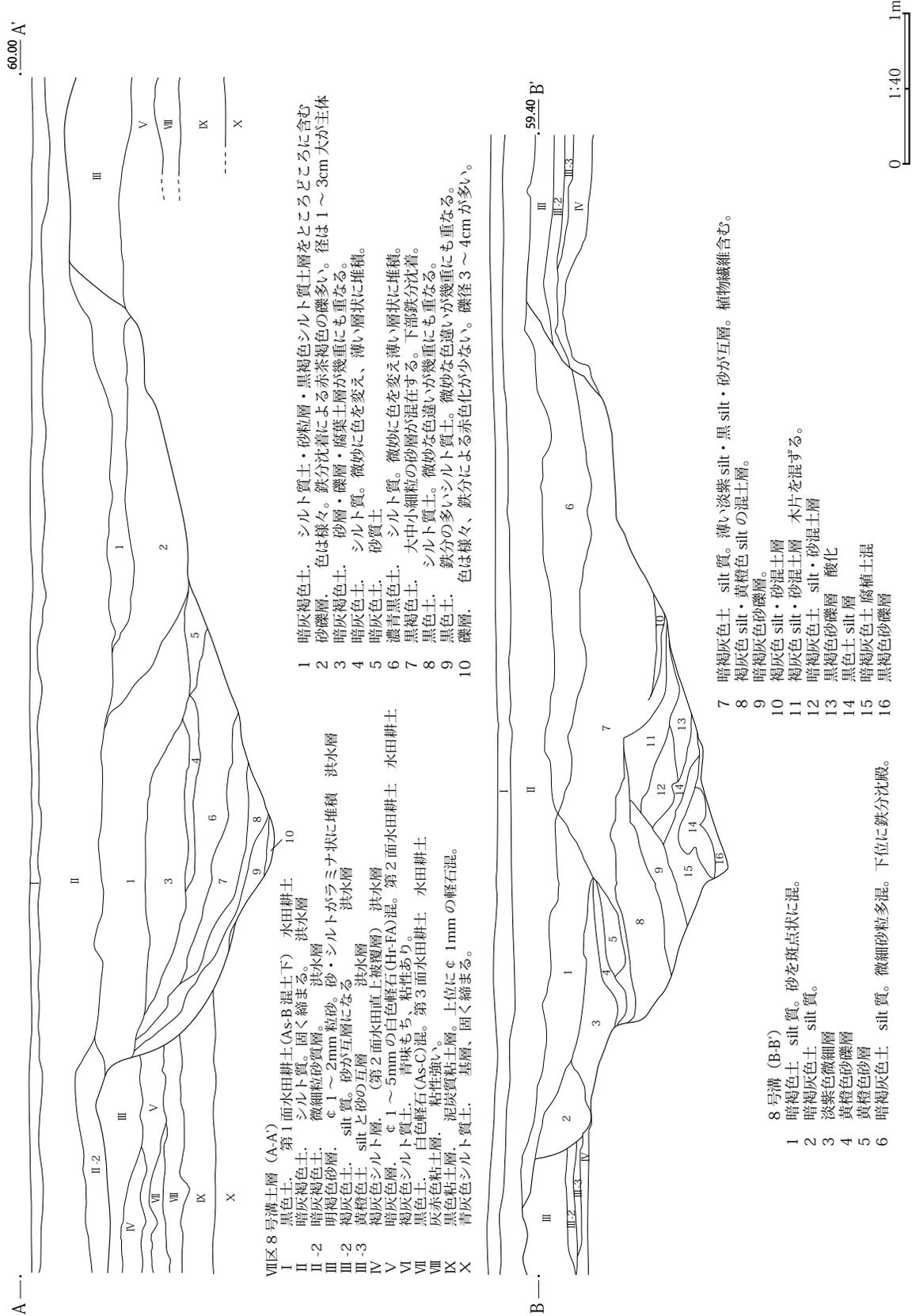
調査区中央部やや西寄にある大規模な溝跡である。軌跡は略南北方向を指向するが、南端では大きく弧を描き南東方に走行し、調査区域外に延びる。北側は既に地方道足利伊勢崎線の部分で大きく蛇行をくり返す溝(河道)として調査されている。検出延長は約83m、上縁幅5.3m、深さ1.2m上縁幅・深さとも調査区北縁の土層断面による)を測る。断面形状は上半が大きく開き緩いU字形を呈するが、中位が段状をなし中央部が幅細に落ち込む。底面勾配は北から南である。

溝の掘り込み面は第2面水田跡を覆う洪水Ⅲ層が捉えられる。水田跡被覆の大別上・下2枚の洪水層のうち下位層である。洪水Ⅲ層の下位層には水田耕土の直上を覆うⅣ層silt層が見られるが洪水層としては同時発生のものであろう。埋土はやはり全体が洪水起源と考えられるsilt・砂層などである。埋土の一部には複数回の洪水状況を思わせる土層堆積状況が見られるが、土質が著しく似通ったもので、土砂流出時の複雑さあるいは激しさが織りなす現象の可能性が高い。埋没後の被覆土はsilt質の洪水層で、この上面は第1面の水田耕土である。

出土遺物は溝筋全体に多くの木材が分布している。人為的投棄に見られるような一所集中な状況ではなく、他所での投棄があったにしても自然の流れによる現位置であろう。木器類としてはとくに、丸木杭、丸太杭が目立つ。



第87図 VII区第2面8号溝

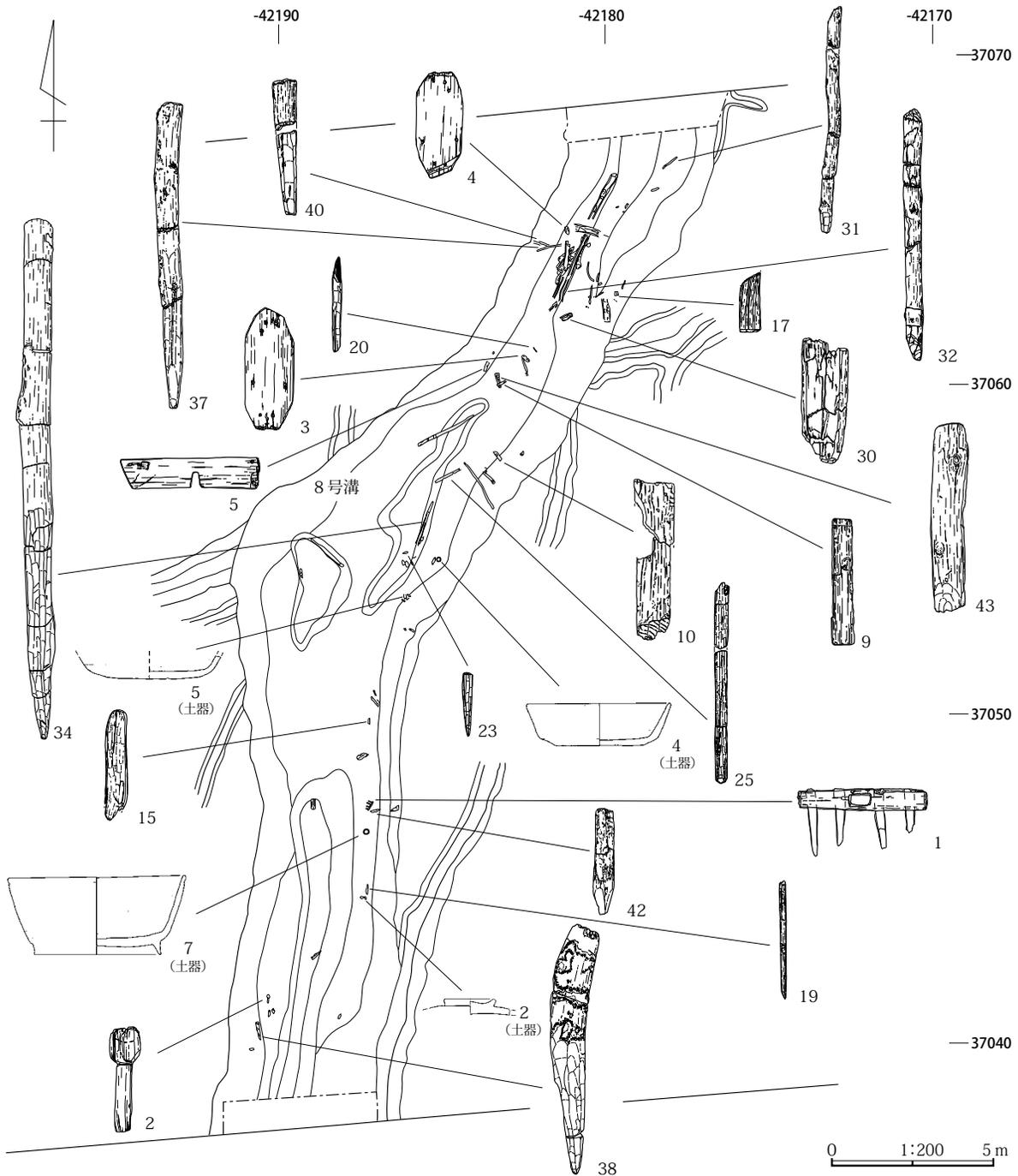


第88図 Ⅶ区第2面 8号溝土層図

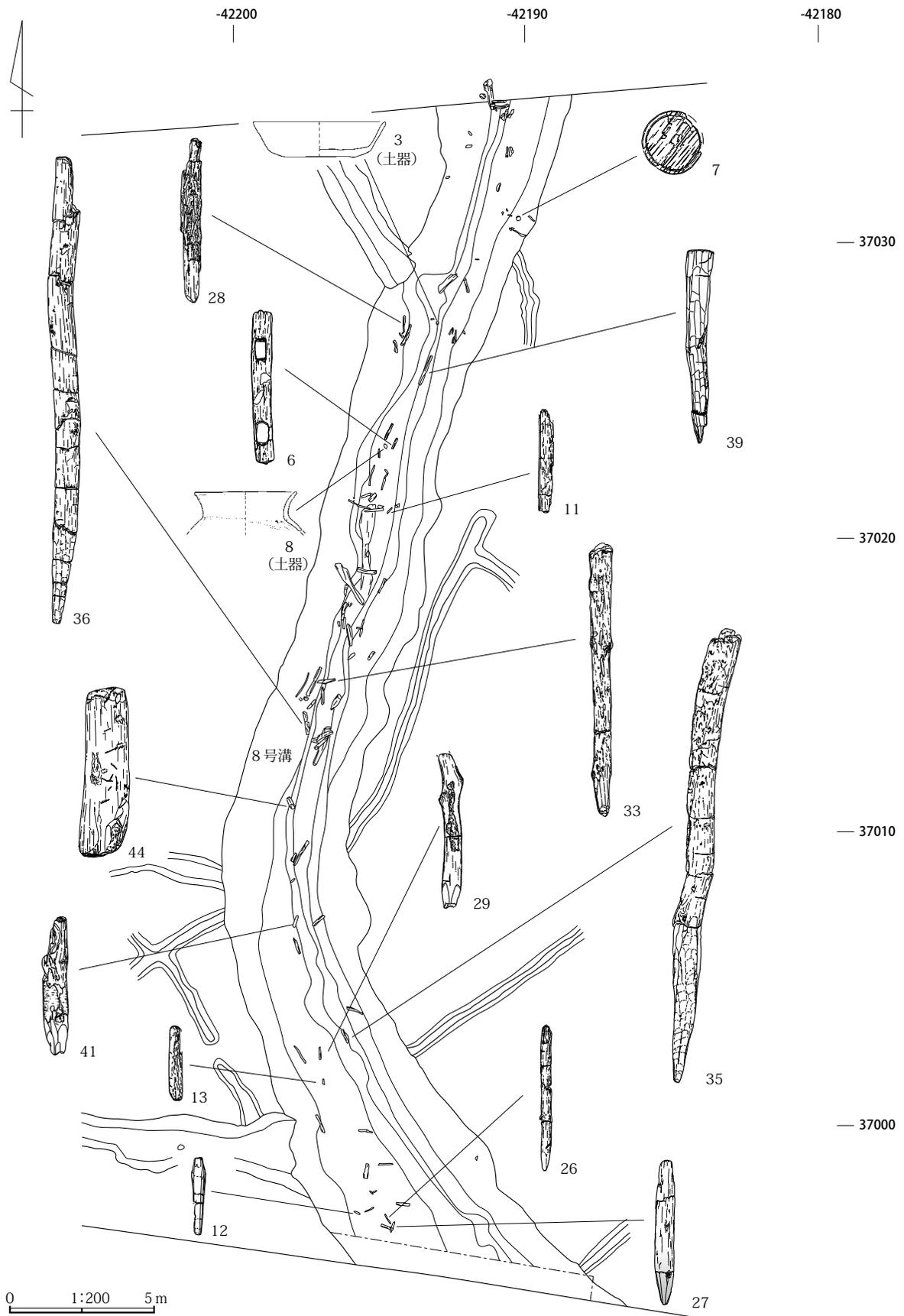
第3章 検出された遺構と遺物

木製品も多種多様で馬鍬、横槌、曲げ物底板、桶底板転用の田下駄、臍穴・くり込みを施す部材、板状加工材、串状木器等がある。土器類は土師器坏・甕、須恵器坏・椀類など8世紀中頃の遺物である。その他小片土器類は多いが8世紀代のものが大半を占める。

8号溝(河道)形成期(発生期)については、底面が2面水田跡とともに3面の水田跡にも達しており、判然としない。出土土器類は極小片のものが多く総点数150余点到すぎない。古墳時代前半ころの土器片も少量見られるが、形状の知り得るものは8世紀中頃の比較的まとまった時代観を示し、長期間の遺構存続は考えにくい。一方では、洪水起源土砂流は5～6様の異なる堆積状況を観察できるが、基本的には自然洪水現象



第89図 VII区第2面8号溝 出土遺物分布図(北半)



第90図 VII区第2面8号溝出土遺物分布図(南半)

の有り様が成せるもので人為開削、自然河道いずれにしろ形成後の埋没過程を示していると思われる。従って、8号溝(河道)は第2面検出の水田跡が洪水層によって被覆された後に形成されたと考えられる。

8号溝が人為的な開削か、自然流水路(河道)かは不明である。当調査区北方で大きく蛇行をくり返す状況とは異なり比較的緩やかな軌跡を保っている。また、壁面や底面掘形の滑らかさや縁線の統一性の様相からは人為的な手が加わっている可能性が高いと言える。

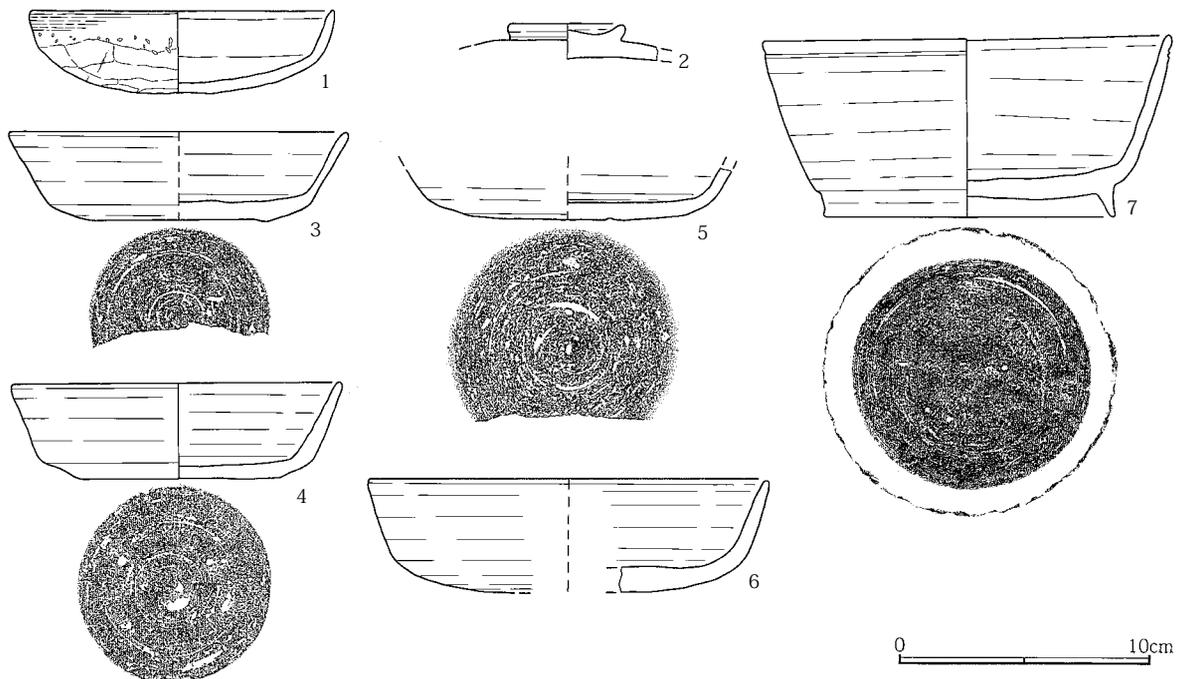
**出土遺物(土器)** (第91・92図、P.L. 42)

1は土師器環。口縁部外傾気味に開き体底部は偏平で浅い丸底。口縁部内外面・見込み部横撫で、体底部外面篋削り。2は須恵器蓋で偏平釘状摘み。3～6は須恵器環。3～5は体部浅く腰部に差し込み整形で二段底をなす。3は外底径11cmで真底は7.3cm。右回転篋削り。胎土中に粘土塊混じり黒色大粒多く混。体部の轆轤目弱い。4は外底径10.5cmで真底は8.0cm。右回転篋削り。見込み部縁はコテ状工具痕。内外面口唇下部は重ね焼による吸炭現象。轆轤目弱。5は外底径11cmで真底は9.0cm。右回転篋削り。重ね焼か。外面

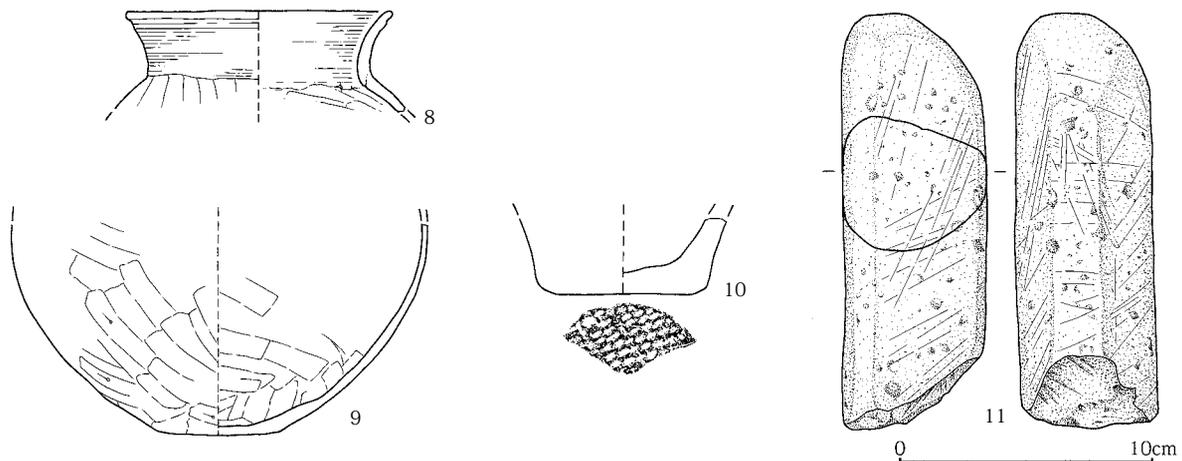
**Ⅶ区第2面8号溝出土遺物計測表(土器)**

単位 cm

番号	器種	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器環	埋土	12.3		3.2		細土	橙7.5YR6/8	良好	
2	須恵器蓋	埋土	摘4.6		1.2		細土	灰白5Y7/1	やや軟	
3	須恵器環	埋土	13.8	7.3	3.5	全	細土	灰白5Y7/1	良好	
4	須恵器環	埋土	13.4	8	3.8	略完形	細土	灰白7.5YR7/1	良好	
5	須恵器環	埋土		9	現高 2	底部3/4	細土	灰白2.5Y8/1	やや軟	
6	須恵器盤	埋土	16.2	13	4.5	全1/4	細土	赤灰7.5R6/1	良好	
7	須恵器椀	埋土	16.8	11.7	7	完形	細土	黄灰2.5YR5/1	良好	
8	土師器甕	埋土	10.6		現高 4	口縁1/4	細砂混	鈍黄橙	良好	
9	土師器甕	埋土		4.9	現高 8	下半1/2	細土	鈍橙7.5YR7/4	良好	
10	縄文土器深鉢	埋土		6	現高 3	底部1/4	細土	鈍橙5YR6/3	良好	網代底
11	砥石	埋土	16.3	5.7	5.3	片端欠		粗粒輝石安山岩		転石利用



第91図 Ⅶ区第2面8号溝出土遺物(土器)(1)



第92図 VII区第2面8号溝出土遺物（土器）（2）

に吸炭。6は体部浅く腰に丸味。底部は肥厚し不定方向の手持ち篋削りか。轆轤目弱。7は須恵器椀。体部直線的で深く、腰部の張りは小さい。付け高台は薄手で低く、端部は鋭く細まり三角形。内外面口唇部下に1条の凹線巡る。底部右回転の弱い篋削り、轆轤目弱。8・9は土師器甕。8は肩部強めに張り、口縁部は外傾して立ち上がり外反する。9は小径な底部でやや凸気味な不安定。胴下半縦、腰部は斜位の篋削り。内面不定方向の撫で。10は縄文式土器、小型深鉢になろうか。網代目底。11は長径転石利用の砥石か膨面が磨れて3面が平滑になる。粗粒輝石安山岩。土器類はおおよそ8世紀の中頃の所産になろう。

#### 出土遺物（木器）（第93・94・96・97・98・99図、P L. 45・46・47・48）

1は馬鋤。台木とこれに埋め込まれた4本の歯が残る。出土品馬鋤の歯数は9～11本が一般的とされる。台木は残存長30cm、5×5cmの角材で上下に貫通する方形孔2.3～2.7×2.0cmを穿ち、歯を挿入する。歯は基部を方柱状にして先端部を剣先状に尖らす。残存歯最長は11cm(含む台木16cm)、歯の心々間は内側2歯が9cm、内側2歯と各両端歯の心々はともに7cmである。台木側面、内側2歯の間に5×3cmの方形孔が貫通する。台木に装着する部材は歯の他に、牛馬に繋ぐ引き棒、使用者が握る把手付き柄がある。引き棒は埋め込まれた歯の両端から1歯と2歯の間に装着する例が多い。本例は残存4歯の間に孔を穿っており、使用者の握る柄の可能性が高く柄孔が側面につく形態のものであろう。

2は横槌。敲打部小さく節部を使用する。側面の摩滅または使用によるおもわれる欠損が見られる。柄部は長めである。敲打部・柄部ともに角取り。全長24cm、敲打部長さ8cm、一辺6cm前後の方形、柄部長16cm、3.5×2.7cmの方形。工具用か。

3・4は田下駄。片面縁沿いに側板結合用の溝を彫り込んであることから(カキゾコ)、曲げ物蓋板の転用であろう。7孔を穿つが挿図上端の3孔の内脇下にある1孔と、中央やや下位の左右2孔が鼻緒になり、現代の下駄と同じ縦長の田下駄になる。上下端の各2孔は他の部材に取り付けるための結束孔である。(輪かんじき型、木器集成図録 近畿原始編 奈良文化財研究所) なお、2点の下駄は外枠の大きさに若干の違いがあるものの、鼻緒孔の間隔がほとんど一致するところから一対であろう。

5は台座などの部材になろうか。曲げ物蓋板の転用品であろう。片面の縁に側板結合のための溝を彫り込んである。溝の形状は3・4の田下駄と共通である。右縁は底板の曲線を示す。長辺片縁に組み込みの挟りを入れ、上縁両端部に小孔を穿つ。

### 第3章 検出された遺構と遺物

6は組み合わせ車輪枠の継手部材内輪になろう。厚みのある角面整形材で緩く湾曲する。両端に出柄を作り出すが欠損。平面両端寄りに方形2孔を穿つ。両端の出柄は車輪枠の入柄と組合うと考えられる。方形の2孔は車輪の輻(ふく)(spoke)の挿入孔。全長(出柄除く)40cm、幅5.6cm、厚さ2.3cm、輻孔径は表面右が5.4×3、左6.3×3.3cm、裏面右が5×3.1cm、左が5.5×3.4cm、両輻孔内縁間は16cmである。

7は曲げ物蓋板。周縁に片切りの溝を巡らし、側板結合のための2孔一対を4カ所に穿つと思われる(縁辺欠損で不明瞭)。1孔に樺皮紐(?)が残る。木釘の有無は不明。

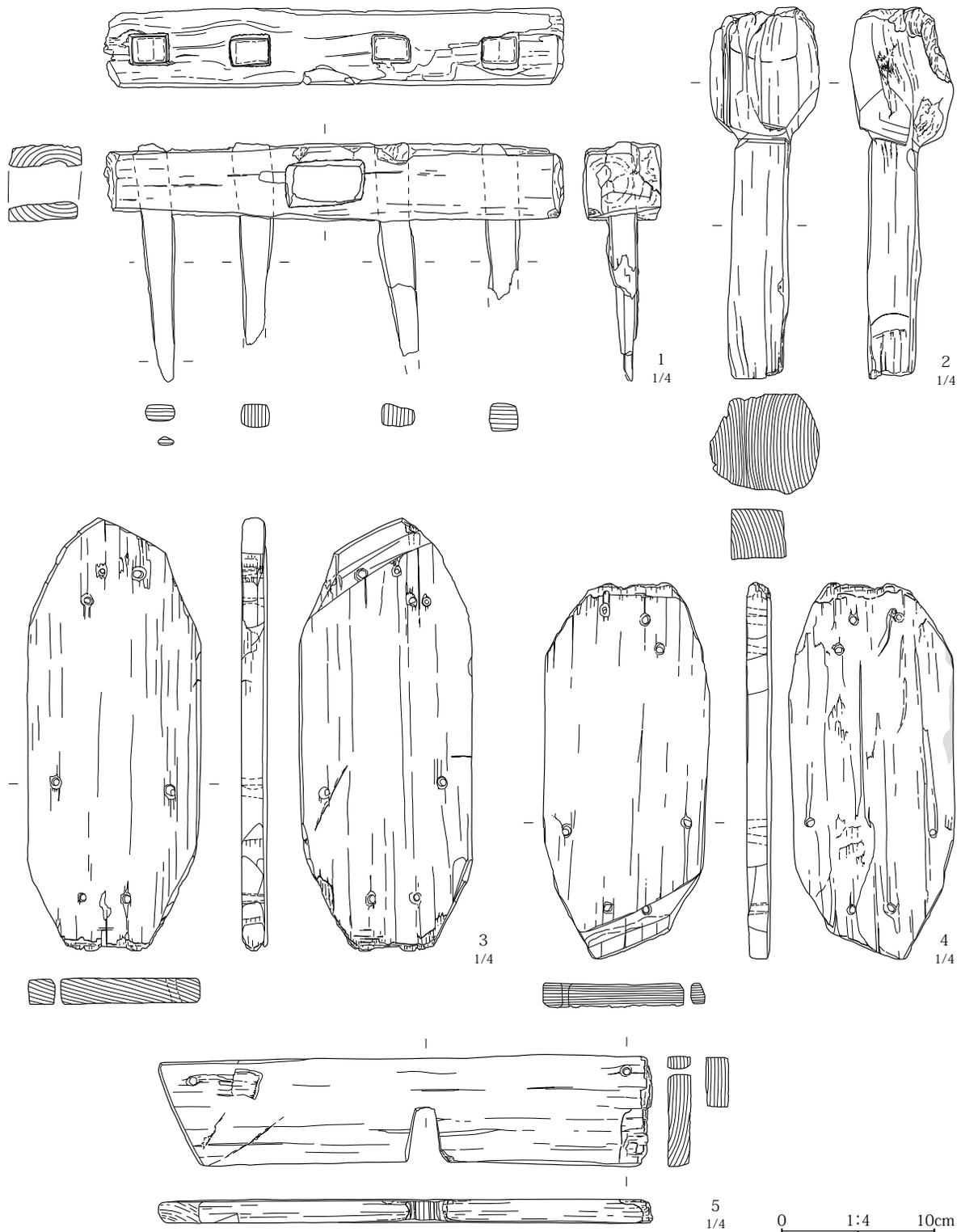
8は半欠で球体を思わせる。表面は滑らかに磨かれる。用途不明。9~11・17は板材。9の片面端部に小さな段を切り込む。17の片面端部に切り込み痕が残る。曲げ物蓋板の転用残欠か。12~15は用途不明の部材。12は面取り状に木面調整。他は滑らかな木面。

Ⅶ区第2面8号溝出土木器計測表

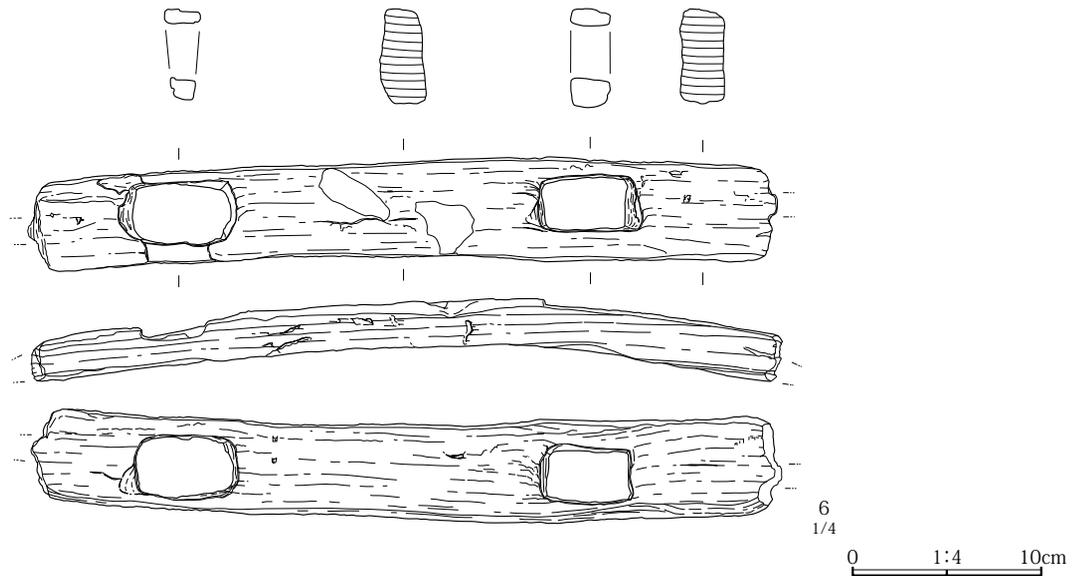
単位 cm

図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種	備考
第93図-1	馬鍬	30×13×3	台は心材	本体ヤマグワ、歯アカガシ亜属	台木・歯
第93図-2	横槌	23×7×6		クリ	
第93図-3	台座部材?	32×8×1.5	板目材	スギ	
第93図-4	田下駄	24×11×1.5	板目材	スギ	桶底板転用
第93図-5	田下駄	28×11.5×1.5	板目材	スギ	桶底板転用
第94図-6	車輪	33×3×3	柁目材	アカガシ亜属	車輪枠
第96図-7	曲げ物	15×0.7×	板目材	ヒノキ	底板
第96図-8	不明(球体)	13.1×9.5×5.9	心材	クヌギ節	
第96図-9	板部材	29.2×5.3×1	柁目材	スギ	組部材
第96図-10	板部材	37.1×9.4×1.2	柁目材	スギ	
第96図-11	板部材	26.7×3.8×1.4	柁目材	スギ	
第96図-12	角部材	20.2×3.7×2.1		アカガシ亜属	
第96図-13	板材	19.3×3.5×1.1	板目材	針葉樹	角滑らか
第96図-14	板材	16.3×4.3×1.4	板目材	スギ?	角滑らか
第96図-15	厚手板材	25.4×5.2×2.6	板目材	針葉樹	角滑らか
第96図-16	やや厚板材	15×4.3×1.6	柁目材	スギ?	角滑らか
第96図-17	板材	13.7×4.9×1.2	柁目材	スギ	片面切り込み
第97図-18	串状品	23.9×1.4×1.7		針葉樹	焦げ痕
第97図-19	串状品	27.3×1.5×0.9		スギ?	焦げ痕
第97図-20	串状品	21.9×2.2×1.3		針葉樹	
第97図-21	串状品	22.1×1.7×1.1		針葉樹	
第97図-22	串状品	21.9×3.1×1.5	柁目材	針葉樹	転用材焦げ痕
第97図-23	串状品	14.6×2.3×1.2		スギ?	
第97図-24	串状品	13.6×2.2×	丸木材	コナラ節	片削り
第97図-25	棒状品	46.3×3.2×	丸木材	コナラ節	
第97図-26	杭	37.7×2.6×	丸木材	針葉樹	
第97図-27	杭	37.3×4.9×	丸木材	クリ	
第97図-28	杭	42.4×5.5×	丸木材	クヌギ節	
第97図-29	杭	39×4.5×	丸木材	クヌギ節	
第97図-30	角部材?	28.8×10.7×5.3	丸太材	スギ	丸太破材?
第98図-31	杭	52.3×3×	丸木材	アカガシ亜属	
第98図-32	杭	58.2×4.3×	丸木材	アカガシ亜属	
第98図-33	杭	71×5.6×	丸太材	スギ	
第98図-34	杭	120×6.9×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第98図-35	杭	110.8×7.4×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第98図-36	杭	12.8×6.7×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第99図-37	杭	77×5.5×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第99図-38	杭	57.7×8.9×	丸太材	クヌギ節	先4面削り
第99図-39	杭	50×7×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第99図-40	杭	31.4×5.6×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第99図-41	杭	35.6×6.5×	丸太材	コナラ節	先4面削り
第99図-42	杭	24.3×4.9×	丸太材	ホオノキ	先4面削り
第99図-43	杭	43.7×8.3×	丸太材	コナラ節	
第99図-44	杭?	44.2×12.3×	丸太材	アカガシ亜属	

18~24は串形品。18は両端を尖らす。先端部または全体が炭化しているものが多い。25は棒状製品。全体に削り調整。片端は面取り状に削る。30は角材状破材。26~29・31~33は径5cm前後の丸木杭。先端部は多面または3面の削り落としとして尖らす。34~44径5cm以上の丸太杭。先端部は基本的に4面削り落としで尖らす。



第93図 VII区第2面8号溝出土木器(1)



第94図 VII区第2面8号溝出土木器(2)

**車輪復元 (1/15) (第95図)**

部材木器(第94図、P L. 45-6)の観察を通して、内輪(車輪外縁の継手)案に至る経緯は次のようである。本資料は緩い湾曲のある部材である。両端に出柄(ほぞ)の痕跡を認め、入柄部材との結合を連続した場合、輪状になる。この形態は『木器集成図録 近畿古代編』奈良文化財研究所 収録の運搬具 車輪項で組合せ車輪断片資料に酷似し、同書の(P L. 12、1203~1207。出柄と入柄とつないで輪とし、長方形の孔に輻を挿入・・・)という解説にほぼ一致する。

本部材の長さ40cmで、湾曲から径を算出するとほぼ円周540cmとなり、輪の内縁直径は172cmの大きさになる。部材の仕様に比べて大径輪のため外縁に鉄輪を取り付け、部材結合の強度と木地の保護を得たものと考えた。上記想定の下付けとして、鉄輪装着に使用したであろう釘留めの痕跡がなかろうかと観察したが見いだせなかった。さらに、車輪算出径の大きさの割には、部材の厚みが貧弱であること、結合の安易さと脆弱さが鉄輪を嵌め込んだとしても、この木器資料そのものが車輪であるとするには大きな疑問となった。この時点で編者はまだ、古代の車輪構造(例えば内輪・外輪ともいうべき部材の組み合わせ)を理解しておらず、そのことから生じた外的な疑問であった。

絵巻物には牛車が多く描かれており、『一遍上人絵伝』・『石山寺縁起』などに描かれた荷車や牛車の絵図から、本資料は車輪本体ではなく分割された車輪外縁材を繋ぐ部材ではないかと考えた。出柄は外縁材に作られる入柄と組み、輻は継手孔を貫き外縁材に嵌め込まれて固定され結合の強度を増したものであろう。復元には『石山寺縁起』十五紙・十六紙の荷車を参考としたが、『縁起』例は車輪継手6分割である。部材算出車輪径(内径)に6分割を単純に割り振ると、本資料の継手にある2本の輻間隔と車輪外縁部装着の輻間隔が異なり構造的に矛盾が生じる。また、復元車輪自体も2mほどで大径に過ぎる感がある。

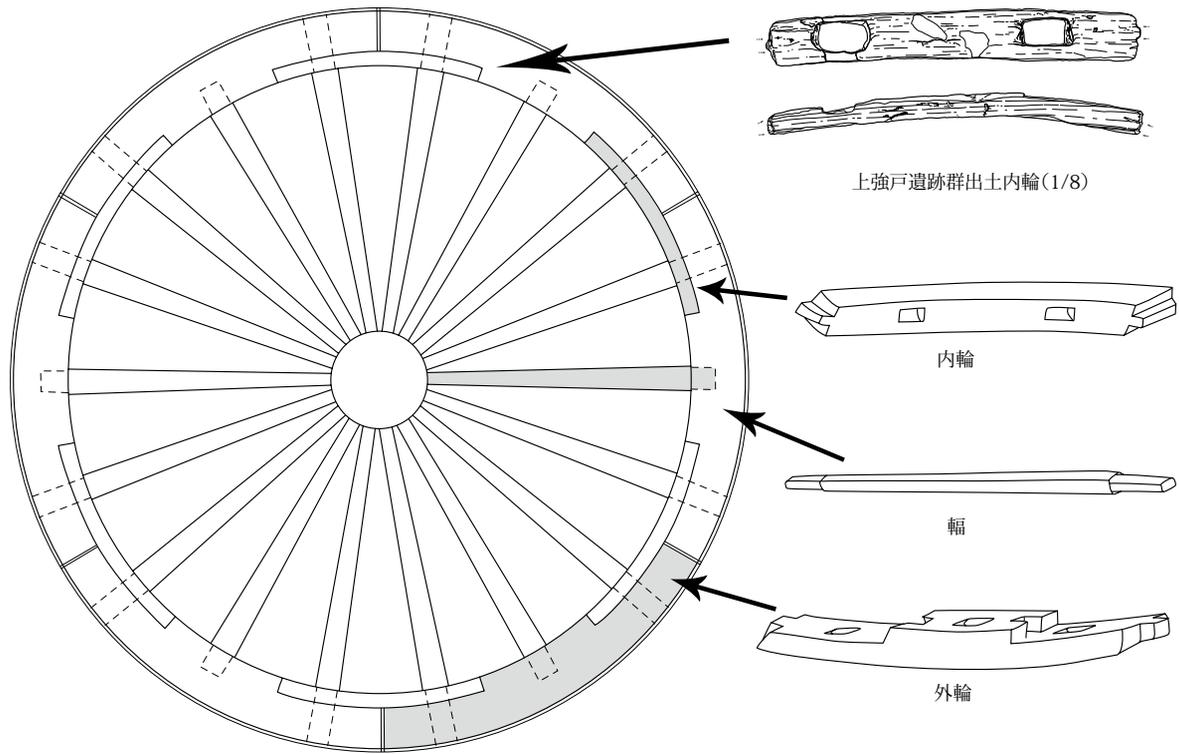
構造上で最も重要な単位は輻の間隔と考え、継手輻孔心間21cmを基本に輻18本から約378cmの円周、直径(内径)約124cmを得た。本資料の継手長と2カ所の輻孔間隔で18本の輻を均等配置した。復元図は『縁起』の車輪図より外縁径を推定加算したもので、車輪外径150cm弱ほどになる。なお、接地する車輪の輻は部材より約5cmであるが、長岡京跡の調査で検出された牛に引かせた造営用車の轍(わだち)跡では車輪輻は10cmとみられている。群馬県内では太田市(旧新田町)下新田遺跡の道路遺構で轍状の痕跡がある。

車輪部材の出土例には京都府仁和寺子院の井戸跡より外輪(大輪)が2枚出土している。復元された車輪は直径1.44mで、7分割の外輪構成で輻は21本と推定されている。また、奈良県桜井市の小立古墳出土の資料は車輪の各部材が組み合わされた状態で外輪3点、内輪3点、輻7点などが出土している。車輪径118.8cmで、5分割の外輪構成が考えられている。

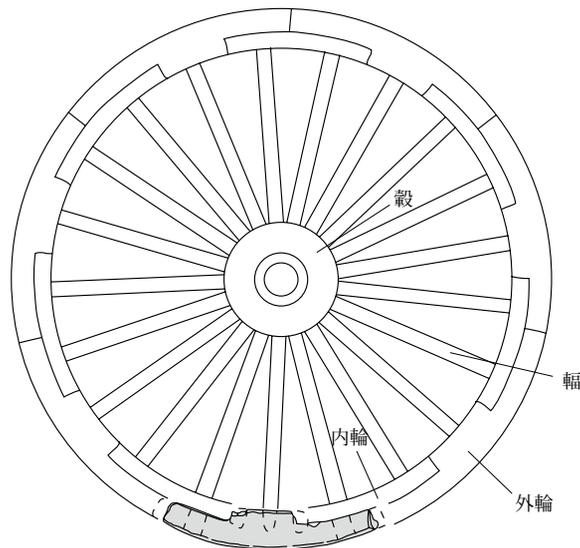
参考・引用文献

『石山寺縁起』日本の絵巻16 中央公論社 1993。『国史大辞典』吉川弘文館 昭和59年 第4巻。『講座・日本技術の社会史第八巻交通・運輸』日本評論社1985。『下新田遺跡』新田町教育委員会1992。村上和直「仁和寺子院出土の車輪」・橋本輝彦「奈良県桜井市・小立古墳出土の車輪について」『古代交通研究』第13号古代交通研究会2003年度

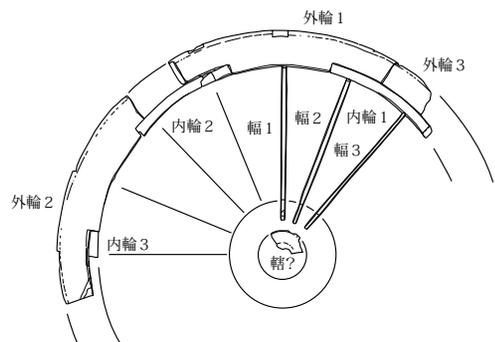
なお、車輪及び道路遺構についての史料は太田市教育委員会文化財課 小宮俊久氏よりご教授をいただいた。



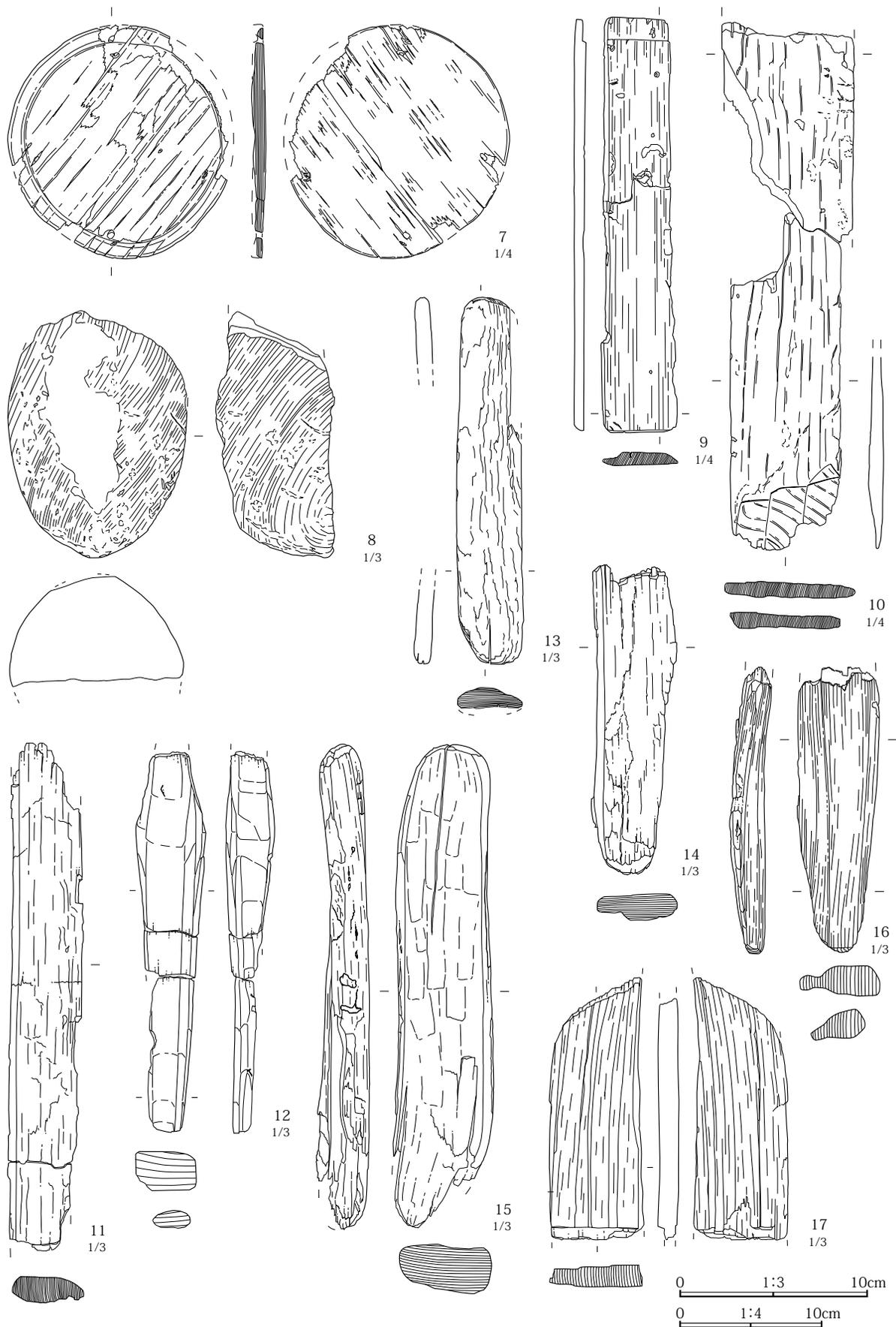
第95図 上強戸遺跡群VII区第2面8号溝出土の車輪復元図(1/15)



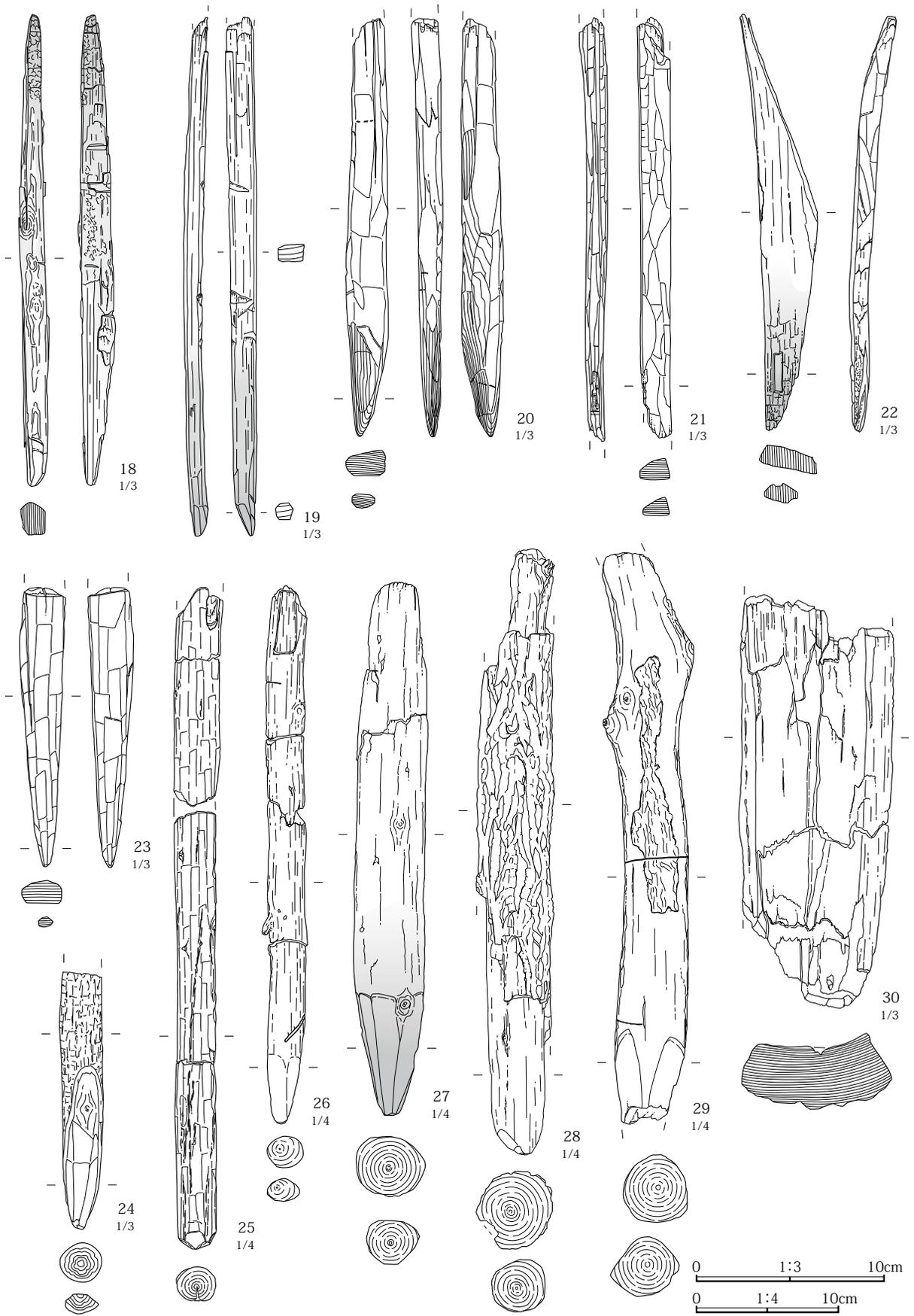
仁和寺子院出土の車輪復元図(1/20)  
〔村上和直 2003 一部改編〕



小立古墳出土の車輪復元図(1/20)  
〔橋本輝彦 2003 一部改編〕



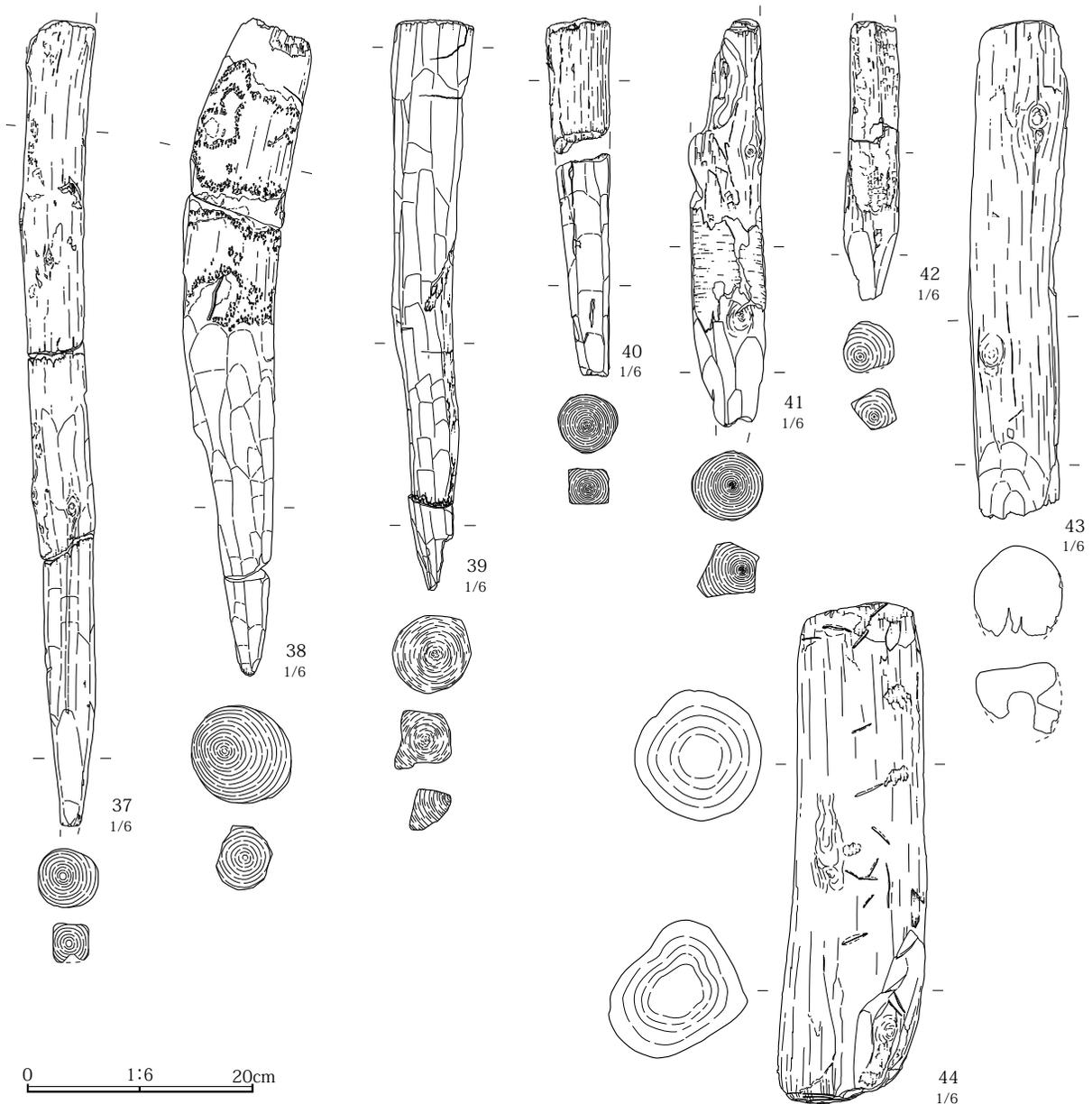
第96図 VII区第2面8号溝出土木器(3)



第97図 VII区第2面8号溝出土木器(4)



第98図 VII区第2面8号溝出土木器(5)



第99図 VII区第2面8号溝出土木器(6)

**10号溝** (第100・101図、P L. 21)

調査区中央やや東寄りに検出され、軌跡は直線的でほぼ南北走る。南・北端は調査区域外に延びるが、北側は8号溝と同様に地方道足利伊勢崎線調査によって確認されている。検出延長は約80m、上縁幅4m、深さ1m前後(上縁幅・深さとも調査区北側の土層断面による)を測る。断面形状は大きくU字形を呈する。底面の勾配は北から南に下る。

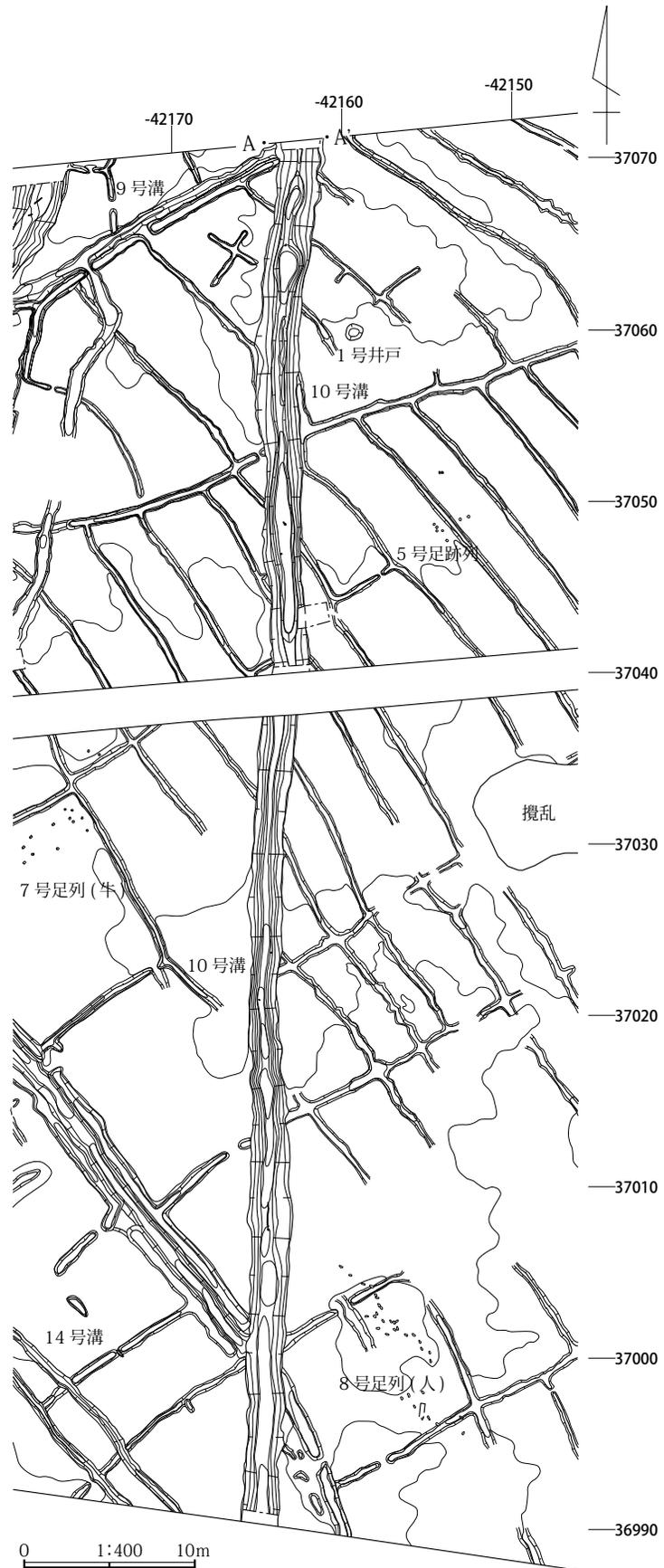
溝の掘形面は8号溝を覆う洪水Ⅱ層で、第2面水田跡被覆土の大別2枚の上下層のうちの上層である。埋土は最下位層に砂礫層が、上位にsilt質の厚い土層が堆積する。埋没過程は比較的単純な土層堆積状況から短期集中的であったことが窺われる。10号溝埋没後の被覆土は第1面の水田耕土である。

出土遺物は土器類に限られ、8号溝に見られるような木材・木器の出土は無い。土器は小片合わせ50余点にすぎない。形状の知り得るものは平安時代前半期の土師器・須恵器の坏類数点である。

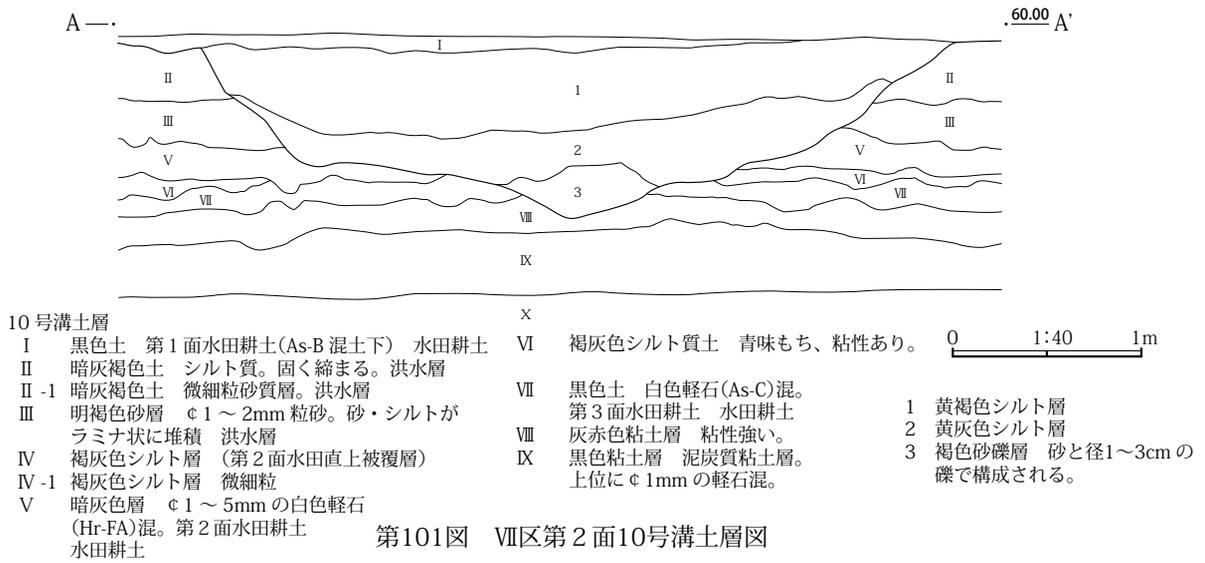
10号溝の形成時期と存続については、出土遺物の量とその時代相、掘り込み面や埋没土層堆積の単調さを勘案すれば8世紀末～9世紀前半代の比較的短期間の所産と考えられる。

**出土遺物** (第102図、P L. 43)

1・2は土師器環。1は体部偏平で指頭成形後弱い篋削り、縮み皺状の痕跡顕著。口縁部横撫で、口唇部内屈気味に丸まる。底部平底気味で不定方向の篋削り。2は体部指頭痕残り、上半横撫で、下半篋撫で。口唇部は細まって内屈。3～8は須恵器環。3は体部に丸味をもち口縁は内湾気味に開く。腰部に弱い差し込み。底部に「子□」の墨書。右回転糸切り。4は体部内湾気味に開き、腰部に弱い差し込みを入れ底部との境丸味を作る。底部右回転篋削り。5は体部内湾気味に開き、腰部丸い。底部右回転篋削り調整。6は体部内湾気味に開き腰部丸い。器肉薄い。底部右回転篋削り調整。口縁部外面に吸炭帯巡り重ね焼き痕。7は腰部に差し込み。器肉厚目。内外面燻し焼成様。底部粗目な右回転糸切り。8は腰部に差し込み。内外面燻し焼成様。底部右回転篋削り調整。9は椀底部。薄手の付高台。内外面燻し焼成様。底部右回転篋削り調整。10は古墳時代前期の台付甕の台部。端部は素縁、胴部の接面には砂土の塗布なく単口縁甕。外面縦～斜方粗目掻き目。



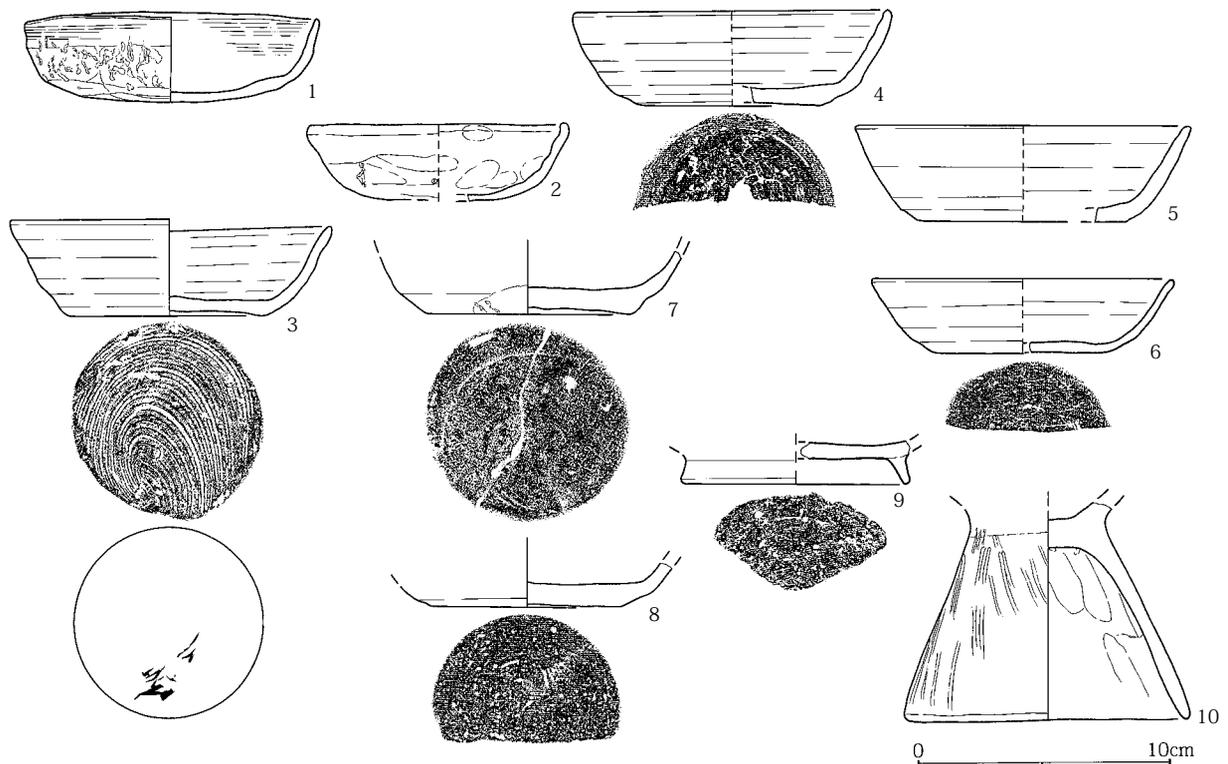
第100図 VII区第2面10号溝



Ⅶ区第2面10号溝出土遺物計測表 (土器)

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器杯	埋土	11.6		3.2	全2/3	細土	橙5YR7/6	良好	
2	土師器杯	埋土	10.4		3	全1/4	細土	橙7.5YR7/6	良好	
3	須恵器杯	埋土	12.7	7.5	3.5	完形	細土	灰白7.5YR7/1	良好	「子口」墨書
4	須恵器杯	埋土	12.6	7	3.5	全1/4	細土砂粒少	灰N/4	良好	
5	須恵器杯	埋土	13.4	8	3.8	全1/4	細土	灰白7.5YR7/1	やや軟	
6	須恵器杯	埋土	12	6.4	2.9	全1/4	細土	灰白7.5YR7/1	やや軟	
7	須恵器杯	埋土		8	現高 3	体部上半欠	細土	燻し黒	軟	
8	須恵器杯	埋土		7.5	現高 1.7	底部1/2	細土	燻し黒	やや軟	
9	須恵器碗	埋土		9.4	現高 1.5	底部1/4	細砂粒多	燻し黒	やや軟	
10	土師器台付甃	埋土		11.5	現高 8.5	台部1/2	砂粒多	鈍橙5YR7/4	良好	単口縁



**水田跡**（第103図、P.L. 20・22・23・24・25）

水田跡は第1面水田跡下に堆積する2度にわたる洪水層に被覆されている。この洪水層は西側に続くⅥ区検出の同面水田跡にも及んでいるが、地形の高低差のためか洪水層の状況はかなり異なってⅥ区では比較的薄い被覆となっている。

第2面において検出された水田総区画数は133区画である。区画形状はかなりの長短軸長差のある長方形区画と、略方形の形態に大別される。水田造成の大まかな傾向は、調査区中央やや西寄りで南方へ広がりを見せる低地帯を境に東・西側で方形長短軸の取り方が異なる。低地帯の東側では南西方向の、西側では南東方向への傾斜に短軸を設けそれぞれ地形等高に対応したものとなっている。また低地帯では正方形にちかい区画である。このような水田区画の造成方法は西隣Ⅵ区でも施されているもので、当区西方部はⅥ区の北西部と同様な低地帯の正方形様区画がそのまま続いている。水田耕土はHr-FAを混ざる暗灰色土である。

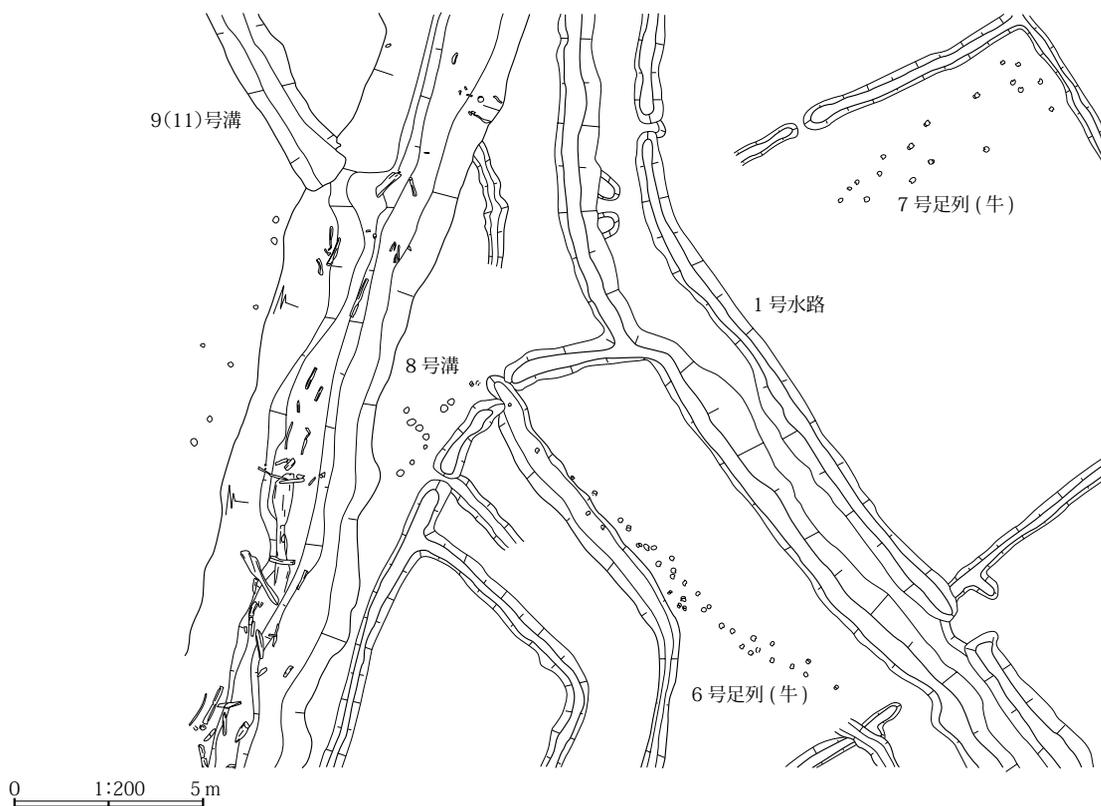
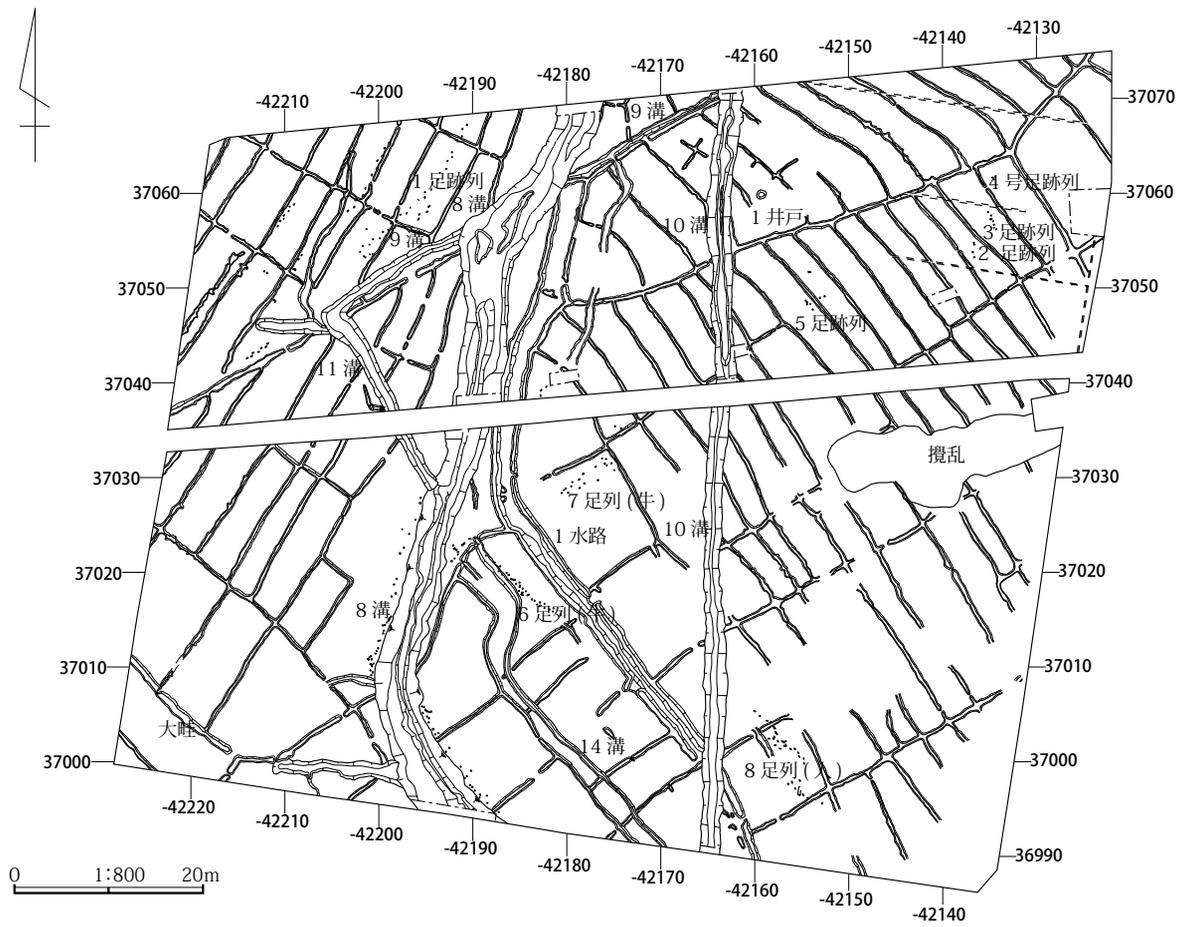
灌漑配水については、区画畦に設けられる水口の開部のあり方によっておおよその復元が可能になる。しかしながら、Ⅶ区水田区画では水口の存在が極めて少なく、希に区画長辺に設けられるが短辺にも皆無ではない。少ない上に規則的な配慮が認められないこのような状況は、水田区画の造作が異なる調査区の東半と西半でも同じである。灌漑水はどのような方法によったものか明らかではないが、高所区画から低位区画へ順次の越流方式でもあろうか。いずれにしても基本的な水流筋は大まかな地勢から、中央部低地の東側では北東から南西方へ、西側は北西から南東方になる。水田区画の造成は調査区に限って見ても東西の地形の差異を考慮して行われていることは一目して理解される。また給排水については、1号水路の位置からして給水よりは排水の機能に重点が置かれていて様である。

Ⅶ区水田跡における大部構成体としては、比較的高まりの明瞭な1号～3号畦や中央低地帯に設けられた1号水路、方形区画を意図したような9号溝(11号溝)などの施設がある。それらの検出状況からは水田造作に幾度かの変更が試みられたことが窺われる。諸施設の切り合い前後関係、並行関係は、中央低地帯(洪水層の水田被覆後に開削ここでは自然流路か人為的かは不問された8号溝)を境に東側と西側でその様相が大きく異なりかなり複雑である。

東側では、3号畦・9号溝・1号水路の3者は共存している。3号畦は9号溝の南縁及び1号水路北縁の堤部で、南に広がる水田区画の短辺畦畔を造る。ただし、9号溝は北側水田区画の畦畔を断ち切っている。3号畦畔・9号溝・1号水路は南側水田区画に対してだけ機能していた状況を示している。少なくとも1回は当初の水田造作に改変の手が加えられていることになる。

8号溝の西側では3号溝と9号溝及び水田区画の関係が一変する。3号畦畔は9号溝に平行走するが間隔を生じて堤機能から離れ単独畦畔となる。東側では主幹畦畔的区画指向に沿っていたが、中央低地帯を挟んで区画方法が異なるにもかかわらず、此处では低地帯西側本来の水田区画を無視したように斜方向に走る。なおかつ、その南側の水田区画を重視するような畦畔結合を行っているように思われる。南西方に平行走する9号溝は、南東方へ直角に折れ3号畦畔を切断する。そして、9号溝は8号溝の東・西両側の水田区画を破壊する。以上のことから、8号溝の西側では3号畦畔と9号溝によって水田造作は2度の改変が行われていることになる。

検出された水田面には地点によって大きく3つの異なる状況が認められている。①畦畔が低く、水田面が平坦。②水田面に凹凸が著しく畦畔が低目。③畦畔が高く水田面が平坦なところ、等である。このような状況から調査時の所見として、洪水層による廃絶直前まで行われていた水田耕起の段階が想定されている。①は耕起前。②は耕起されたが畦畔の造作が未着手。③耕起・畦畔造り終了。このような田植え間近の水田情景が復元され、従って廃絶は5～6月頃に起きた水害によると考えられている。



第103図 VII区第2面水田跡、人・牛歩行軌跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

一方で、水田耕起は営田諸作業の中ではその労働にかなりの比重があろう。多種作業場面を同時並行的に作り出す状況設定にやや無理な面も感じられる。また、上述の水田面の多様な状況は区域内の一定範囲にそれぞれまとまった現象として表れてはいないことから、営農行動としてはやや合理性に欠ける様に思われる。ここでは現象理解として考えられる①～③の水田耕起段階に対し別な解答を示すことはできないが、何度か行われた水田改変と合わせ水田面の状況に検討の必要がある。

水田面には人や獣類と思われる足跡が多数認められる。獣類の足跡は偶蹄類でその大きさから牛の可能性が高く農作業に伴って残されたのではないかと推測された。足跡は重畳著しく、ほとんどのものからは明確な歩行軌跡などを抽出できなかつたようである。図示したものは足跡の歩幅・歩き筋が追えるものであるが、かなり限定的に認識された例である。これらの抽出例では人と牛が連れ添って歩行する軌跡は無く、起耕作業等に牛を使用した証は得られていない。しかし、不規則多数の足跡群で行われた軌跡の抽出経緯からは、人と牛が伴にする作業行為はなかつたとの確証もまた無い。

**畦** VII区に検出された水田跡では、1号～3号の高まりの強い畦畔が確認されている。これらの畦畔は高さや幅の規模からして対外的に域を画する性質のものでは無く、内部区画の便を専らの機能としている主幹畦畔になる。

**1号畦** 調査区北東隅部から中央部低地帯に向かい北西方へ延び、中央部で南北走る1号水路側堤（水田畦畔）に合する。等高線に直交する調査区東半部の水田区画割りの主幹畦である。走方向に区割りの短辺を割り、南北方向に長軸をなす区画を造る。検出延長約63m、畦の上縁幅30～35cm、基底幅60～70cm、高さ20cmを測る。1号畦を境とし、南・北区画の水田面及び畦畔に異なった状況が見られる。南側の水田は滑らかな面をなし、畦畔は整って高目。北側は凹凸のある水田面でなお畦畔は低目で、低地帯までこの状況が続く。越えて西半部水田面は平坦で高目の畦畔となり北西隅部で再び凹凸面の区画が出現する。

**2号畦** 調査区の南西隅部にあり、当区での検出延長は僅か15mにすぎないが西半部水田区割りの主幹畦であろう。走向は等高線に直交する南東～北西方で、西側VI区1号畦に続く南東隅に延長部分が至る。VI区・VII区間の空白地帯を合わせ検出延長は70m強になる。上縁幅40～60cm、基底幅80～100cm、高さ15cmである。

**3号畦** 1号畦の北側でこれと同方向に走行し、水田区画東半域の一角から中央低地帯を越えて西半域に達する。北東～南西走向で調査区北縁中央部から西縁中央部に向かい直線的に延び当区間での検出は67mである。西側VI区の南東隅に延長部分が至り、当区間との空白部分を含めれば検出延長は92mほどになる。上縁幅約40cm、基底幅約70cm、高さ20cmを測る。

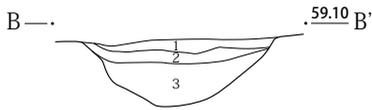
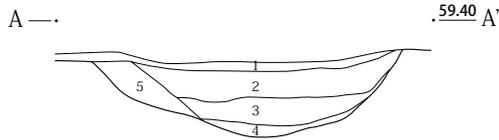
3号畦の北縁は9号(11号)溝が併走し、東半部水田区画帯の一角では溝とその南縁堤の関係で両者が共存併走する。3号畦畔は中央低地帯を過ぎて(8号溝を境に)9号溝と平行走はするものの、両者は50cmほどの間隔を保ち単独の遺構となる。西半部の水田区画帯に対しては、水田の方形区画を無視するような走向での区画割りとなる。3号畦はその北側区画との畦畔結合がなされないか極めて不鮮明であるのに対し、南側では不自然な形ではあるが畦畔結合が行われている。

3号畦は直角に近く南へ折れる9号溝に切断され新旧を示すが、水田区画畦畔もまた9号溝によって破壊されている。3号畦畔と9号溝は互いにも、中央低地帯を挟んで東・西の水田域に対してもかなり複雑な関

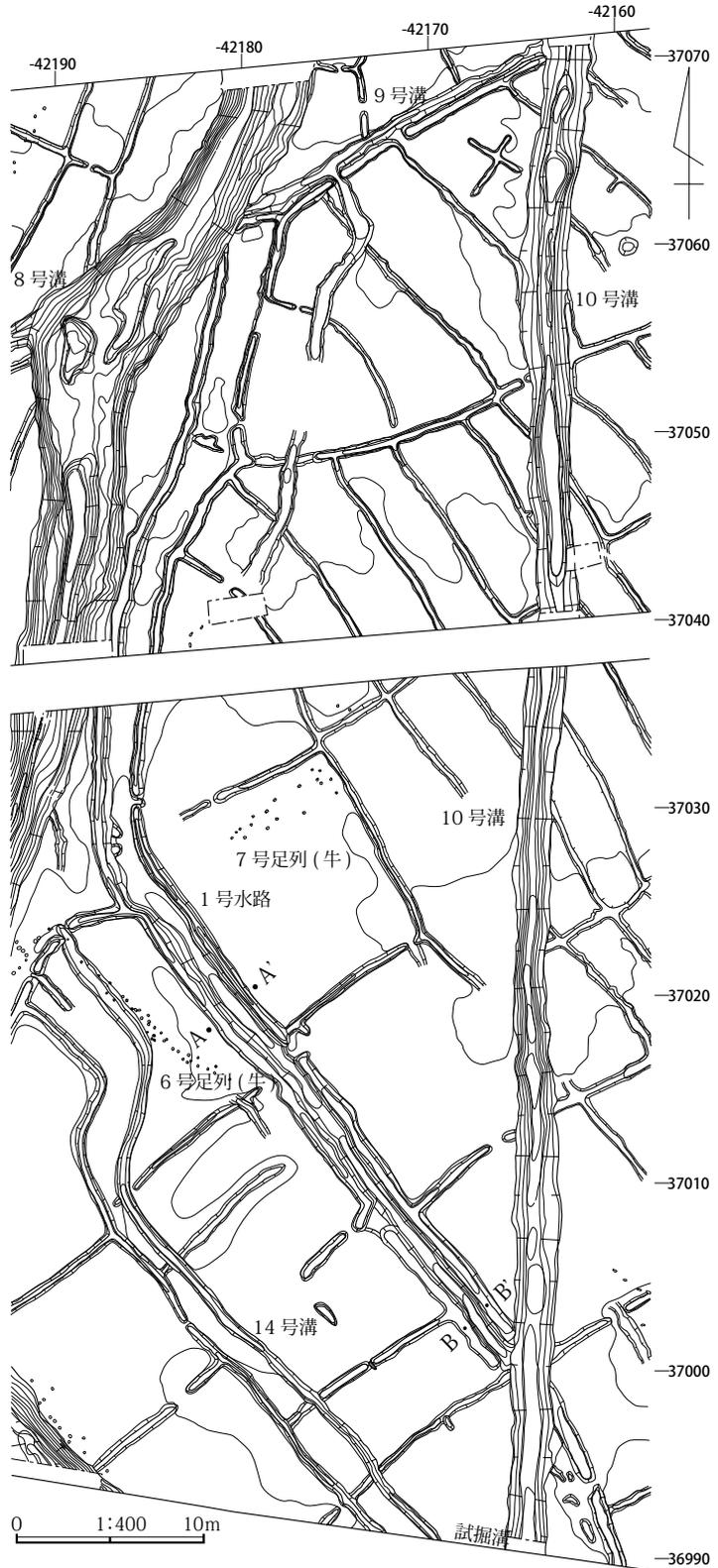
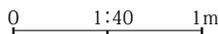
係を示している。3号畦畔と9号溝は、低地帯の西側水田区画に起こったか、または起こりつつあった異変に対し相前後して東半部を防御する結界的な役割を期して施された造作のように思われる。なお、低地帯西側の水田域と3号畦畔・9号溝の直上～下位への洪水堆積層は、砂層・silt層の幾重もの同質薄層で覆われており防御造作の甲斐も無く間もなく洪水の被災に遭ったようである。

1号水路 (第104図、P.L. 24)

中央低地帯を西方に緩く弧を描いて南北走する。北方は3号畦畔に合してこれを限りにし、畦畔の仕切りによって直交する9号溝との同時共存が図られている。左右の縁辺は第2面の水田畦畔を兼ねて堤が沿う。地勢が下方になる調査区南端では溝が細くなり、位置的には10号溝と交差する箇所あたりで単線畦畔となる。水路底面は左右の水田面より低く、排水の機能を主としたものであろう。水口と考えられる畦畔の跡切れは左縁で3～4カ所、右縁では2カ所である。埋土はsilt質土を混入し、底面近くには植物質腐食物が残る。断面形状は緩いU字形を呈する。検出延長は約77m、幅(東西堤頂部より)2.3m、深さ30cmを測る。勾配は北から南へ下る。出土遺物はない。



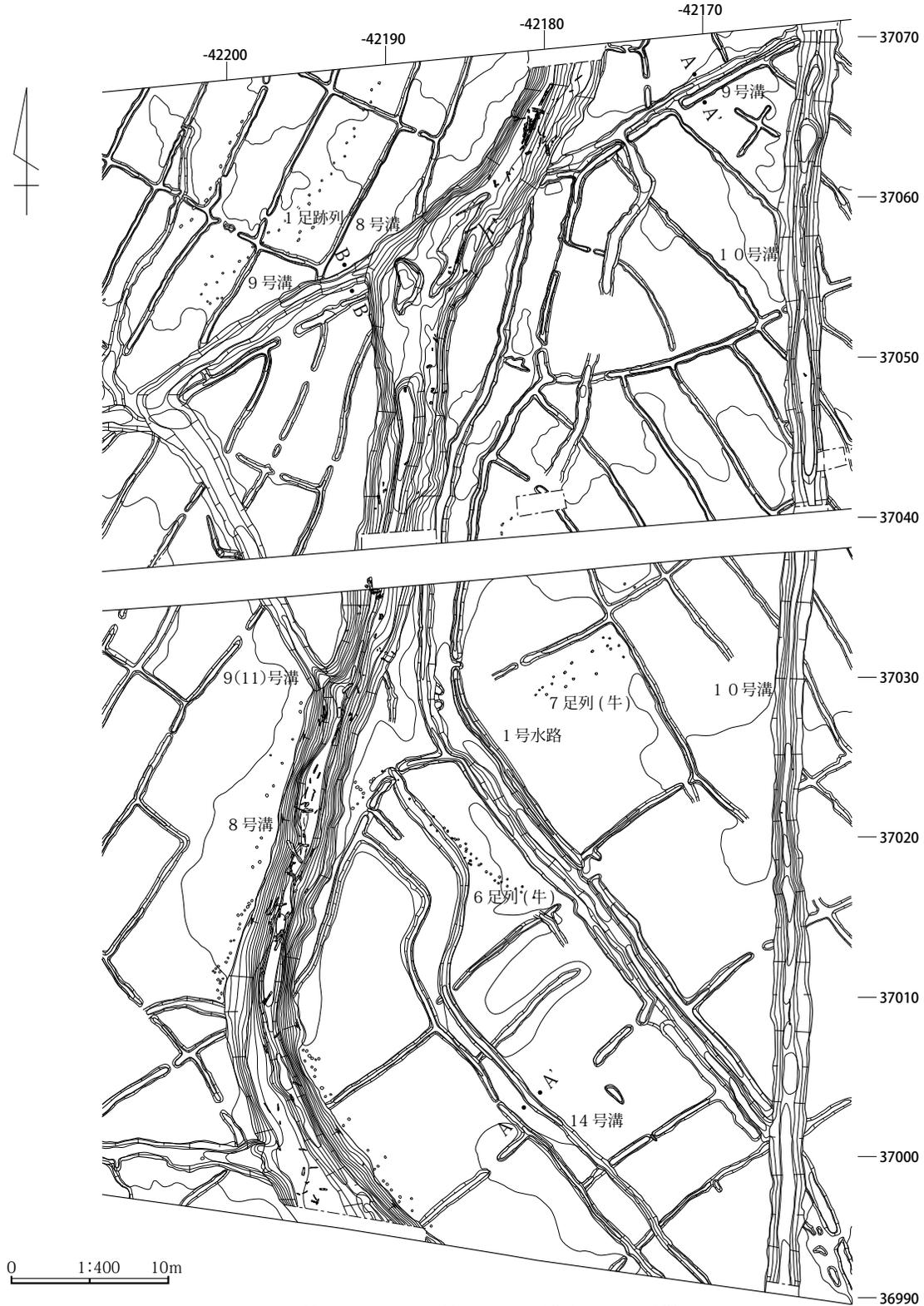
- 1号水路土層
- 1 明褐色土 silt質。緑色化
  - 2 明褐色土 silt質。下位に黒褐色土を混。
  - 3 黒褐色土 silt質。植物繊維質を混。
  - 4 黒褐色土 silt質。植物繊維質多混。粗細粒砂を斑点状に混。
  - 5 暗褐色土 silt質。白色軽石少混。



第104図 VII区第2面1号水路・土層図

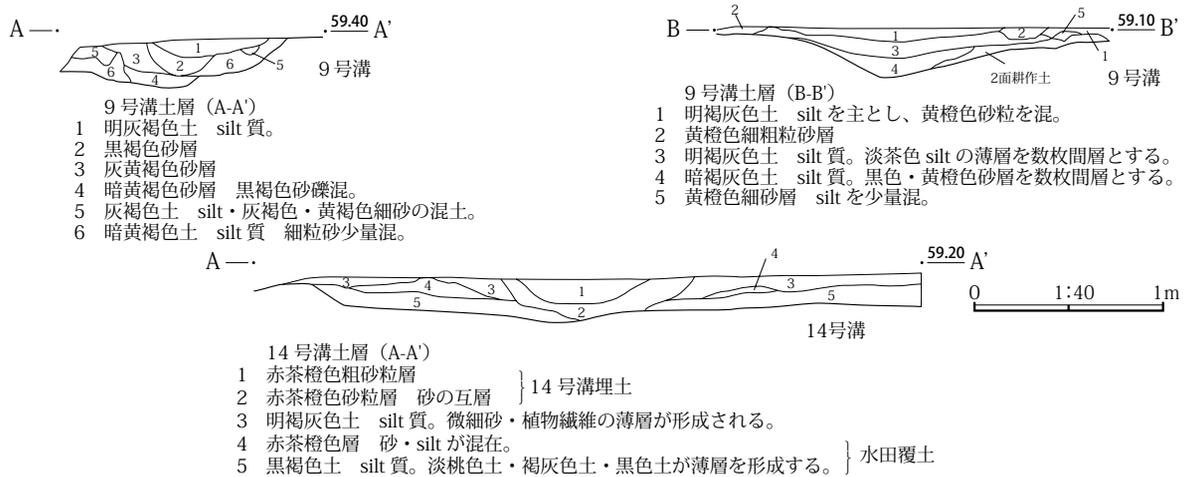
**9号溝 (11号・14号溝) (第105・106図、P L. 20・21)**

調査区北縁中央部から南西方向に直進し、約48mで直角に折れて南東走する。水田区画の主幹畦畔の一つに想定される3号畦畔とは中央低地帯(8号溝)を境に東側では併走共存し、西側では平行して単独遺構になって新旧重複を生じている。9号溝は走行22mで8号溝に合し、軌跡が跡切れる。8号溝による分断の後、



第105図 VII区第2面9号溝(11・14号溝)

3mほどの空間において同方向に溝筋が出現する。幅を細めて一旦南へS字蛇行をし、再び南東方へ伸び調査区域外に入る。調査ではこの部分を別個の遺構として扱い14号溝として認識されていたが、軌跡としては9号溝の連続と思われる。検出走延長約57m、溝幅の最大箇所は直角に折れて方向を変えた部分にあり約2.5mである。深さは25cmを測り、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土はsilt質、砂層を主とした薄層が幾枚も重なり、洪水起源の最下位に堆積する層序を示している。9号溝内の堆積土層及びその堆積状況は中央低地帯西側域の水田面を被覆する土層と一連のものであり、同時存在的な環境下にあったことが窺われる。従って、9号(11号)溝と水田跡とは重複前後関係があるものの、その時間差についてはかなり短期間であったと考えられる。3号畦畔との共存及び切り合い関係については、3号畦畔の項で述べたが区画形状を違える西側域の水田に起こった異変に対し3号畦畔と相前後して採られた東側水田保持への予防・防衛的施設と考えられる。



第106図 VII区第2面9号溝(11号・14号溝)土層図

**VII区第3面の遺構と遺物** (第107図、P L. 26・27・28・29)

第3面より検出された遺構は、著しい蛇行軌跡を見せる溝群と方形区画の水田跡が主要な遺構である。溝跡群と水田跡の前後関係については、水田耕土を幾筋かの溝跡が掘り込んでいることが確認され、溝跡は一部を除きその多くは水田耕作停止後あるいは耕作停止の直接的原因となる形成過程が考えられる。溝跡の埋土上面は第2面水田耕土に被覆されている。従って、水田耕土を掘り込む溝群の上縁もかなりの部分は削平されていると考えられる。

溝跡は、その地勢により北方から発し南方へ合流する基本的走方行を採っている。形成については、自然・人為のいずれかは決しがたく、形成の前後・新旧などは不明であり、樹枝のような分支状の軌跡や細かい蛇行走向などから自然流水によるとの感が強い。しかしながら、護岸養護のためと思われる杭の打設された溝も存在することから、自然流水路に対し修復・改修など何らかの手が加わっており、溝によっては当初から人為的開削になる可能性もある。溝跡の埋土は総体的に粘性のある土質を主体としており、その形成が流水等に起因を求めるとしても、埋没については洪水などの急激な異変を想定することはできない。

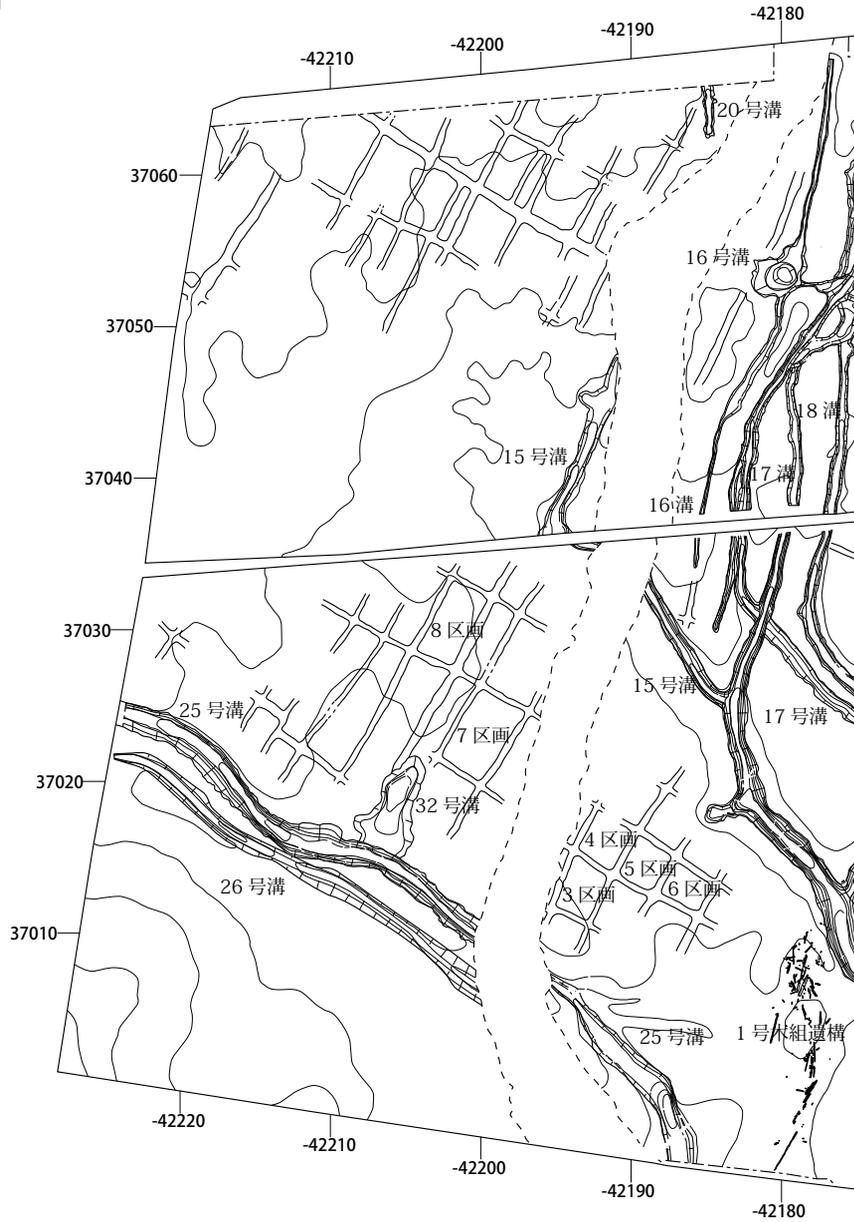
水田跡は、これより上位面である第2面水田耕土の直下に検出されるが、水田区画の形態は所謂小区画水田の範疇に入るものであろう。水田面には部分的に洪水起源のsilt質薄層が堆積する。水田跡は洪水等による削平や第2面水田の耕起が畦畔の高まりとともに、ある程度は耕土面にも及んだものとおもわれ、畦畔筋は土色の違いによって辛うじて認識できる状態であった。検出景観は上述のごとくの遺存状態で、部分的で切れ切れない広がりである。

出土遺物は溝跡より土器類の他、鋤・弓・棒状製品・板材等とともに多量の割材杭・丸木杭が、また水田耕土内からも柄振（えぶり）（直柄横鋤）などの農具や板材、角杭・丸木杭などの木器類が検出されている。

**溝跡**

溝跡は中央部の一帯と南西部のものに大別される。中央部では樹枝状の広がりとなし、多くは自然流路的な軌跡をなす。その端緒は、北側調査区域外に延び丘陵縁辺に発すると思われる。南下に従い支線を集め、主幹的な18号・22号・29号溝など2、3筋の溝に集約される。南西部に検出された2筋の溝は、南下軌跡では中央の溝に合流しよう。北上する軌跡は北西方へ延び、西側Ⅵ区検出の溝に続く。護岸養護と考えられる杭の打設がみられ、明らかに人の手が加わった溝である。

Ⅶ区第3面

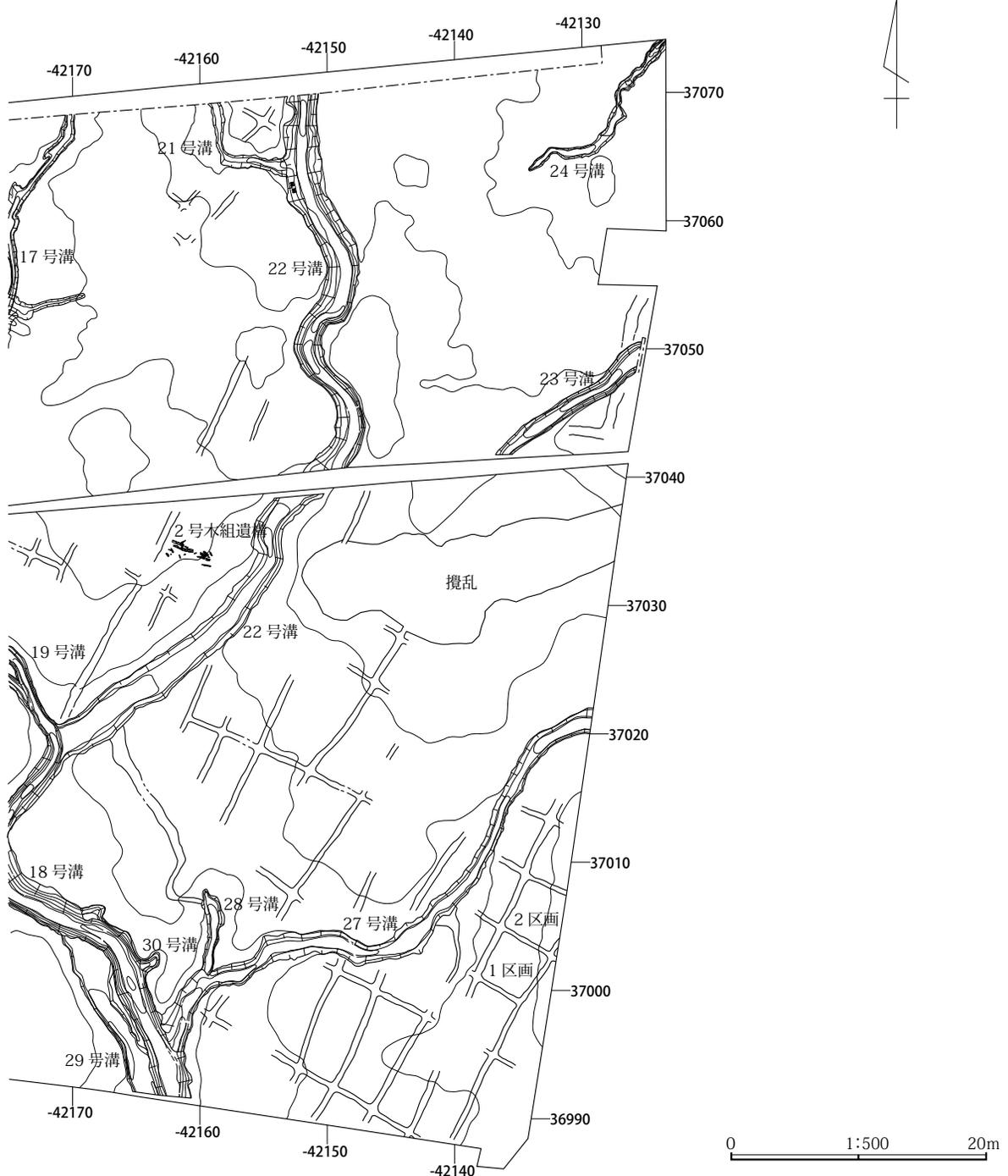


15号溝 (第108・109・110・115図、P.L. 26)

中央低地帯にある。検出延長は、29mを測り北端は第2面8号溝と重複し途絶えるが、北方延長上にある軌跡と同筋とすれば48mの溝筋である。溝幅1～1.2m、最深30cm前後を測る。断面形状は緩いU字形や凹凸平坦化を呈す箇所もある。調査区北縁より略南北走して30mほどで直に近く南東方へ折れ、主幹溝18号の中位筋で合する。出土遺物は土師器鉢形土器片、木器で天秤棒、又鋤の刃部片、角杭などがある。

出土遺物

土器(第123図) 1は土師器鉢。内斜口縁、器肉薄く深い体部。内外面に篋磨きの痕跡あり。



第107図 VII区第3面全体図

### 第3章 検出された遺構と遺物

**木器** (第125図、P L. 48) 1は天秤棒か。丸木両面を削り平滑にする。両端部は対面を削ぎ薄くする。稲束などを突き刺して運搬したものか。2は又鋏の刃部か。3は割材の杭、先端削り部焦げ痕。

#### 16号溝 (第108図)

中央低地帯にあり、単筋の溝である。略南北走して、検出延長は約37m、最大幅50cm、深さは浅く15cmを測る。断面形状は浅い皿形を呈す。溝筋中程に溜状の広がり形成されるが、深さ30cm余りで流水溜まりまたは湧水の痕跡とも考えられる。出土遺物は土師器小片で2～3点で目立った木器や木材の出土はない。

#### 17号溝 (第108・109・110・114・116図)

中央低地帯にあり、北端は18号溝と軌を一にするが南下10mほどで分流する。緩く蛇行し、調査区中央部付近で分枝を生じて後、本筋は19号溝に合する。検出延長約54m、最大溝幅1.3m、深さ20～30cmを測り、断面形状は緩いU字形を呈する箇所が多い。出土遺物には完形の丸木弓がある。

#### 出土遺物 (第125図、P L. 49)

**木器** 1は丸木弓。両先端部は両面から削り込んで弭(ゆはず)を作る。弓(ゆ)幹(がら)には小枝節痕が見え、全体には樹皮を剥いだ程度の加工だが一端の弓幹から弭部は半円状に平たく削り整形を施す。点々と焦げ痕が残る。

#### 18号溝 (第108・109・110・117図、P L. 31)

中央低地帯にあり、17号溝と分流して後16号溝から東西方分離溝や19号溝と複雑に交差する。南下軌跡中位付近より合流枝筋が加わり溝幅を増して、基幹的な溝筋となる。検出延長約89m、最大溝幅2.5m、深さ50～60cmを測る。断面形状はU字形を呈する。出土遺物には杭材と思われる多量の丸木材などがある。土器類に土師器小型壺、鉢が、木器には曲柄又鋏、丸木棒状製品、丸木杭等がある。

#### 出土遺物

**土器** (第123図、P L. 43) 1は小形壺。口頸部内湾気味に開く。胴部の器肉厚く、底部は小径の平底。口頸部内外面横撫で、外面胴部横位の篋削り、内面頸部顕著な絞り痕。2は小形壺口頸部。短めで内湾して開く。口唇部やや細まる。内外面横撫で。3は鉢。口縁部短く外反して開く。胴部偏平に張り、底部小径な平底。胴部横位篋削り、内面横～斜位篋撫で。

**木器** (第126図、P L. 49) 1は曲柄又鋏。軸部がやや太目で刃部との境に小さな段を作る。刃部は内湾して広がり最大幅は中央にあり両刃は平行して長く延びる。

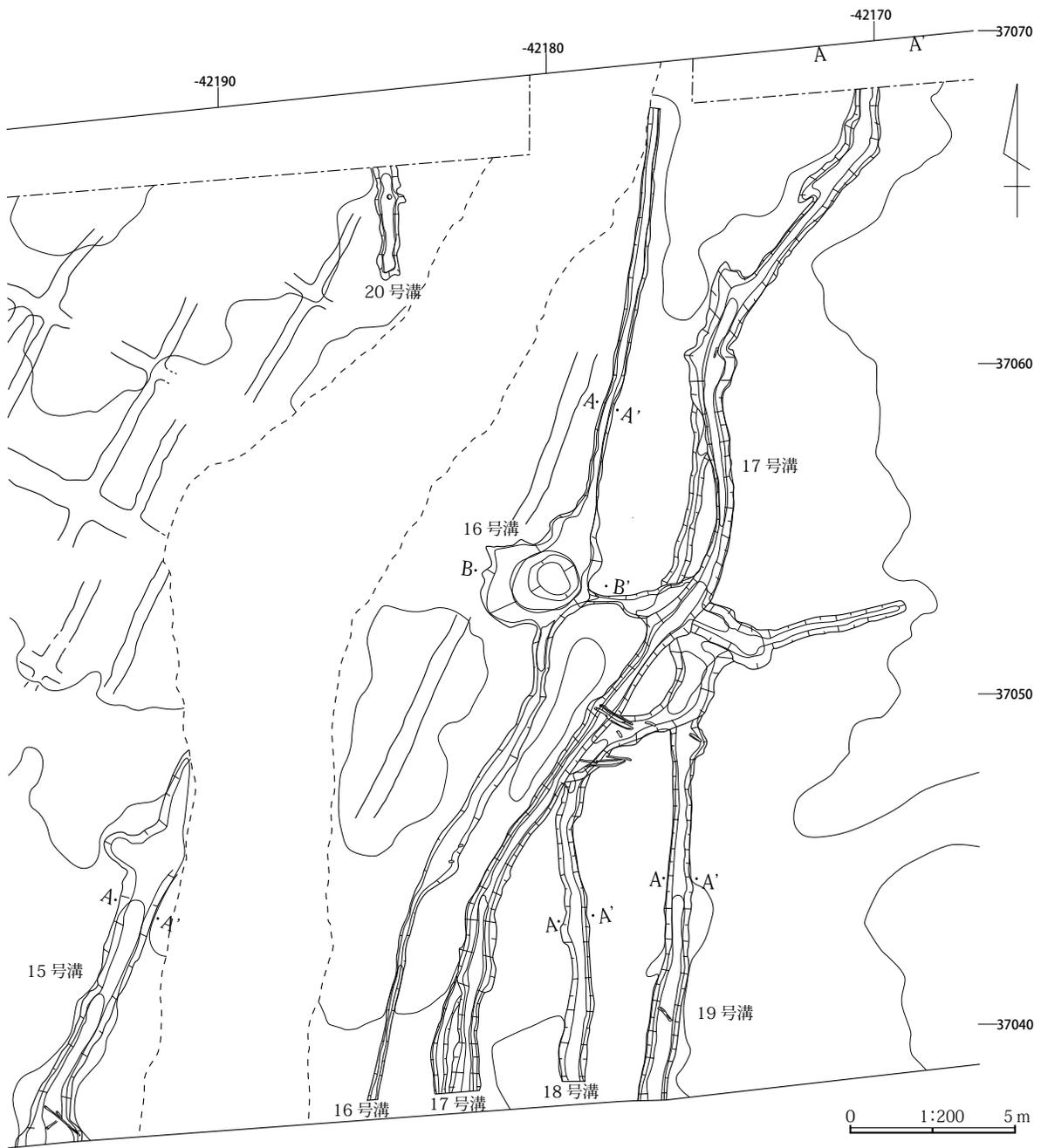
2は田下駄。葉形状の両端部に紐かけ用の削り込みを削り出す。中央やや偏して両側に紐磨状の痕跡があり、表裏面に一条の横棧圧痕を残す。片面は摩耗が著しく足乗せ面か。無孔一紐結合型一輪かん型田下駄。両面に横棧状圧痕が付くのは輪かんに結合後に改めて足を括るためか。

3・4は丸木の半裁割材で、片面丸木側の両先端部に切り込みを入れて円頭形を削り出す。用途不明。

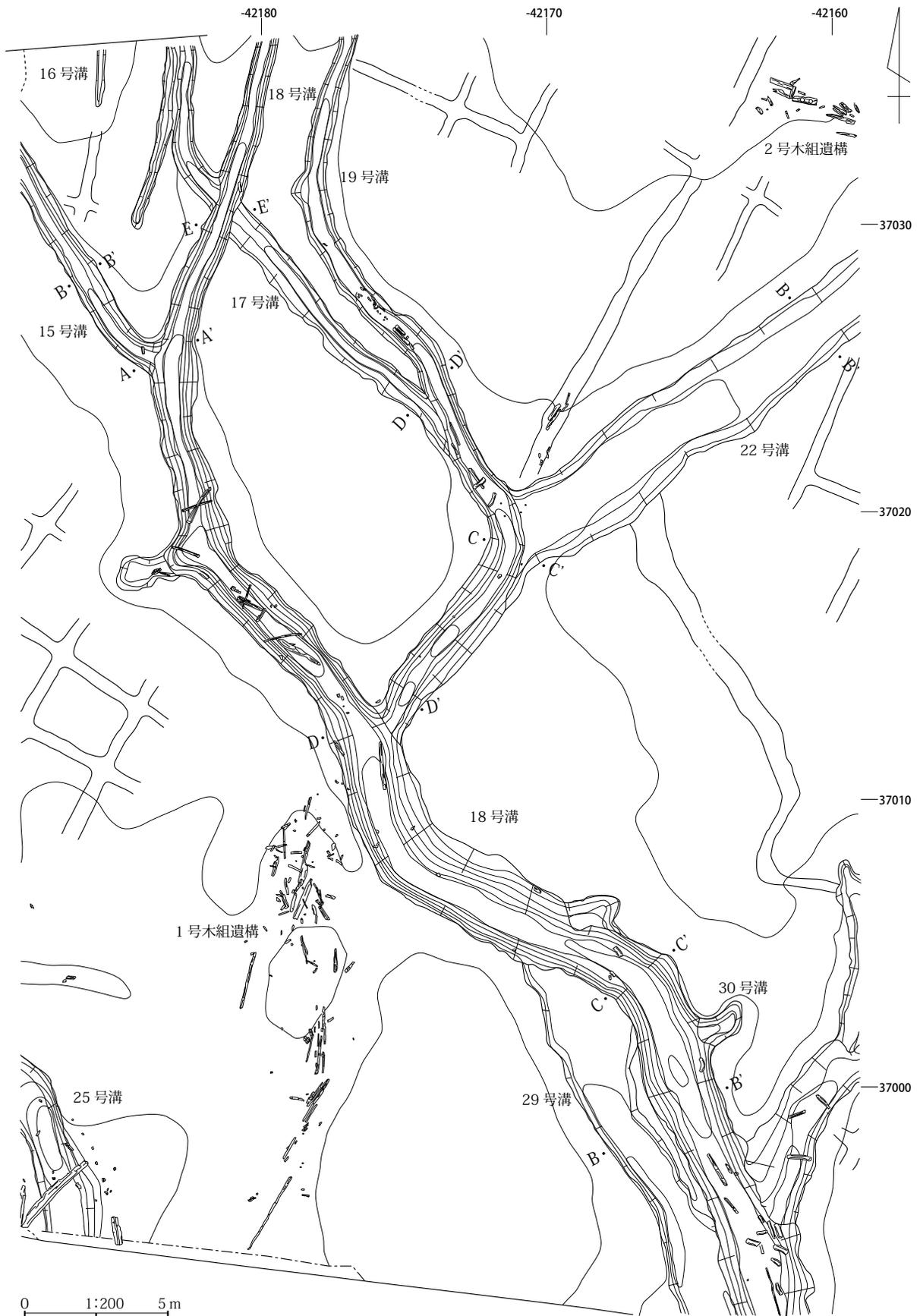
#### 19号溝 (第108・109・110・118図、P L. 31)

中央低地帯にあり、北端は18号溝から分流する。直線的に南下後中位で17号溝・22号溝を合わせ、18号溝に合流する。検出延長約40m、幅1.8m、深さ30～40cmを測る。断面形状はU字形を呈する。出土遺物には丸木材を中心に土師器鉢・壺・甕、木器は又鋏・丸木杭などがある。

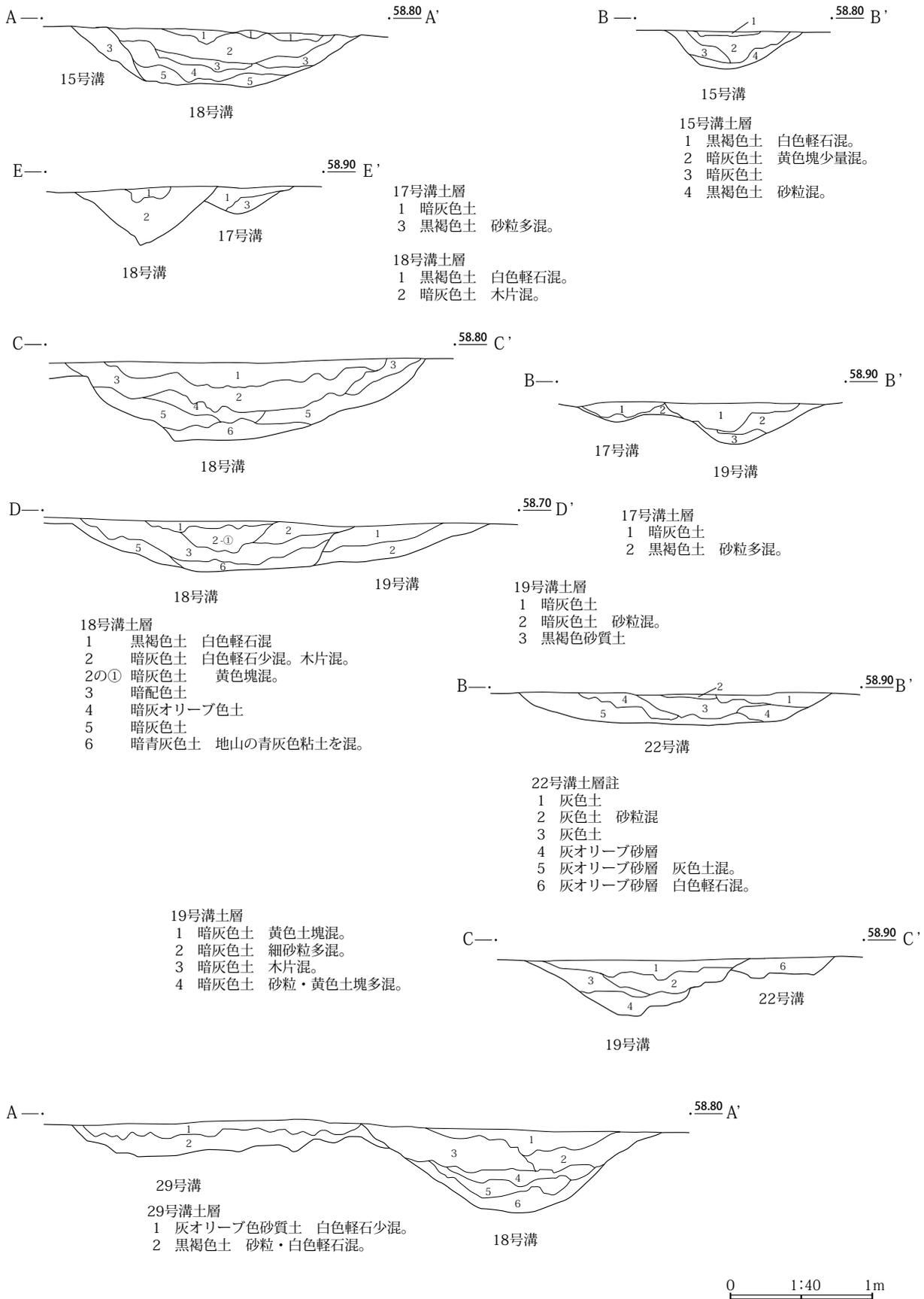
#### 出土遺物



第108図 VII区第3面15号～19号溝・土層図



第109図 VII区第3面15号・17号～19号・22号・29号溝



第110図 VII区第3面15号・17号・18号・19号・22号・29号溝土層図

### 第3章 検出された遺構と遺物

**土器**(第123図、P L. 43) 1は鉢。口縁部短く直立。体部深めで底部小径な平底。器面粗い。2は小形壺。口頸部緩く外傾し、口唇部は小さく内屈気味。胴部器肉厚くやや偏平気味に張る。底部は肥厚し不安定な平底。口頸部内外面横撫で、腰部斜～横位篋削り。3は甕。口縁部外反気味に開く。胴部やや撫で肩で上半部が丸く張る。弱い斜位篋削り。中位から下位に煤状の付着物。器面の荒れ著しい。側縁は面取り状に磨り込。

**木器**(第127・128図、P L. 50) 1～4は曲柄又鋏。1は笠部を有し、片面の笠部は緩やかな脹らみを持つ。刃部は笠下の括れから内湾して下脹れ状に刃幅を増し最大幅は中央下にある。刃部内縁は直線に整形され、基部の挟りは直角。軸部断面は蒲鉾形。2は軸部と刃部の境に明瞭な段を作る。刃部外縁は内湾して刃幅を増し最大幅はほぼ中位にある。内縁も弱く内湾気味に挟り基部に至る。軸部断面は蒲鉾状。3は軸部下位から緩やかに広がり、刃部は内湾気味に刃幅を広げて下膨れ状に最大幅は中央下位にある。内縁は内湾して基部に至り、裾広がり気味の形状に決る。4は又鋏の刃部。

5は角材を用いて一端を太め、一端を細目にする。片面を直ぐにして他面の細目端寄りにコの字状の切り込みを入れる。6は板材。片木口に臍状の凸部を作る。

7～9は杭材。7はミカン割材の杭、8・9は丸木杭

#### 22号溝 (第109・110・114図、P L. 30)

調査区東半部北縁から中央低地帯に向かい小さく蛇行して17号・19号溝の合流点近くでこれと合する。検出延長は約64m、溝幅は2.5m余り、軌跡全体がほぼ一定の幅で第3面の溝群中18号溝の南端にも匹敵するが、深さは浅く20cm前後である。埋土は他の溝とは異なり、砂層の堆積が中心である。出土遺物には丸木材の他、少量の土器類で土師器壺等がある。

**出土遺物**(第124図、P L. 43) 1は土師器壺。口頸部は直線的に外傾して開く。胴部は球形で底部は略丸底。口頸部内外面横撫で後粗間縦篋削り、肩部斜位篋磨き。胴部斜位の弱い篋削り。2は土師器壺口頸部。直線的に外傾して開く。口唇部細まって内屈。

#### 23号溝 (第111図)

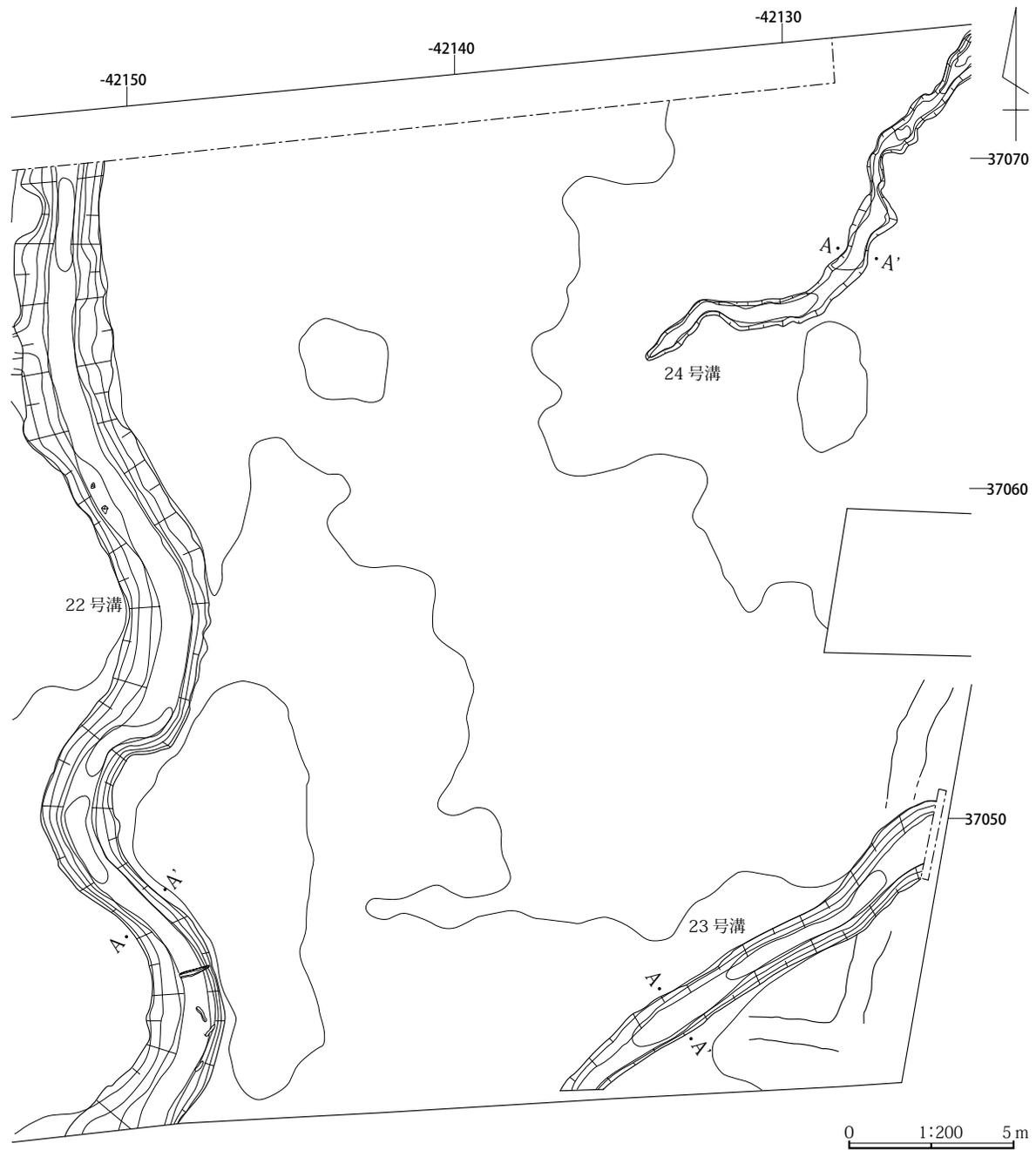
調査区東縁にあり、北東～南西走する検出延長は14m余りで、北東走方は東側調査区域のⅧ区では検出されていない。南西走方は跡切れたままで検出されず不明であるが、小区分け別期調査による検出面の誤認に起因するための消失と思われる。溝幅1.6m、深さ25cmほどである。出土遺物にはみるものはなく、土師器細片のみである。

#### 24号溝 (第111図)

調査区北東隅部にあり、北東～南西走の自然消滅状の軌跡である。検出延長16.5m、幅約80cm、深さ10cm程度で壁線は小さく波うって定まらず、底面の小凹凸は著しい溝先端部であろう。出土遺物は無い。

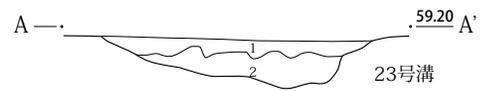
#### 25号溝 (第112・119図、P L. 32)

調査区南西部にあり、26号溝と並走する。大きく緩やかに蛇行し、北西～南東走する。南東端は調査区域外に延び、北西方は西側調査区のⅥ区検出の5号溝に続く。当区での検出延長は50m、調査区空間域を加算しⅥ区検出5号溝部分と合わせて、総延長は120mである。溝幅約2m、深さ40cmを測り、断面形状はU字形を呈する。埋土は最上層に第3面の水田耕土が覆い、水田以前の遺構である。以下、砂層・silt質層が主体である。流水、洪水などによる埋没が考えられる。



22号溝土層

- 1 暗灰色土 silt質。砂粒混。
- 2 鈍黄褐色土 細粒砂多混。
- 3 暗灰色土 silt質。微細砂粒・黒色土が互層。
- 4 鈍黄褐色土 大粒砂多混。
- 5 黒褐色土 粘性。細粒砂混。



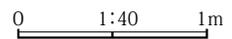
23号溝

- 1 明黄褐色土 砂質。褐色粘土粒・褐色silt・白色軽石混。
- 2 鈍明黄褐色土 siltと粘土の混土。

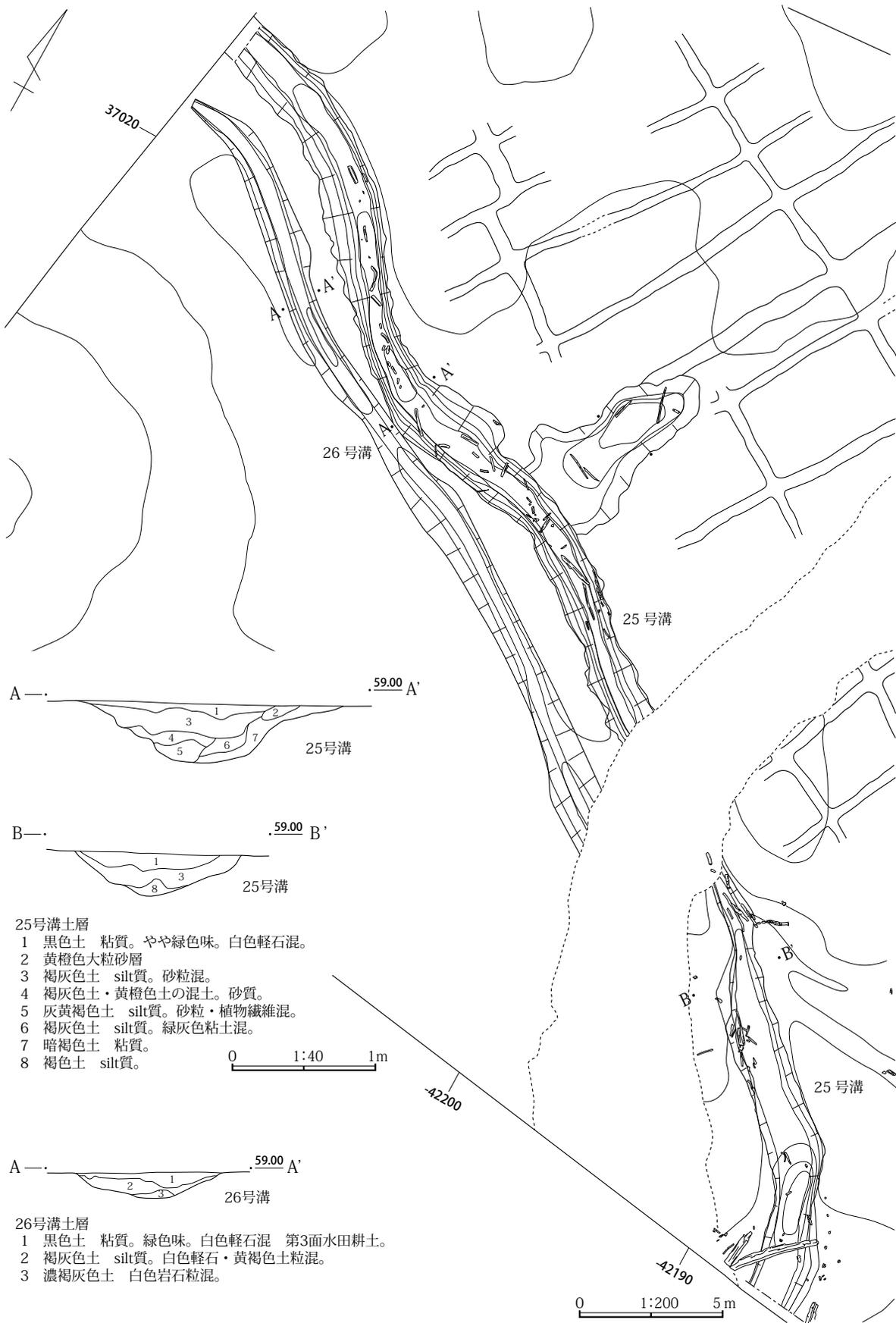


24号溝土層

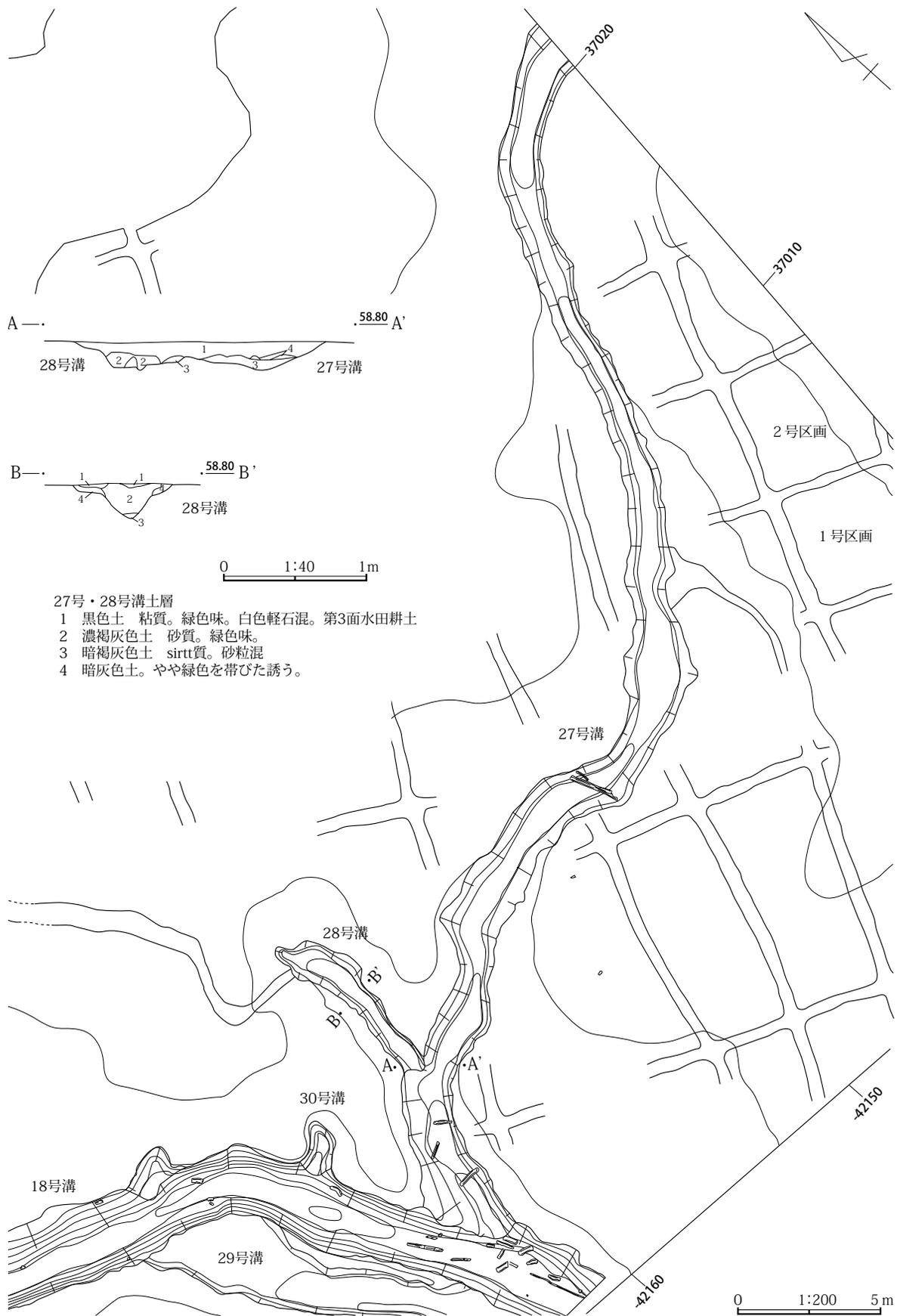
- 1 黄褐色土 大粒砂多混



第111図 VII区3面22号~24号溝・土層図



第112図 VII区第3面25号・26号溝・土層図



第113図 VII区第3面27号・28号溝・土層図

### 第3章 検出された遺構と遺物

南東端左岸には10点の打設された杭列が検出され、Ⅶ区第3面の溝群の中で、人為的は造作が知れる唯一の溝である。杭列は溝落ち込み縁辺よりやや距離をとって緩い弧を描く様に打設される。単列を主とするが一カ所のみ後背に一杭が打たれる。打設杭間は50～60cmで、列行には凹凸の乱れは無く地中遺存杭長は50～60cmのものが多く杭材の木取りはミカン割状の板材である。杭の打設地点は一カ所のみで周辺にはこれに直接に関連する施設の遺構は確認されていない。後述する1号木組遺構とは比較的隣接するがその関連は不明である。現状では25号溝の護岸に供した可能性が高く、杭身露呈部分にしがらみ状に小枝材などを絡めて土砂の流入などの防止。または打設した杭身自体で縁辺の法面の崩落防止。等が考えられる。

出土遺物は土器と木器類がある。土師器の器台・埴・壺・甕がある。木器は又鋤刃片板状木製品のほか、打設杭がある。溝中からは多量な木片が検出されている。

#### 出土遺物

**土器** (第124図、P L. 43) 1は器台。坏部腰角に張る。体部は直線的に外傾し、口縁部は小さく括れる。坏と台部は通孔。2は埴形土器。口縁部内湾して開く。平底。外面細目な斜～横篋磨き、内面は斜～横位篋磨き。3は壺口頸部。均一な器肉で丁寧な作り。口縁外面上位横、下位縦掻き目後縦位篋磨き。内面横位篋磨き。内外面に赤色塗彩。4は甕。口縁部は、くの字状に折れ内湾気味に開く。胴部緩やかに張り、平底。外面細目縦位掻き目後篋磨き。腰部篋削り。内面口縁部細目掻き目。胴部斜位篋撫で。

**木器** (第129・130・131図、P L. 51・52) 1は曲柄又鋤の半欠。軸部と刃部の境は僅かに括れ、刃部は下膨れ状。2～4は板材。2は縁部片端に削り込みがはいる。3は片端に面取り状の削り整形。4は大形な篋状を呈する。

5～14は25号溝の南端部左岸に打設された板杭材である。木取りミカン割状の板材で、片端を尖らすに柾目面を両側から削る。樹種はスギと考えられる。

#### 26号溝 (第112図)

調査区南西部にあり、25号溝と北西～南東へ併走する。南東端は調査区域外に延び、北西方は西側調査区の6号溝に続く。当区での検出延長は約29m、Ⅵ区との調査区空間地域を加算して6号溝部分と合わせて、総延長は73mである。溝幅約1m、深さ20cmを測り、断面形状は浅い皿形を呈す。埋土は25号溝と同様に、最上層には第3面水田耕土が覆い、水田跡以前の遺構である。出土遺物は検出されていない。

#### 27号溝 (第113・120図)

調査区南東部にあり、北東から南西への走方で大きな蛇行軌跡をつくり、南西端は18号溝に合する。北東部は調査区域外に延び、東側Ⅶ区に検出されている12号溝に続く。当区での検出延長は約47m、幅1.2m、深さ20cmを測り、断面形状は浅い皿形を呈する。埋土最上位は第3面水田の耕土が覆う。Ⅶ区検出の12号・7号は69mで総延長116mにおよぶ。なお、7号溝部分は溝幅を著しく減じる。出土遺物には少量の土器片と丸木杭をふくむ丸木材がある。

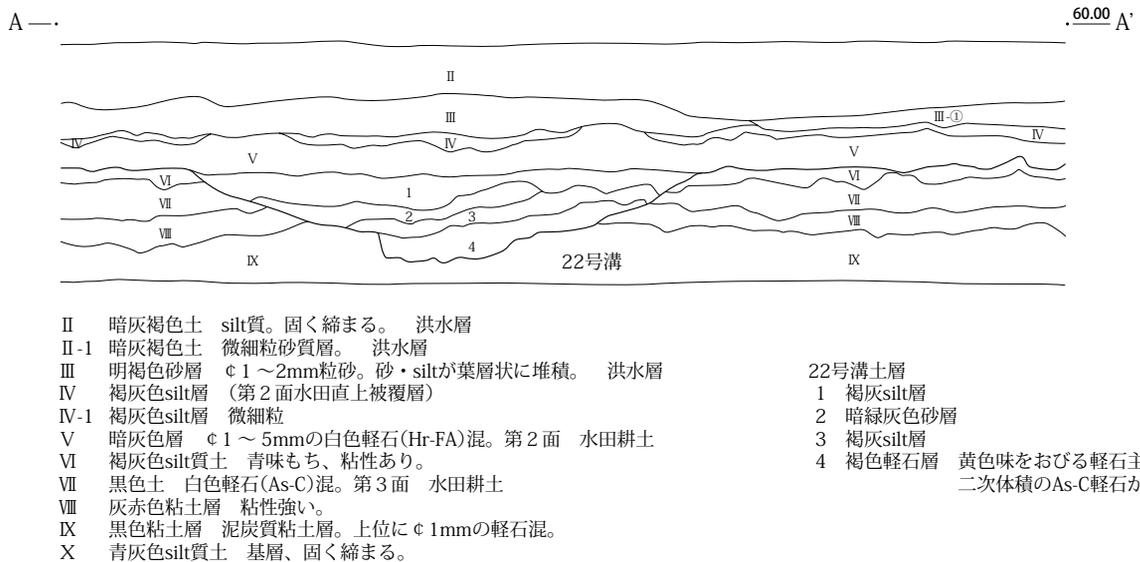
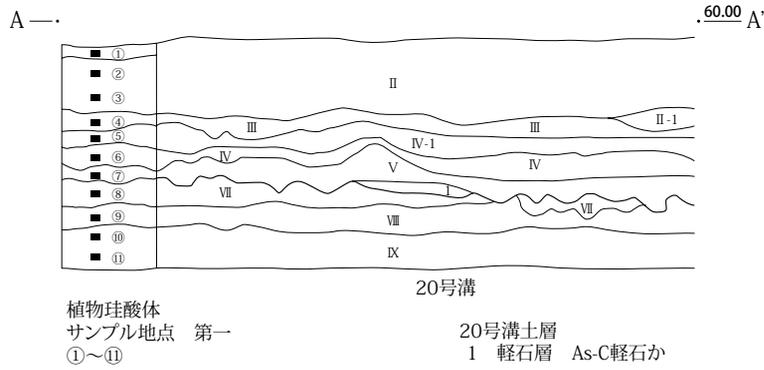
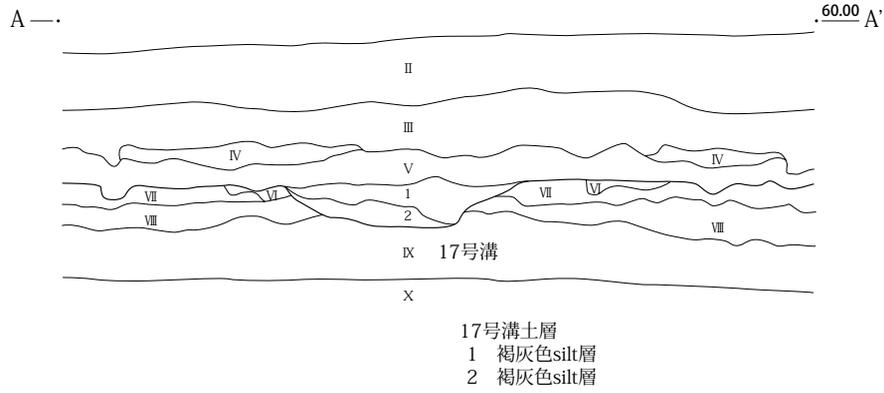
#### 出土遺物 (第124・132図、P L. 53)

**土器** 土師器小壺。作り丁寧、壺形模倣の手捏ね土器か。

**木器** 1・2は丸木杭。

#### 29号溝 (第109・110図)

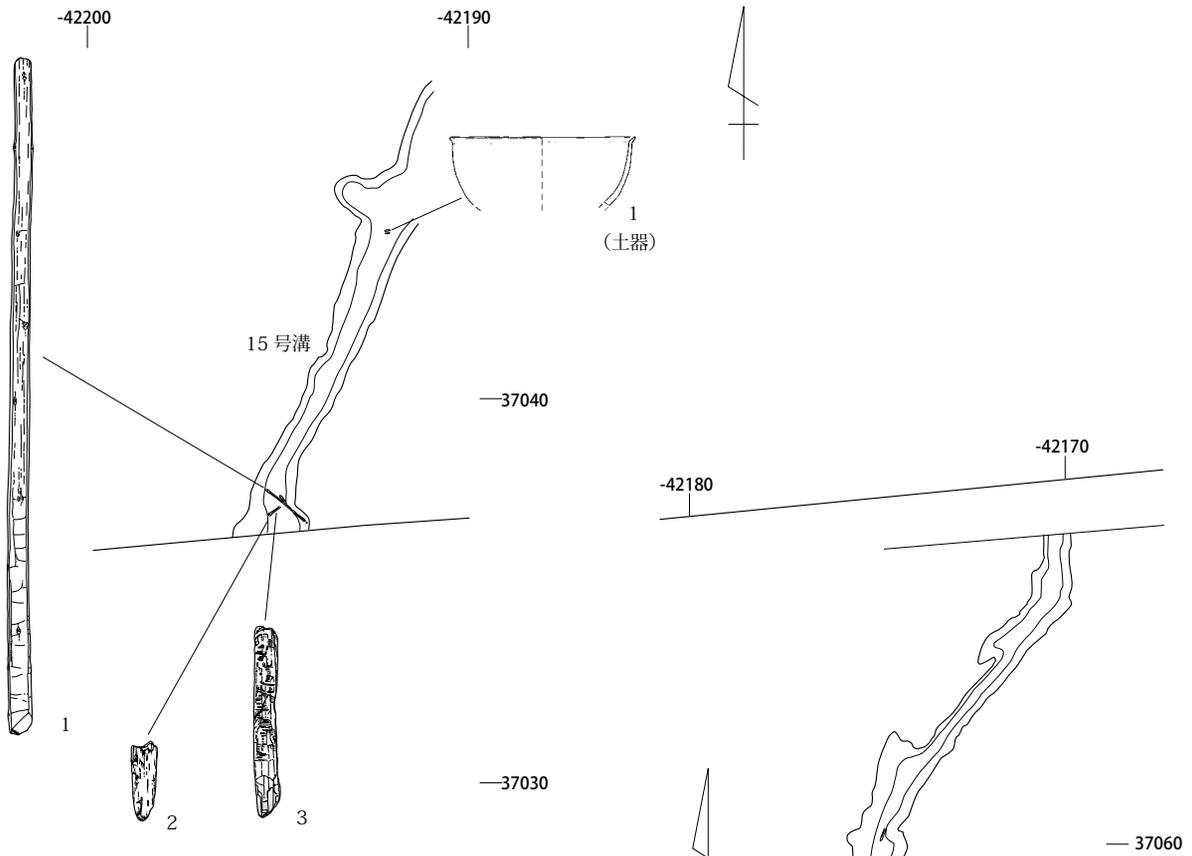
調査区南縁辺部にあり、18号溝より分支するようである。また、溝の形状は前述した22号溝に類似するが直接的な結合関係には無い。検出14m、深さ20cm前後、断面形状は浅い箱形を呈する。出土遺物は無い。



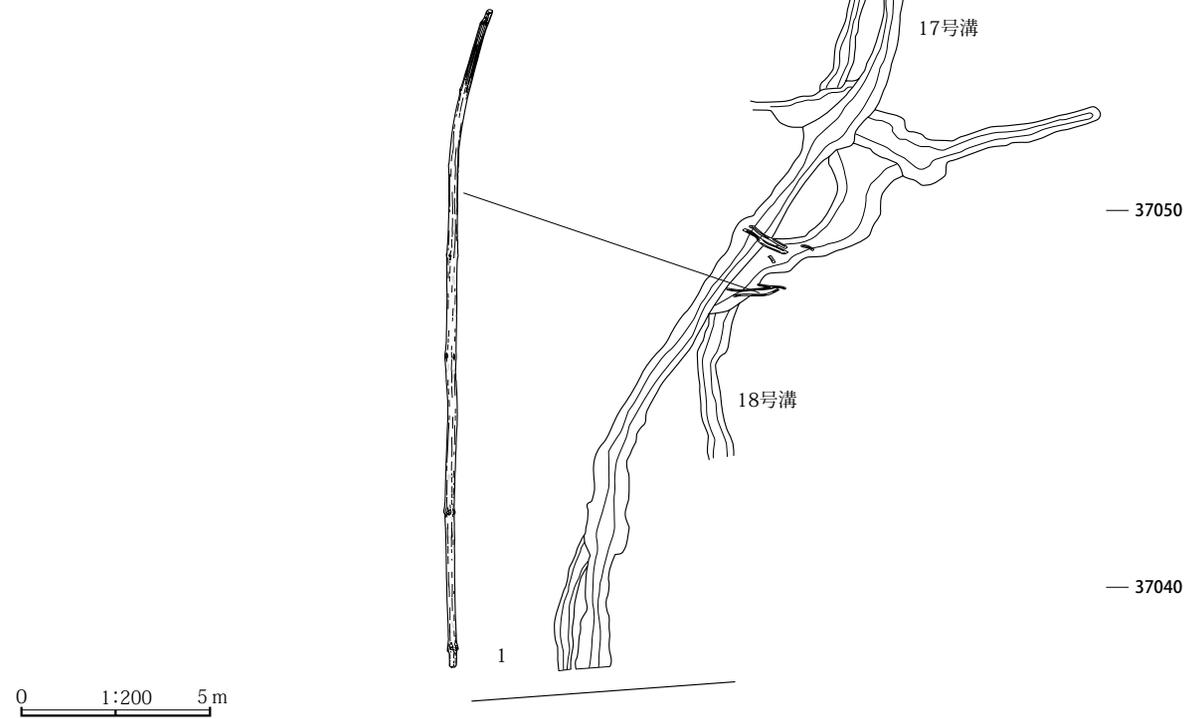
0 1:40 1m

第114図 VII区第3面17号・20号・22号溝(北側セクション)

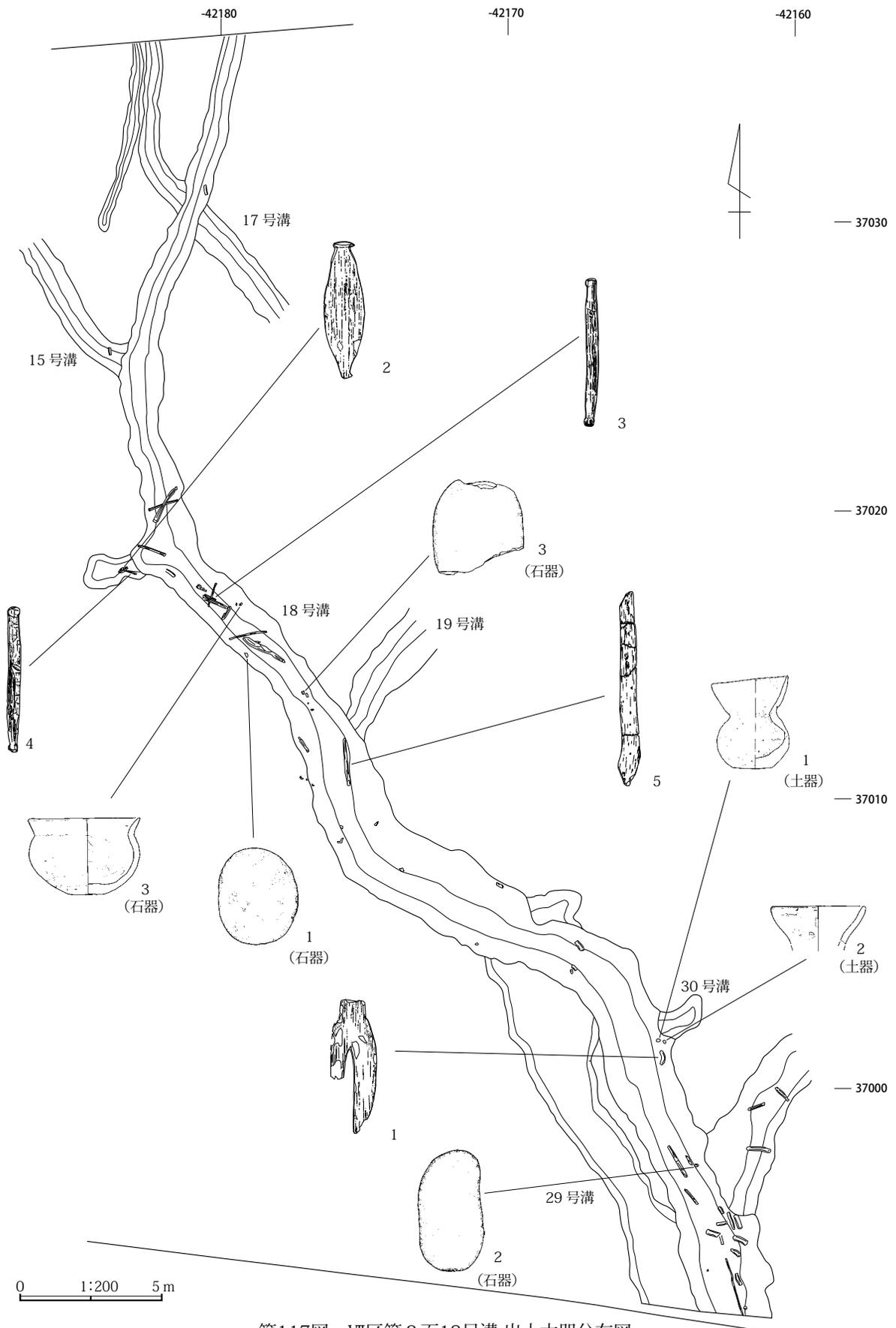
第3章 検出された遺構と遺物



第115図 VII区第3面15号溝 出土木器分布図

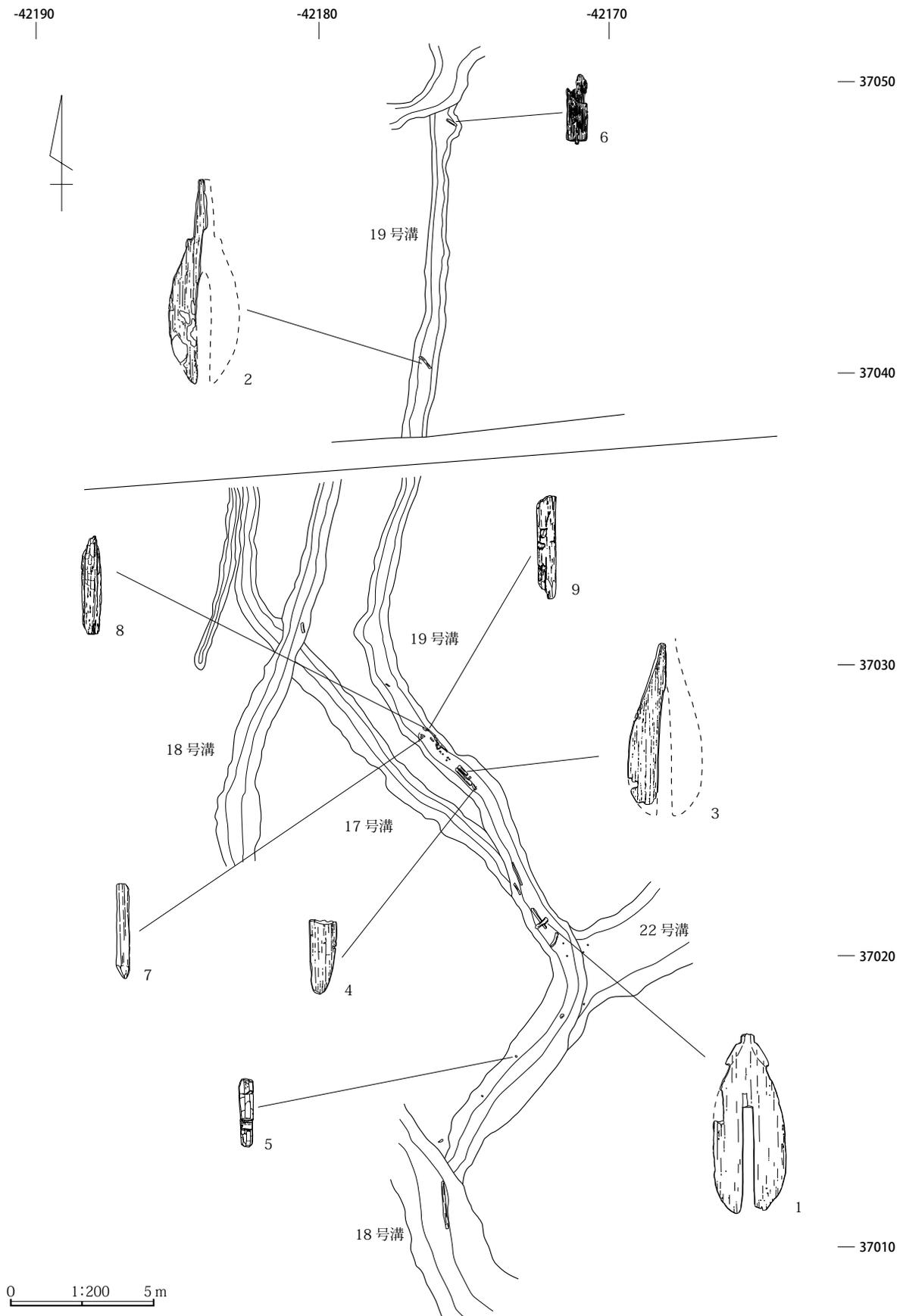


第116図 VII区第3面17号溝 出土木器分布図

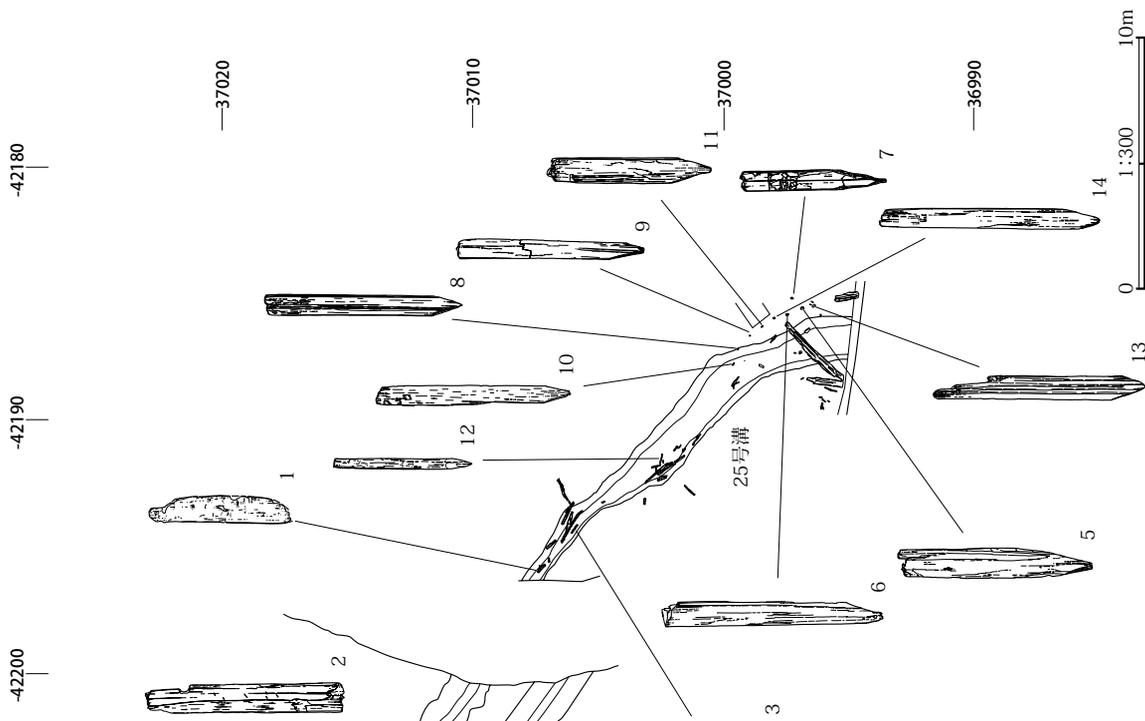


第117図 VII区第3面18号溝出土木器分布図

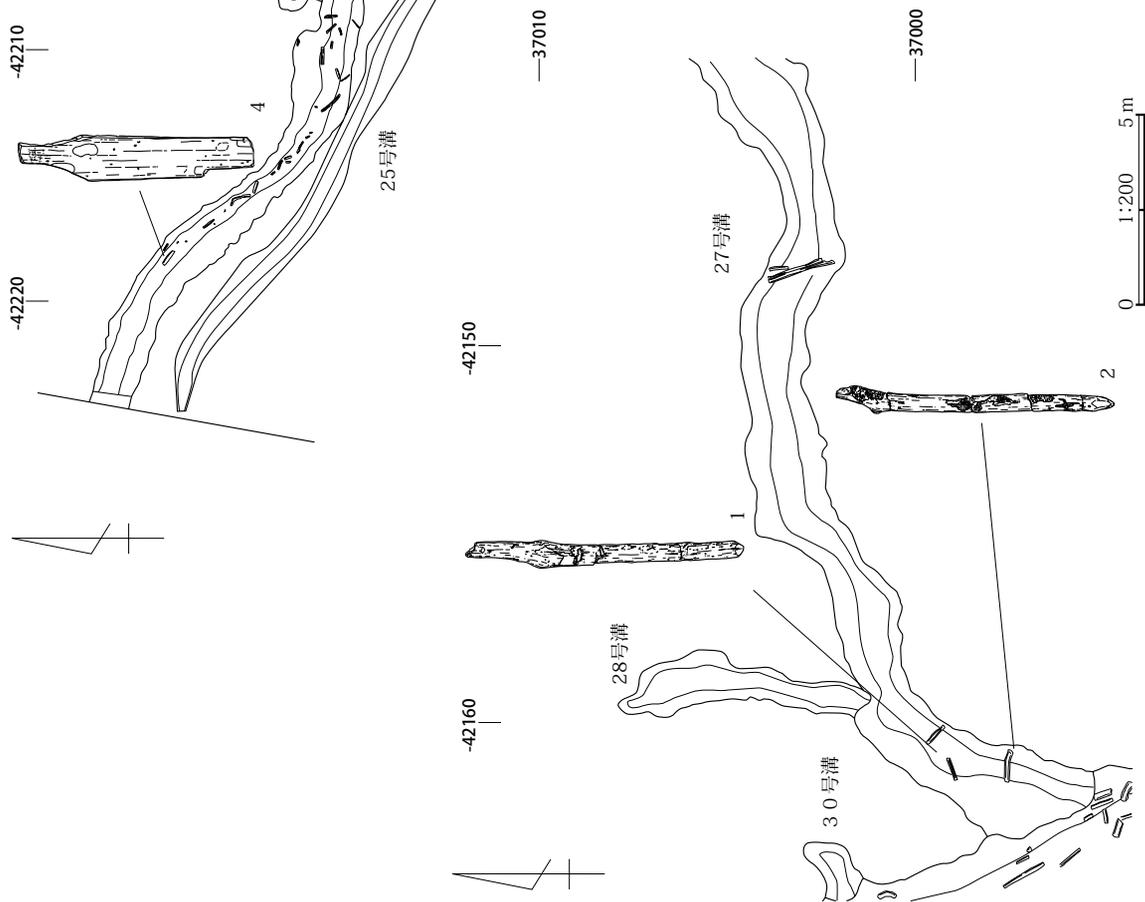
第3章 検出された遺構と遺物



第118図 VII区第3面19号溝出土木器分布図



第119図 VII区第3面25号溝出土木器分布図



第120図 VII区第3面27号溝出土木器分布図

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 水田跡 (第107図、P L. 26・27・28・29・30)

第3面水田跡は、上位面第2面水田跡耕土下に検出された。被覆土には、上位水田耕土の他に極部分的に洪水起源と考えられる薄いsilt層が介在する箇所も見られるが、耕土面への被覆であり畦畔を埋め、かつ覆うほどの層厚は無い。水田面検出に際しては畦畔の高まりは無く、その認識は畦畔と水田耕土との土色の違いに依っている。水田耕土はC軽石及びFA軽石と思われる白色軽石を含む黒褐色土である。

調査区内の遺存状況は、溝跡が集中する中央部での畦畔痕はとくに希薄となっているが、少なくとも当調査区では全面に造作されていたと考えられる。畦畔の痕跡は西半部の北側及び南に偏した地点と、東半部の南側にその痕跡がよく残る。中央部は耕土に相当する黒褐色土の層は他所より厚いものの、土質・土色差による畦畔の痕跡は確認し難く空白帯になっている。区画形状は長方形を主とし、長短辺に差の小さい正方形のものもある。畦畔区画の造作は、略北東～南西方向に長軸畦畔を造り、短軸畦畔の区切り加減によって北西～南東方へ連なる一列単位の水田区画の大きさがほぼ揃えられている傾向がある。

第3面水田跡においてのmacro的地勢では、極緩やかな北高南低を呈し、micro的には中央部に北高南低の低地部分が形成される。この地形的特徴は、上位で検出された第2面水田跡でも同様であるが、畦畔区画は両者に大きなちがいが見られる。当第3面水田跡の畦畔は、基本的な区画指向として北東～南西方向に長軸畦畔を採る(一部、中央低地帯付近他に略正方形区画を造るが)。少なくとも調査区域内においては一貫した区画方法となっている。これに対して、第2面水田跡では、中央低地帯に向かいこれに直交する方向に畦畔長軸を採るものである。調査区西半と東半及び低地帯での区画方法がそれぞれ異なり、地形の変化に合わせ畦畔の区画方法を変えている。基本的な地形のあり方が類似する第3面と第2面の水田跡畦畔区画方法の違いは、どこに由来するのであろうか。1には、第3面水田の耕作停止または廃絶後に形成された溝群が東・西側縁部と中央低地の落差を増幅させたことによる第2面水田耕作者(集団)の地形対応策。2には、一区画あたりの区画面積を拡大するための区画仕様の変化、等が考えられる。後者にその由来が求められるとすれば、古墳時代以降に展開する水田区画の大型化(条理水田)への段階的な区画変化を示すものであろうか。

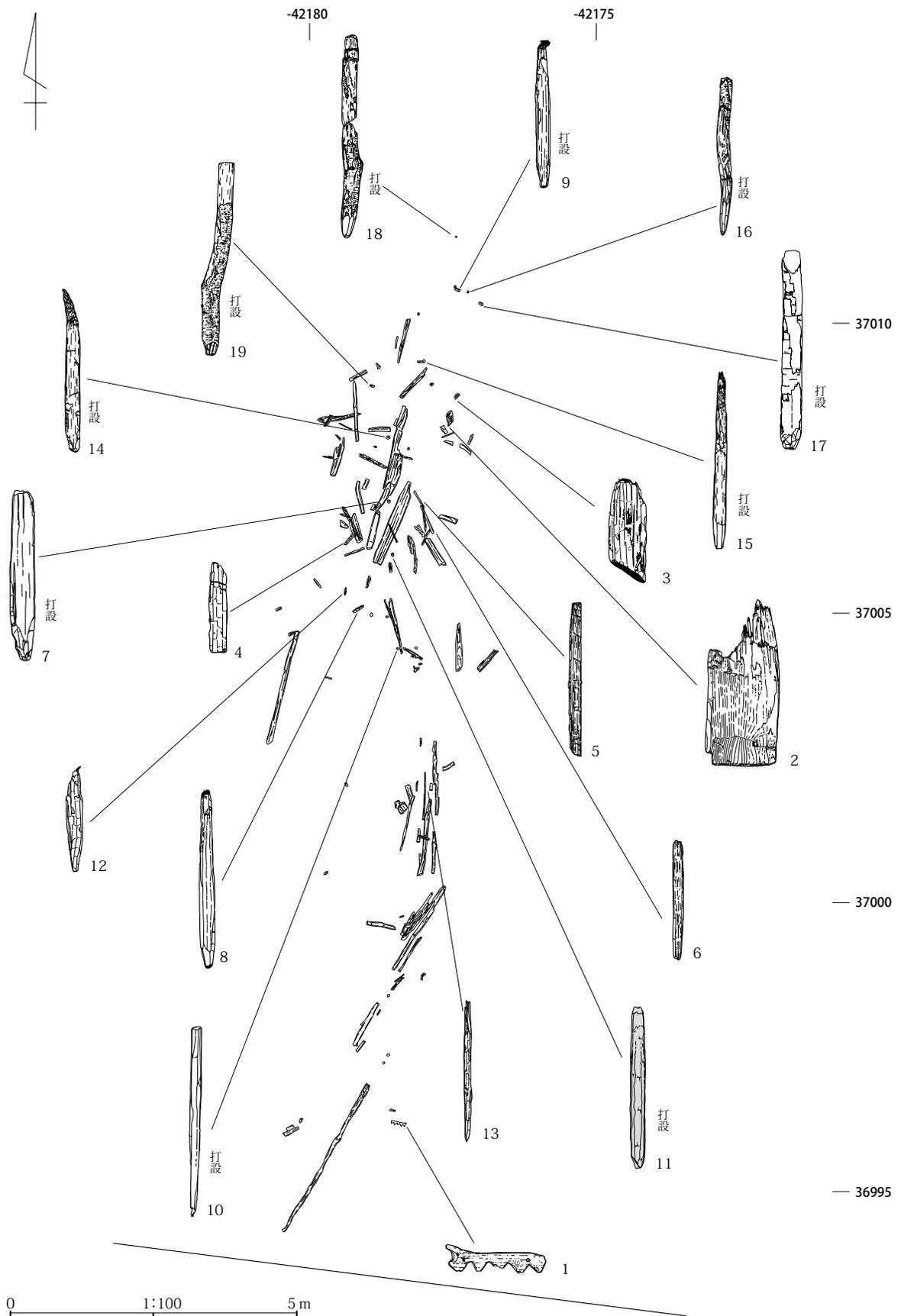
#### 1号木組遺構 (第121図、P L. 32・33)

調査区南側中央、X=36994~37009・Y=-42178~-42180の範囲にある。木組遺構の名称が与えられているが立体的な組構造を示してはいない。水田畦畔筋などと直接重なることは無いが、木材出土の層位は第3面水田耕土中であり、水田耕作前かまたは耕作が継続する時間帯の中で形成されたことになる。検出分布範囲は南北約15m、幅5mである。上方北から下方南に向かって棒状の丸木材または角材が流れ止まった状態で集中的な分布をなすが、表層的な木材分布からは木組の状況は窺うことはできない。しかし、土中には南北方向に緩く蛇行曲線を描く様に1列の杭が打設されている。杭の様子は丸木杭と角杭の2種類がある。水流の制御・護岸などの機能もつ施設が考えられるがそれらを示すような付属材や遺構の掘形や地形状況は残されていない。打設杭の土中遺存部分は38~52cmである。出土遺物は木器杭類の他、農具の横鋤(えぶり)・厚板材等がある。

#### 出土遺物

**土器**(第124図、P L. 43) 1は土師器高坏の脚柱である。細身の脚柱で、坏部との接合に充填塊が残る。外面縦位篋削り。裾内面粗目の掻き目。現高9cm、胎土砂粒多く、赤橙色(10YR6/8)、焼成やや軟。

**木器**(第132・133・134図、P L. 53・54) 1は直柄横鋤(えぶり)。柄部装着の孔を半部する片側で、復元幅52cm、高さ7cm強、厚さ1.1cm、柄部挿入孔径3.5cmを測る。中央の直柄装着部上縁は円弧状に高まり、



第121図 VII区第3面1号木組遺構 出土木器分布図

第3章 検出された遺構と遺物

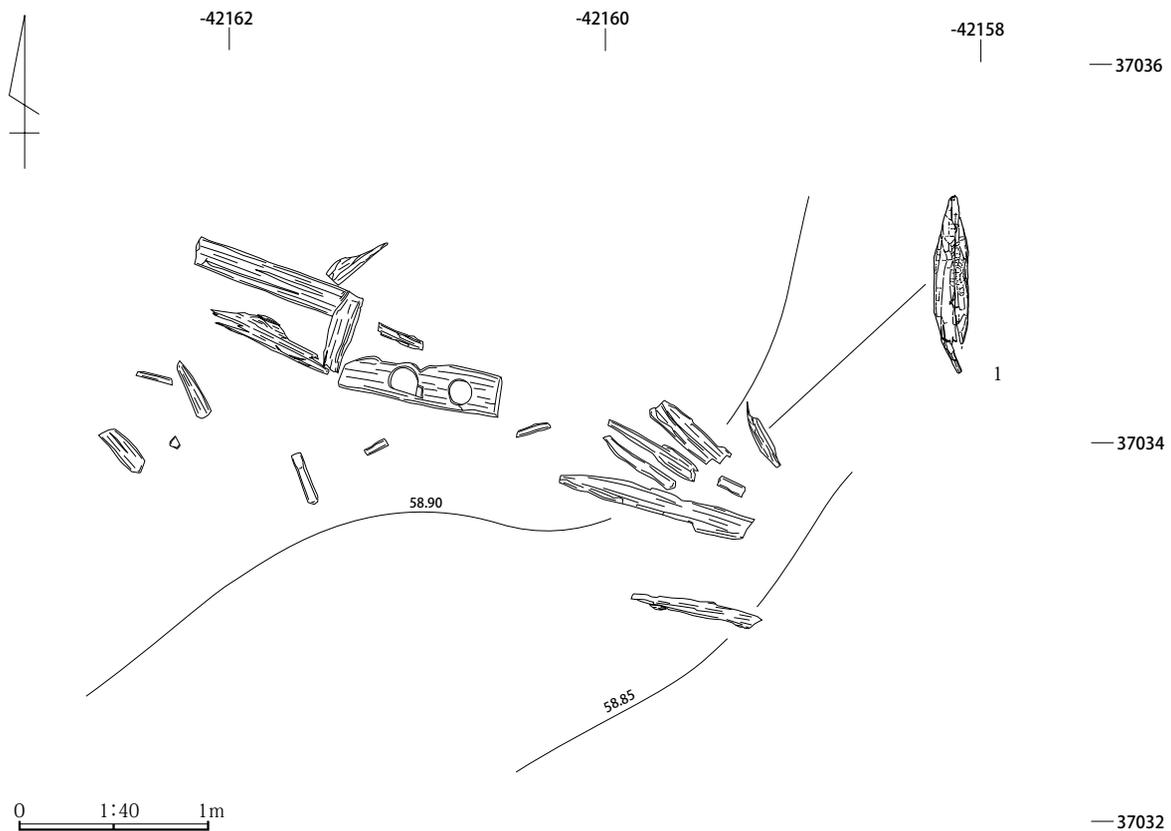
左右端縁は緩く弧を描く。刃部は鋸歯形状で先端へ薄く、歯数は10本、鋸歯の基幅は5cm、歯長は最大で2.5cmを測る。柁目材。樹種はアサダ。

2・3は厚手板材。2は柁目材、3は板目材。4～6は幅狭な板材か、柁目材。10は棒状製品か多面削り整形。7～9・11～15は角杭、16～19は丸木杭。打設杭は7～9・11・14～19である。11は全体に焦げ痕、15は基部に焦げ痕がある。

2号木組遺構 (第122図、P L. 33)

調査区ほぼ中央、X=37033～37034・Y=-42158～-42162の範囲にある。板材を中心として略東西方向に長く分布し、出土層位は第3面水田耕土中である。板材は一直線に並ぶ部分と、これに直交しコの字状に組まれたような部分が見られ、板材による柁形の施設または堰などの遮蔽施設の一部とも考えられる。比較的整然とした位置にある材の範囲は東西長が3m強、幅50cmである。板材には丸と角の臍穴状の孔を穿つ組材と考えられるものがあり、幅15～20cm、長さ1m前後の材が多い。当遺構は1号木組遺構からは北へ30mほどの位置にあり、直線的に結ばれる様な位置関係にある。同一出土層位であることを考え合わせると両者は、水利・治水に関連した一連の施設の可能性がある。しかし、板材は遺存状況が悪く取り上げ後に形状を止める資料が少なく、遺構としての掘形や地形状況は1号木組遺構と同様に残されていない。

出土遺物 (第134図、P L. 54) 1は形状の保つ板材である。板目材。

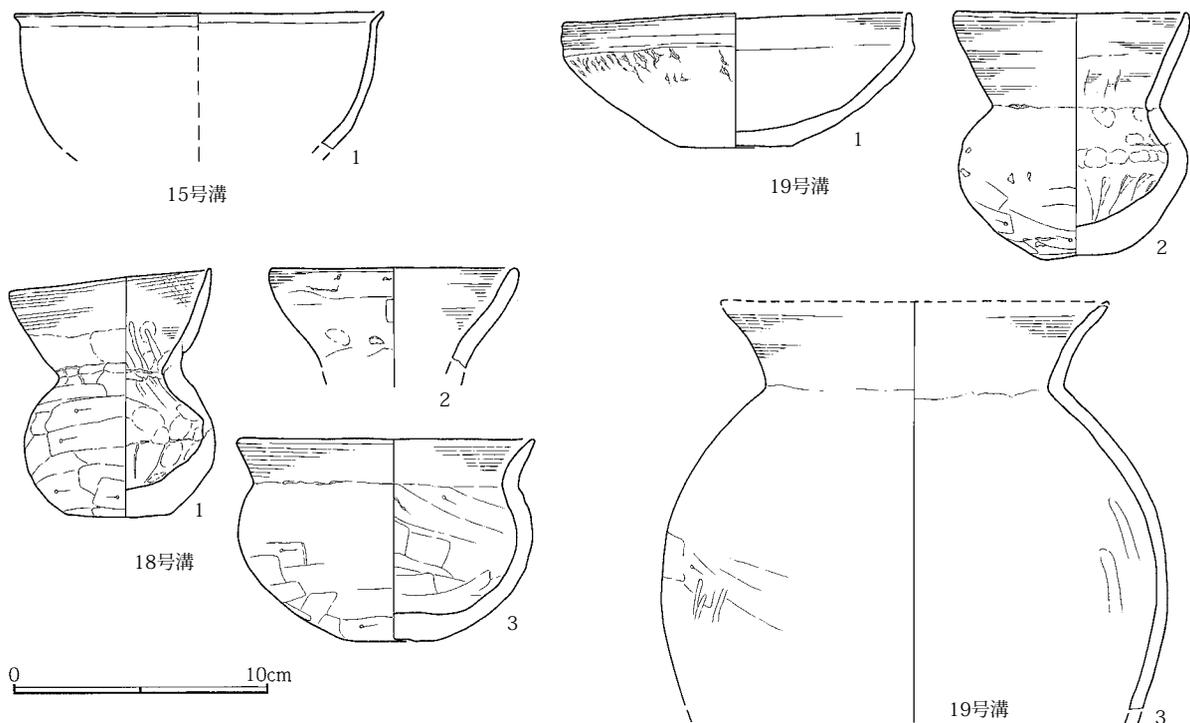


第122図 VII区第3面2号木組遺構 出土木器分布図

Ⅶ区第3面溝跡出土遺物(土器) 計測表

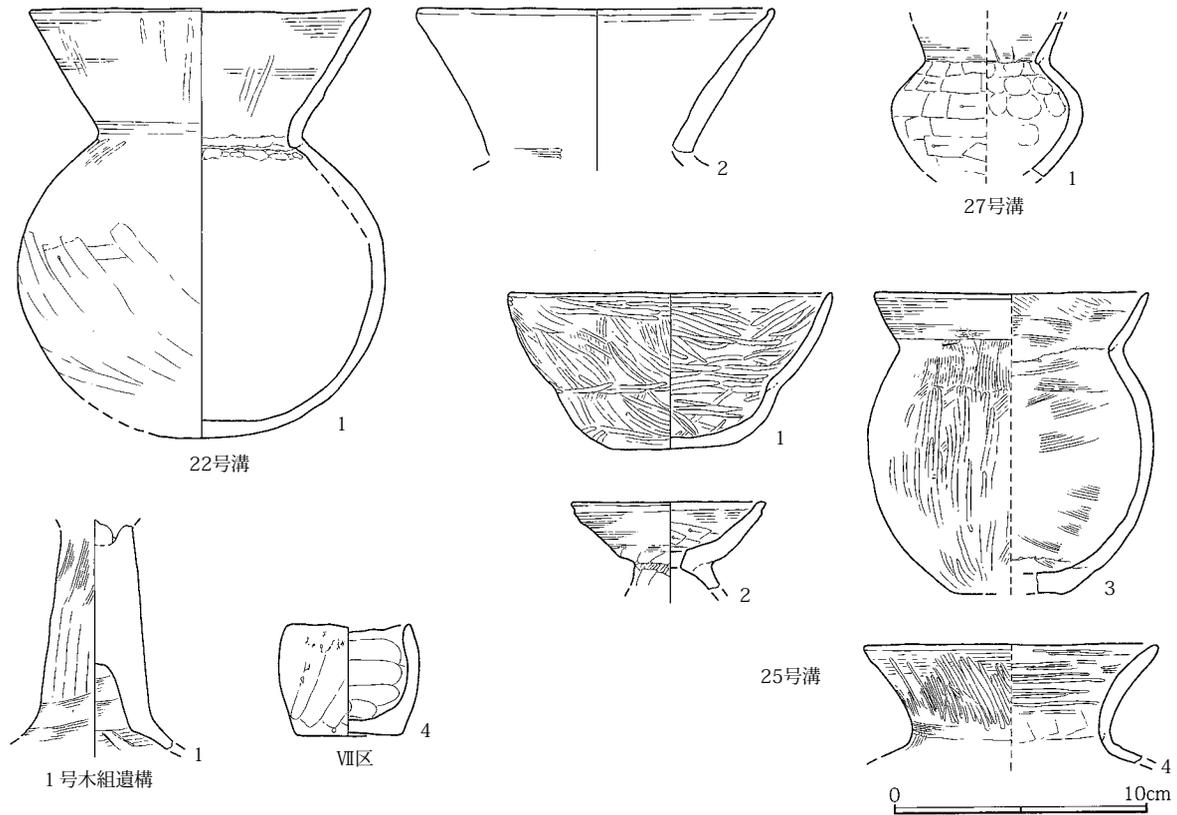
単位 cm

15号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器鉢	埋土	14.8		現高 5.9	口縁部片	粗砂多	鈍黄橙10YR7/3	良好	内斜口縁
18号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	埋土	8.1	4.2	9.7	略完形	細土	灰黄2.5YR7/2	良好	
2	土師器壺	埋土	10		現高 3.8	口頸部片	細土鉄粒多	鈍橙5YR7/4	良好	胴径7.6cm
3	土師器鉢	埋土	10.8	3.7	7.9	全2/3	細土鉄粒混	鈍橙2.5YR6/4	良好	胴径11.8cm
19号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器坏	埋土	13.9	4.5	4.4	完形	細砂多	橙5YR7/6	良好	
2	土師器壺	埋土	9.3	3.5	9.5	完形	細土	鈍橙5YR7/4	良好	胴径9.1cm
3	土師器甕	埋土	15.5		現高16.4	上半1/3	砂粒多	鈍橙7.5YR7/4	良好	胴径20cm
22号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	埋土	13.5		16.8	略完形	細砂混	鈍黄橙10YR7/3	良好	胴径14.2cm
2	土師器壺	埋土	14.2		現高 5.8	口頸2/3	砂粒多	浅黄2.5YR7/3	良好	
25号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器埴	埋土	12.8	4.7	6.2	略完形	粗砂混	黄褐10YR5/8	良好	
2	土師器器台	埋土	7.7		現高 3.4	坏部	砂粒多	灰黄2.5YR7/2	良好	
3	土師器甕	埋土	10.8	4.2	11.9	全1/4	細土	鈍黄橙10YR7/3	良好	胴径10.6cm
4	土師器壺	埋土	11.7		現高 4.6	口縁1/3	細土	浅黄10YR8/4	良好	
27号溝										
番号	器種・器形	出土位置	口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器壺	埋土			現高 6	頸~胴1/3	微細砂混	灰黄2.5YR6/2	良好	



第123図 Ⅶ区第3面15号・18号・19号溝出土遺物(土器)

第3章 検出された遺構と遺物



第124図 VII区第3面22号・25号・27号溝・1号木組遺構出土遺物（土器）

VII区第3面溝跡出土木器計測表(1)

単位 cm

15号溝					
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第125図-1	天秤棒	133.8×4.6×2.4		* マツ科モミ属	
第125図-2	又鋤	15.7×5.1×1.3	柁目材	ケヤキ	刃部か
第125図-3	角杭	37.7×4.9×3.4	角材	クヌギ節	先焦げ痕
17号溝					
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第125図-1	弓	130.8×2.2×2.2		* イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	
18号溝					
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第126図-1	又鋤	35.3×12×2	柁目材	* ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
第126図-2	田下駄	36.1×10.8×2	板目材	* ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
第126図-3	織機	39.1×3.2×1.6		* マツ科モミ属	布巻具か
第126図-4	織機	38.3×3.3×1.6		* マツ科モミ属	布巻具か
第126図-5	丸木杭	51×4.7×	丸太材	アカガシ亜属	
19号溝					
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第127図-1	又鋤	46.2×19.1×1.5	柁目材	* ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
第127図-2	又鋤	53.5×7.1×1.9	柁目材	* ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
第128図-3	又鋤	42.1×8×1.2	柁目材	* ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
第128図-4	又鋤か	19.5×7.1×1	板目材	* ブナ科コナラ属アカガシ亜属	刃部か
第128図-5	組部材?	17.9×3.8×2.3	角材	?	
第128図-6	板状部材	18.3×5.5×1	柁目材	スギ	方端出臍あり

## Ⅶ区第3面溝跡出土木器計測表(2)

単位 cm

## 19号溝

第128図-7	角杭	24.8×3.6×3.6		クヌギ節	
第128図-8	丸太杭	25.6×5.2×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り
第128図-9	丸太杭	26.9×5.0×	丸太材	アカガシ亜属	先5面削り

## 25号溝

図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第129図-1	又鋤	42.5×8×0.7	板目材	* ブナ科コナラ属アカガシ亜属	刃部
第129図-2	板状部材	59.4×8.8×1.7	板目材	* マツ科モミ属	組部材?
第129図-3	板状部材	41.9×6.0×2.2	板目材	マツ科	
第129図-4	平鋤?	70.7×13.5×4	板目材	* ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
第130図-5	板杭	58.2×9×3.5	板目材	スギ	先2面削り
第130図-6	板杭	66×7.4×3	板目材	スギ	先2面削り
第130図-7	板杭	43.7×6×4.9	板目材	スギ	先2面削り
第130図-8	板杭	59×6.3×2.9	板目材	スギ	先2面削り
第130図-9	板杭	56.3×5.8×3.2	板目材	スギ	先2面削り
第131図-10	板杭	58.3×6×3.3	板目材	スギ	先2面削り
第131図-11	板杭	49.3×7.7×4.4	板目材	スギ	先2面削り
第131図-12	板杭	41.3×3.1×2.3	板目材	スギ	先2面削り
第131図-13	板杭	61.2×7×2.7	板目材	スギ	先2面削り
第131図-14	板杭	65.8×6.1×2.8	板目材	スギ	先2面削り

## 27号溝

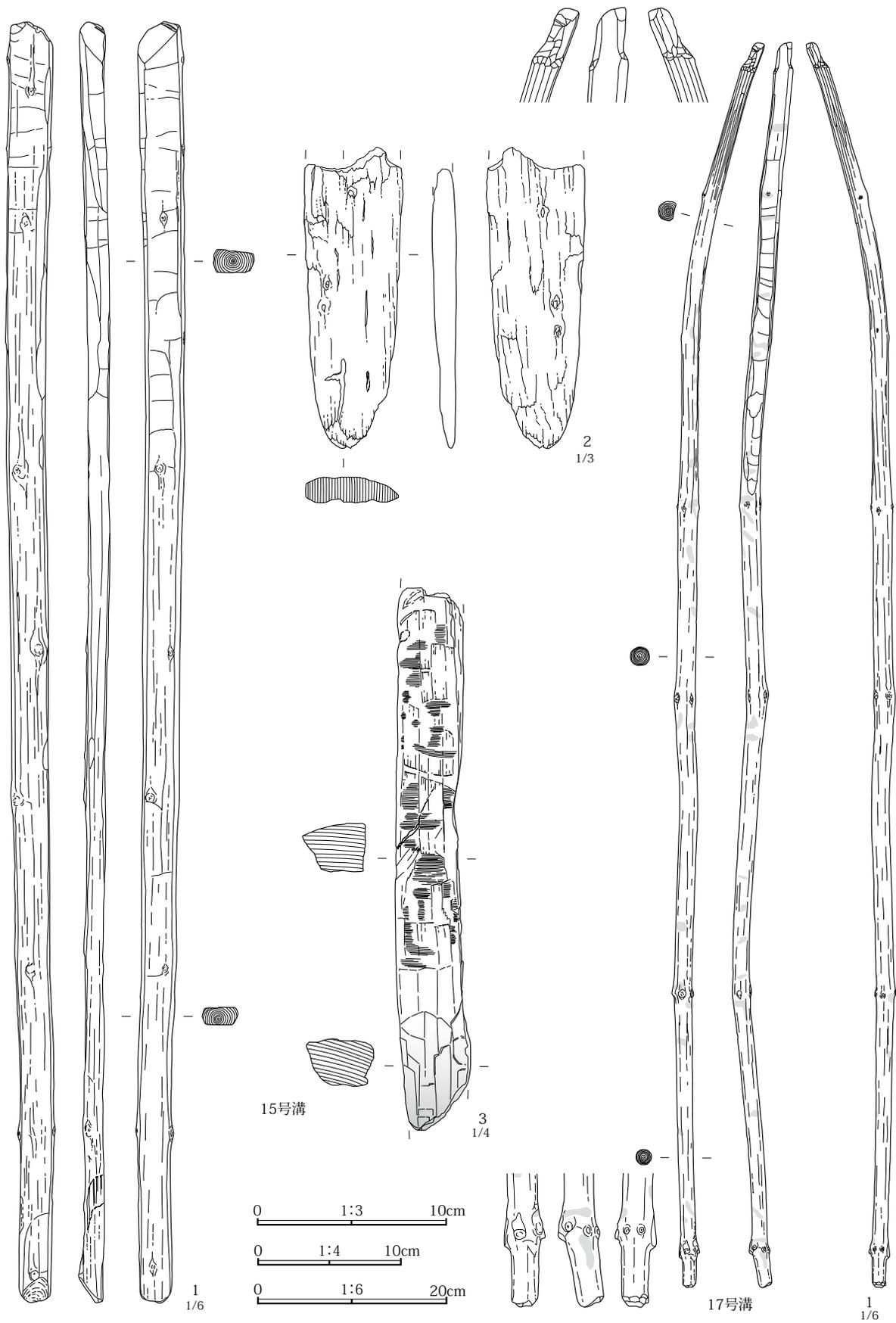
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第132図-1	丸木杭	55.2×4.3×	丸木材	クヌギ節	
第132図-2	丸木杭	55.3×3.4×	丸木材	アカガシ亜属	

## 1号木組遺構

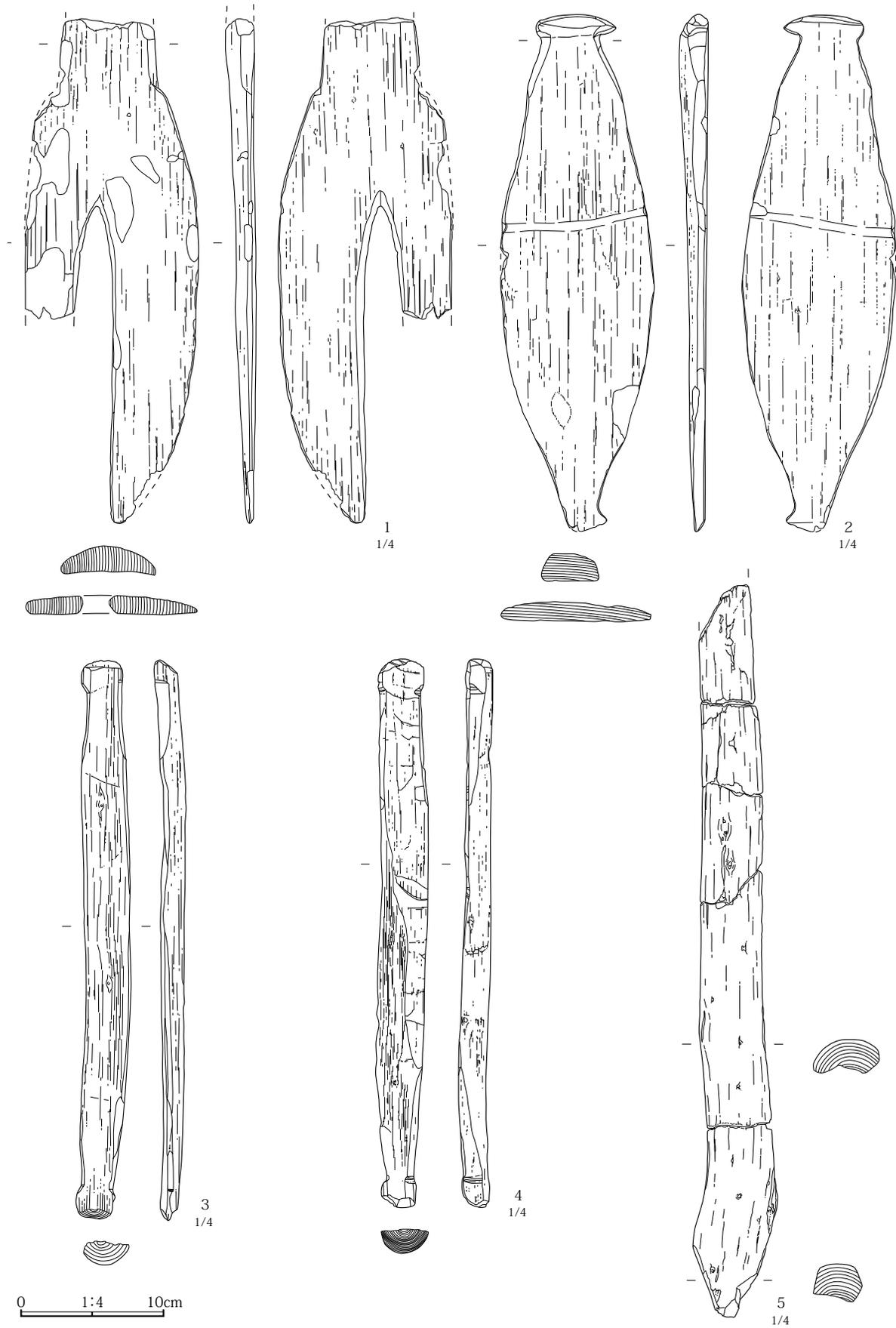
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第132図-1	横鋤(エブリ)	25.8×7×1		* カバノキ科アサダ属アサダ	
第132図-2	建築部材?	43.4×18.7×4.1	桁目材	スギ	
第132図-3	板状部材	27×9.9×3.7	板目材	針葉樹	
第132図-4	不明部材	23.5×4.7×1.8	角材?	ニレ科エノキ属	
第133図-5	板材	38×3.2×1.1	桁目材	スギ	
第133図-6	角材	31×2.8×1.4		スギ	
第133図-7	角杭	38×3.7×2.8	角材	スギ	先4面削り打設
第133図-8	角杭	45.9×4×3.3	角材	スギ	先5面削り打設
第133図-9	角杭	44.1×6.6×4.2	角材	クヌギ節	先多面削り打設
第133図-10	棒状品	49.1×2.9×2.6		スギ	杭として打設
第133図-11	角杭	42.8×3.9×4	角材	スギ	表面焦げ打設
第133図-12	角杭	27.2×4.3×3.4	角材	スギ	先多面削り
第133図-13	串状品	36.3×2.2×1.9		ヤマグワ	
第134図-14	角杭	42.2×4×4	角材	スギ	打設
第134図-15	角杭	45.7×3.4×3.6	角材	スギ	基部焦げ打設
第134図-16	丸木杭	40.8×3.4×	丸木材	アカガシ亜属	先多面削り
第134図-17	丸太杭	51.5×5.5×	丸太材	アカガシ亜属	先4面削り打設
第134図-18	丸木杭	52.5×4.3×	丸木材	アカガシ亜属	先多面削り打設
第134図-19	丸木杭	49.1×4.5×	丸木材	アカガシ亜属	打設

## 2号木組遺構

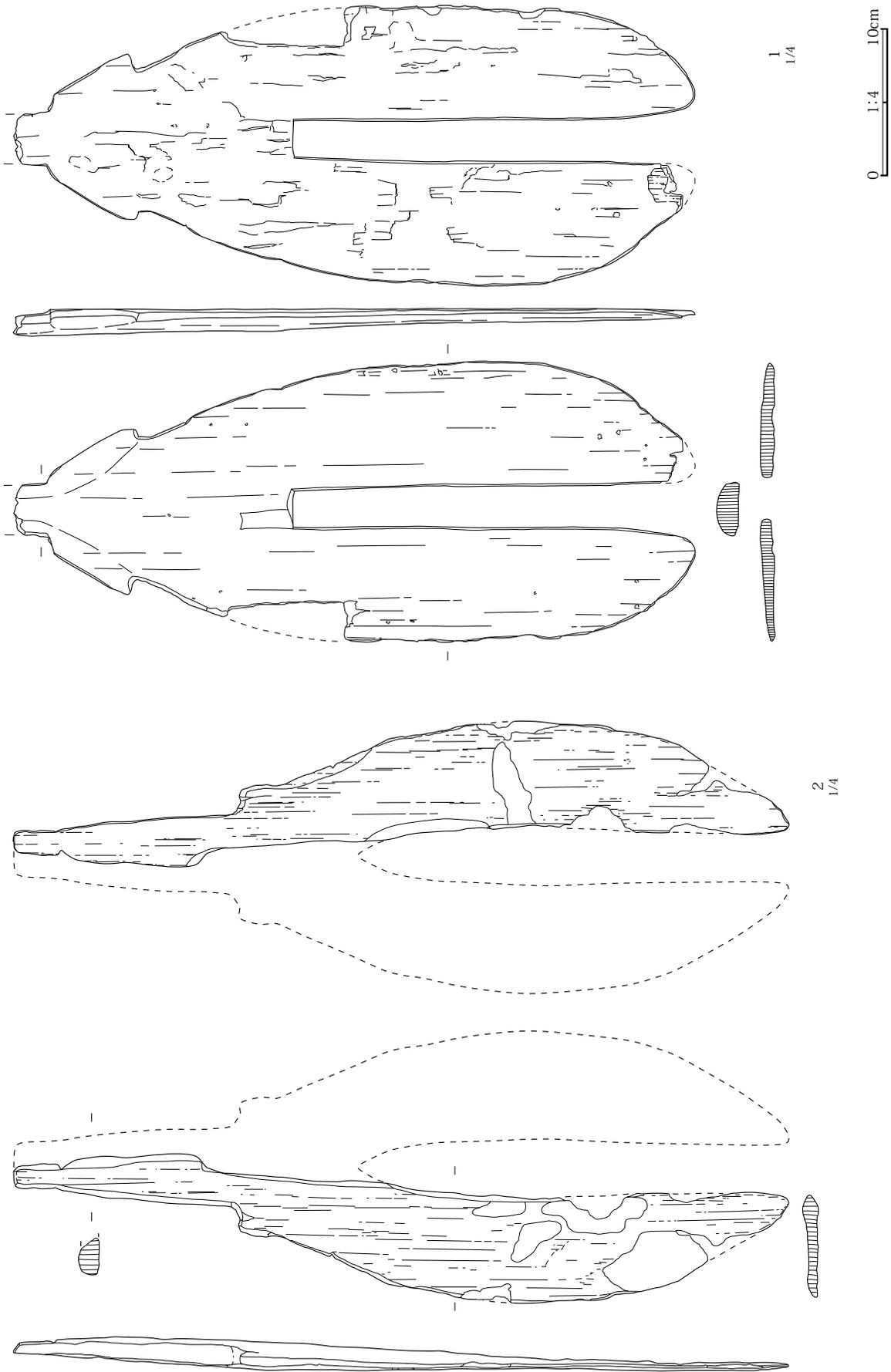
図版番号	器種	計測値 (cm)	木取り	樹種 (*印は吉田生物研究所同定)	備考
第134図-1	角杭?	35.1×6.9×2	角材?	スギ	



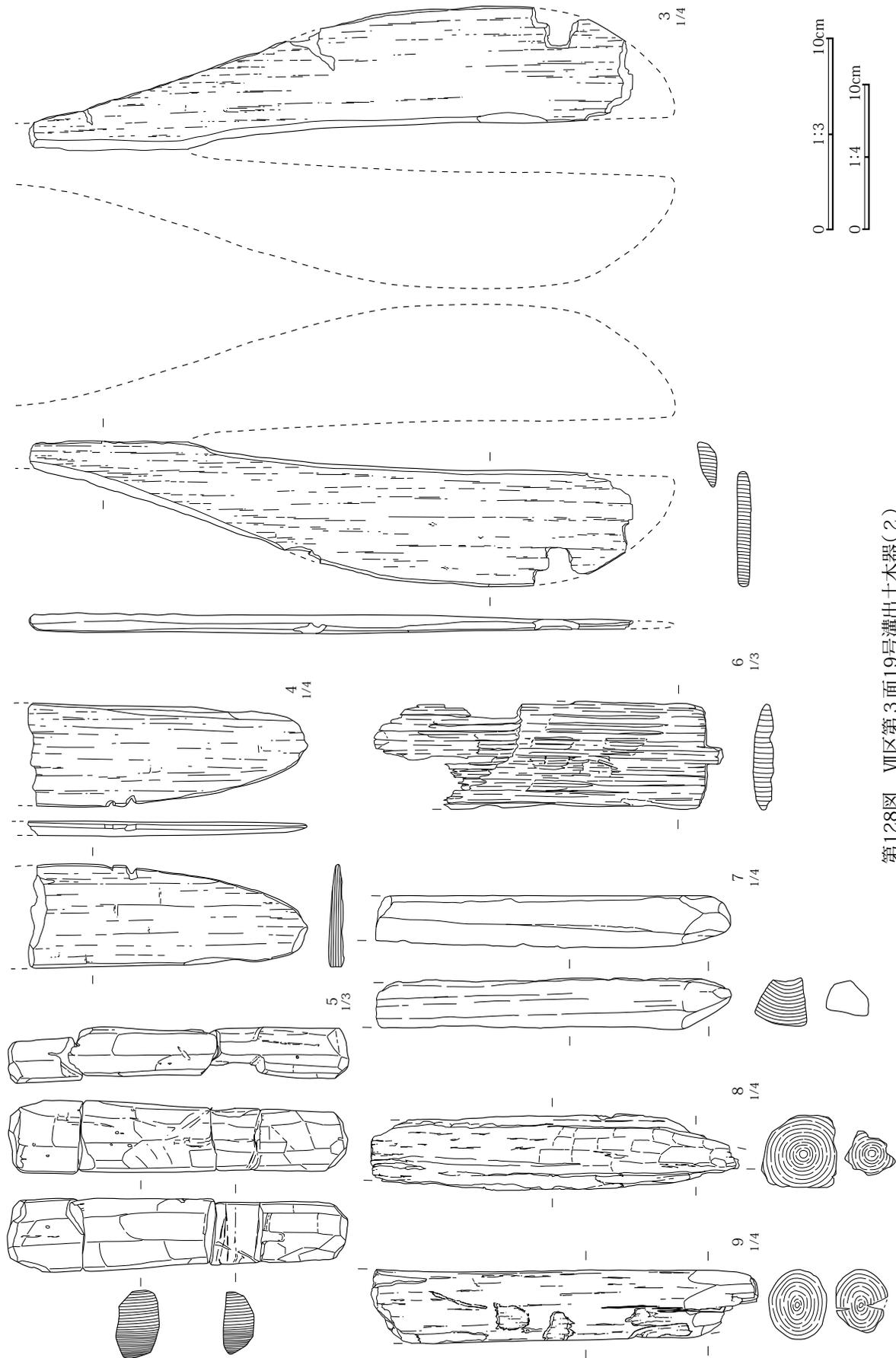
第125図 VII区第3面15号・17号溝出土遺物(木器)



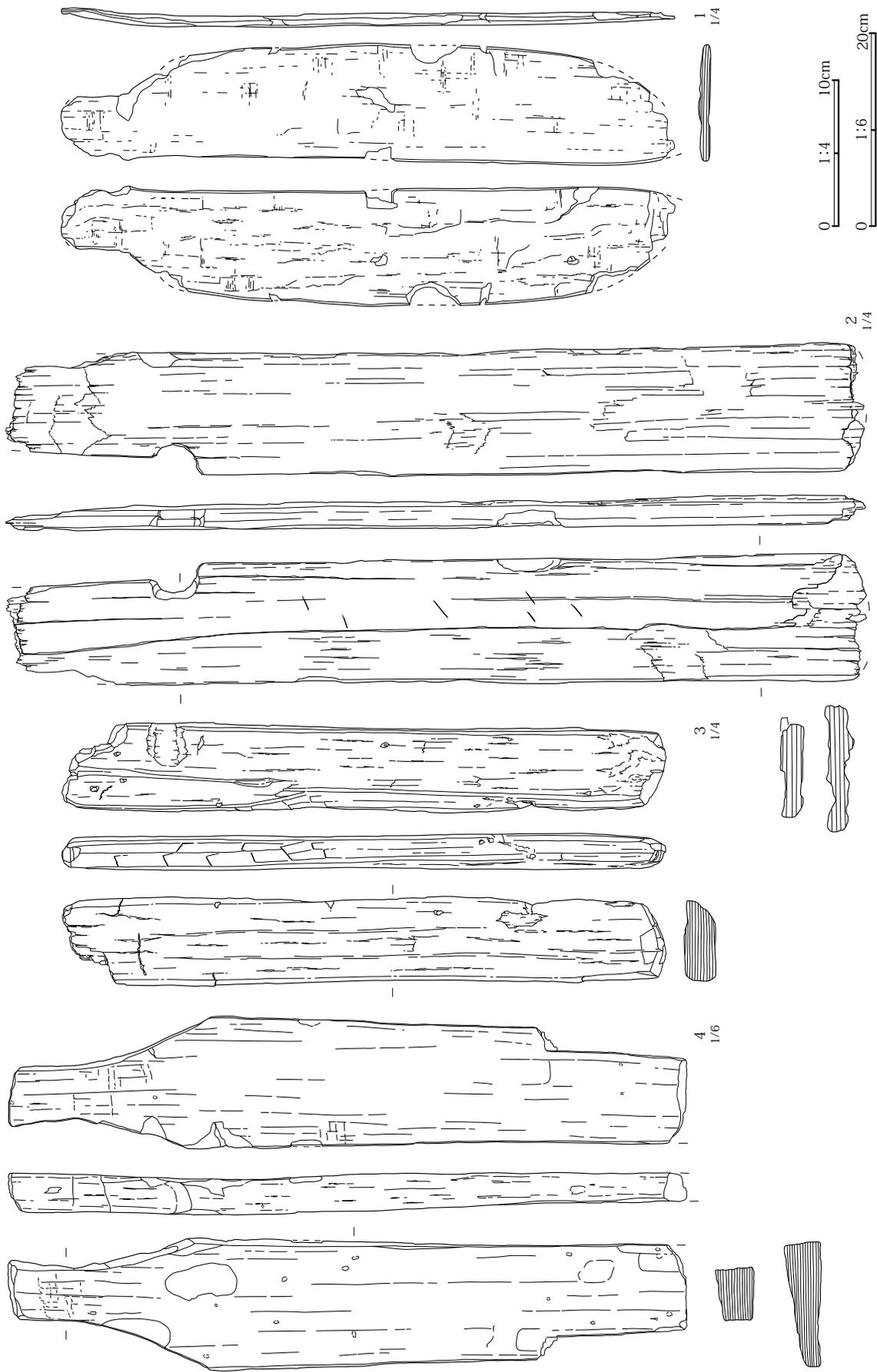
第126図 VII区第3面18号溝出土木器



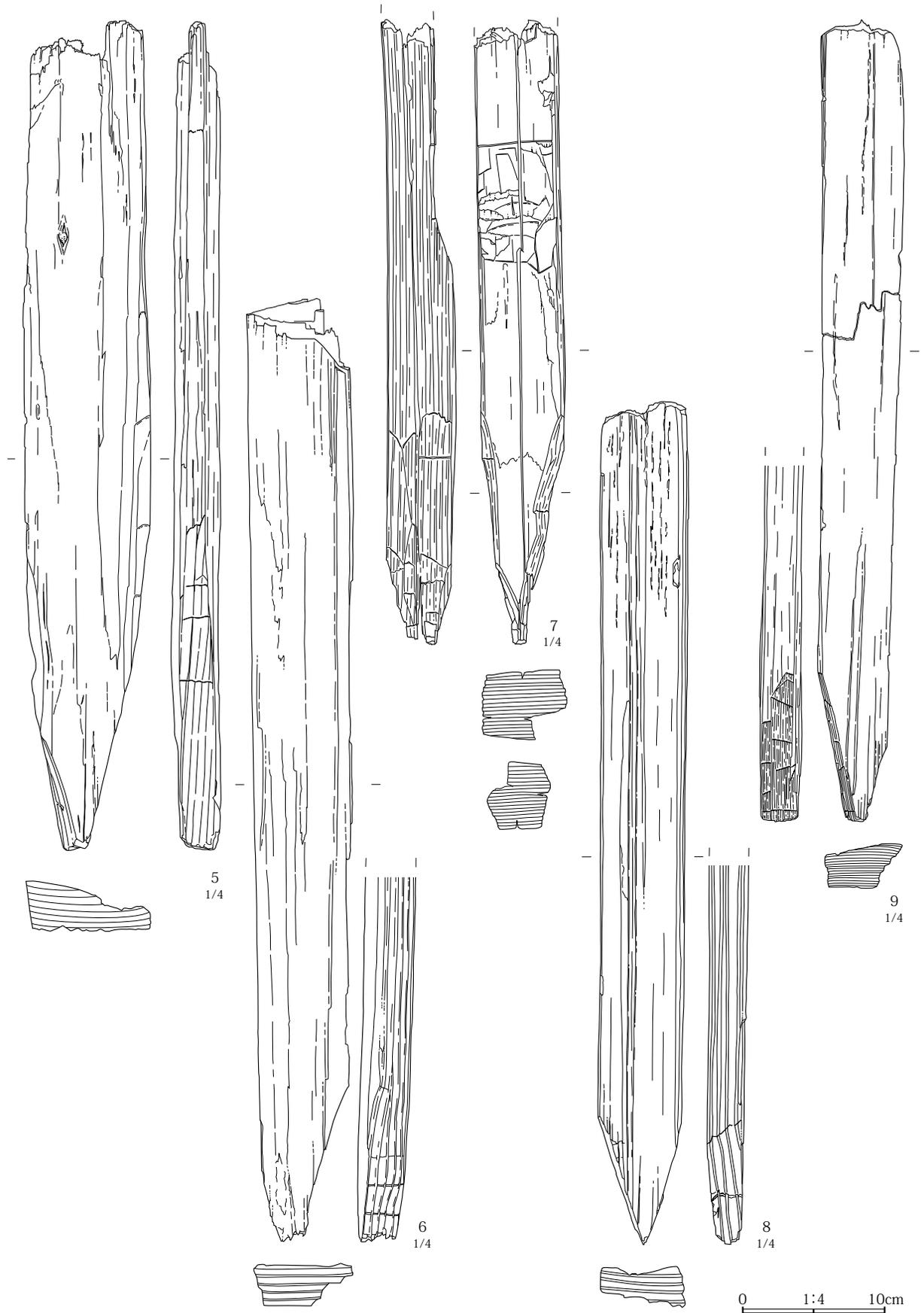
第127図 VIII区第3面19号溝出土木器(1)



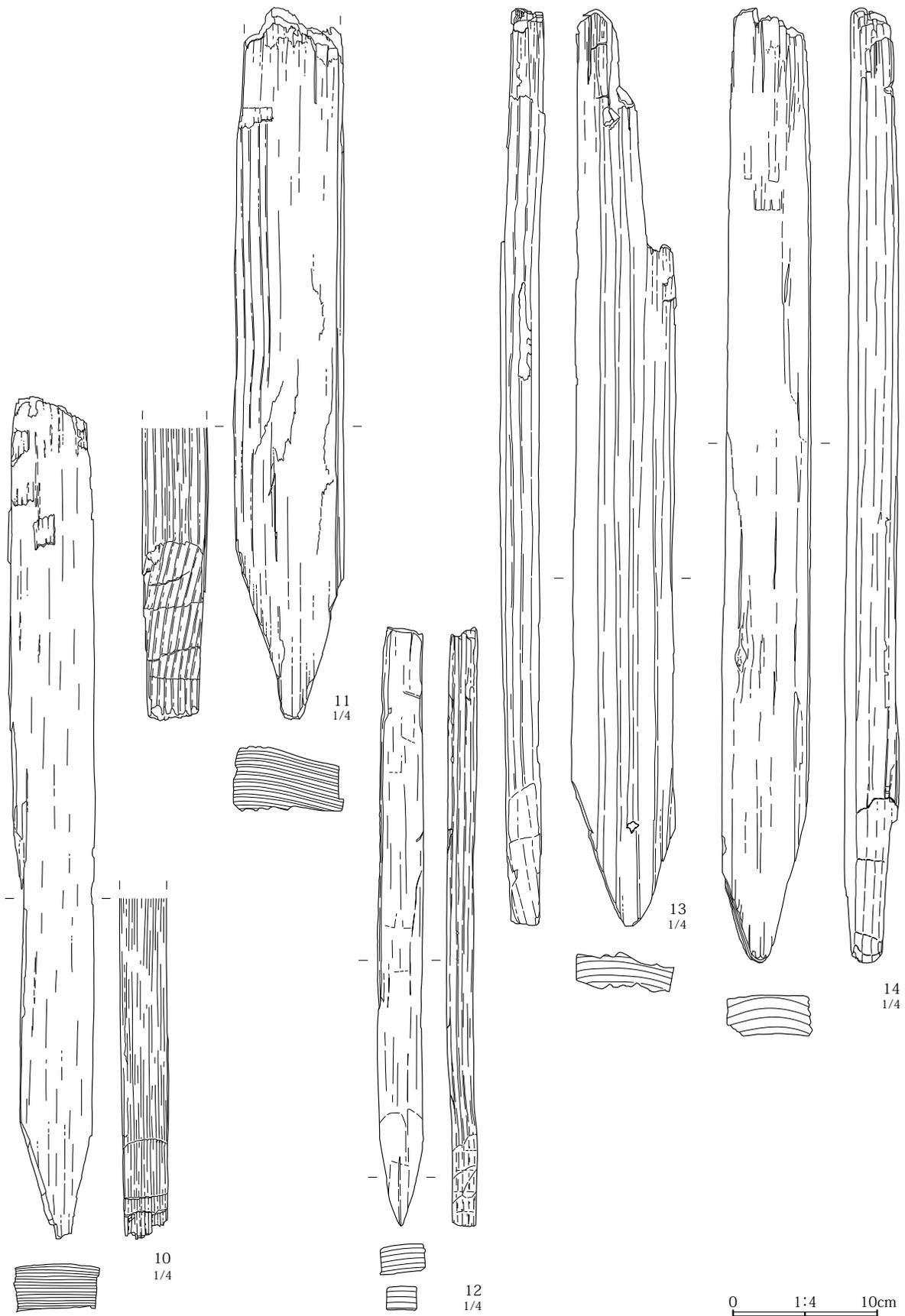
第128図 VII区第3面19号溝出土木器(2)



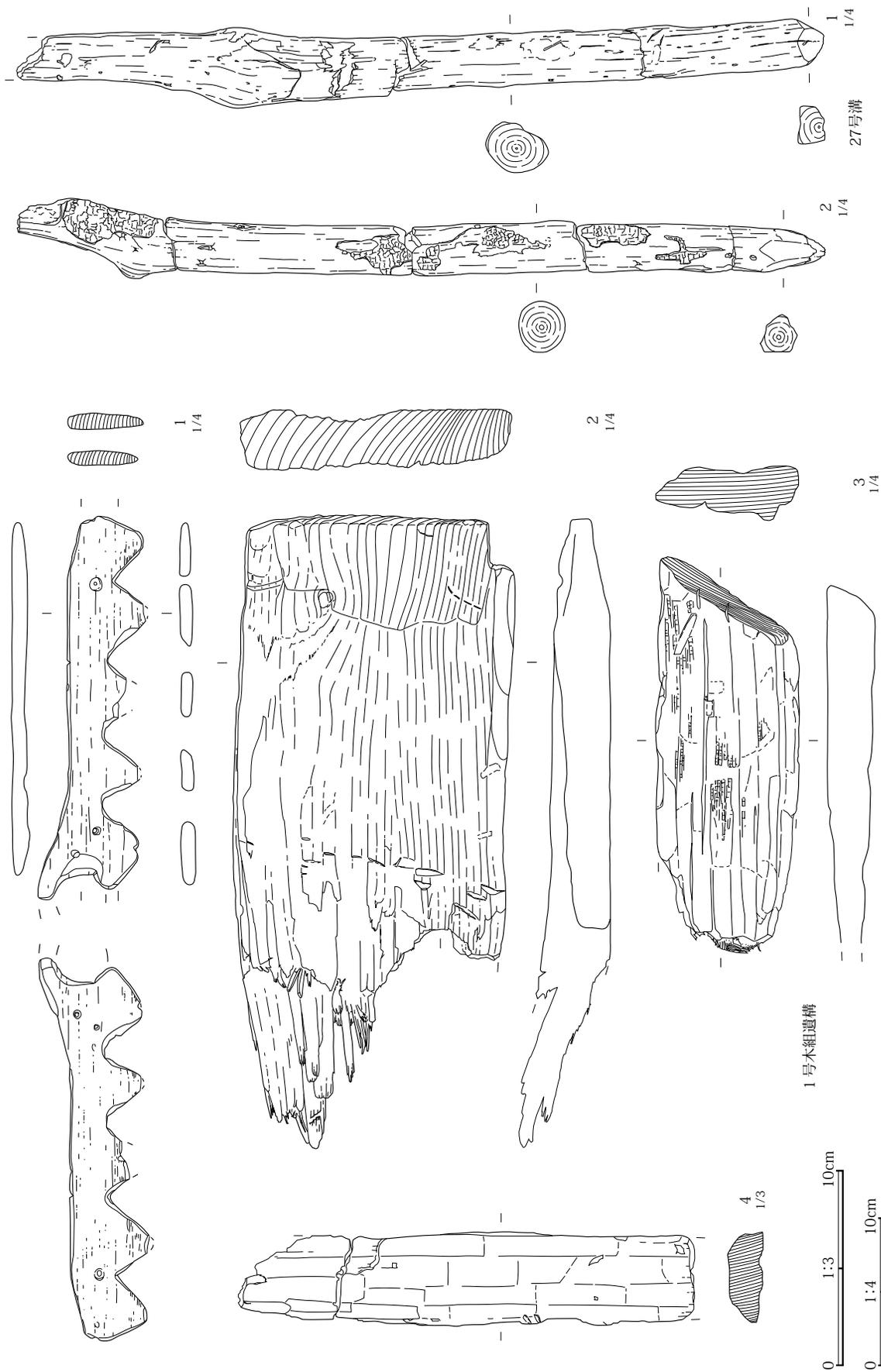
第129図 VII区第3面25号溝出土木器(1)



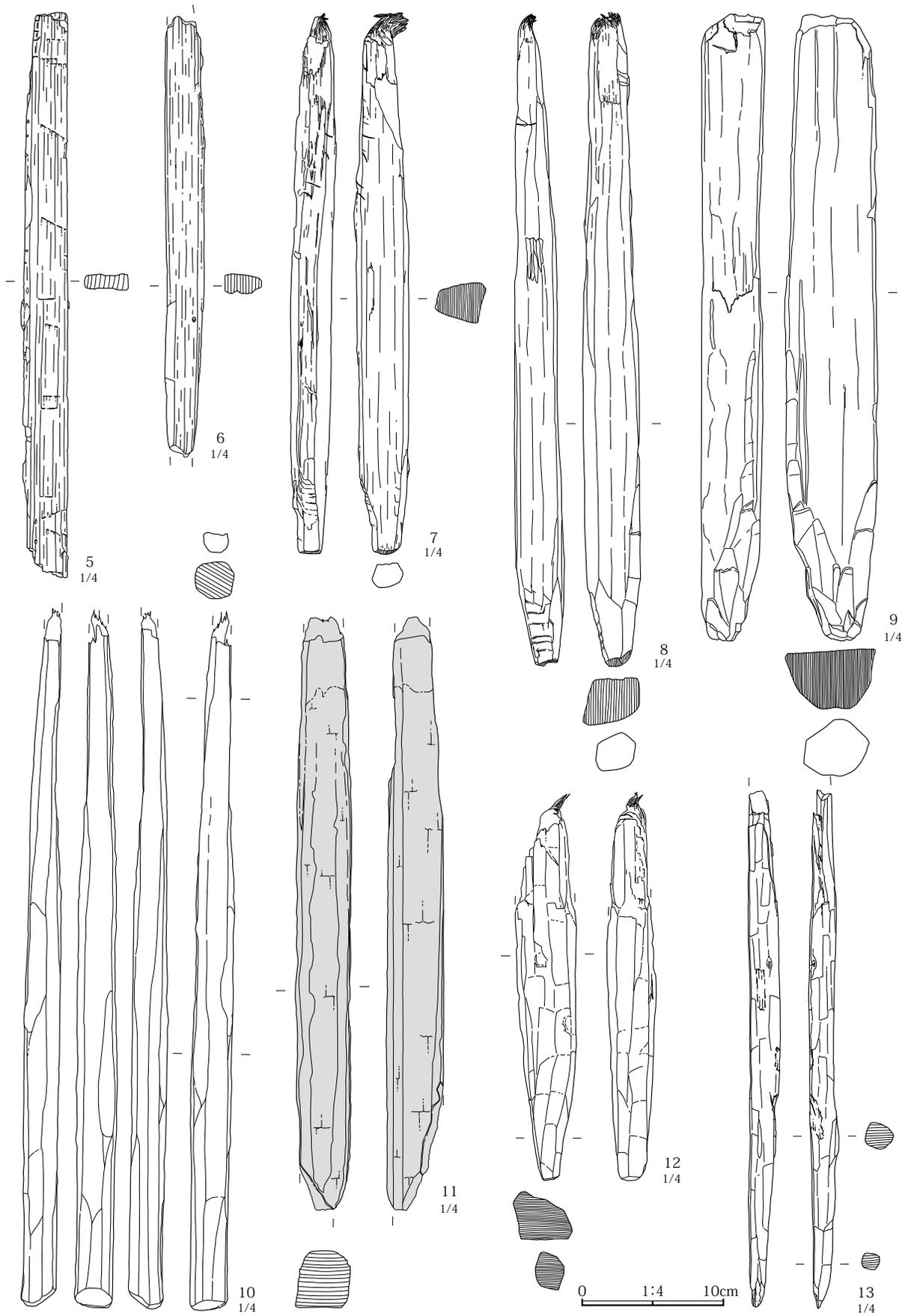
第130図 VII区第3面25号溝出土木器(2)



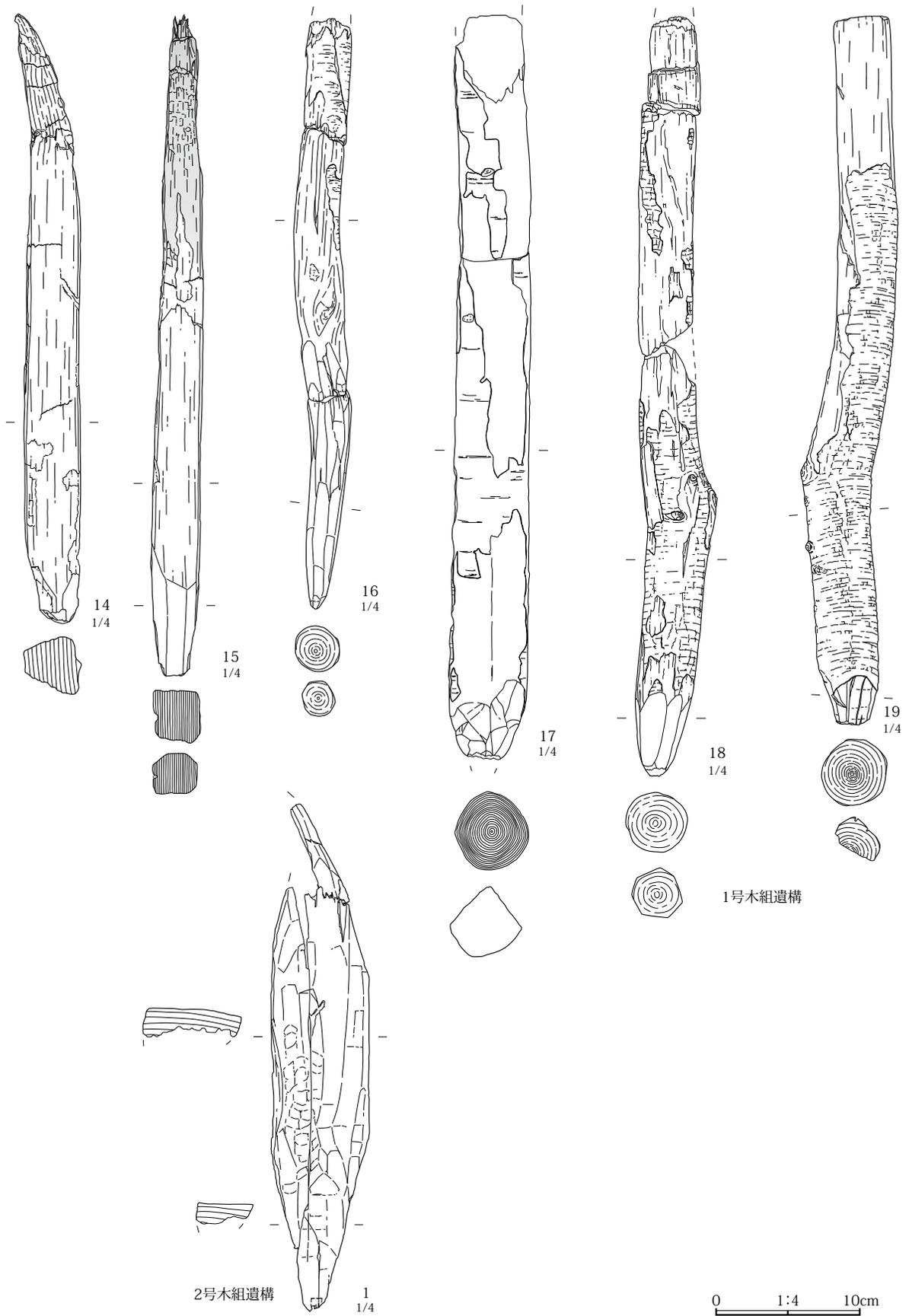
第131図 VII区第3面25号溝出土木器(3)



第132図 VII区第3面27号溝・1号木組遺構出土木器(1)



第133図 VII区第3面1号木組遺構出土木器(2)



第134図 VII区第3面1号木組(3)・2号木組遺構出土木器

Ⅶ区出土遺物

**土器**(第124図) 土師器手捏ね土器である。第3面の出土。鉢形模倣の完形品で口径4.8cm、底径4.2cm、器高4.4cm。胎土は細砂粒を含む。鈍橙色で焼成は良好。

**石器**(第135・136図) 1～3は第3面18号溝出土の磨り石。2は平面の摩滅顕著で光沢があり滑らか。側縁に軽い敲打痕がある。3は半欠。粗粒輝石安山岩。

4は第3面19号溝出土。磨り石。長側縁部は平坦に調整される。粗粒輝石安山岩。

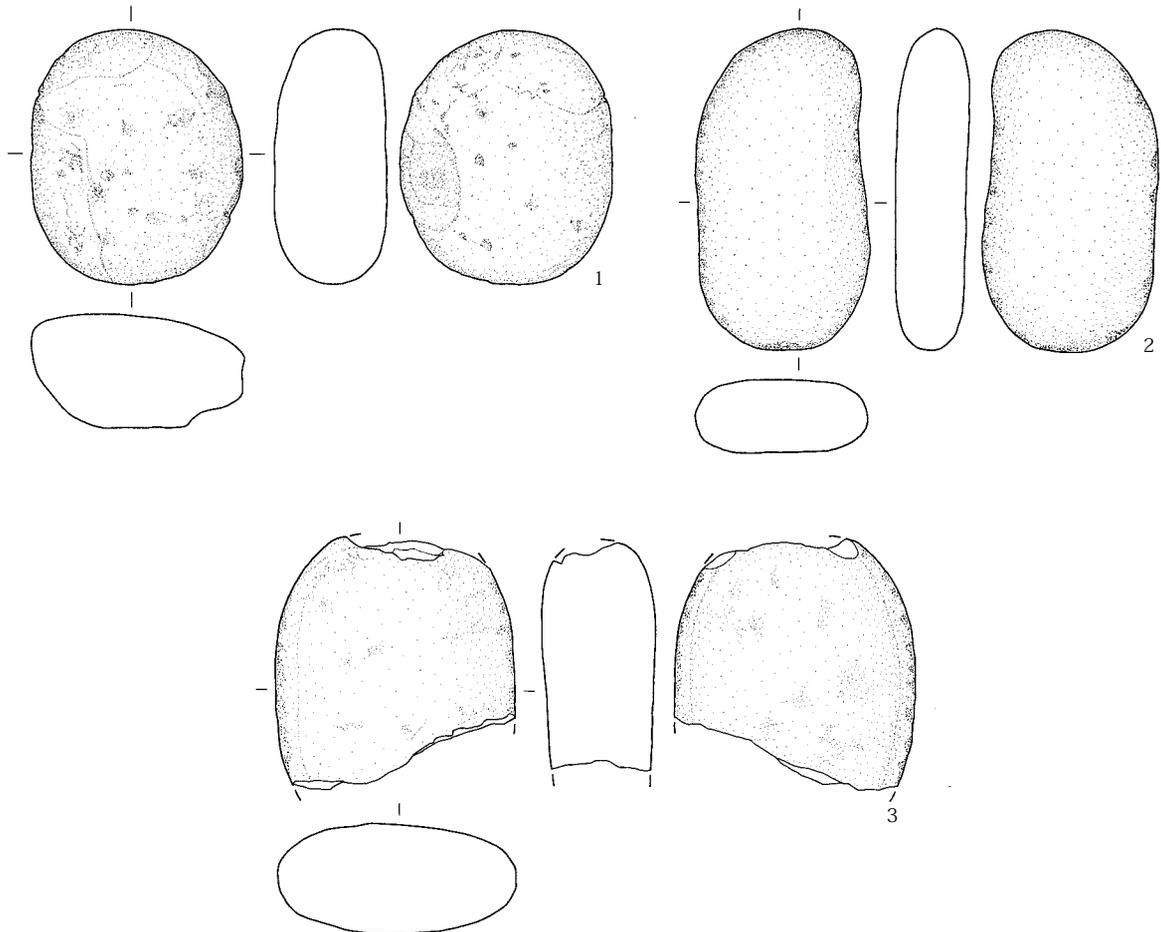
5・6は調査区北東部に設定された試掘溝出土。5は長径石の片端破断面を敲打面に使用。片端は両面が研磨溝のごとくに削られる。側縁頂部付近には敲打痕がある。6は多孔石器とともに粗粒輝石安山岩。

7は表採品。小玉様の製品。風化が進んでいるためか、脆弱。

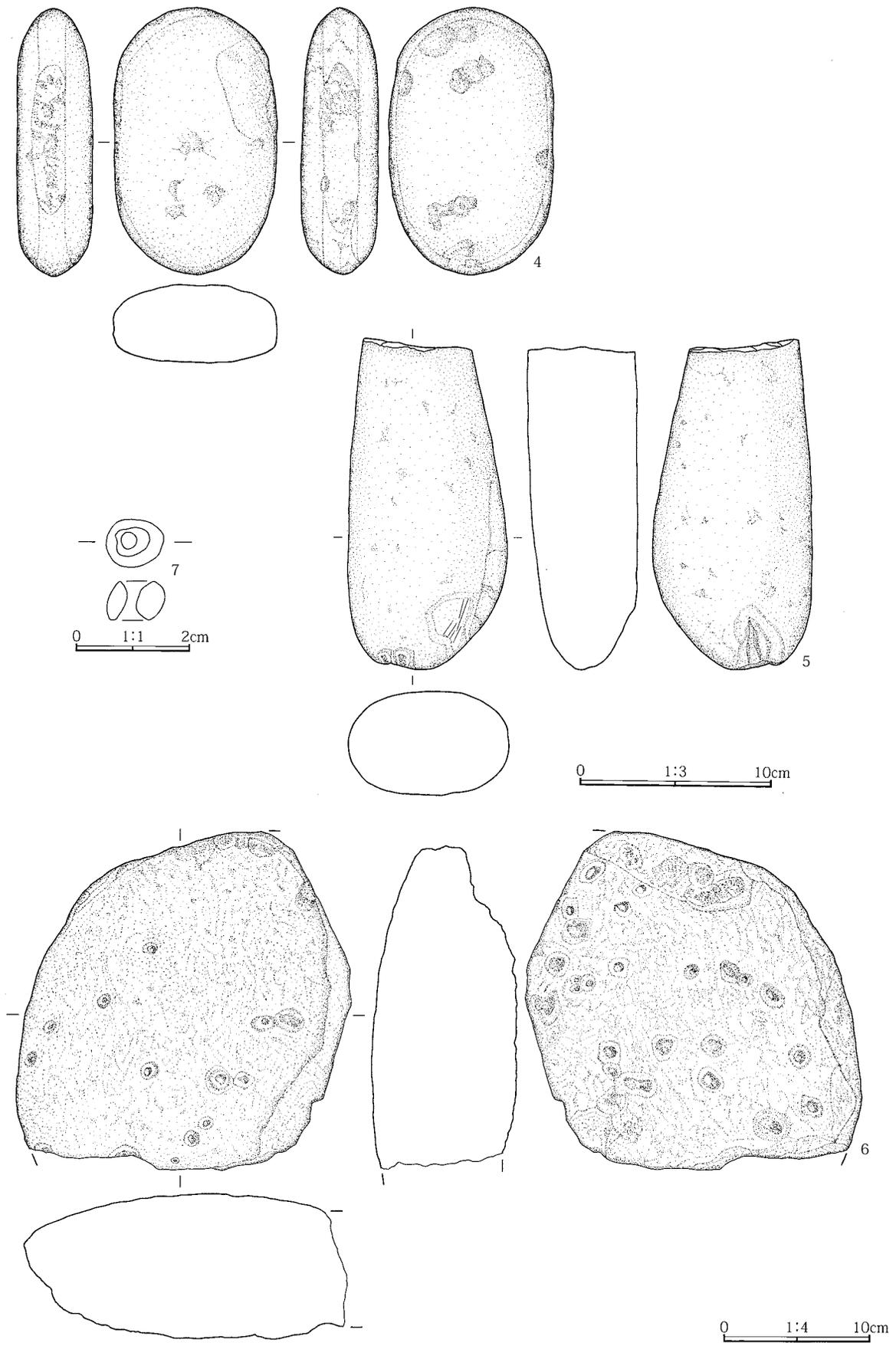
Ⅶ区出土の遺物 石器計測表

単位 cm・g

図版番号	器種	出土位置	残存	長径	短径	厚	備考
第135図1	磨り石	18号溝	完形	10	8.4	4.5	重550g 粗粒輝石安山岩
第135図2	磨り石	18号溝	完形	12.7	7	2.9	重470g 粗粒輝石安山岩
第135図3	磨り石	18号溝	半欠	9.7	9.5	4.3	重690g 粗粒輝石安山岩
第136図4	磨り石	19号溝	完形	13.7	8.4	4	重740g 粗粒輝石安山岩
第136図5	敲打石器	北西試掘溝	完形?	17	8.3	5.3	重1,380g 粗粒輝石安山岩
第136図6	多孔石器	北西試掘溝	半欠?	23.2	23.2	9.8	重6,300g 粗粒輝石安山岩
第136図7	小玉	表採	完形	0.955	0.925	0.62	重0.64g 材質不明



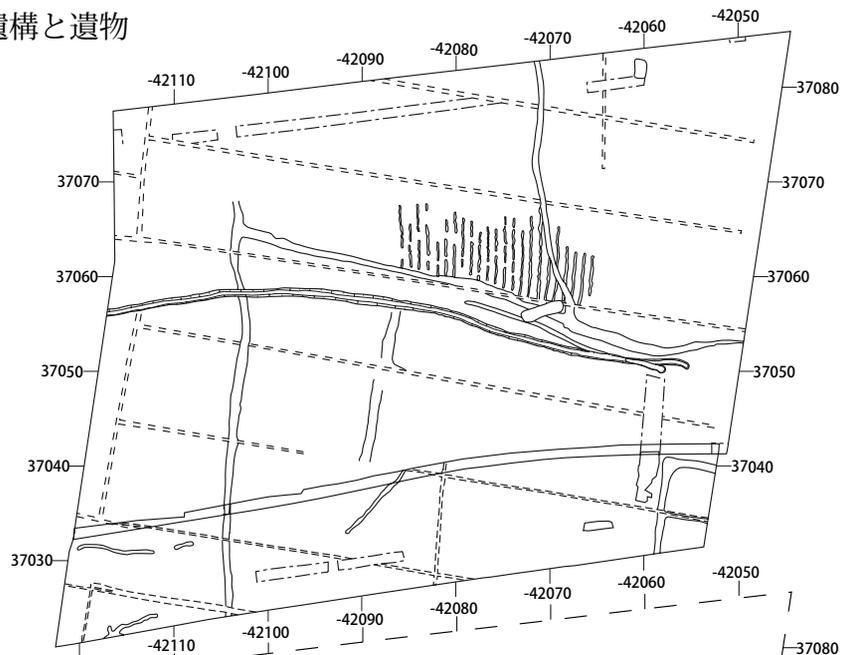
第135図 Ⅶ区出土石器(1)



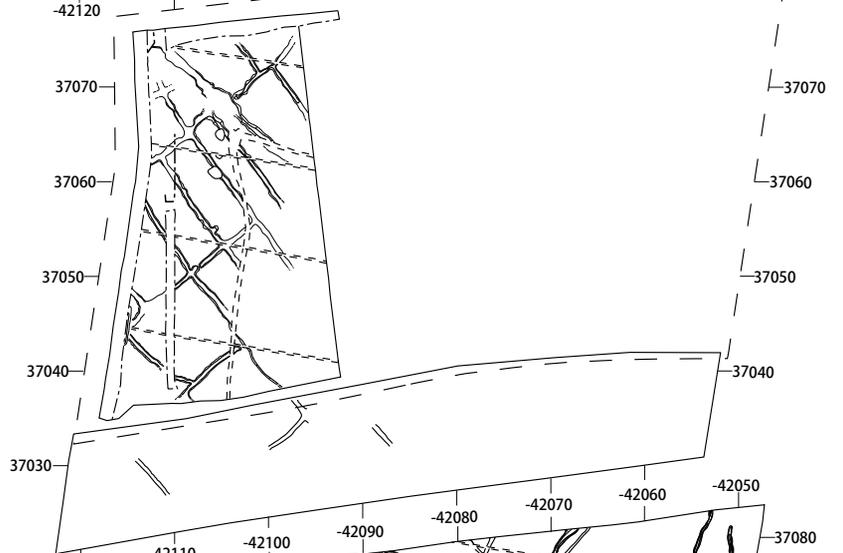
第136図 VII区出土石器(2)

6. VIII区の遺構と遺物

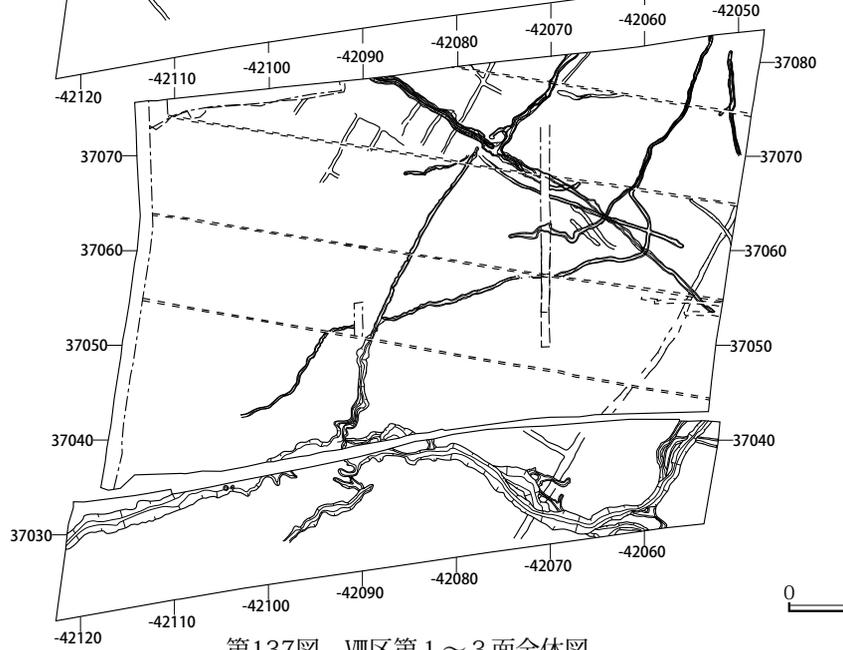
VIII区第1面



VIII区第2面



VIII区第3面



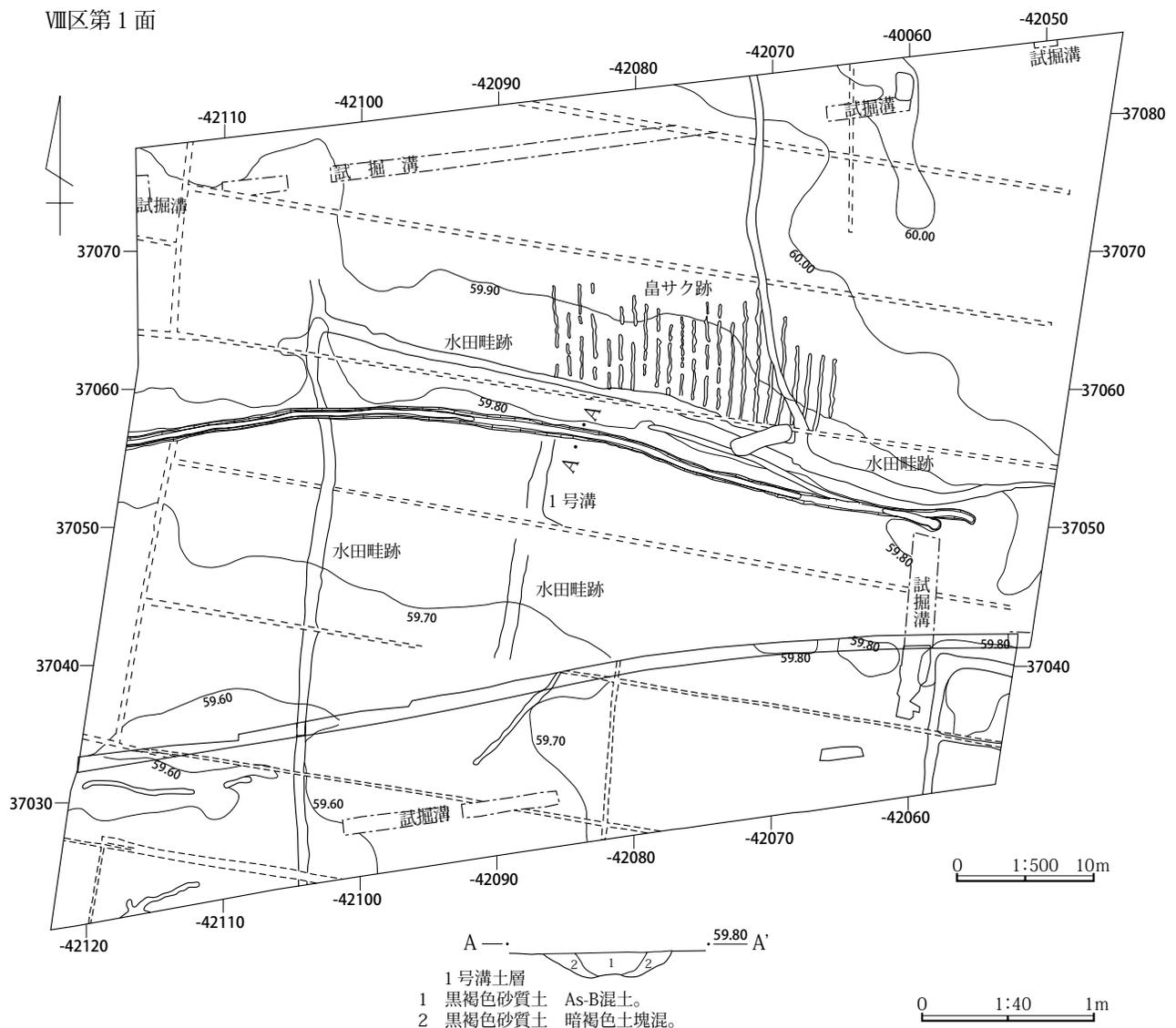
0 1:800 20m

第137図 VIII区第1～3面全体図

Ⅷ区では1.2の小区割り調査が行われた。当区での遺構検出面は第1面・第2面・第3面からなる。各面での検出遺構は、第1面からは中央東西方向に延びる溝跡1条、南北方向の畝サク状痕、方形区画の水田畦畔の痕跡などがある。第2面では調査区の西側と南側に方形区画の水田畦畔が検出されている。第2面は西側のⅦ区およびⅥ区調査区検出の水田跡と同じ面であり、水田跡遺存の東限域である。第3面もまた、Ⅶ区で検出された水田区画と溝跡の連続する遺構内容となっている。ただし、水田跡は遺存状況が悪く僅かに痕跡を認めるのみである。

Ⅷ区第1面の遺構と遺物 (第138図、P.L. 34)

第1面から検出された1号溝は調査区中央部にあり、緩く弓なりの軌跡で東西走する。西側Ⅶ区第1面の4号溝に連続する溝である。当区での検出延長は約63mで、東端は軌跡が跡切れる。溝幅75cm、深さ15cm、断面形状は浅い皿形を呈する。埋土はAs-B混土と思われる黒褐色砂質土を主体にする。出土遺物は無い。



第138図 Ⅷ区第1面全体図

### 第3章 検出された遺構と遺物

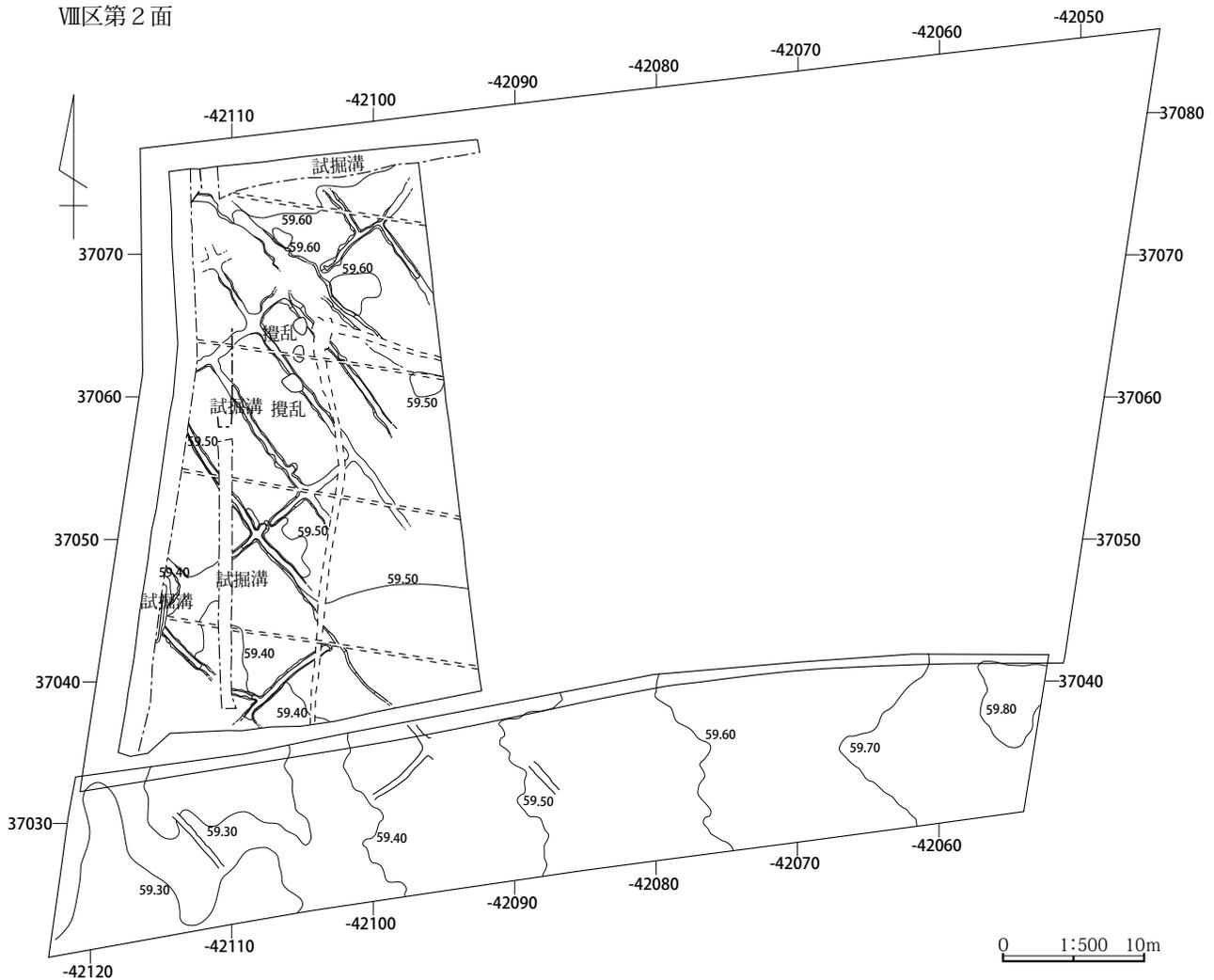
**サク状遺構**は調査区中央部にあり、検出範囲は約160㎡である。遺存状況は、削平が深くおよんでいるため凹みとしてはほとんど残らず土色の変化による認識である。サク方向は略南北に切られ、サク幅は10～20cm、サク間は約70cmの等間隔になる。

**水田跡**は畦畔などの高まりなどは検出されず、検出面の土壌色合いによる水田耕土と畦畔と思われる軌跡が断続的に認識されたことによる。畦畔の軌跡は、東西・南北方向が基本的区割り方向で略方形区画を示すが、区画規模などの状況を明らかにできる様な面的に広がりをもった遺存状況では無い。第1面での出土遺物は溝、サク状遺構、水田跡いずれからも遺構に特定できる物は無い。

#### Ⅷ区第2面の遺構と遺物（第139図、P L. 34・35・36）

第2面より検出された遺構は方形区画の水田跡である。Ⅷ区2面から続く水田跡で、調査区西側に偏った域の部分的な遺存である。調査区に対する検出範囲の比率は1/3程度、面積は700㎡ほどである。調査区の南側に僅かな畦畔の痕跡を認めるが、区画形状が知れるものは無い。第2面での調査区東側約2/3の範囲には水田を含め遺構が認められていない。

Ⅷ区第2面



第139図 Ⅷ区第2面全体図

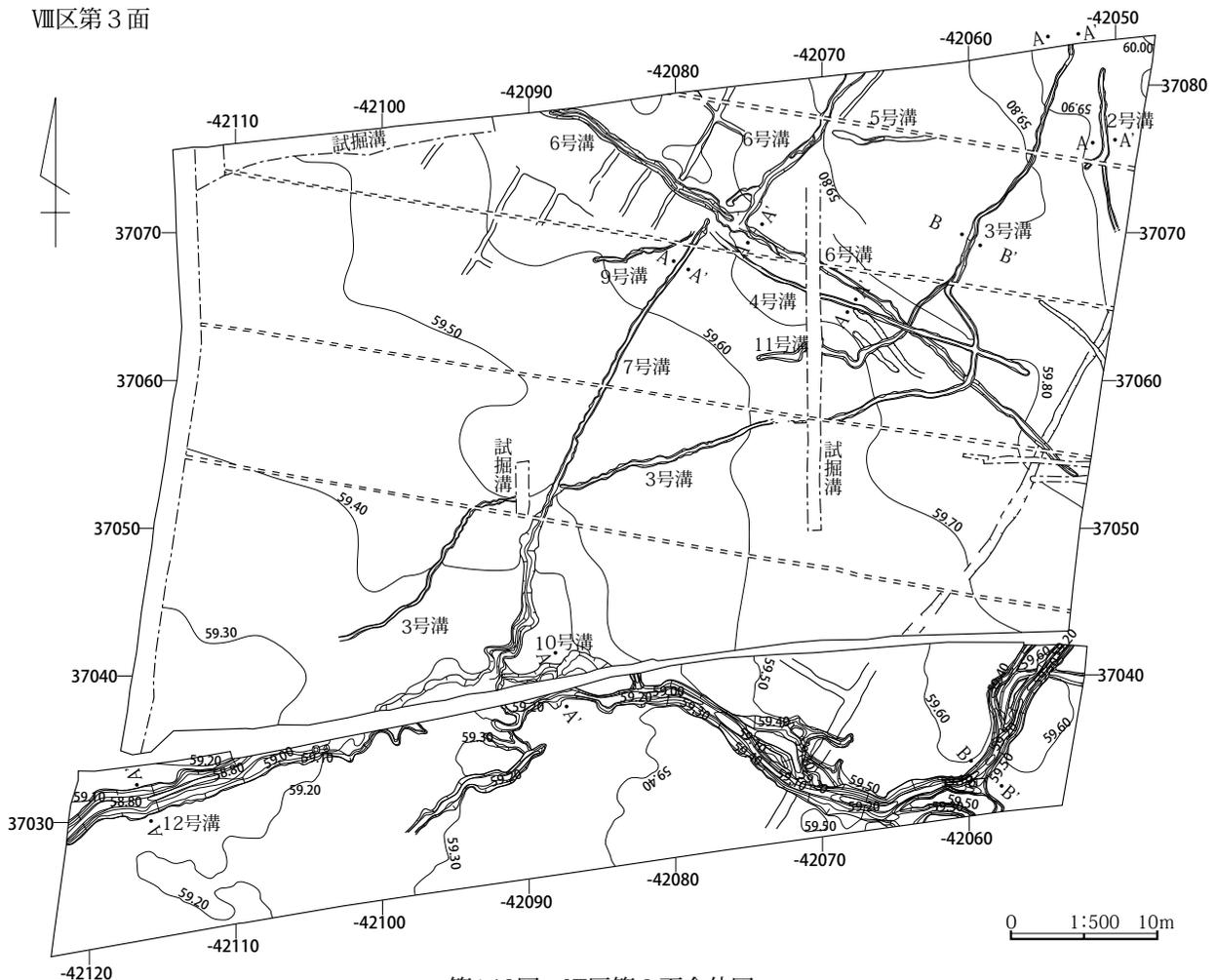
検出された水田跡の総区画数は19区画ほどである。区画形状は長短軸長差のある長方形を主として、南西部には正方形態の区画も見られる。畦畔区画の造成はⅧ区東半のそれと同じく南西方向に向かう微妙な下り傾斜地形を考慮して、長軸畦畔を北西～南東方向に、短軸畦畔を北東～南西方向に採る。水口と想定される畦畔の切れ間は短軸畦畔または北東～南西軸畦畔の片端に寄って切られる傾向にある。水田跡に直接伴うと思われる出土遺物は検出されていない。

**Ⅷ区第3面の遺構と遺物** (第140・142図、P.L. 36・37)

第3面より検出された遺構はかなり複雑な軌跡を辿る6条ほどの溝跡である。一部西側Ⅷ区に続く溝跡もあるが、総じて幅細な緩い蛇行軌跡をもち、自然流水などによって開削された形状の感が強い。面的には西側Ⅷ区に検出された第3面水田跡に連続するものであるが、当区においての畦畔は北縁の6号溝付近にそれらしき痕跡を認めるのみである。出土遺物は少なく、溝跡内より少量、小片の土師器が検出される程度である。

**2号溝跡** 調査区北東部X=37070~37080・Y=-42049~-42050の範囲にあり南北走する。両端は調査区内で跡切れ、検出延長11m、幅40cm、深5cmを測る。断面形状は浅い皿形を呈する。埋土はsilt質土である。出土遺物は無い。

Ⅷ区第3面



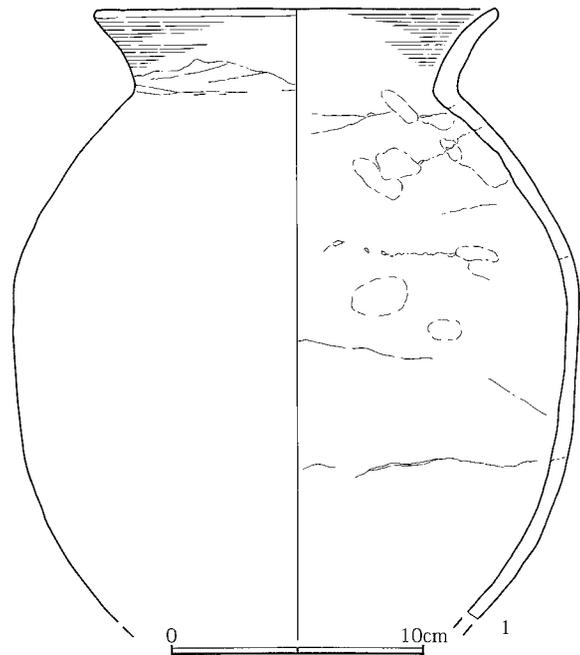
第140図 Ⅷ区第3面全体図

**3号溝** 調査区を北東～南西部に斜行し、 $X=37042\sim37083$ ・ $Y=-42052\sim-42102$ の範囲にある。北東部から蛇行気味に南下後、分枝を生じている。4号溝と重複し鍵状に折れて南西走する。北端は調査区域外に延び、南端は跡切れる。検出延長は76m、幅50cm、深さ10cm前後の浅い溝である。断面形状はV字形・凹凸・浅皿形など定まらない。埋土は砂層を主体とする。出土遺物は検出されない。

**4号溝** 調査区やや北側、 $X=37060\sim37071$ ・ $Y=-42053\sim-42078$ の範囲にあり、6号溝に一部併走する。東側は3号溝に直交して重なり途絶える。西側は7号・6号溝の交差箇所にあたり、同じく軌跡は途絶える。検出延長24.2m、幅45cm、深さ10cm足らずの浅い溝である。出土遺物は無い。断面形状は浅い箱形を呈する。埋土は砂質層である。出土遺物は検出されない。

**6号溝** 調査区北側中央部 $X=37066\sim37080$ ・ $Y=-42066\sim-42089$ の範囲にある。北西端は区域外に延び南東端は一部4号溝と併走し、調査区東区域外に延びる。検出延長は約45m、幅70cm、深さ20～30cmで断面形状からは水流により深く抉れた状況を窺わせる部分もある。埋土は砂層を主とする。出土遺物には土師器甕などがある。

出土遺物（第141図） 1は土師器甕。口縁から胴部にかけて1/4残存。口縁部外反気味に開く。胴部は長胴化の傾向がある。最大径は胴部上半で22.4cm、器面の荒れ著しい。口径16.0cm、残存器高24.1cm。胎土は砂粒多く混、鈍褐色を呈し、焼成は良好。

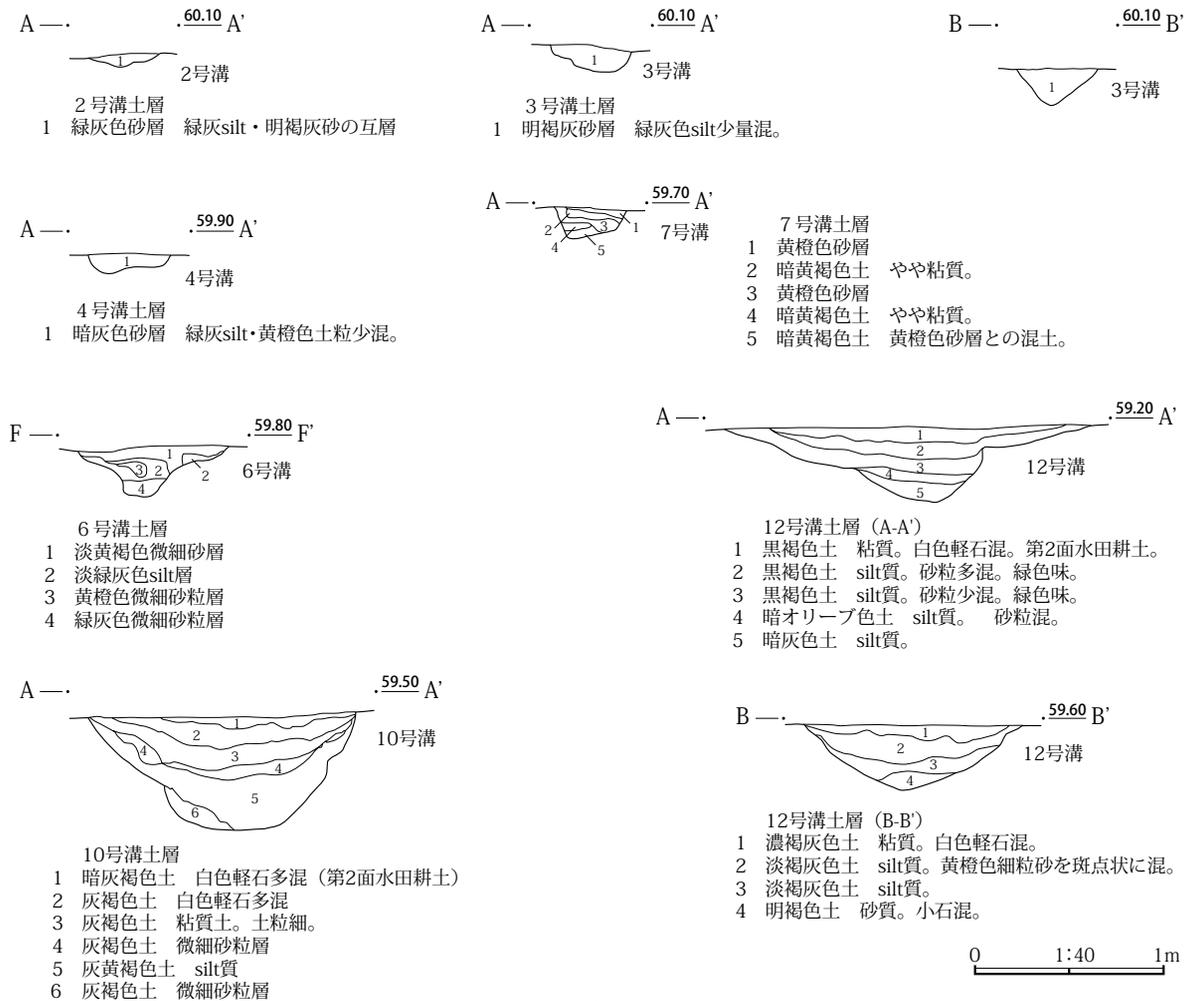


第141図 VIII区第3面6号溝出土遺物

**7号溝** 北縁は調査区域外に延び、南西方へ直線的な軌跡をもつ。 $X=37039\sim37081$ ・ $Y=-42067\sim-42092$ の範囲にある。北縁より14mほどで6号溝に直交し、調査段階では併せて6号溝として認識されていた。ここでは、6号溝との交点南側付近で一端跡切れるが軌跡の符合から北側への延長部分を同一として扱う。南端は、西側VII区検出27号溝の延長である12号溝に合する。検出延長51m、幅1m～40cm、20cmを測る。断面形状はU字形を呈する。埋土は砂層を主体とする。出土遺物は微細な土師器数片である。

**12号溝** 調査区南部 $X=37028\sim37041$ ・ $Y=-42052\sim-42121$ の範囲にある。大きな蛇行軌跡をなして、東西走する。西はVII区27号溝に続き、東は調査区域外に延びる。中央部で南下する7号溝が合するあたりで南下する支枝的軌跡を生じている。溝筋の東方では支枝の離合が多く複雑な軌跡状態を呈する。当区での検出延長約67m、幅は最大部分で約2mに及ぶ。深さ30～40cmを測る。断面形状はU字形を呈し、砂層・silt層で埋まる。出土遺物は土師器細片の他は検出されていない。

**VIII区の出土遺物**（第143図）



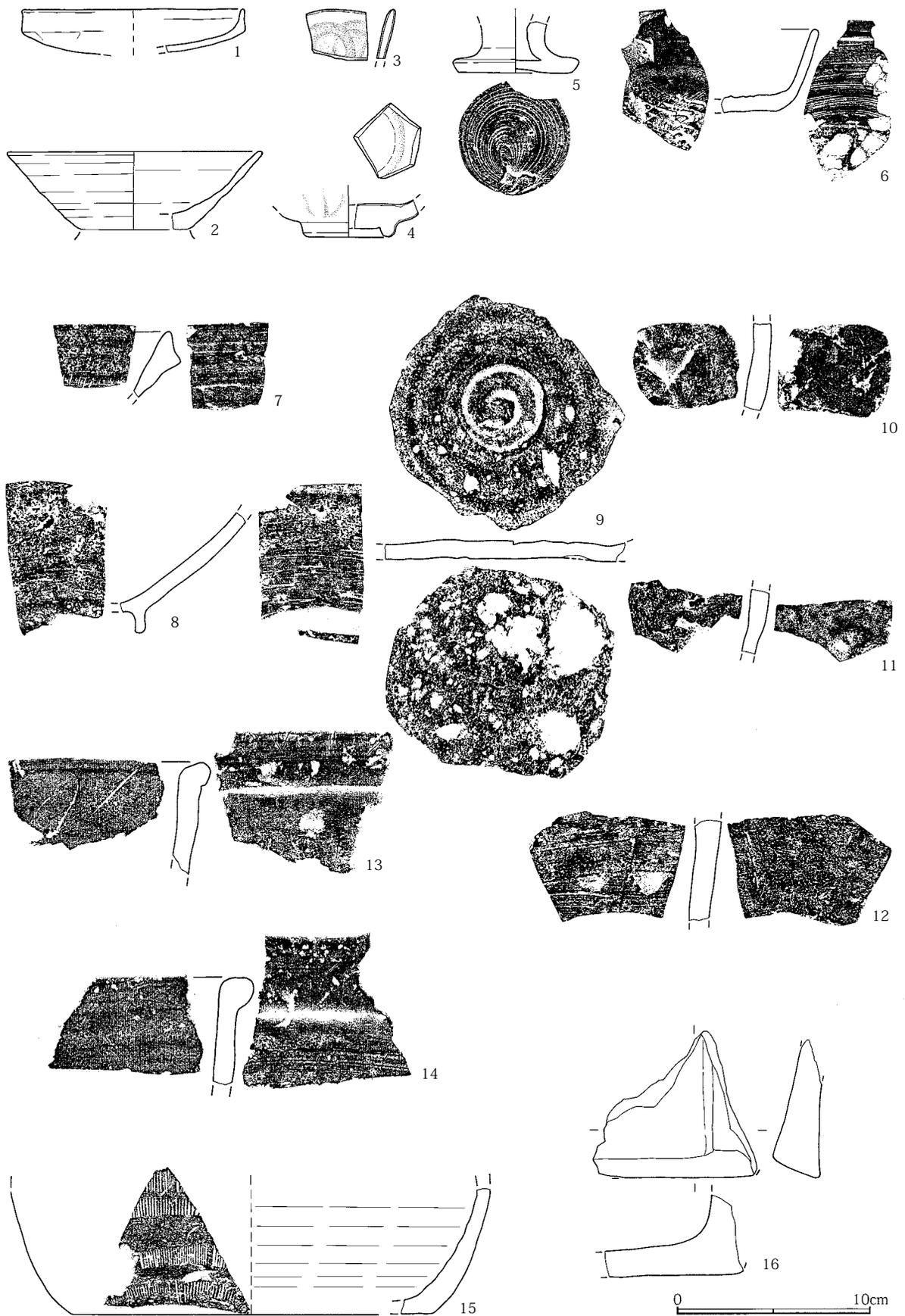
第142図 Ⅷ区第3面溝跡土層図

3・4は龍泉窯系の青磁碗。6はおろし皿。美濃古瀬戸系で13世紀前半代か。7は丹波播り鉢。17世紀後半～18世紀前半。8は常滑片口鉢。12～13世紀。9は常滑甕底部。中世。9～11は常滑甕胴部片。

Ⅷ区出土遺物計測表 (土器・陶磁器)

単位 cm

番号	器種・器形	出土位置	口径	底径	器高	残存	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器坏	表採	11.6		現高 2.1	全1/4	細土	橙5YR6/6	良好	体部偏平
2	須恵器碗	37080-42070	13.3	5.6	現高 4	高台欠1/4	砂多	鈍黄橙10YR7/3	軟	酸化炎焼成
3	青磁碗	表採				口縁小片	緻密	灰白5Y7/2	堅緻	蓮弁龍泉窯系
4	青磁碗	表採		4.8	現高 1.9	底部1/3	緻密	灰白N8/1	堅緻	龍泉窯系
5	瀬戸美濃花瓶	表採		6	現高 2.3	底部	細土	灰白5Y8/2	良好	表面黒褐釉
6	瀬戸美濃系おろし皿	表採			4.3	底部小片	緻密	灰白5Y7/1	堅緻	明黄褐釉
7	陶器播り鉢	表採				口縁小片	粗土	灰5Y6/1	堅緻	表面黄褐
8	陶器鉢	表採			現高 6.2	底部小片	粗粒混	灰白5Y8/1	良好	見込み磨り痕
9	陶器甕	表採	厚0.8			底部	砂粒多混	灰5Y5/1	良好	
10	陶器甕	表採				胴部小片	粗土	灰白5Y8/2	堅緻	表面灰オリーブ
11	陶器甕	表採				胴部小片	粗土	灰白10Y8/3	堅緻	表面灰オリーブ
12	陶器甕	表採				胴部小片	粗土	灰白10Y5/1	堅緻	表面暗灰黄
13	軟質陶器甕?	表採				口縁小片	細土	鈍橙～黒	良好	表面燻し
14	軟質陶器甕?	表採				口縁小片	細土	鈍橙～黒	良好	表面燻し
15	軟質陶器火鉢?	表採			現高 7.4	底部小片	細土	橙	良好	表面燻し
16	軟質陶器七輪?	表採				底部小片	細土	灰白～黒	良好	



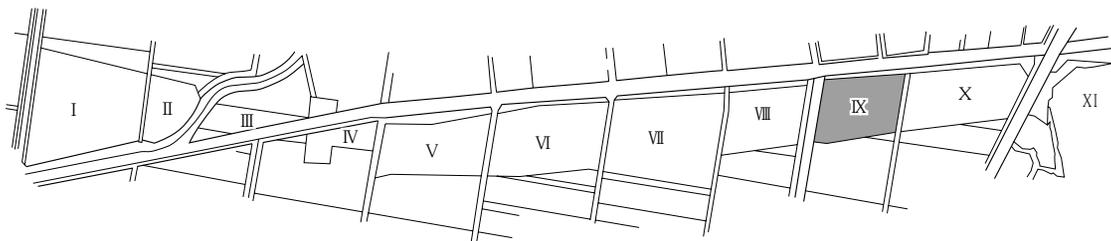
第143図 Ⅷ区出土遺物

7. IX区・X区・XI区の遺構と遺物 (第144・145・146図、P L. 38)

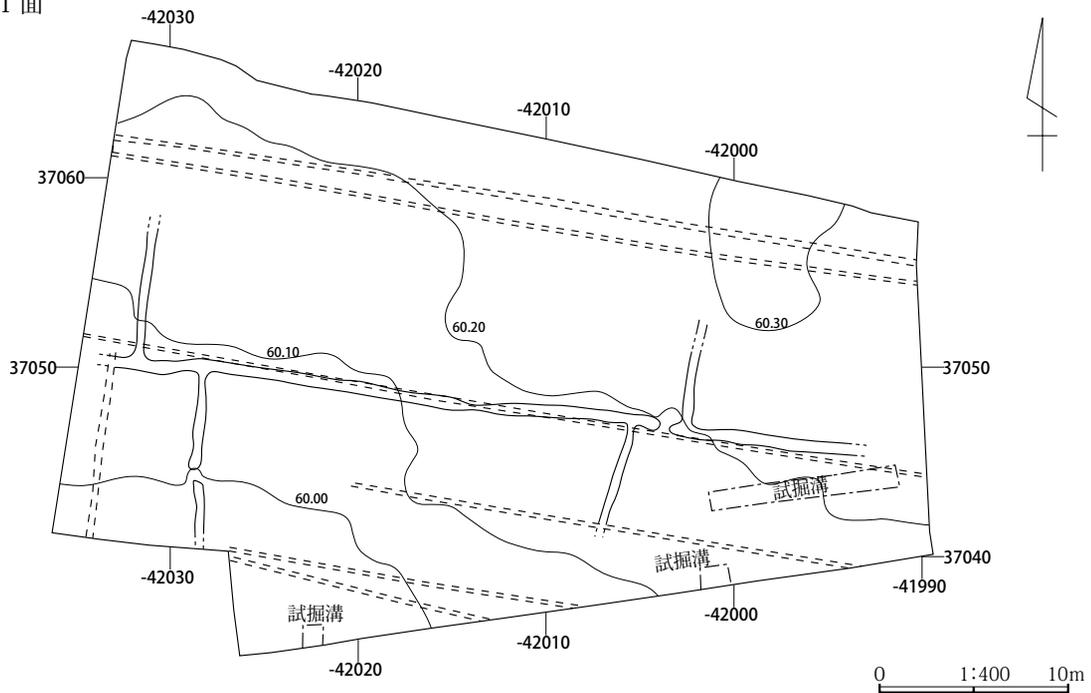
IX・X・XI区では、第1面調査後に行った試掘溝による下位の探索で積極的な遺構面は確認されていない。従って面的な調査は第1面のみである。また、XI区では第1面の遺構確認もされていない。上強戸遺跡群域内においては、近現代にかけての土地改良による削平などの造作は地形的に高まる当該区域が最も大規模に行われたことが考えられる。

IX区の調査では中あるいは近現代にかかると思われる水田畦畔の痕跡が認められている。畦畔の高まりなどは検出されず、土色の違いが確認の目安となっている。区画はかなり整った方形で略東西・南北に区割りされる。区割り単位は東西長で20mや30mの規模が見られる。

X区の調査では、IX区で辛うじて確認された畦畔の痕跡はさらに危うく、東西方向に区割りが存在したとの痕跡を認めるにすぎない。



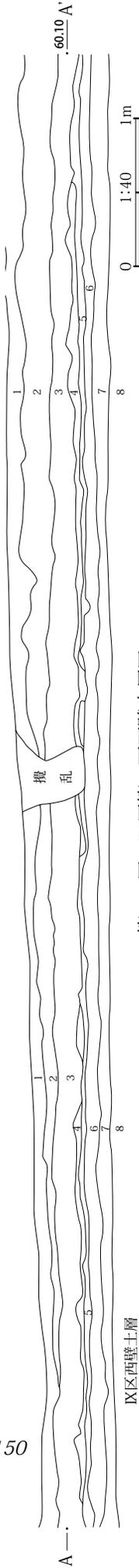
IX区第1面



第144図 IX区第1面全体図

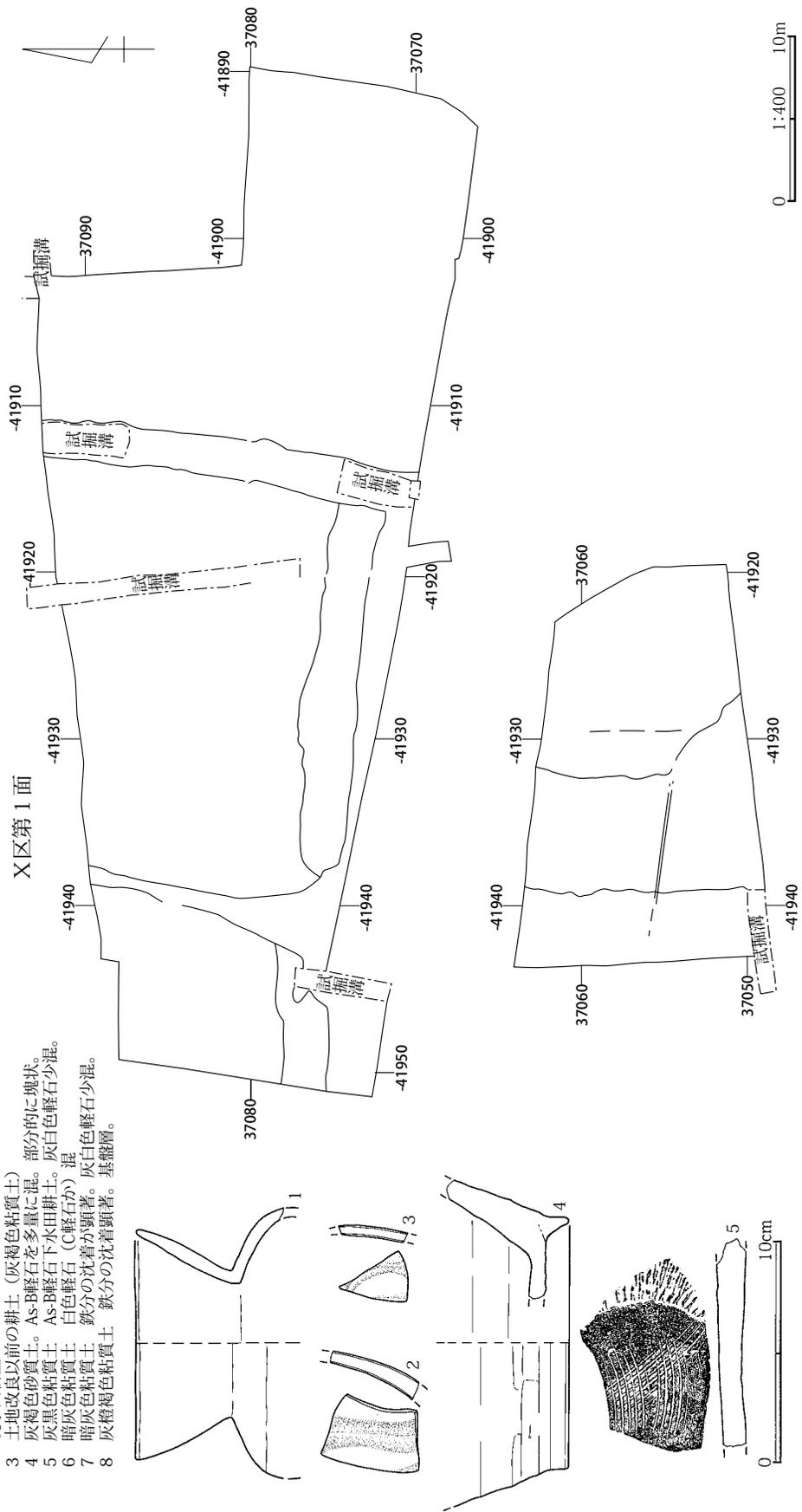
IX区・X区の出土遺物 (第147図)

1～4はIX区出土。1は土師器壺。やや短めの口頸部は内湾して立つ。肩部の張りは強い。古墳前期。2・3は青磁椀。蓮弁文、龍泉窯系。2はやや甘い焼成。4は常滑片口鉢。播り鉢使用痕あり、13世紀代。5はX区出土。堺産の播り鉢。18～19世紀。

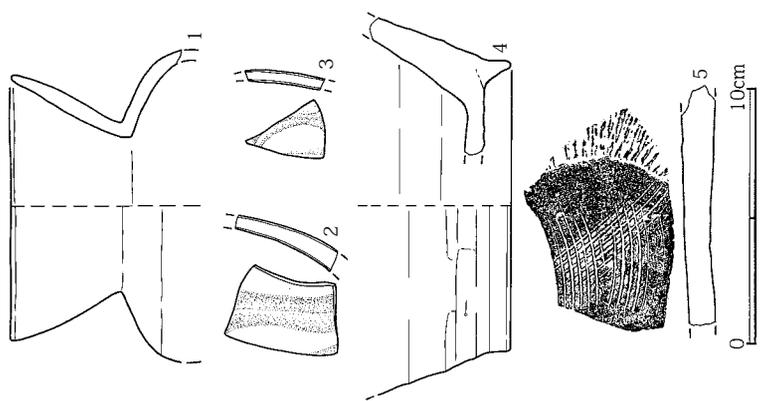


第145図 X区第1面西壁土層図

- IX区西壁土層
- 1 表土
  - 2 現水田耕土
  - 3 土地改良以前の耕土 (灰褐色粘質土)
  - 4 灰褐色粘質土。As-B軽石を少量に混。部分的に塊状。
  - 5 灰褐色粘質土。As-B軽石を少量に混。灰白色軽石少混。
  - 6 暗灰色粘質土。白色軽石 (C軽石) 混。
  - 7 暗灰色粘質土。鉄分の沈着が顕著。灰白色軽石少混。
  - 8 灰褐色粘質土。鉄分の沈着顕著。基盤層。



第146図 X区第1面全体図

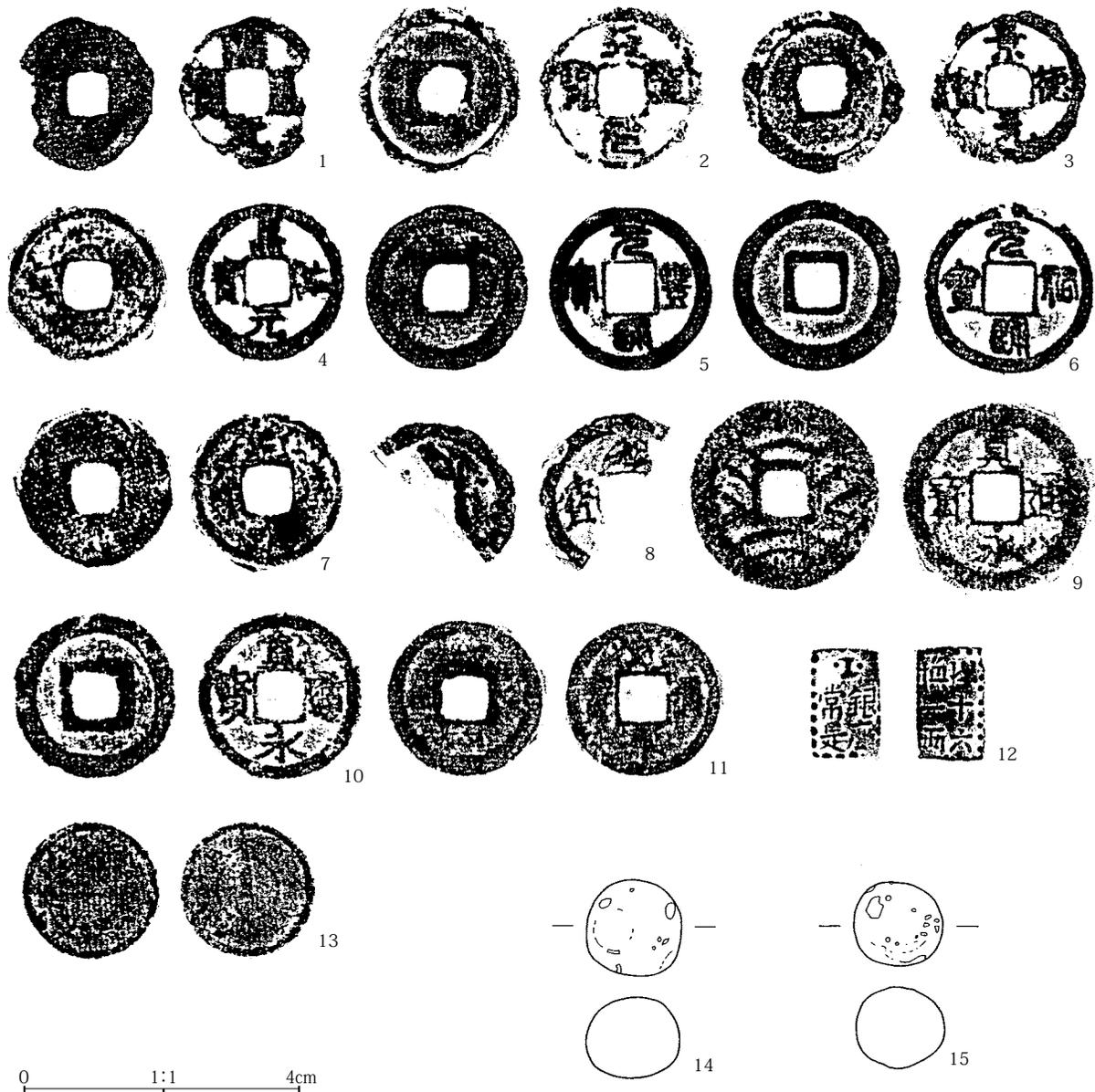


第147図 IX区・X区第1面出土遺物

上強戸遺跡群出土銭貨・鉛製品計測表

単位 mm

図版番号	銭名	出土位置	残存	直径	内輪径(表・裏) 厚さ	内輪径 (表・裏)	厚	備考
第148図1	開元通宝	Ⅶ区第1面	一部欠損	22.5		18.8	1.25	南唐966年初鑄
第148図2	天聖元寶	Ⅶ区第1面	略完	23.8		20.55・19.5	1.2	北宋天聖元年 1023年初鑄
第148図3	景德元寶	Ⅶ区第1面	一部欠損	23.65		18.1・17.4	1.15	北宋景德元年 1044年初鑄
第148図4	嘉祐元寶	Ⅶ区第1面	略完	23.2		17.05	1.1	北宋嘉祐元年 1056年初鑄
第148図5	元豊通寶	V区	略完	24.2		18.8・17.3	1.15	北宋元豊元年 1078年初鑄
第148図6	元祐通寶	Ⅶ区第1面	一部欠損	24.85		20.6・18.5	1.02	北宋元祐元年 1086年初鑄
第148図7	不明	V区表採	一部欠損	22		19.2	0.6	
第148図8	不明	Ⅷ区表採	三分の一				1.15	
第148図9	寛永通寶	Ⅷ区表採	略完	27.65		22.45	1.1	四文銭 背文11波
第148図10	寛永通寶	V区2号溝	略完	24.1		18.55・17.55	1	
第148図11	寛永通寶	Ⅶ区第1面	略完	22.65		19.35・17.5	0.75	摩滅顕著
第148図12	文政一朱銀	Ⅵ区	略完	長1.64		短1.10	1.7	文政十二年 1829年初鑄
第148図13	ア+無し5円銅貨?	Ⅶ区表採	略完	1.99			1.3	昭和25年鑄摩滅顕著
第148図14	鉛製品 円弾	V区2号溝	略完	径12.45×13.6・重13.6g				
第148図15	鉛製品 円弾	Ⅶ区第2面	略完	径12×11.9・重9.75g				



第148図 遺跡出土の銭貨・鉛製品

8. その他の遺物

ここに掲載する遺物は基本的には遺構に伴わない包含層または採集遺物であるが、遺構出土であっても明らかに時代を異にする資料を集成的に扱ってある。

上強戸遺跡群出土の縄文土器 (第149図)

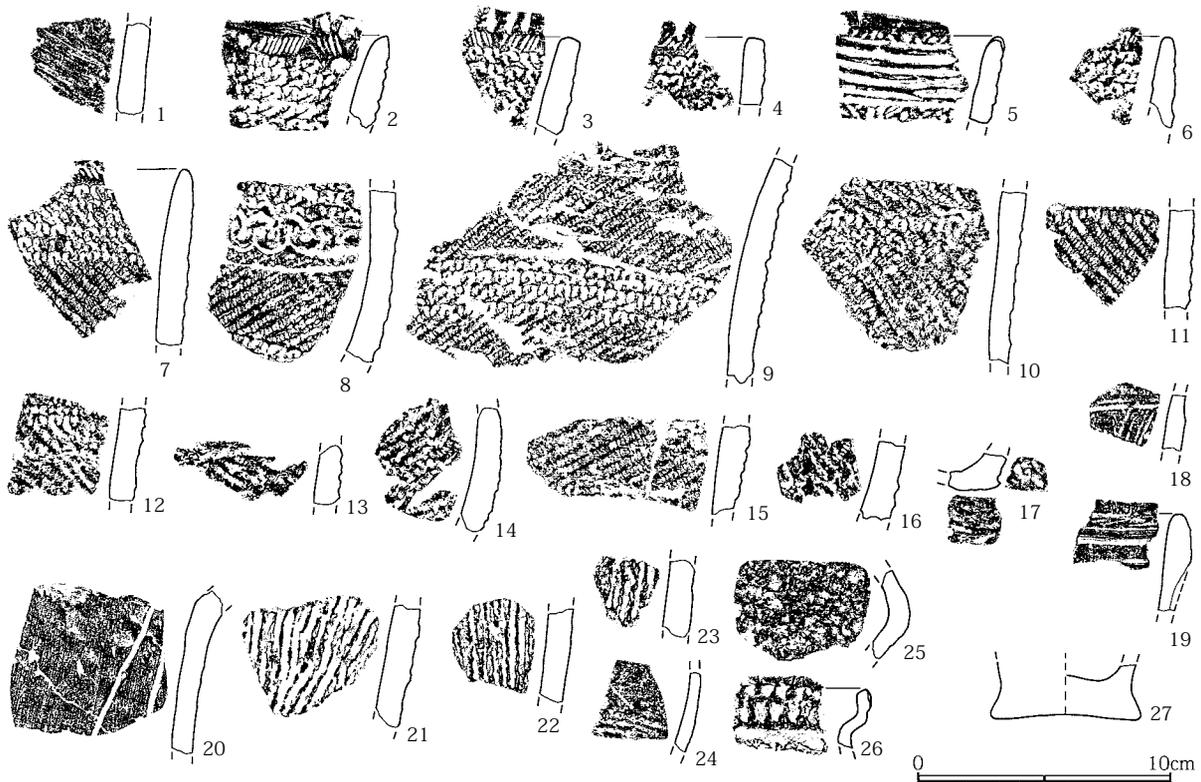
1は胎土の繊維を僅かに含み、表面に条痕を斜位に施す土器で、早期後半と考えられる。

2～17は前期の関山式土器である。胎土に繊維を多く含み、2～4の口唇部には白歯状の突起をもち、口縁直下に鋸歯状の沈線を巡らせ、以下に多段のループの縄文を施す。5は口唇部に鋸歯状の沈線を巡らせ、口縁部に平行沈線を数条巡らせる土器。6・7は口唇部に鋸歯状の沈線を巡らせ、以下に多段ループの縄文を施す。8は胴部に多段ループの縄文を施し、さらに横位のコンパス文を巡らせる。9・12は胴部に多段ループの縄文を施し、10・11は胴部にループの縄文を施している。12～16は胴部に縄文を施した土器で、17は底部片である。

18は胴部に半裁竹管による平行沈線を施し、19は口縁部に平行沈線を施すもので、前期の諸磯式土器である。

20は胴部に単沈線で文様を描き、21～23は胴部に縦位の撚り糸文を施すもので、中期後半の土器と考えられる。

24は縄文が施され、25は口縁部付近の屈曲部と思われるが、表面の風化のため時期は不明である。また、26は平口縁で頸部が大きく屈曲し、口縁が直立する器形で、口縁部以下に刺突を施す土器であるが、時期については不明である。27は底部。



第149図 遺跡出土の縄文土器

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 群馬県上強戸遺跡群出土木製品の樹種固定

(株) 吉田生物研究所

#### 1. 試料

試料は群馬県上強戸遺跡から出土した農具10点、繊維具2点、武器1点、建築部材1点の合計14点である。

#### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹3種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(遺物No.2)

(写真No.2)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

##### 2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物No.1,4,5,12)

(写真No.1,4,5,12)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

##### 3) カバノキ科アサダ属アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.)

(遺物No.14)

(写真No.14)

散孔材である。木口ではやや大きい道管(～200 $\mu$ m)が単独ないし数個放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は年輪界と接線状が顕著である。柾目では道管は単穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は中型である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～750 $\mu$ mであった。アサダは北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.)

(遺物No.3,7,8,10)

(写真No.3,7,8,10)

環孔材である。木口では大道管(～430 $\mu$ m)が年輪界にそって1～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ属クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、本州(岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

5) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

(遺物No.6,9,11,13)

(写真No.6,9,11,13)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管(～200 $\mu$ m)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)  
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)  
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I～V」京都大学木質科学研究所(1999)  
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編I・II」保育社(1979)  
深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon  
MICROFLEX UFX-DX Type 115

群馬県上強戸遺跡出土木製品同定表

写真No.	出土遺構	図版番号 P L 番号	品名	樹種
1	Ⅶ区15号溝	125-1 48-1	柄	マツ科モミ属
2	Ⅶ区17号溝	125-1 49-1	弓	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
3	Ⅶ区18号溝	126-1 49-1	二又鋤	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	Ⅶ区18号溝	126-3 49-3	織機	マツ科モミ属
5	Ⅶ区18号溝	126-4 49-4	織機	マツ科モミ属
6	Ⅶ区18号溝	126-2 49-2	田下駄	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
7	Ⅶ区19号溝	127-2 50-2	二又鋤	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	Ⅶ区19号溝	127-1 50-1	ナスビ型鋤	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
9	Ⅶ区19号溝	128-4 50-4	二又鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
10	Ⅶ区19号溝	128-3 50-3	二又鋤	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
11	Ⅶ区25号溝	129-4 51-4	鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
12	Ⅶ区25号溝	129-2 51-2	堰板	マツ科モミ属
13	Ⅶ区25号溝	129-1 51-1	鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
14	Ⅶ区1号木組	132-1 53-1	横鋤	カバノキ科アサダ属アサダ

第4章 自然科学分析



柁目×100

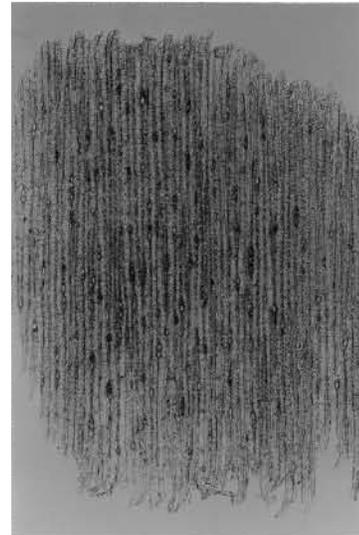


板目×40

No. 1 マツ科モミ属

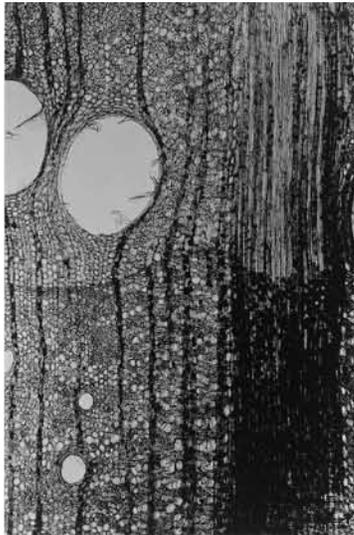


柁目×100



板目×40

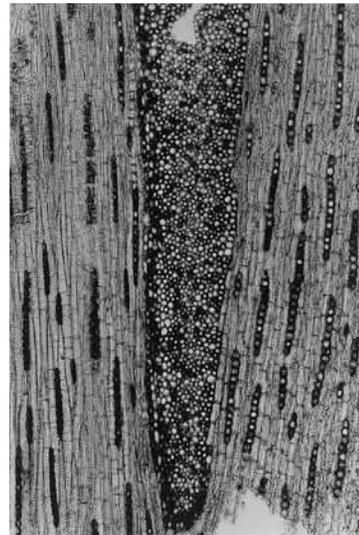
No. 2 イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ



木口×100

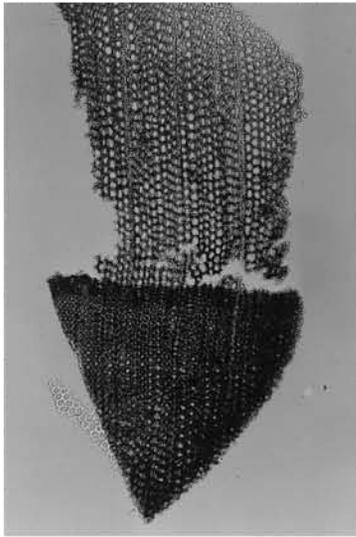


柁目×100

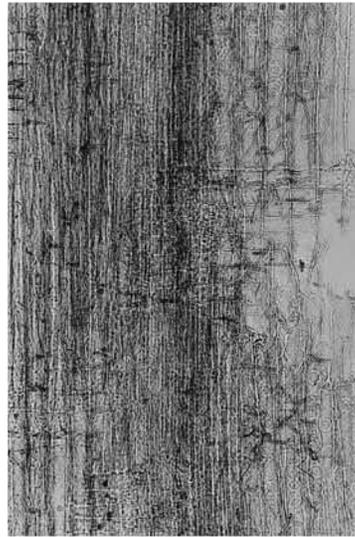


板目×40

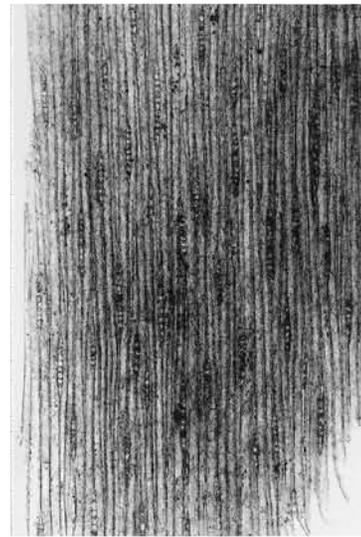
No. 3 ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



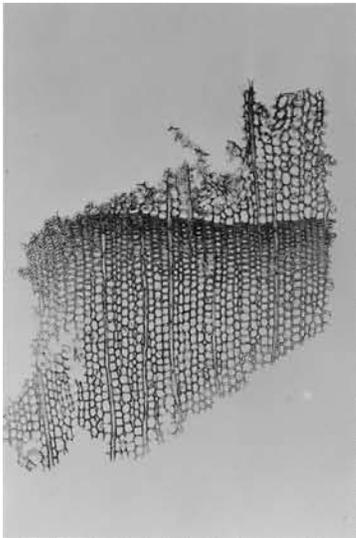
木口×40  
No. 4 マツ科モミ属



柁目×100



板目×40



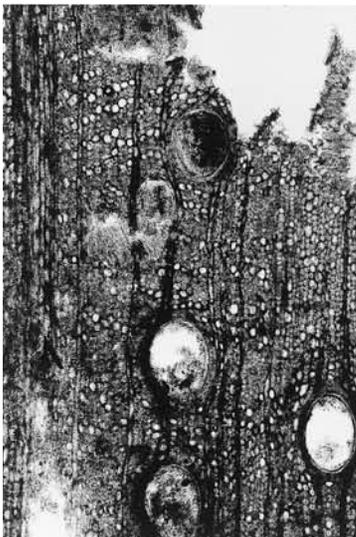
木口×40  
No. 5 マツ科モミ属



柁目×100



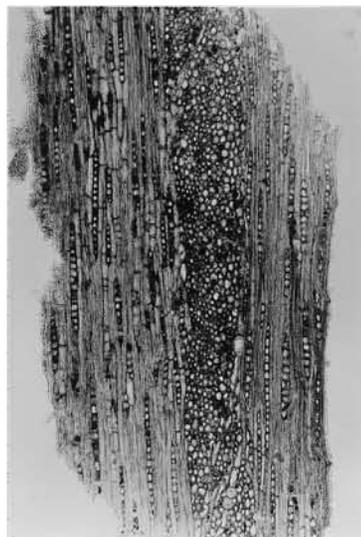
板目×40



木口×40  
No. 6 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



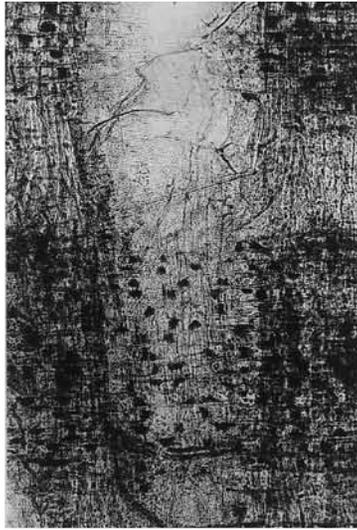
柁目×100



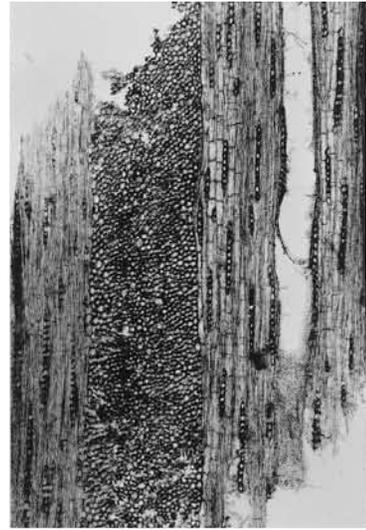
板目×40



木口×40



柁目×100

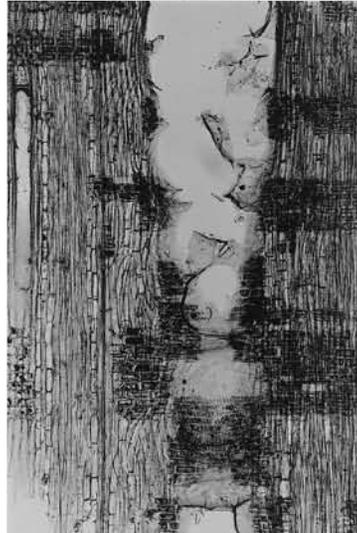


板目×40

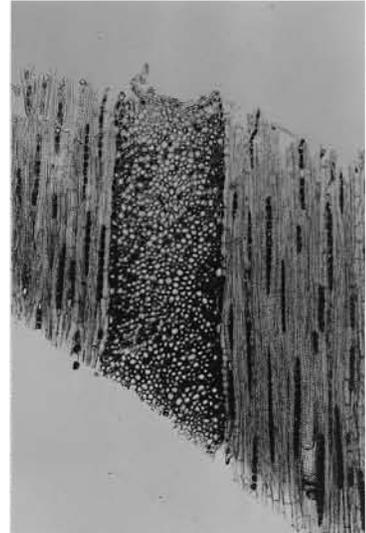
No. 7 ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口×40

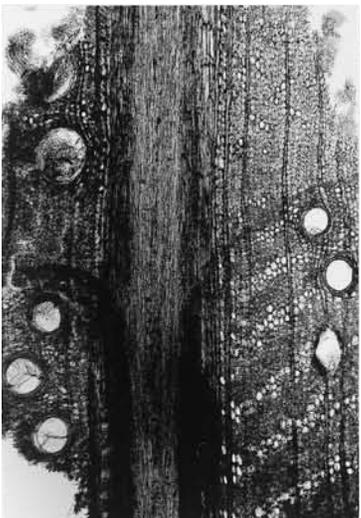


柁目×100

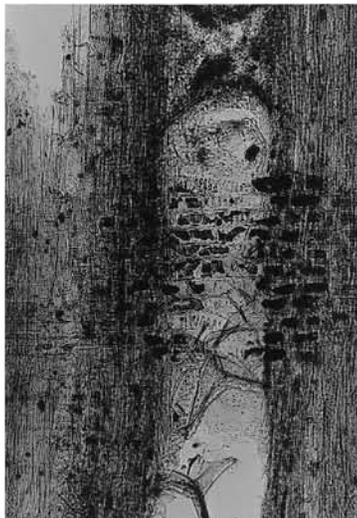


板目×40

No. 8 ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口×40



柁目×100

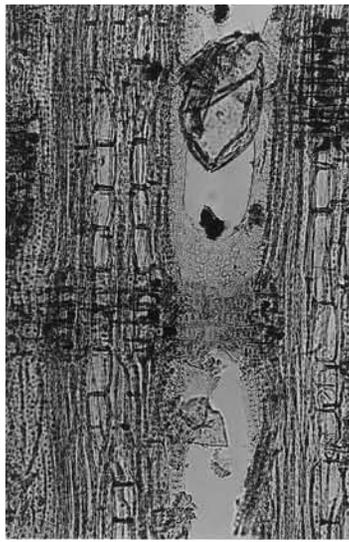


板目×40

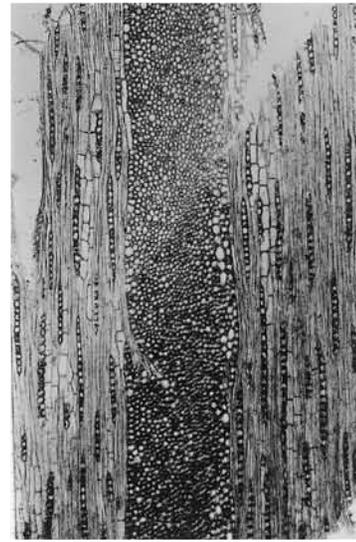
No. 9 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口×40

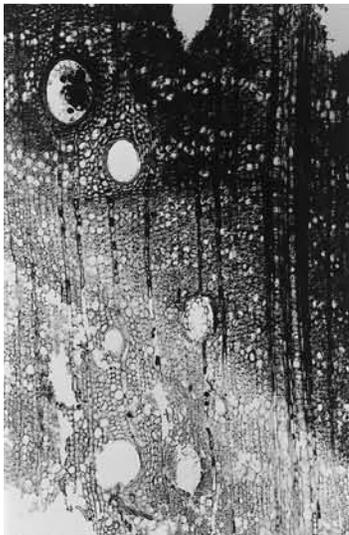


柁目×100



板目×40

No. 10 ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



木口×40

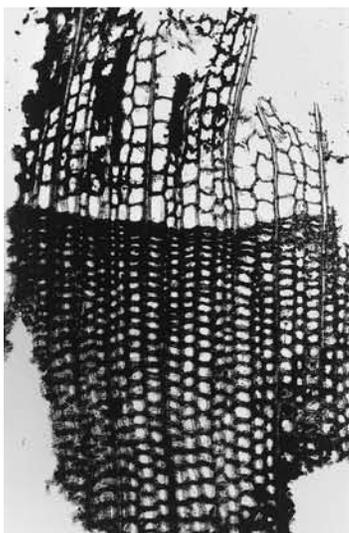


柁目×100



板目×40

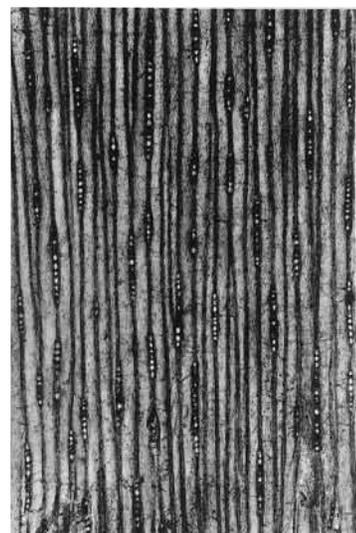
No. 11 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口×40



柁目×100



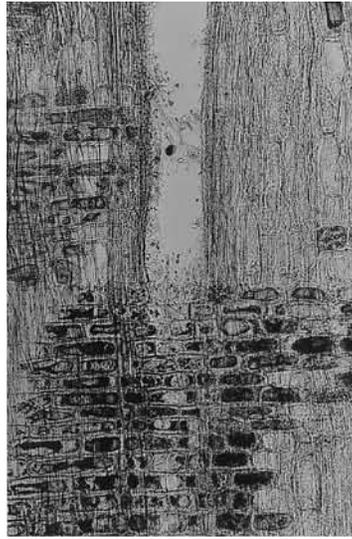
板目×40

No. 12 マツ科モミ属

第4章 自然科学分析



木口×40



柁目×100

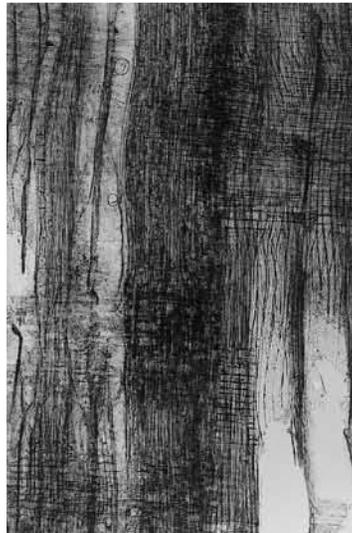


板目×40

No. 13 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口×40



柁目×40



板目×40

No. 14 カバノキ科アサダ属アサダ

## 第2節 上強戸遺跡群の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

群馬県域平野部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間や榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された上強戸遺跡群においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ分析を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象地点は、Ⅶ区-1北壁セクション、Ⅶ区-1・22号溝、Ⅶ区-2・25号溝脇の3地点である。

### 2. 土層の層序

#### (1) Ⅶ区-1北壁セクション

Ⅶ区-1北壁セクションでは、下位より黒泥層（層厚10cm以上）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色泥層（層厚1cm）、黒泥層（層厚7cm、以上8層）、暗灰色泥層（層厚7cm）、桃灰色シルト層（層厚9cm）、暗灰色泥層（層厚4cm、以上7層）、黒灰色泥層（層厚5cm）、灰白色軽石を多く含む黒灰色泥層（層厚7cm、軽石の最大径2mm、以上6層）、灰色シルト層（層厚7cm、5層）、白色軽石を多く含む灰色粘質土（層厚13cm、軽石の最大径6mm、4層）、白色軽石を少量含む灰色粘質土（層厚7cm、軽石の最大径5mm、3層）、層理が発達した灰褐色砂礫層（層厚19cm、2層）、灰色砂質シルト層（層厚4cm）、層理が発達した黄灰色砂層（層厚11cm）、砂混じり灰色土（層厚14cm、以上1層）が認められる（図1左）。

これらのうち6層の上面からは疑似畦畔、4層の上面からは水田第2面が検出されている。

#### (2) Ⅶ区-1・22号溝

Ⅶ区-1・22号溝の覆土は、下位より礫混じり黄灰色砂層（層厚10cm、礫の最大径4mm）、灰色砂質土（層厚8cm）、灰色砂層（層厚7cm）、灰色粘質土（層厚7cm）、白色軽石を多く含む灰色粘質土（層厚6cm、軽石の最大径7mm）、白色軽石を含む灰色粘質土（層厚8cm、軽石の最大径3mm）からなる（図1右）。

#### (3) Ⅶ区-2・25号溝脇

Ⅶ区-2・25号溝脇では、下位より灰色粘質土（層厚9cm）、暗褐色泥炭層（層厚4cm）、黄灰色軽石層（層厚0.9cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色砂質土（層厚0.8cm）、層理が認められる黄色軽石層（層厚8cm）、灰白色軽石混じり灰色粘質土（層厚14cm、軽石の最大径3mm）が認められる。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、上述3地点において、土層ごとまたは厚さ約5cmごとに採取

## 第4章 自然科学分析

された試料のうち、18点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。Ⅶ区-1北壁セクションでは、試料13に白色の細粒軽石(最大径1.3mm)が少量含まれている。試料6には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径2.3mm, 斑晶:斜方輝石および単斜輝石)が比較的多く含まれている。この軽石は、試料5にも比較的多く認められる。試料3には、発泡がさほど良くない白色軽石(最大径6.3mm, 斑晶:角閃石および斜方輝石)が多く含まれている。この軽石は、試料1にも比較的多く認められる。火山ガラスとしては、これらの軽石の細粒物である軽石型ガラスがそれぞれの試料に含まれているほか、無色透明の軽石型ガラスも少量認められる。特徴的な火山ガラスの濃集層準は検出されなかった。

Ⅶ区-1・22号溝では、試料3にスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径2.8mm, 斑晶:斜方輝石および単斜輝石)が比較的多く含まれている。この試料やその上位の試料2では、この軽石の細粒物である軽石型火山ガラスが認められる。Ⅶ区-2・25号溝脇では、試料2および試料1に、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石(最大径5.1mm, 斑晶:斜方輝石および単斜輝石)が含まれている。試料2には、とくに多くの軽石が含まれており、試料2が採取された試料については、この軽石で特徴づけられる軽石の一次堆積層である可能性も考えられる。これらの試料には、この軽石の細粒物である軽石型火山ガラスが認められる。

## 4. 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

Ⅶ区-1北壁セクション、Ⅶ区-1・22号溝、Ⅶ区-2・25号溝脇におけるテフラ検出分析の結果、特徴的なテフラが認められた試料のうち、4試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。Ⅶ区-1北壁セクションの試料13に含まれる斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.705–1.711である。また試料6に含まれる軽石の火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.514–1.519である。Ⅶ区-1・22号溝の試料3に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.501–1.520である。Ⅶ区-2・25号溝脇の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.500–1.519である。

## 5. 考察

Ⅶ区-1北壁セクションの試料13(8層)に含まれる斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.705–1.711である。この試料に含まれる斜方輝石については、従来知られているテフラの中では、約8,200年前\*1に浅間火山から噴出した浅間藤岡軽石(As-Fo, 早田, 1991, 1996)の屈折率( $\gamma$ :1.706–1.710)によく似ている。

そのほか、約5,400年前\*1に浅間火山から噴出した浅間六合軽石 (As-Kn, 早田, 1991, 1996) あるいはそれに関係するテフラ ( $\gamma$ : 1.706–1.708) と、比較的屈折率が高い、約1.3～1.4万年前\*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992) や、約1.1万年前\*1に浅間火山から噴出した浅間総社軽石 (As-Sj, 早田, 1990, 1991, 1996) に由来する斜方輝石が混在している可能性も考えられる。試料13の下位の放射性炭素 (14C) 年代値は、6880±60y.BP (Beta-190840, 後述) を考慮すると、後者である可能性が高いのかも知れない。

Ⅶ区-1北壁セクションの試料6 (6層上部) に含まれる軽石については、岩相に火山ガラスの屈折率などを合わせると、3世紀終末～4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000) に由来すると考えられる。したがって、その上位の試料3 (4層) や試料1 (3層) に含まれる白色軽石については、岩相や層位を合わせて考慮すると、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。榛名火山起源のテフラについては、テフラの分布と本遺跡の位置関係から、Hr-FAに由来する可能性がより高いと思われる。

以上のことから、6層上面から検出された疑似畦畔の層位は、As-Cより上位で、Hr-FAより下位にあると考えられる。また4層上面から検出された水田第2面については、Hr-FAより上位にあると推定される。

Ⅶ区-1・22号溝の試料3 (④層) およびⅦ区-2・25号溝脇の試料2に含まれる火山ガラスのうち、屈折率が高いものについては、As-Cに由来すると考えられる。軽石の純度は高いものの、屈折率が低い火山ガラスが混在していることを考慮すると、厳密な意味ではAs-Cの一次堆積層とは考えにくいのかも知れない。少なくとも、Ⅶ区-1・22号溝については、断面で認められた土層のうち、最下位のものAs-Cの再堆積層と考えられる。なお、実際のテフラとの層位関係を考慮する上では、流水によるAs-Cの流失や、人為的な溝内堆積物の除去なども考える必要がある。

## 6. 小結

上強戸遺跡群において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、Ⅶ区-1北壁セクションの試料13 (8層) から、浅間六合軽石 (As-Kn, 約5,400年前\*1) に由来する可能性のあるテフラ粒子が検出された。また、試料6 (6層上部) や試料5 (5層) から浅間C軽石 (As-C, 3世紀終末～4世紀初頭)、試料3 (4層) や試料1 (3層) から榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭) または榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6世紀中葉) に由来する軽石が検出された。したがって、6層上面から検出された疑似畦畔の層位は、As-Cより上位で、Hr-FAより下位にあると考えられる。また4層上面に層位のある水田第2面については、Hr-FAより上位にあると推定される。Ⅶ区-1・22号溝の試料3 (④層) およびⅦ区-2・25号溝脇の試料2からは、As-Cに由来すると考えられる軽石が多く検出されたものの、As-C以外の粒子も少量ながら検出された。

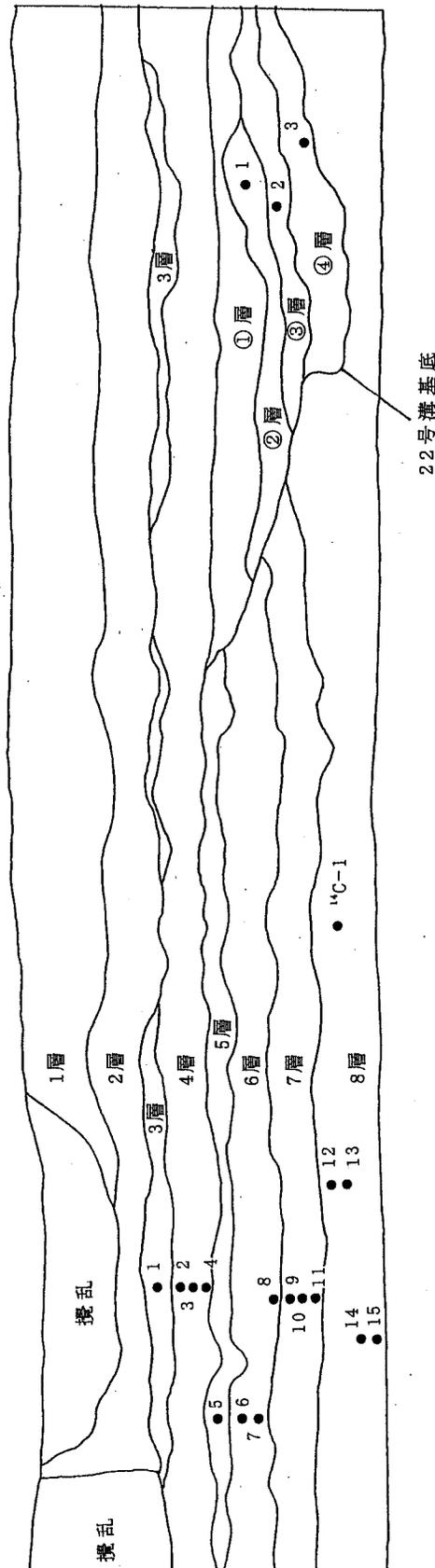
\*1 放射性炭素 (14C) 年代。

## 文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.  
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.

#### 第4章 自然科学分析

- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質. 地研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉（1990）群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.37-129.
- 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く - 古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.



第150図 VII区一北壁セクションの土層断面図  
数字はテフラ分析の試料番号

表1 テフラ検出分析

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
VII区-1北壁セクション	1	++	白	4.3	++	pm	白	
	3	+++	白	6.3	++	pm	白	
	5	++	灰白	2.2	++	pm	灰白	
	6	+++	灰白	2.3	++	pm	灰白	
	7	—	—	—	+	pm	灰白	
	8	—	—	—	—	—	—	
	9	—	—	—	+	pm	白	
	11	—	—	—	+	pm	透明	
	12	—	—	—	+	pm	白	
	13	+	白	1.3	+	pm	白	
	14	—	—	—	—	—	—	
	15	—	—	—	—	—	—	
	VII区-1・22号溝	1	—	—	—	—	—	—
		2	—	—	—	+	pm	灰白
		3	++	灰白	2.8	++	pm	灰白
VII区-2・25号溝脇	1	+++	灰白	5.1	++	pm	灰白	
	2	++++	灰白	4.1	+++	pm	灰白	
	3	—	—	—	—	—	—	

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，—：認められない。

最大径の単位は，mm. bw：バブル型，pm：軽石型。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 ( $\gamma$ )
VII区-1北壁セクション	6	1.514—1.519	—
	13	—	1.705—1.711
VII区-1・22号溝	3	1.501—1.520	—
VII区-2・25号溝脇	2	1.500—1.519	—

屈折率測定は，温度変化型屈折率測定装置 (RIMS86) による。

## 上強戸遺跡群出土試料の放射性炭素年代測定

## 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	Ⅶ区-1北壁セクション	有機物	酸洗浄・測定時間延長	Radiometric

※1) Radiometricは液体シンチレーションカウンタによる $\beta$ 線計数法

## 2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代(西暦)
No. 1	190840	6860±60	-23.9	6880±60	交点: cal BC 5740 1 $\sigma$ : cal BC 5800 ~ 5710 2 $\sigma$ : cal BC 5870 ~ 5660

## 1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。14Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

## 2) 13C測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比(13C/13C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

## 3) 補正14C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

## 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と14C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ (68%確率)と2 $\sigma$ (95%確率)は、補正14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ ・2 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

### 第3節 上強戸遺跡群Ⅶ区の植物珪酸体

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

イネ科植物は別名珪酸植物とも言われ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。こうして吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積され植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が形成される。そのうち機動細胞珪酸体については藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年植物珪酸体分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。上強戸遺跡群Ⅶ区では発掘調査において水田遺構が検出されており、これを検証することを中心に土層断面より採取した土壌試料について植物珪酸体分析を行った。以下にその結果・考察を示す。

#### 1. 試料

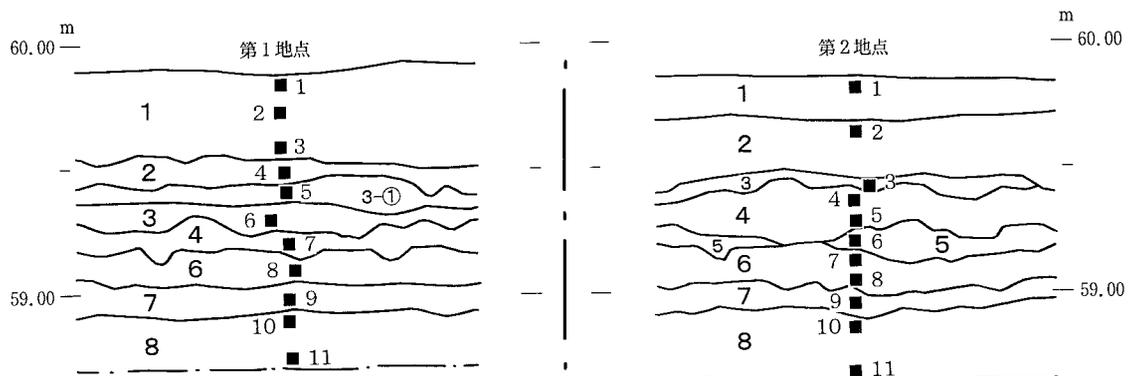
試料は、調査Ⅶ区の第1点（試料番号1-1～-11の11試料）および第2地点（2-1～-11の11試料）より採取された22点（図1）で、以下に各土層について簡単に示す。

1層の試料1-1は灰色のシルト質粘土、1-2および1-3、2-1は灰色のシルト質砂である。2層は明褐色の砂で、第2地点の下部は砂レキ層となっている（試料1-4, 2-2）。3-①層は褐灰色のシルト質粘土で、下部に砂が認められる（試料1-5）。3層は褐灰色の粘土（試料1-6, 2-3）、4層は暗灰色の粘土で、本層は2面耕土である（試料1-7, 2-4, 2-5）。5層は褐灰色の粘土（試料2-6）、6層は黒色の粘土（試料1-8, 2-7, 2-8）、7層は灰赤色の粘土で、本層は3面耕土である（試料1-9, 2-9）。最下部8層は黒色の粘土である（試料1-10, 1-11, 2-310, 2-11）。

#### 2. 分析方法

上記した22試料について以下のような手順にしたがって植物珪酸体分析を行った。

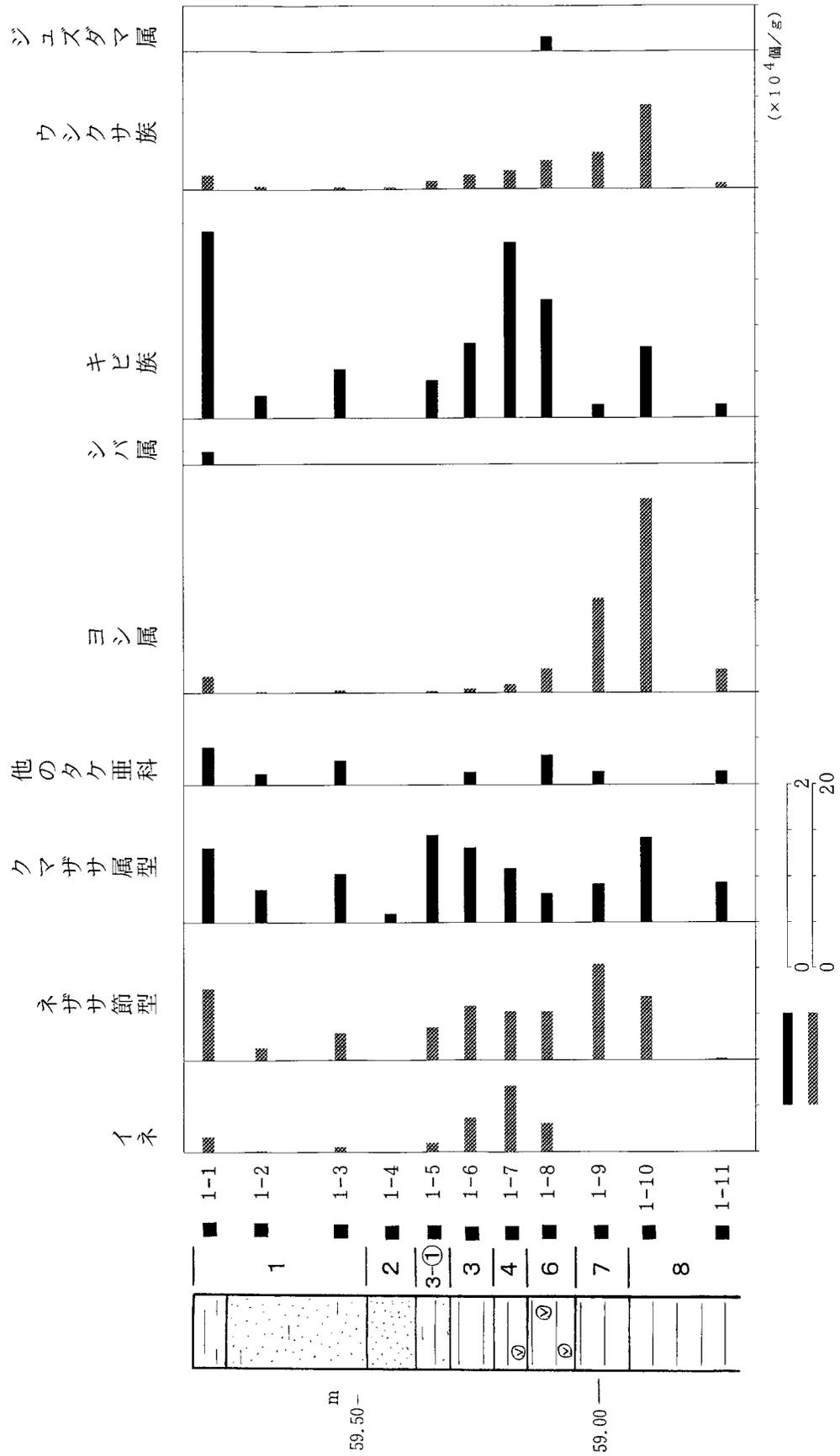
秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下



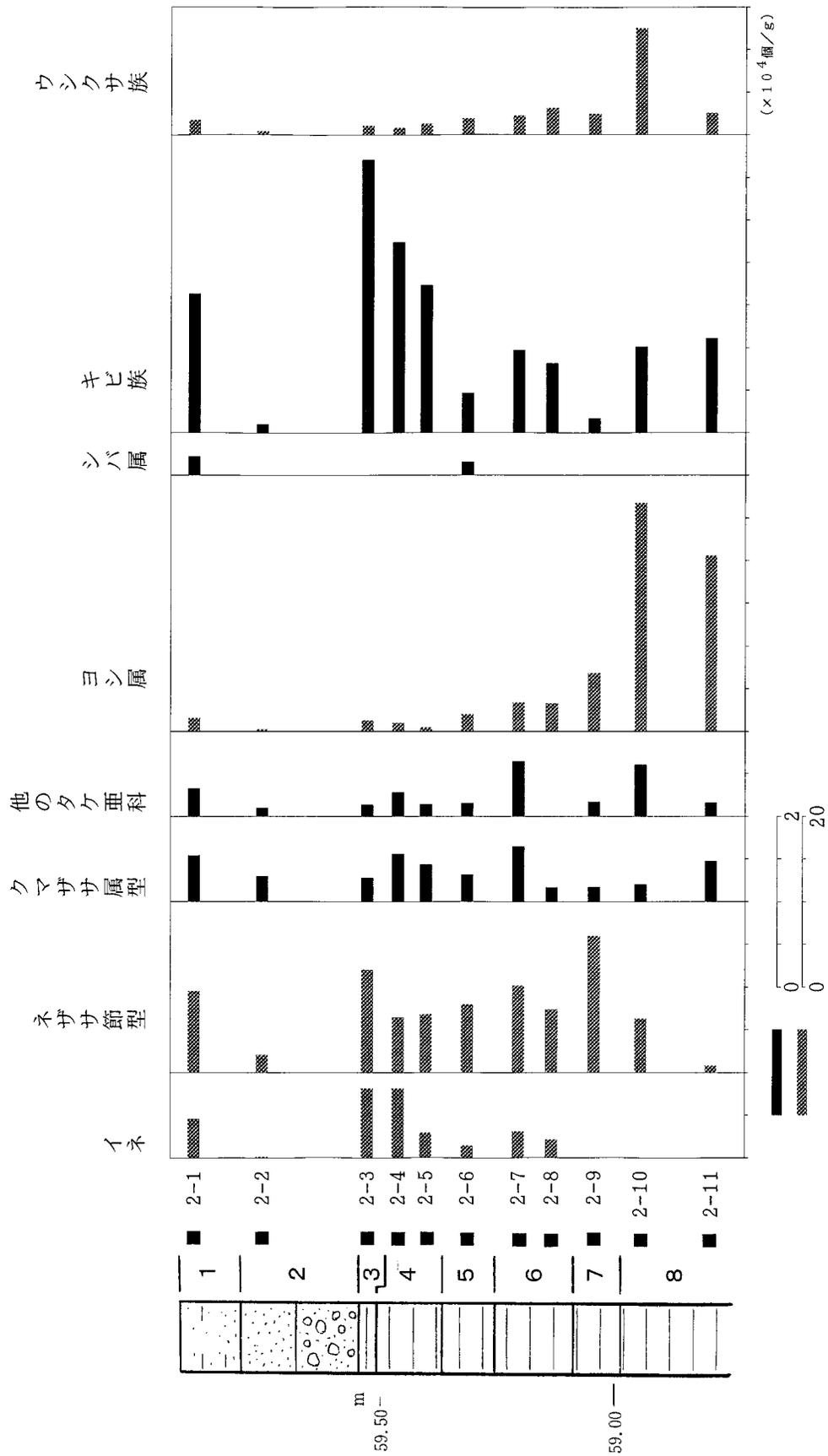
第151図 試料採取地点付近の土層断面図

表1 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料 番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ジュズダマ属 (個/g)	不明 (個/g)
1-1	16,400	77,700	8,200	4,100	17,700	1,400	20,500	15,000	0	24,500
-2	1,200	13,300	3,600	1,200	1,200	0	2,400	3,600	0	4,800
-3	5,300	29,300	5,300	2,700	2,700	0	5,300	2,700	0	6,700
-4	0	0	1,000	0	0	0	0	1,900	0	0
-5	9,500	35,500	9,500	0	1,400	0	4,100	8,200	0	16,400
-6	36,800	58,600	8,200	1,400	4,100	0	8,200	15,000	0	16,300
-7	72,000	52,900	5,900	0	8,800	0	19,100	19,100	0	23,500
-8	30,500	52,900	3,200	3,200	25,700	0	12,800	30,500	1,600	40,100
-9	0	104,200	4,200	1,400	102,800	0	1,400	39,400	0	32,400
-10	0	69,500	9,300	0	211,400	0	7,700	91,100	0	74,100
-11	0	1,500	4,400	1,500	24,700	0	1,500	5,800	0	2,900
2-1	45,700	94,700	5,400	3,300	15,200	2,200	16,300	17,400	0	14,100
-2	1,000	20,800	3,000	1,000	2,000	0	1,000	4,000	0	4,000
-3	80,900	119,900	2,800	1,400	12,600	0	32,100	11,200	0	22,300
-4	81,100	64,300	5,600	2,800	9,800	0	22,400	8,400	0	16,800
-5	29,000	68,000	4,300	1,400	4,300	0	17,400	13,000	0	15,900
-6	14,000	79,300	3,100	1,600	20,200	1,600	4,700	18,700	0	9,300
-7	30,700	101,800	6,500	6,500	33,900	0	9,700	22,600	0	21,000
-8	21,200	73,400	1,600	0	32,600	0	8,200	31,000	0	14,700
-9	0	159,400	1,700	1,700	68,500	0	1,700	24,000	0	22,300
-10	0	62,600	4,000	4,000	266,600	0	10,100	125,200	0	20,200
-11	0	7,900	4,700	1,600	205,600	0	11,100	25,300	0	3,200



第152図 第1地点の機動細胞珪酸体分布図



第153図 第2地点の機動細胞珪酸体分布図

の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

### 3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め(表1)、それらの分布を図2(第1地点)、図3(第2地点)に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

第1地点：検鏡の結果、下部3試料と2層(砂)の1-4を除く7試料試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数としては、最も少ないのは試料1-2の1,200個で、1-1および1-5~8において10,000個を越え、試料1-7では72,000個に達している。

イネ以外についてみると、ヨシ属が下部で非常に多く検出され、7層より上部に向かい急減しており、ウシクサ族も同様の産出傾向が認められる。ネザサ節型も下部試料で急増し、上部に向かい次第に減少するが最上部で再び増加している。キビ族は下部試料を除きイネと同様の産出傾向を示している。クマザサ属型は増減を繰り返すが10,000個には達しておらず、その他シバ属やジュズダマ属などが若干得られている。

第2地点：試料2-8(6層)より上位でイネが検出されており、個数的には試料2-2の1,000個を除き10,000個以上で、試料2-3、-4では80,000個を越えている。

イネ以外ではやはり下部試料でヨシ属が非常に多く、試料2-10、2-11(8層)では200,000個を越えるがその直上では急減している。ウシクサ族も試料2-10で最も高い検出個数を示すがその後急減・漸減している。ネザサ節型は最下部より急増し、その後上部に向かい漸減するが最上部では再び増加している。キビ族も下部試料で10,000個以上とやや多い検出個数を示しており、6層より上位ではイネと同様の産出傾向を示している。その他クマザサ属型は4,000個前後を増減しており、試料2-1や2-6でシバ属が若干検出されている。

### 4. 稲作について

上記したように、イネの機動細胞珪酸体は6層試料より上位でほぼ連続して検出され、1および2層の砂が卓越した試料を除きほぼ10,000個以上を示している。ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原 1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、イネの機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上強戸遺跡群VII区では上記したように6層試料より上位でこの5,000個を越えるイネの機動細胞珪酸体が検出されており、この時期より水田稲作が行われ始めたと推測される。この6層には浅間Cテフラ(As-C)とみられる軽石が認められることから、時代としては4世紀中葉頃と推測される。この水田稲作は4層の2面耕土(6世紀初頭?)をへて3層堆積期まで行われていたと考えられ、その後1,2層の洪水層の堆積により一時的に水田稲作は中断するものの、両地点の最上部試料では多くのイネの機動細胞珪酸体が検出されており、この頃には再び水田稲作が行われるようになっていたと推測される。なおこの1層の上面には1,108年に噴出した浅間Bテフラが認められている。

以上のように上強戸遺跡群のVII区においては浅間Cテフラが降下した4世紀中葉頃に水田稲作が行われ始め、その後洪水により一時的に水田稲作は中断したものの浅間Bテフラ降下前には再び水田稲作は行われる

ようになっていたと推測される。

### 5. 遺跡周辺のイネ科植物

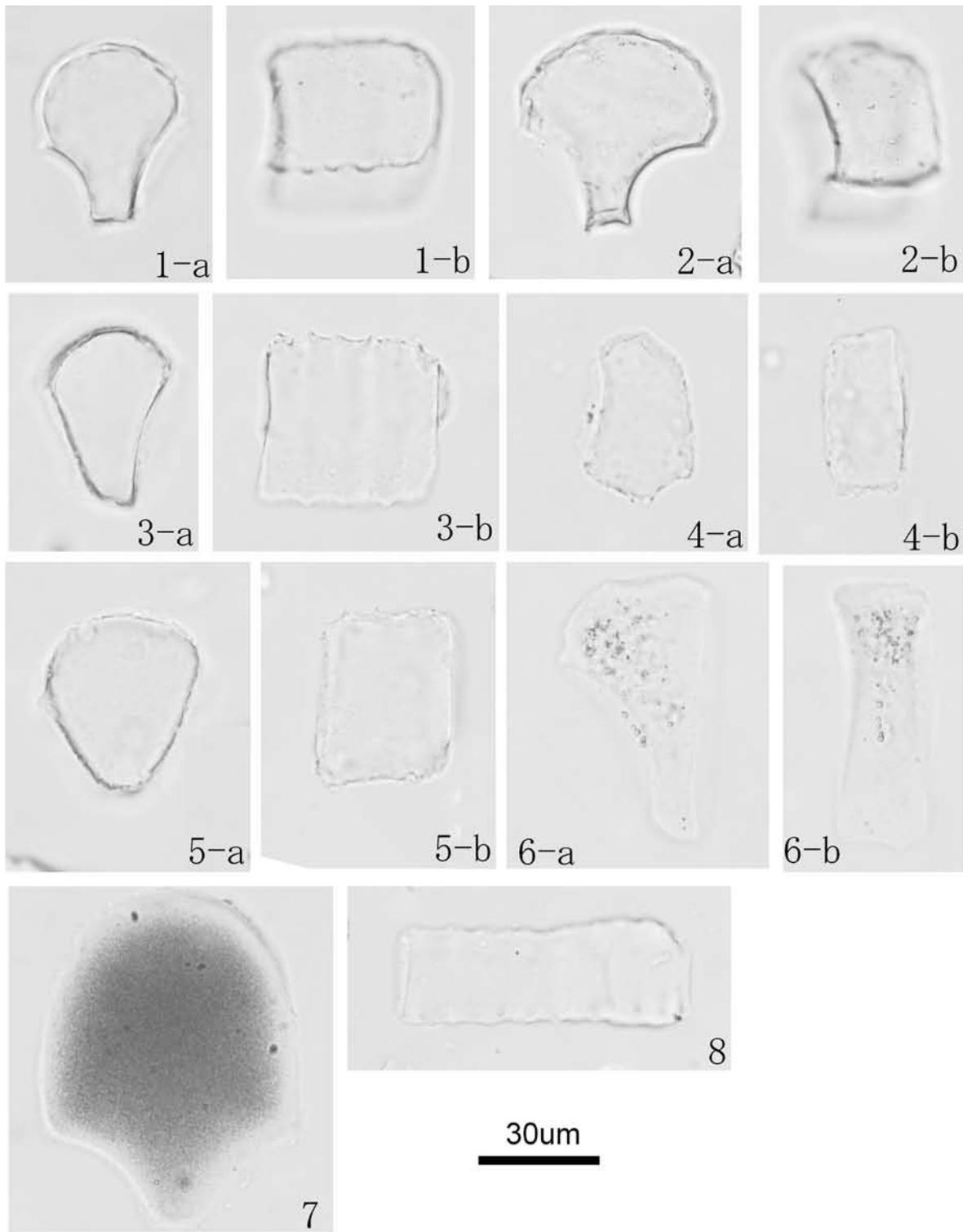
水田稲作が行われ始める以前の7層・8層堆積期においてヨシ属が非常に多く検出されており、遺跡周辺の低地部にはヨシやツルヨシといったヨシ属の大群落が形成されていたと推測される。またウシクサ族（ススキ、チガヤなど）もヨシ属と同様の産出傾向を示していることから、このウシクサ族はヨシ属と同様の環境で生育するオギである可能性が推測され、低地部に多くみられたのであろう。これらにやや遅れてネザサ節型が急増しており、先の低地部周辺にアズマネザサを代表とするネザサ節型のササ類が生育地を急速に広げたとみられる。

その後4世紀中葉頃には水田稲作が行われるようになり、この水田開発によりヨシ属やウシクサ族（オギ?）の群落は切り開かれ、急速に生育地を狭められていった。言い換えればヨシ原を切り開いて水田稲作が行われるようになったと推測され、この水田稲作は洪水により一時的に中断するものの浅間Bテフラ降下以前までは少なくとも行われていたと考えられる。なおこの時期においてキビ族も多く検出されているが、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培植物か他の雑草類であるかの分類は難しいのが現状である。しかしながらこの時期のキビ族はイネと同様の産出傾向を示していることから水田に関係した雑草類、すなわちタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族と推測される。

クマザサ属型があまり多くはないが全試料から検出されている。このクマザサ属型のササ類は主に森林の下草的存在で生育していたと考えられ、ミヤコザサやスズダケといったクマザサ属型のササ類が遺跡周辺の丘陵部などに成立していたであろう森林下に生育していたとみられる。

#### 引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学，9，p.15-29.
- 藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル，227，p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—。考古学と自然科学，11，p.9-20.



図版 上強戸遺跡群Ⅶ区の機動細胞珪酸体 (scale bar:30  $\mu$  m)

- 1、2：イネ (a：断面、b：側面) 1：1-7、2：2-4  
 3：ネザサ節型 (a：断面、b：側面) 2-3  
 4：クマザサ属型 (a：断面、b：側面) 2-2  
 5：他のタケ亜科 (a：断面、b：側面) 2-6  
 6：ウシクサ族 (a：断面、b：側面) 1-8  
 7：ヨシ属(断面) 2-10  
 8：キジ族 (側面) 2-3

## 第4節 上強戸遺跡群出土人骨

榎 崎 修一郎

### はじめに

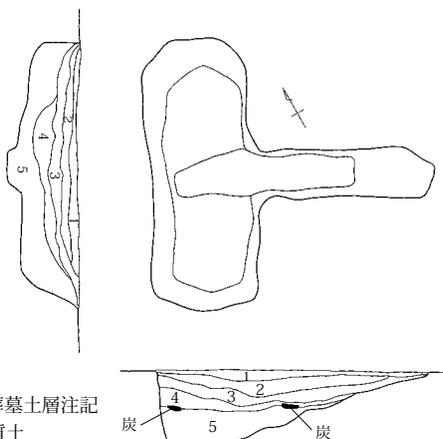
上強戸遺跡群は、群馬県太田市上強戸町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成14(2002)年12月～同18(2006)年3月まで実施された。本遺跡のA区及びB区より中世火葬墓及び土坑墓が検出され、平成20(2008)年3月に、『上強戸遺跡群』(群埋文編)が刊行されている。本稿は、当該墓跡より出土した火葬及び土葬人骨の分析報告である。同遺跡群からは、土坑墓や多量の石像物が検出されており、続刊する報告との比較検討が必要と考えここに報告する。

### 1. A区1号火葬墓出土火葬人骨

報告書には、「火葬墓」と記載されているが、遺構の性質から、「火葬跡」と記載されるべきである。

#### (1) 火葬人骨の出土状況

火葬人骨は、長軸121cm・短軸45cm・深さ30cmの火葬跡から検出されている。長軸は、北北東～南南西の方向である。本火葬跡には、東側に長さ75cm・幅20cmの袖が検出されている。報告書では煙道と記載されているが、本報告者はこれを焚き口と推定している。したがって、火葬時には、南東から風が吹いていたものと推定される。



A区1号火葬墓土層注記

- 1 灰橙砂質土
- 2 褐灰色砂質土
- 3 褐灰色土。炭化物・焼壁ブロックを含む。
- 4 褐灰色粘質土。炭化物・焼土ブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土。灰白色を含む。炭化物・骨片を多量に含む。

第154図 A区1号火葬墓平・断面図[1/30]

#### (2) 火葬の方法

火葬人骨の色は、明灰色から白色を呈しているもので、火葬の際の温度は約900℃以上であると推定される。また、人骨には亀裂・歪み・捻れが認められるので、白骨化させたものではなく、死体をそのまま火葬にしたと推定される。

#### (3) 火葬人骨の出土部位

火葬人骨の残存量は非常に少ないが、一部ずつ全身に及ぶ。

#### (4) 副葬品

副葬品は、検出されていない。

#### (5) 被火葬者の頭位

火葬人骨の出土位置を検証すると、頭蓋骨片は北東・西・南西・南のどれからも検出されている。恐らく焼成過程及び拾骨過程で攪乱されたと推定される。従って、被火葬者の頭位は、不明である。しかしながら、群馬県の火葬跡の事例では、被火葬者の頭位は北側が多い。

#### (6) 拾(収)骨方法

出土火葬人骨の残存量は非常に少ないため、現代にまで続く、拾(収)骨を丁寧に行う全部拾(収)骨をする東日本タイプの拾骨方法であると推定される。

#### (7) 被火葬者の個体数

火葬人骨の残存量は多くはないが、明らかな重複部位は認められないため、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

#### (8) 被火葬者の性別

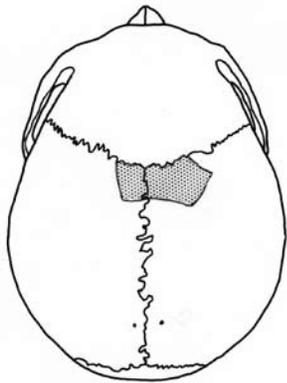
火葬人骨を観察すると、火葬による収縮を考慮しても骨は薄く華奢であるため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

#### (9) 被火葬者の死亡年齢

左右頭頂骨片を観察すると、冠状縫合部は、内板は一部癒合しかかっているものの、外板はまだ癒合していない状態である。したがって、被火葬者の死亡年齢は、約30歳代～40歳代であると推定される。



写真1. A区1号火葬墓出土人骨[左右頭頂骨]



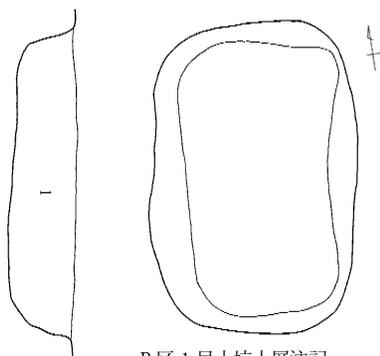
第155図 A区1号火葬墓出土人骨部位図[頭蓋骨上面観]

## 2. B区1号土坑

報告書には、「土坑」と記載されているが、遺構の性質から、「土坑墓」と記載されるべきである。

### (1) 人骨の出土状況

人骨は、長軸140cm・短軸90cm・深さ30cmの長方形土坑から検出されている。なお、本土坑の長軸は、南北の方向である。



B区1号土坑土層注記  
1 暗褐色土。白色パミスを含む。

第156図 B区1号土坑平・断面図[1/30]

### (2) 被葬者の頭位・埋葬状態

残念ながら、人骨の出土位置が不明であるため、被葬者の頭位は不明である。しかしながら、群馬県の中近世の土坑墓検出人骨の頭位は北が多い。

### (3) 副葬品

土坑底部より、銭貨6点（永楽通宝5点・元豊通宝1点）が検出されている。

### (4) 被葬者の個体数

遊離歯1本しか検出されていないため、被葬者の個体数は1個体である。



写真2. B区1号土坑出土遊離歯[上顎右M2咬合面観]

### (5) 被葬者の性別

出土遊離歯の上顎右M2（第2大臼歯）の歯冠計測値は、BL（歯冠頬舌径）が10.9mmである。したがって、被葬者の性別は女性である可能性が高い。

### (6) 被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約30歳代であると推定される。

## まとめ

上強戸遺跡群から、2体の中世人骨が検出された。A区1号火葬墓(跡)から、約30歳代～40歳代の女性火葬人骨が1体検出された。また、B区1号土坑(墓坑)から、約30歳代の女性人骨が1体検出された。

### 担当者

- ・『上強戸遺跡群』報告書担当者：深澤敦仁（現群馬県教育委員会文化財保護課）
- ・本報告書担当者：綿貫邦男

---

---

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第453集

## 上強戸遺跡群（1）

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書

---

---

平成21年 1 月20日 印刷

平成21年 1 月26日 発行

発行／編集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784番地の2

電話 0279-52-2511（代表）

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷 上毎印刷工業株式会社